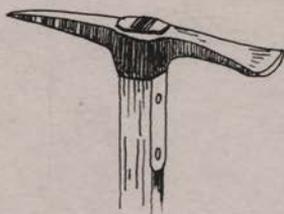


# 山 岳



ウエーパ  
氷斧

Vol.95/2000

# エスパース



スバンティーク (7,027m) C1 後方はライラ [撮影・'99日本ヒマラヤ協会隊]

数々の輝かしい  
登頂を支えてきた  
エスパース。

1970年の第1号エスパースの発売以来、数々のアイデアと改良を重ね、いつしか山岳テントの代名詞とまで言われるようになったエスパース。現在ではスリーシーズン用から厳冬期遠征仕様まで9機種がラインナップされ、多くの登山者から信頼を得て愛用されています。

カモシカスポーツは登山家の信頼に応えます。



**カモシカスポーツ** ホームページ <http://www.kamoshika.co.jp/>

山の店・本店 ☎03 (3232) 1121 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 1-28-6 2F

山の店・横浜店 ☎045 (212) 2044 〒231-0062 神奈川県横浜市中区桜木町 3-11

●AM10:30~PM8:00 (月~金) / AM10:30~PM7:00 (土・日・祝)

山の店・穂高店 ☎0263 (82) 1511 〒399-8302 長野県南安曇郡穂高町北穂高 2827-18

●AM10:30~PM7:00

第九十五年(通卷一五三号)

山

岳

二〇〇〇年



# 山 岳 二〇〇〇年 目 次

アメリカカ登山界の現状と将来……………	C・ベックウイズ……………	7
二十世紀を生き続けたマロリー……………	江 本 嘉 伸……………	23
劔岳「ゲンジロウ尾根」の正しい表記と命名の由来……………	五十嶋 一 晃……………	36
同志社大学山岳部の七十年		
—— 遠い山・旅する心……………	平 林 克 敏……………	60
コнде東峰、北東稜からの登頂		
—— 山野井妙子&松原尚之一九九九……………	松 原 尚 之……………	89
レッドメイン峰初登頂		
—— 学習院大学山岳部レッドメイン峰登山隊の記録……………	棚 橋 靖……………	99
立教大学ガッシュアブルII峰登山隊の報告……………	鱒 坂 青 青……………	106
中国・四川省の未踏の山々……………	中 村 保……………	114
チョンムズターゲの偵察		
—— 西部クンルンの未知の領域を訪ねて……………	児 玉 茂……………	136
日本山岳会会員数と会費の推移……………	南 川 金 一……………	151

図書紹介

『山の生涯―来し方行く末』(村木潤次郎)、『砂に埋もれたホータンの廃墟』(田村俊介)、『能海寛 チベットに消えた旅人』、『川口慧海―人と業績―』(若松林治)、『ウォルター・ウエストン未刊行著作集』(水野 勉)、『二期一会の山、人、本』(田辺 寿)、『遙かなり秘境司可西里』(業師義美)、『ヒマラヤへの道・Ⅱ(山の仲間50年の軌跡)』(小浜浩三)、『日本北辺の探検と地図の歴史』(長岡正利)、『TIBET'S SECRET MOUNTAIN(兄玉茂)』、『日本アルプシズムの社会的構造』(宮下啓三)、『会報「山」図書紹介一覽』

\*

追悼

加治甚吾氏(長尾徳夫、高橋宏一氏(塩澤 厚)、鳥居 亮氏(片岡 博)、吉永孝行氏(南川金一)、中楚愛三氏(中世古隆司)、野田福五郎氏(星野辰雄)、丸山彰氏(平林克敏)、広羽 清氏(大塚博美)、岸田権二氏(平林克敏)、池田知幸氏(津田文夫)、松長春利氏(池田 悟)、堀内章雄氏(伊丹紹泰)、武田満子氏(松永康子)、宮崎辰雄氏(森川 列)、増江俊三氏(中川博人)、安田 武氏(高村 奉樹)、矢田目昇氏(牧野牧夫)、相沢甚平氏(柴崎 徹)、和仁古昇氏(本田誠也)、洲崎幸久氏(川俣俊一)、『会報「山」計報・追悼文一覽』

\*

支部だより

会務報告(一九九九年六月〜二〇〇〇年五月)

山岳図書目録(一九九九年)

英文梗概

A21

A40

257

239

196

163

写真

海外登山の記録

追悼

208 112  
5 5  
209 113

表紙挿絵・本文中カット

遠藤光男



## アメリカ登山界の現状と将来

C・ベックウイズ (『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』編集長)

(訳・補記／中村 保)

クリスチャン・ベックウイズ (Christian Beckwith) 氏、アメリカ山岳会 (A A C) の伝統ある『The American Alpine Journal (AAJ)』の編集長が日本山岳会の招待により、二〇〇〇年四月十三日に来日した。三十一歳、『チベットの七年』のブラッド・ピットに似ているという女性もいる。まだ独身で好感の持てる青年である。一九九四年に他界した著名なエディター、アダムス・カーター氏のを引き継いだときは弱冠二十六歳であった。能力と将来性に賭けるベンチャー・ビジネスを育むアメリカの風土を象徴する起用といえよう。彼の訪日のきっかけを作ってくれたのはアメリカ登山界きっての知日派であるニコラス・B・クリンチ氏である。

クリンチ氏は一九六八〜七〇年にA A Cの会長を勤め、その後もシェラ・クラブの理事長も歴任している重鎮である。ペルー・アンデス、カラコラムのヒドン・ピーク、マシヤールム、南極のビンソン・マシッフ、そして崑崙山脈の最高峰ウルガ・ムスターグを初登頂し、また梅里雪山の探査に先鞭をつけたパイオニアである。世界の登山界との人脈は広い。一九九八年の十一月に京都大学学士山岳会のチョゴリサ登頂四十周年の記念行事に招待され、日本のヒマラヤ登山の活動状況をつぶさに知り強い関心をもった。近年ヒマラヤ登山全体の四〇パーセントが日本隊によってなされているのに、海外に発信されている記録は僅かである。もっと世界の登山界に積極的に知らされるべきであ

る、というのがクリンチ氏の思いであった。帰国後、「AAJ」の新編集長を日本の登山界との交流と情報のネットワークづくりのために行かせたいので意見を聞かせて欲しい、と私に打診してきたことが発端となった。

ベックウイズ氏来日まで紆余曲折と面倒な調整もあったが、とにかく実現の運びに漕ぎつけることができた。彼に課せられた講演のテーマは「アメリカ登山界の現状と将来の展望」である。四月十四日に日本山岳会で行われたスピーチを本人の了解を得て以下収録し、その後で同氏のプロフィール、「AAJ」の編集方針、来日中のスケジュール等を補足する。後段で、帰国後アメリカ山岳会の「AAJ News」に書かれた記事の翻訳も載せる。

大塚会長ならびに日本山岳会の皆様、アメリカ山岳会の代表としてここでお話す機会を与えられたことにまず深謝申しあげます。そして、今回の私の来日によって日本山岳会とアメリカ山岳会の関係に新しいページが開かれることを確信します。

私が依頼された話の題目はアメリカ合衆国（以下アメリカ）での近年のクライミングの状況、および将来どう変わり、いかに意義づけられるかということです。

しかし、まず最初に考えたことは、北米大陸全体に言及することなしに、アメリカの登山について語ることはできないということです。パフィン島に触れずにヨセミテについて話をする事、あるいはメキシコの岩壁の探検と共通するアクセスの問題を議論せずに、テキサスのウエコ・タンクのアプローチに関わる話をする事は、アメリカのクライマーが自然な形で抱いている多くの事柄を無視することになります。

アメリカのクライマーにとって、アクセス手段としての車はヒマラヤ遠征におけるシェルパやアルプスのエイギュ・ド・ミデイのゴンドラと同じような手段であり、車を利用することによってアメリカにおける大岩壁のフリー・クライミングから困難を克服して登るミックス・ルートの登攀が可能になります。メキシコやカナダでもそうです。車の利用範囲は地政学的な国境を自由に越え、モンタナやワイオミングのクライマーたちをカナダの困難な氷雪と岩のニュー・ミックス・ルートへと誘います。そして、メキシコのエル・ポルトレロ・チコの暖かい石灰岩の壁は、冬の寒さに

閉じ込められて南に憧れていたアメリカのクライマーを招きます。

というわけで、与えられた制約はありますが、私なりに考えて話を進めさせていただきます。さもないと、皆様の今夜の酒代を私が払われる羽目になるからです。それは私の望むところではありません（訳者注…これはジョーク。日本側はスピーチすることを招待の条件としてベックウイズ氏に通告していたので）。

残念ながらアメリカ合衆国の登山には北米大陸の他の場所と異なることがひとつあります。それはアクセスです。主流のメディアで登山が取り上げられ、クライマーの姿が目につくようになるにしたがい、我々が登山をする土地を管理する規制機関から厳しく監視を受けるようになりました。メキシコでは登山は一般的ではなくおおむね外国人によって行われているし、カナダはアメリカほど訴訟好きな社会ではないせいか、クライミング・アクセスはまだ問題になっていません。

しかし、アメリカではここ何年か我々クライマーの登る権利は前例のない挑戦に曝されています。国のあらゆるところで官僚主義の煩雑な手続きを強制して登山者の移動をコントロールし、登山を管理し、料金を設定しようとする攻撃的な動きが起こっており、これに対して今日アメリカの登山団体は戦っています。アメリカのクライマー、とくに昔から社会の片隅でアウトサイダーとして気ままに生きてきた人々にとっては、登山がポピュラーになるにつれ、アメリカ文化の本来のルールや政策利害の真っ只中に置かれるようになり、厳しい状況になりました。いくらかの希望はありますが、これからの何年かはアメリカのクライマーにとっては係争の多い年になるでしょう。

次の二つのケースが、現在の政策によって引き起こされている状況を物語っています。

テキサスのエル・パソ郊外のウエコ・タンク州立歴史公園は北アメリカでは、顔を描いた岩絵が最も集中しているところで、アメリカ原住民についてのたいへん貴重な考古学的なサイトとされています。また、ここは一九八〇年代の前半よりクライマーにとってアメリカで最良のボルダリングのエリアであり、冬場をやり過ごす格好の場所でもあ

りました。

一九九八年、テキサス州公園・野生生物局(TWPD)は一日に入れる登山者の数を非常に厳しく制限し、この決定は登山界に衝撃を与えました。この規制を覆す、あるいは和らげるために精力的な努力が行われましたが、TWPDはかたくなに登山者の権利に対抗しました。事実、一九九九年の九月には四十カ所の新たな岩絵のサイトが公園内で発見されたと発表され、クライミングにさらなる制限が必要になるであろうとの意向が示されています。登山団体とTWPDとの継続的な話し合いは、山岳界にとって多大な時間と費用を費やすことになりました。しかし、世界からやってくるクライマーにとってこの素晴らしい砂漠の環境と、信じられないくらいボルタリングに適したこの地が近い将来開かれる見込みは少ないでしょう。

もう一方の傾向として、ヨセミテ渓谷の中心部に関してよく報道されている係争問題があります。

ヨセミテ渓谷ほどクライミングのフィールドとして重要なところはアメリカでは他にないでしょう。完全な花崗岩の岩壁、美しいクラック・ライン、そして、それぞれのルートに挑む人たちに基礎的な登攀技術を学ばせるゲレンデでもあります。しかし、一九九七年にクライマーにとって伝統的なキャンプ・サイトであったキャンプ・4が、渓谷での登山を本質的な部分で修復不能なまでに変えてしまうような開発に脅かされました。

一人の男がこの脅威に立ち向かいました。トム・フロストです。写真家、発明家、ヨセミテのサラテと北アメリカ壁とヒマラヤのアマダブラムおよびアンナプルナ南壁の初登攀者である彼は、開発を阻止するため国立公園サービス局を訴えました。この訴訟にはアメリカ山岳会も加わり、彼らは後にキャンプ・4がナシヨナル・ヒストリック・サイトとなるよう申請しました。

キャンプ・4は現在その資格を取得する手続きが進行中で、開発から守られることが保証されることになりました。

この勝利は国中のクライマーに祝福されましたが、さらに大きな闘いが待っています。この新たな規制のなかには、原野での固定式アンカーの禁止条項が含まれています。そのことにより、最も人気の高いいくつかの山では、人工の

プロテクションからアップザイレンをすることができなくなります。また国立公園における入域の予約制度は、実際のクライミングを行うか前から書類手続きが強いられます。

良いニュースは、アメリカのクライマーたちがじつに見事に結束してこれらの問題に対処していることです。悪いニュースは、この戦いが始まったばかりだということです。どんな理由があるにせよ、クライマーを糾合するのは部屋いっばいの子猫たちを一カ所に導くようなものです。しかしアメリカのクライマーにとっては、自分たちのお気に入りの山へのアクセスを維持するためには政治的な圧力団体をつくるのが唯一の現実的な方法となっています。

このような文句なしの厳しい背景にもかかわらず、過去数年の間にアメリカでは多くのクライミングが行われています。

なかでもリン・ヒルが行ったクライミングほど、最近感動を与えた登攀はないでしょう。それはフリー・クライミングによる初登攀の後、同じルートを一日でフリーで完登したもので、間違いなく世界で最も有名になりました。一九九三年、リン・ヒルという小柄で、知性的、非常に才能のある女性が彼女の限界をさらに押し上げたのです。彼女はワールド・カップで三年連続で優勝した後、競技登山から引退し自分の山登りの原点である伝統的なクライマーに戻ることに目を向けました。これを現実のものにするために、長い間切望されていたヨセミテのエル・カピタンのノーズ・ルートのフリー化に目標を置き、これに取り組みました。

一九五八年のウォーレン・ハーディング、ウエイン・メリー、ジョージ・ウイットモアによる初登攀以来、ノーズ・ルートは二世代にわたりクライマーの希望と熱い志を具現してきました。リン・ヒルが挑戦する以前にもエル・キャップの意義あるフリー登攀の試みは記録されていますが、ヨセミテの新たな黄金時代の幕開けとなるエル・キャップの最初のルートは彼女の努力によるものといっていでしょう。彼女はこのルートを5・13bでフリー化しました。

昨年、二百六十一日の努力の末、すべてのピッチをフリー化したスコテュー・パークは、彼女のルートは5・14bに近いと示唆しています。彼女の登攀以降、クライマーたちはこの巨大な岩を違った眼で見えるようになり、多くの

ルートがフリーで登られるようになりました。サラテ、エル・ニーニョ、フリー・ライダ、そして今年のレオ・ホルディング・ルート、パッセージ・トウー・フリーダムで、これはエル・キャップ・タワーの難易度5・13に到達しました。アメリカ人のクライマーはエル・キャップの新たなフリー化推進にはあまり登場せず、サラテのみがアメリカ人によって登られただけです。それは二十一歳の若い強力なトミー・コールドウェルによって成し遂げられました。皆様ご存知の平山ユージさんがこのルートの第三登に成功しています。いろいろ取り沙汰されつつも、アメリカのベスト・クライマーたちは伝統的に多大な影響を及ぼしてきた花崗岩の大岩壁に再び注意を向け始めました。

多分エル・キャップの人工登攀ルート、すなわちエイド・ラインのほとんどがすでに登られたことにより、ヨセミテの他の場所も復活を享受しています。その間接的反響はこの渓谷の外でも疑いなく感じられるようになるでしょう。

ヨセミテ黄金時代のパイオニアの一人であるイヴォン・シュナードは、一九六三年の「アメリカン・アルパイン・ジャーナル」に次のように書いています。「ヨセミテ渓谷は近い将来新しい世代のスーパー・アルピニストたちのトレーニング・グラウンドになるだろう。彼らはこの地球上の高峰の最も美しく困難な岩壁に危険を犯して挑むであろう。ヨセミテで学びパタゴニア、パキスタン、バフィン島、さらに辺境にでかけ、渓谷で習得した登攀技術を駆使して難ルートを開拓したエイド・クライマーの成功によって、シュナードの予言は現実のものとなりました。

エル・キャップにおいて毎年新ルートが開かれ、昨年だけでもガードル・トラバースの初登を含む六つのルートが加わりました。しかし、既存のルートに新しいピッチがつながり、割り込むようなものも増えています。多くの渓谷の常連は、ヒマラヤとかアンデスのような大きな山で自分たちの大岩壁を探し、いまでもシュナードの予言を実行に移しています。しかし、単純なエイド・クライミングから進化したもっと素晴らしい登り方も出てきており、ここ数年のうちに世界の各地で新しいパラダイムを形成するでしょう。

素敵な才能の持ち主である二十一歳のクリス・マクナマラはスピード・クライミングの分野で最前線にいます。他の多くのヨセミテ・クライマーとともに、マクナマラ、通称「ビッグ・マック」は一步先んじようと努力し、圧倒的

タイムのスピード登攀に成功しました。現在のスピード・クライマーにとってはエル・キャップの最も難しいエイド・ルートに登攀するだけでは十分でなく、次の挑戦が行われています。それはできるだけ速く登ることです。プレイヤータちは十分慣れ親しんでいる快適な競技場で訓練をし、以前は何日もかかった三〇〇〇フィートのエル・キャップを数時間で登攀を可能にする、ますます洗練された技術を導入しています。このようなタイプのクライミングがこの渓谷の外でどの程度応用できるかは現時点では定かではありませんが、こうして開発された技術は将来一般的に使われ、より安全で速く効率のよいクライミングができるようになるでしょう。

もう一方でクリーン・クライミングも前面に出てきています。いままではピトン、カップパー・ヘッドなどを使用していました、取り外しのできる道具を使いクリーンな登攀をすることです。クリーン・クライミングは登山雑誌に出はじめ、一九六七年にピンが岩を傷つけないようにナットを使用するという説明が、パタゴニアのタカログ記事に紹介され、この現象をさらに広げていきました。この傾向は特に環境への影響や登山方法に眼を光らせている規制当局によって推奨されました。しかし、今後の展開は予断を許しません。

アメリカの岩場は陽のあたる花崗岩だけではありません。すべてのクライマーがヨセミテの開放的な大岩壁に満足しているわけではありません。冬になるとアルピニストの気持ちは氷やミックス・クライミングに移ります。氷の岩のルートにアイス・ツールやクランポンを駆使して登る、目をみはる方法が新たに開発され、アメリカの登攀現場で見られます。難しい体操のテクニックとさらに洗練されたツールやプロテクション、そして最近の研究からスクリュールを埋め込む角度が変わったことで岩と氷の困難なルートに簡単に取りつけるようになりました。アメリカのアイス・クライミングのこのような展開の分野で評価されているのはジェフ・ロウです。彼のルート、オクトパシーにはコロラドのバイルの沿道に面している崖から一〇〇フィートの石灰岩の壁を経て細い氷柱が懸かっています。人々はこのルートによって再び冬山の厳しい登攀への可能性に注目しました。

アルピニストたちは地元の小さな壁で技を磨き、困難な山の新たなルートへの準備をしてきたわけですが、同時に

将来のミックス・ルートに備えて新しいツールを用いてアイス・クライミングへの心構えに怠りありません。マウン・ト・ケネディの北壁に拓かれた一九九七年のペア・オブ・ジャックスは、最新のミックス登攀技術を応用した代表的なルートです。六〇〇〇フィートの岩壁がカナダとアラスカの境界に存在しており、他の一般的な登山地域から孤立して極寒の地に聳えています。

ジャック・タックルとジャック・ロバーツの二人は、アラスカで過去二十年間に行われた最も輝かしい登攀のうちのいくつかを成し遂げたアルピニストですが、地元で学んだミックス・クライミングの巧妙な技を使う対象としてケネディの北壁を選びました。この登攀はポータレッジを使う非常に困難なミックス・クライミングです。一人がクランポンを落としてしまったことと、二日間ものすごい嵐のため登頂はできませんでしたが、彼らの挑戦はホーム・グラウンドで訓練を重ね、大きなプロジェクトに積極的にアプローチしようとする現代のアルピニストに可能性を示すことなく示すことになりました。

このような志向性がマウント・ハンターの北壁のような突出した目標を新たな課題として掲げ、これからアラスカにおいてますます困難なルートが生まれることに繋がっていくでしょう。

多くのクライマーが将来のルートを考え出していくなかで、ワシントン州出身の若いガイドであるステイブ・ハウスは最近もっとも想像力を働かせた人です。一九九五、九六、九七年に彼は北アメリカの最高峰、デナリ（マッキンレー）でガイドの仕事をする傍ら、おなじスタイルの登り方を踏襲して三つの新ルートを開拓しました。そのなかのひとつが西側バットレス北西壁の「美しいことは希である (Beauty is a Rare Thing)」というルートが含まれています。考え方としては超軽量で寝袋を使わずに済むように寒い夜に登攀し、日中の一番暖かいときに昼寝をし一回の試みでルートを完登するやりかたです。ときには三十六時間連続で行動します。このようにより軽量で迅速に登攀することで成功のチャンスが増えます。それ以来彼の新しいルート作りはカナダでもアラスカでも続き、アラスカのルース・ゴルジュにある「マウント・ブラッドリーの贈物」と呼ばれるルートの最近の登攀は彼の優れた能力を立証

しています。

今までお話ししたことは、過去十年の間にアメリカの登山界において起こった決定的な動向を表すひとつひとつの例証です。これらのことは、装備・衣類・食料・薬の進歩に助けられ、今日のクライマーが一世代前の人たちより難度の高いルートのより効率的登攀が可能になったことにより達成されました。新しいテクニクもその一端を担っています。新技術が今後クライミングの基本的なノウハウとなっていくことは疑いを入れませんが、大切なのは、より研ぎ澄まされたテクニク、より強度の高い装備、より軽量の器具や濃縮ドリンクなどよりも他のクライマーには見えないものを見ようとする構想力です。またそれを現実のものにしようとする大胆さなのです。冒険的なクライマーはその時代のテクニクとツールを使って新しいルートを開き、登山の道標となってきました。そして彼らこそが登山を次の章へと導くのです。

登山は革命的ではなく、一つか二つの例外的な登攀とともに徐々に進化していきます。しかし、このような少しずつの変化であっても、次の世代にはどうなっているかをイメージするのは難しいほどの変遷を遂げることでしょう。では私の国で登山がこれからどうなっていくのかということですが、確かなことは過去の先駆者が実践していたように、人々はバイオニアが築いたものの上にさらに努力の成果を積み重ねていくということです。つまり今日画期的なルートであっても明日にはクラシック・ルートになるといえます。クライマーたちはエル・キャップの新しいフリー・ルートに想像力を駆使して登り、それをコロラドのガニソン・ブラック・キャニオンやロングス・ピーク・ダイヤモンドに応用します。彼らはベイルとかオウレイ、ハイアライト・キャニオンで学んだミックス・クライミングの技術とヨセミテ渓谷で訓練したスピード・クライミングの方法の両方を融合した登攀技術を使って、マウント・ローガンの南壁やマッキンレーの東壁のような偉大なアラスカでの目標に挑みます。先駆者たちはその間にも大胆な新しいルートを確立し、クライミングのレベルを今は心に描くことが難しいくらいに一層高めていくのです。

しかし、ひとつだけ変わらないことがあると思います。それはクライミングの精神です。能力、国籍、時代に関係

なく私たちの心の奥に行動の原点として存在し、結果が予測し難い状況に敢えて遭遇したいという奔放な好奇心です。クライマーたちはそんな状況下で自分自身を観察・評価することを通じて、それまでは想像できなかった自分を発見できることを知っています。この自己の再認識がクライマーを天空に高く聳える山々へ送り出すのです。未来の私たちをいかなる世界に導くにせよ、クライミング・スピリットは常に存在し、失敗と成功の狭間で傑作として残るルートを開拓し、私たちを次の大いなる冒険へと誘うのです。ご静聴ありがとうございました。

ベックウイズ氏はアラスカのアンカレッジで生まれたが、育ったのはメイン州である。パーモント大学で英文学を専攻したせいも、スピーチの表現とレトリックは難解で通訳、翻訳とも苦勞させられた。登山を始めたのは二十歳のとき一年間英国に滞在していたときであるという。ワイオミングのジャクソンに住みついていたからクライミング誌「マウンテン・ヨードル」を創立したが長続きしなかった。登山歴は八年。アメリカ国内ではグランド・テトンを中心に多くの登攀をしている。海外ではキルギスタンに三回の遠征隊をリードし、この地域に関する米国のエキスパートの一人である。ウエスト・コクシャル・タウ山塊を初めて探査・登攀し、二回の入域で十四峰の初登頂を行った。この記録は「AAJ一九九九」に詳しい。さらに天山山脈のハン・テングリに一回出かけ、英国隊に加わって中央西部チベットのリンポ・カンリにも行っている。ヒマラヤとカラコルムにはまだである。

登山経験がさして豊富とはいえない無名だった彼が高名なアダムス・カーター氏の後釜に座ることになった経緯は冒頭に書いたとおりアメリカらしい。彼は生前のカーターとは面識はなく、名声以外は何も引き継いでいないという。ベックウイズ氏起用を仲立ちしたのは同じワイオミング在住のイヴォン・シュナード氏である。クライミングのキャリアや山岳界における知名度より編集者としての才覚と能力が見込まれたことであろう。一回目の出来栄はひどく、叩かれたらしい。現在は五冊目を手がけているが、世界の登山情報の収集にも苦勞している。なかでも日本発のインフォメーションは「岩と雪」が廃刊になったあとは一元的な情報源がなくなってしまい、欧州ではポーランドのニカが病のため第一線から退いてしまったので世界の情報ネットワークは一挙に崩壊してしまった。ちなみに、日本のニュースに関しては、アダムス・カーター氏は「岩と雪」をベースにし、足りないところは個人的なコネクションを使って補っていたが、ベックウイズ氏にはどちらもないので苦慮しているのが現状であるという。日本からの発信

を求めているのはアメリカ山岳会のみではない。このことは日本の登山界全体の課題であろう。

では、「AAJ」の編集方針はどんなものか。中村とのインタビューにこう答えてくれた。

1. 「AAJ」が取り上げる基準は、(1) 初登頂 (2) 新ルートの開拓 (3) その他特筆するに価すると判断される登攀、あるいは探検の三つのカテゴリーに限定する。

2. 公募隊によるヒマラヤ登山はアメリカでも増えつつある。一方、自分なりの志の実現を目指す本来の登山家の数はいまままでおりで、減りも増えもしない。ヒマラヤの八千メートル峰であろうと、すでに確立されたルートガイドに導かれて安全に行動する登山は興味の対象外である。「AAJ」には載せない。

明確な編集哲学が感じられる。それはベックウイズ氏のスピーチの締めくくりにおいて如実にアピールされているといえる。今回の同氏の来日スケジュール(二月十三〜二十一日)はたいへんタイトではあったが、受け入れ側の協力と温かい心遣いのお蔭で、日米双方にとって一定の成果が得られたものと思う。来日前から頼まれていた中国情報に関しては日本ヒマラヤ協会が特別に資料を準備してくれたし、京都、広島では登山界の主だった皆様の歓迎を受け、ロック・クライミングにも連れて行っていただいた。日本の若手クライマーとの交流もそれなりにできた。最後は山野井氏との奥多摩でのクライミングも実現し希望が叶えられた。ベックウイズ氏にとっては大きな収穫だったろう。

独断と偏見や情報ソースの偏りも散見されるが、外国人が見たなかなか鋭い観察と核心を突く指摘もある。本心と皮肉とユーモアがほどよく融合していて興味深い。同氏の講演の記事と併せ読むとより面白いであろう(訳者)。

### 箸とカラビナ―考察…日本の登山界

The American Alpine News, Vol.10, No.229, April 2000

クリスチャン・ベックウイズ(中村 保訳)

「ベックウイズさん、貴方が知っておくべきことがひとつあります。日本人には二つの習慣があります。

ひとつは食事のときにいつも使う箸で、もうひとつが名刺、すなわちビジネス・カードです。私たちは挨拶のたびごとに交換します。これが私の名刺です。貴方の名刺を頂戴したいのですが」。

こう言われたが、私のネーム・カードは遥か一方マイルも離れた家の仕事部屋にある引出しの中の箱に置いてきてしまった。私は翌週たくさんの日本の登山家と会う予定だった。ちょっと困ったことになったが、覚悟して成り行きに任せることにした。かくして、日本の文化・習慣を知らないが故に、外交上の儀礼を欠くような冒険的な出だして今回の旅は始まることとなった。

日本ほど中国における登山に長く、そして深く係わってきた国は他にはない。やっかいなことだが、たぶん韓国を例外として、アメリカと日本ほどそれぞれの登山文化の大きなギャップを感じさせる関係は他の国との間では存在しない。

一九九五年、国際的な登山情報に関する一連の基礎的なニュース・ソースが崩壊してしまった。すなわち、三十六年間「アメリカン・アルパイン・ジャーナル(AAJ)」の編集長を勤め、個人の責任で抜群に優れた内容の世界的な山岳情報誌を纏めてきたアダムス・カーターがその年に世を去ったからである。彼の死とともに多年にわたって几帳面に蓄積されてきた地球規模でのネットワークが喪失してしまった。ほとんど時を同じくして、世界の登山動向を集約してきた日本の情報誌「岩と雪」(山と溪谷社)も出版が取り止めにいった。「岩と雪」の廃刊とともに、日本から西側諸国へ情報を提供してきた中心的な発信基地がなくなってしまった。

私が「AAJ」を引き継いだときは、中国の山に関しては地理的概念を紹介し得るほどの知識とセンスは持ち合わせていなかったし、日本の登山家とのコンタクトや信頼に足る出版物もなかった。一九九五年から二〇〇〇年までの間、中国において幾多の日本隊による重要な登攀が行われてきたが、これらは「AAJ」や西側の登山界には十分には報告されることはなかった。

ここで比類のないほど傑出したニコラス・クリンチに登場していただく。

一九六〇年代の初めにクリンチ氏はペルーのコルディエラ・ブランカへの日本初の遠征隊の登山家に情報を提供し（訳者注…一九六一年の故・吉沢一郎隊長率いる一橋大学山岳部、ペルー・ボリビア・アンデス登山隊のプカヒルカ北峰六〇四六<sup>1</sup>初登頂に役立った）、このことが縁でその後今日まで三十有余年にわたって深い親交と揺るぎない信頼関係が続いてきた。彼の蔵書は、おそらく個人の山岳図書館としては世界一の規模と内容を備えているであろう。日本との強い絆を育み、多くの日本のヒマラヤ遠征に関する本を集めている。（訳者注…山と溪谷社を通じて故・吉沢一郎氏の和書約二千冊をクリンチ氏の計らいでアメリカ山岳会の図書館に寄贈する。完成後は「吉沢・山溪文庫」の名称で保存される予定）。

「AAJ」と日本の登山界との接触にあたり、私の希望を正確かつ上手に伝えることができなかつたため、そのことに気がついたときは、車輪は後戻りできない状態で回転していた。私が異を唱える余裕はなく、東京・京都・広島へとつむじ風のように忙しい日本旅行のスケジュールがセットされていた。かくして、海鮮料理を普通の年の四倍も食べ、乾杯で肝臓はアルコール浸けになりながら、我々と日本の関係再構築に取りかかった。クリンチ氏の日本側の窓口は尊敬すべき中村保氏である。中村氏は二十年以上海外で暮らした世界をよく知る紳士である。現在は日本山岳会の監事を務めており、ヒマラヤ（訳者注…『ヒマラヤの東』の意味）の先駆的なオースソリティーであり、探検的なトレッキングから帰るたびに知られざる未踏のピークの魅力的な写真を提供し続けている。日本とアメリカの情報の流れを改善しようとする意図のもとにクリンチ氏と中村氏が手紙のやり取りを重ねてきた結果が現実の形となり、今年の二月に東京国際空港で中村氏自ら私の名前を書いたステッカーを持って現れた。

国際関係についてのクリンチ氏の豊富な経験や緻密な理解力と、外国での儀礼に慣れていない私の不器用さや未熟さを隔てる埋めがたい断層を上手に記述するのは困難であろう。私が日本に着く前に感じていた

恐怖はブッシュ元大統領のような失態を犯すことであった。したがって、自分に言い聞かせたことは、あえて大きな成功は望まずに、一九九〇年代の初頭に国賓として訪日した折の宮中晩餐会の席上でブッシュが突如嘔吐したような場面だけは避けようということであった。

しかし、このおそれは中村氏の父親的な心配りのお蔭ですぐ杞憂に終わった。日本時間で午後八時、私の体内時計では極めて異常な時間帯であったが、私はレストランに案内された。ここで一連の会話が始まり、以後翌週まで続くこととなった。私が請求書を取り上げようとすると、中村氏はきっぱりと自分の慣例的な立場を主張した。「ベックウイズさん、貴方に払わせるわけにはいきません」と静かにいい、さらに「貴方は私の息子より若いのですよ」と付け加えた。

訪日期間中の滞在費は日本側で負担してもらえろということ、話は具体化したわけだが、日本山岳会が私に「アメリカ登山界の現状と展望」と題する講演をすることを固執したこともあって、彼らはより多くの費用を負担することになった。実は私はこの類のスピーチはいままで一度もしたことがなかったが、なんとかこなすことができた。そう、私は緊張して壇上に立った。汚れていない一番の正装（フリースやフランネルではなく、ボタンが元の位置にきっちり留まっている）で身を固め、部屋いっぱい聴衆をまえに挨拶をした。皆さんのお歳は平均して私の二倍ぐらいだった。東京で二回、広島で一回講演をした。話の重点をエル・カピタンの新しいフリー・クライム、近代的なミックス・クライムとアメリカにおけるクライミング・ゲレンデへのアクセス問題においた。講演の単調さを避けるため、リン・ヒルのノーズ（ヨセミテ）の一日登攀やウイル・ガッドのオウレイ・タイタニックのビデオの助けを借りた。

しかし、である。日本のお年よりの一部の人は居眠りを始め、眼を閉じて夢心地になり、やがて瞼のなかで疑いなく過去を振り返ってマナスルの風景を辿っていたのだろうと想像せざるをえない。

私を招待してくれた方々は常に礼儀正しく丁寧であった。ステージの私に誰一人ブライニングをしなかった。

ひょっとしたら、彼らの気持ちは終わったあとすぐ用意される酒を心待ちにしていたのかも知れない。

三つの都市で毎日毎夜ヒマラヤのベテランたちが説明してくれる百科事典的な情報と知識の吸収に私は専心した。殺人的なボルダリングと二つのロック・クライミングも予定のなかにタイミングよく割り込ませてくれた。ひとつは四五歳のザイルがいっぱい伸びる典型的な登攀ルートであり、もうひとつは世界のベスト・アルピニストのうちの二人、山野井泰史と山野井妙子の家の地下室に造られた壁面で息の弾むフリー・クライミングである。

道中私は、日本には恐ろしくたくさん山の岳会の組織が国レベル、地方レベルの両方に存在し、多くの団体は伝統的に遠征の舞台をヒマラヤに求めてきたことを知った。『岩と雪』が発刊されていた時期には、それらの遠征記録は世界中の他のクライミング情報とともに一冊に纏めて報告されていた。

しかし現在では、山岳雑誌で取り上げられるにしてもどの雑誌に掲載されるか定かではない。日本の国内自体でも情報伝達の流れが系統的かつ一元的ではなく、てんでばらばらなので、いろいろな遠征隊の記録を引き出すことが困難になりつつあることにすぐ気がついた。

このような状況を招来している複合的な原因のひとつに、若手クライマーが既存の山岳会のメンバーになろうとしない傾向がある。なんども遠征を実践してきた長老の会員たちは新機軸の企画には耳を傾けようとしない。「岩と雪」の廃刊もまたその波及的な影響は小さくない。日本の登山家にとって世界のアルピニズムへの開かれた窓が閉ざされてしまったからである。

今日、日本の外との接点が少ない現状を見るに、日本のアルピニズムは世界の登山界から相対的に孤立して発展しているといえよう。単独登攀で世界のトップに位置付けられている最強のクライマーである山野井泰史のようなダイナミックなクライマーたちは日本の登山界に資するようなことには注意を払わず、固定ロープやポーターのサポートに大きく依存する登山方法から脱却し、自分たちの登攀スタイルを進化させている。

日本では純粹なクライミングを専門に対象とする全国規模のマガジンはない。若いクライマーは自分たちの実行可能な範囲を越える登山には興味を示さない。日本山岳会のような伝統に縛られたオールド・ボーイが主流の組織は日本の若年層のニーズと関心に応えてこなかった。若い世代のクライマーたちにとって守旧派のクラブに所属すべき必然性はほとんどない。日本文化の非常に多岐の分野において中心的な役割を担っている「伝統」は漂流し、その継続性が問われている。

私の今回の訪問にあたって心を開いて対応してくれ、受け入れに便宜を図ってくれ日本側の関係者の皆様にたいする感謝の気持ちは言葉では言い尽くせない。とりわけ、中村氏は、ときには私が無意識に演じた無礼な言動や仕草にがまんしながらも、私が知っておくべきすべての人たちに私を紹介し、いつも物静かで落ち着いた態度で私を導いてくれた。

特定の人の名前を挙げることは避けるが、日本山岳会(JAC)はJAC-AAC(アメリカ山岳会)の交流に関心をもっている。より良い山登り、心温かくて親切な人々、気配りのいきとどいた夜の集い、そしてありあまるほどの美味しい海鮮料理を愛する人なら誰でもJAC-AACの行事に参加するために早く名乗りを上げたほうがよい。失望しないこと請け合いです。私が保証する。

出発してから十日後に私はワイオミングのジャクソンに帰ってきた。そう、本当に消耗したが、日本の登山文化と活躍中の現役の方々について、そう多くはないが勉強を始める機会を得たことに満足している。これから先の三か月、馬力をかけて次号のジャーナルを完成しなければならぬ。そう思うと少々意気消沈しなくてもないが、気を取りなおしてきちっと仕上げよう。持ち帰った荷物のなかには三本の酒をしまいこんである。

## 二十世紀を生き続けたマロリー

江本嘉伸

二〇〇〇年八月三十日、九年ぶりに来日したイタリアの登山家、ラインホルト・メスナーは、日本語訳されたばかりの自著『マロリーは二度死んだ』を手に記者会見に臨んだ。来日の目的である富士山のドキュメンタリー撮影、今年新ルートから挑戦したナンガパルバット、九八年のイエティ搜索などが話題となった中で、ジョージ・リー・マロリーのエヴェレスト登頂の可能性についての質問が出た。

メスナーの答えは簡潔だった。

「コンラッド・アンカーと同じ意見だ。第二ステップは、当時の技術では越えられなかった、と思う。唯一可能性のある北側の凹角を登ったとしたらもっと時間がかかって帰って来れなかったのではないか」

コンラッド・アンカーは、一九九九年春のエリック・サイモンソンをリーダーとする「マロリー、アーヴィン搜索隊」に参加したクライマーで、五月一日昼、エヴェレストの北東稜八二五〇<sup>1</sup>地点でジョージ・マロリーの遺体を発

見した当人のことだ。

マロリーたちが頂上まで登ったかどうか可能性を確かめる手段のひとつとして、アンカーは発見とは別に、ある実験をした。五月十六日、もう一人のクライマー、デイブ・ハーンと組んで頂上をめざす途中、難所の「第二ステップ」で無酸素フリー登攀を試みたのである。

もともと北東稜上部には「第一ステップ」(八五一九<sup>メートル</sup>)と呼ばれる岩場と、その上部の「第二ステップ」(八六〇四<sup>メートル</sup>)の二つの難所がある。「第一」も相当な岩場だが、「第二」はかなり手ごわい。一九六〇年に中国隊の王富洲ら三人が登頂した時は三時間以上をかけ、三<sup>日</sup>のストラブを最後には肩車して乗っ越した、と報告されたことが、頂上の写真がないこととともに強い疑念の対象となった。

一九七五年、その疑念を払うかのように中国隊は再度大規模な登山隊を組織して北東稜から九人を登頂させ、ともかく「北面ルート初登頂」の実績を残した。これ以後、難所の「第二ステップ」は、ぐんと楽になった。中国隊が、立派なアルミ梯子をかけてしまったからだ。一九八〇年の日本山岳会隊ははじめこの梯子は、今に至るまで世界各国の登山家たちを支え続けている。

マロリーたちの時代には、勿論何もなかった。マロリーと同じ条件で登り、第二ステップがどのくらいの難度なのか、そして何時間あれば登れるものか確かめてみたら、登頂の可能性を探るデータになるのではないかと、アンカーは八六〇〇<sup>メートル</sup>の高所でフリーに挑戦したのである。

結果は「ノー」だった。

「核心部の三<sup>日</sup>は、5・8ぐらいの難しさ。四時間かかった。でも、第二ステップが技術的に難しい、というのではなく上部全体の難しさから見て、個人の意見だが、マロリーたちが登頂できた可能性はない、と思う」と、アンカーは当時会見で話した。アンカーは、結果的に第二ステップをフリーで完登することはできなかった。最後は宙吊りの足を梯子のステップにかけてひと息ついたのである。帰国後ヨセミテの岩場を登ってみてアンカーは会見で言った

「5・8」を訂正した。「第二ステップは確実に5・10はある」（後述の著書）。アンカーの見解は、登頂した可能性を捨てきれない、とする隊長のサイモンソンの見方とは異にする。

## II

ジョージ・リー・マロリーは、一八八六（明治十九）年六月十八日、英国国教会の牧師の家の長男として生まれた。恩師アーヴィングの指導で十八歳の頃から登山をはじめ、やがて、数々のアルプス登攀をこなすようになる。名門のケンブリッジ大学を卒業してパブリック・スクールの教師となり、二十八歳でルース・ターナーと結婚した。新婚早々第一次世界大戦の勃発で、砲兵として戦地へ。除隊後、教職をつとめながらアルプス登攀を楽しむ日々が続き、その間三人の子の父ともなった。その頃、エヴェレスト計画が動き出していたのである。

マロリーにとって、エヴェレスト登山隊への参加は、妻のルースがどう考えるか、が重要だったようだ。幸い、友人たちの説得もあって彼女の理解を得られ、第一次隊から三次隊のすべてに登攀の主軸として活躍した。

第一次世界大戦後の一九一九年、王立地理学協会と英国山岳会が合同で「エヴェレスト委員会」を作った時、マロリーは、真っ先に隊員に選ばれた。

マロリーの功績の第一は、ハワード・バリー大佐を隊長とする一九二二年の一次隊で、ノースコルのルートを見つけたことだ。東ロンブク氷河への狭い入り口がわからず、大変な迂回を強いられた上、九月二十四日になって、ようやく七千呎のノース・コルに立ち、登頂ルートを見極めたのである。五月十八日、インドのダージリンを出発してから四か月以上かかっていた。

翌一九二二年には、登頂を目的とする本隊がC. G. ブルースを隊長として組織された。ロンブク氷河の末端にベースキャンプを張り、いよいよ頂上攻略にはいった。マロリーは、無論その先頭にいた。マロリーたちは五月二十日には八二二五呎と、人類としてはじめて八千呎を越えた。しかし、二回のアタックの失敗後、六月七日、ノースコルの

斜面で七人のシェルパが死亡するという悲惨な雪崩事故が発生、登山は終了した。

一九二四年、第三次隊（隊長は、二次隊と同じブルース）がチベットに向かった。三十七歳になったジョージ・マロリーは、弱冠二十二歳のアンドルー・アーヴィンとともに、第二次アタック隊として六月八日早朝、第六キャンプを出た。第五キャンプにいたノエル・オデルが目撃した二人の姿が最後となった。二人はついにそのまま帰らなかつた。

マロリーとアーヴィンは頂上に達したのだろうか、それとも途中で力尽きたのだろうか。そのことについての、果てしない議論が始まった。

二人を最後に目撃したオデルは、登頂し、降路で道を失い、倒れたのではないかと主張した。しかし、三次隊で大クローワールの八五七二メートル地点まで登り、最高到達記録を作ったノートンはじめ他のメンバーは、時間からいえば登頂以前にスリップした可能性の方が強いのではないかと、この立場をとった。オデルを除いて当時のメンバーが「登頂していない」とみたことは興味深い。

その後、オデルが二人を見た岩場が下の「第一ステップ」だったのか上部の「第二ステップ」だったのか、が問題となった。「第二ステップ」だとしたら、相当に困難な登攀になった筈だからだ。

八〇年八月、日本山岳会の招きで八十九歳になったオデルが来日した時も、このことが話題になった。「おそらく頂上に立ったと思います。しかし、下降中になにかまずいことがあって、帰ってこれなかったのだ」と、オデルは語った。

この時には、私たちも上部のさまざまな写真を持っている。加藤保男をまじえた話し合いを通じて、マロリーたちが最後に目撃された地点は、「第一ステップ」であった、と私はその時確信した（今回の搜索を考え出したヘブレムたちはより上部だった、と指摘している）。

しかし、目撃地点がどこであれ、登頂できた可能性は否定できない。その場合、技術的には第二ステップをどう乗

り越えるか、がヤマ場となるだろう。それをアンカーは試み、「ノー」と結論したのだった。

## III

二十世紀末の登山界に衝撃を与えた「マロリー発見」は、一九九八年、二十六歳の若いドイツの登山史家、ヨッヘン・ヘムレブが、記録、写真、地図など過去に発表されたマロリーとアーヴィンについてのあらゆる情報を分析した上、彼らの眠る場所についての推理をインターネットのホームページ「エヴェレスト・コム」に書きこんだことが、きっかけだった。このテーマに関心を持っていたアメリカの出版社幹部のラリー・ジョンソンが、ヘムレブの斬新な着想にひかれ、二人の間でEメールのやりとりがはじまった。間もなく二人は新たな分析の成果を活かすためにエヴェレストに捜索隊を組織する、という大胆な計画のために動き出した。イギリスの登山家でフィルム・プロデューサーのグレアム・ホイランドがマロリー、アーヴィンのエヴェレスト挑戦七十五周年を記念した番組をBBC放送で企画中でもあった。紆余曲折の末、BBCはのちに捜索隊に合流する。

ヘムレブもジョンソンも山は好きだが、エヴェレストに登るほどの力量はない。捜索隊を組織するにあたり、ジョンソンは商業公募隊のパンフレットの中から山岳ガイド歴二十六年、エヴェレスト登頂経験のあるマウンテン・ガイド社のエリック・サイモンソンを知り、隊長の仕事を委ねた。サイモンソンは、デイク・ハーンやコンラッド・アンカーら優秀なクライマーをメンバーに引き入れ、九九年春にはエヴェレストに向かったのである。隊が構成されるまでBBCとの折衝、資金対策、メディア、メンバー選定まで相当やっかいな仕事であったらしい。ヘムレブもアドバイザーとして隊に加わり、ジョンソンはトレッキング隊のメンバーとして後から現地に向かった。

ヘムレブの意見で捜索隊が重視していた情報があった。故王洪宝の証言だ。これは一九八〇年日本山岳会チヨモラマ隊に関わる。前年、一九七九年の偵察隊が、貴重な証言を得ていたのである。

聞いたのは、明大山岳部OBで偵察隊員の長谷川良典(当時三二)。中国側隊員の王洪宝(三九)から、七五年に

中国隊が登頂した際、八二〇〇<sup>ポンド</sup>の第六キャンプから遠くない場所で、「イングリース」の遺体を見た、と、話したのだ。

雪の上に「八千一百五十米 英国人 死体」と字を書いてのやりとりだった。

王が遺体を「英国人」と判断したのは、一九二〇年代の登山装備の特徴を見ぬいたためとおもわれる。

王はそのことを話した翌日、ノースコルへ向かう途中雪崩に襲われ、二人の仲間ともどもクレヴァスに飲みこまれてしまった。一緒に行動していた長谷川は辛うじてクレヴァスのふちにひっかかり、九死に一生を得た。

筆者自身報道隊員として参加した八〇年の北東稜隊は、しかし、マロリーやアーヴィンの痕跡を見つけることはできなかった。折れたピッケル、古びたレギュレーターや高度計など拾ったものはいくつかあるが、ほとんどが中国隊のものとなされた。単独登頂者となった加藤保男が、「いろいろ落ちてますよ」と、稜線に残された物について語っていたのを思い出す。その加藤は、二年後の冬、三度目のエヴェレストに登った直後「頑張るぞ」の声を最後に、帰らぬ人となった。

今回の捜索隊に参加した英国BBC放送のスタッフは、九八年秋と九九年三月の二回、東京の長谷川を訪ね、王が話した内容についてあらためて詳しく聞いた。ホテルの一室でカメラ撮影しながらの、真剣なインタビューだったという。

北京などで当時の中国隊のメンバーからも話を聞いたらしい。王は第六キャンプから出て遺体を見つけ、二十分ほどで戻った、という。遺体発見のことは、当時「外国人の…」とだけ他の中国隊のメンバーにもらしていたことだ。

ヘブレムは、王の証言を重視した。少なくとも、七五年の中国隊の第六キャンプに近い場所に遺体がひとつある。そのキャンプ・サイトを特定し、そこから二十分以内で往復できる範囲を搜索すれば……。

ただし、サイモンソンは「マロリーの遺体に誰かが近づいた形跡はまったくなく、七五年の目撃は別人物」との見

方をとっている。王は、「英国人」の遺体を雪をかぶせて埋めた、と当時言っており、そういう痕跡はなかった、ということだろう。とすれば、王が見たのはアーヴィンであった可能性は強い。

いずれにしても、一抹の反省があるのは、せっかく長谷川が王から聞き出した情報に対して、私たちは、十分には対応できなかったことだ。北東稜隊は、登頂のほかに「マリローの痕跡を探る」ことを課題としてはいたが、実際はそういう余裕がなかった、といったほうが正直だろう。

#### IV

そして、運命の五月一日になった。本格搜索の初日である。

コンラッド・アンカーら五人のクライマーは八二〇〇<sup>メートル</sup>付近の墜落した登山家たちの「墓所」とみられる地点を扇形に広がって搜索を開始した。六人の登山者の遺体を見つけた。アンカーだけは下方を重視して「スノーテラス」と呼ばれる地形の縁まで下り、ひとりの古い遺体を見つけた。

鉞（びょう）靴、古いザイル、などから、七十五年前に行方を絶った英国人であることは一目瞭然だった。高度計、ゴーグルなどの遺留品も残っていた。「アーヴィン」と、搜索隊のメンバーは皆考えた。

冷凍庫のような環境にいたせいだろう、うつぶせになった遺体は、七十五年を経過しているにしては、損傷が少なかった。衣類はほぼ剥ぎ取られ、剥き出しになった肌は太陽にさらされて白っぽくなっていた。「ギリシヤかローマの大理石の像のようだった」と、発見者たちは報告している。

先端がちぎれた、白くなつたザイルが身体に巻かれていた。状況から岩場から落ち、雪の斜面を滑り、手を広げて止まった。しかし、片方の足を骨折してそれ以上は動けず、そのままの姿勢で息絶えた、とみられる。

発見位置から同行者のアンドルー・アーヴィンと思われる遺体がマリローとわかったのは、着ていた衣類に「G. Mallory」との洗濯票があったからだった。

それでも「どうしてアーヴィンがマロリーのシャツを着ているんだ？」と発見者がつぶやいたほど、アーヴィンとの思いこみは強かった。

マロリーたちが不明になって九年後の一九三三年五月三十日、第四次エヴェレスト登山隊のハリスとウェジャラーの二人が八三三〇呎の第六キャンプを出た。一時間後、二人は一本のピッケルを発見した。この隊は二四年の時と同じく八五七二呎まで登ったところで頂上を断念し、帰国したが、そのピッケルがマロリーのものか、アーヴィンのものか、があとあとまで問題となった。

議論が続いて、最終的にはアーヴィンのものではないかとみられるに至った。この地点でアーヴィンが滑り、ピッケルを放してしまったのではないかと。今回の搜索隊が、遺体をアーヴィンと考えたのは、だから自然の反応だったのである。

マロリーの名の縫い取りのほか、胸から妻のルース夫人はじめ家族からの手紙が見つかり、はじめてジョージ・マロリー本人であることがわかった。搜索初日にして、まさに世紀の発見であった。

## V

マロリーは、一次、二次隊での活躍で、エヴェレスト登山の「スター」となった。もともと、その容姿は「ギリシアの神のよう」と形容され、画家のヌードモデルもつとめたこともある。早口ではあったが、講演にも定評があり、資金集めの目的から、あちこちの講演に駆り出された。国内だけでなく、一九二三年には三か月間、米国各地を講演旅行している。その際、ニューヨーク・タイムズ紙のインタビューを受けた。「なぜエヴェレストに行くのですか？」との質問に答えて、こう言った。

「Because it's there (それが、そこにあるから)」  
やがて、この言葉は世界中に広まることとなった。

新聞には「日曜版」という特殊なジャンルがある。誰が読むのだろうか、大体、こんな新聞の束をどう配ったり売ったりするのだろうか、と思わせるほど分厚い。ジョージ・リー・マロリーの「ビコース イッツ ゼア」という言葉は、その分厚い日曜版の中の一ページに掲載された。だから当時はマロリーの記事を見過ごした読者が多いのではないか。

まずは、一九二三年三月十八日付けのニューヨーク・タイムズ紙を見てみよう。

「印刷するに価するすべてのニュースを」という、この新聞のモットーが表ページに刷りこまれている。「第一部」の特集だけで実に三十二ページもある。論評記事が特集されている「第二部」が十六ページ。「第三部」のブックレビューが三十二ページ、というふうにつき、以下写真、音楽、ドラマなどの特集ページ、最後に不動産などの広告特集となり、合計すると、何と百六十ページに達する。

ジョージ・マロリーのインタビューは、「第八部」の「特別読み物(フィーチャー)特集」の中で扱われている。ただし、トップ記事の扱いではなく、この日の目玉は、W. A. モファットの飛行船による北極点計画である。「大きくすぎて写真に入りきれないので」との断り書きつきで巨大な飛行船の迫力あるスケッチとともに、詳しく紹介されている。

マロリーのインタビュー記事は、この特集の十二ページ目に△エヴェレストに登るのは、スーパーマンの仕事▽と見出しで登場する。特別読み物の扱いにはなっているが、第一ページから数えれば日曜版紙面の百二十二ページ目ということになるから目立つ場所ではない。他の記事には結構写真や図版が使われているのに、写真も地図も一枚も使われておらず、ジョージ・マロリーの名も見出し部分には出てこない。サブ見出しは△前登山隊の隊員が登頂の難しさを語る。二四年にはベースキャンプをより高くして勝利したい、と▽となっている。総じて、編集者が気合いをいれてつくった紙面とは思えない印象を受ける。

考えて見れば、この時点ではジョージ・マロリーのアメリカでの知名度は低く、アメリカ人にとって、マロリー、

who? だったのだろう。

マロリーのアメリカ講演旅行は、一九二二年秋、英国のエヴェレスト委員会によって計画された。次のエヴェレスト登山のための資金を少しでも稼ぎ出すことが目的である。スター性を持った隊員としてマロリーが選ばれ、一九二三年一月十七日、彼は定期船でニューヨークに到着した。エージェントが準備していた最初の講演は十日も先だったが、新聞の取材を四社受けることとなった。ニューヨークタイムズ紙の記者との会見はこの時ではないか、とおもわれる。記事の掲載は二か月も後（つまり三月十八日）になったが、日常のニュース面と違って日曜版のような紙面の締め切りは相当早く、取材後一、二か月もたって記事が出ることは不思議ではない。

記事は、無署名である。

後に世界の山好きを虜にする「ピコーズ・イツ（イット・イズ）・ゼア」は、この記事の冒頭に出てくる。なお、英語の原文は日本山岳会会報『山』の二〇〇〇年九月号に全文掲載されているのでこの稿では省く。

△なぜエヴェレストに登りたい、と思ったのですか？ との質問がジョージ・リー・マロリーに向けられた。彼は世界最高峰をめざす登山隊に一九二二年、一九二二年の二回とも参加しており、現在ニューヨークに滞在中だ。一九二四年にも行く計画であり、頂上に到達しようと繰り返し理由として、それがそこにあるから（ピコーズ・イツ・ゼア）と答えた▽

記事はこのあと△しかし、遠征は価値ある科学的成果をあげたのではないですか？▽と記者が尋ねたのに対するマロリーの答えが続く。

△確かに最初の遠征は価値ある地質学的調査をやった。二回の遠征とも地質学と植物学の観察と標本収集をした。地質学者は頂上の石をほしがる。そこが褶曲の頂上なのか底なのか分かるだろうから。しかし、これらは副産物だ。シヤックルトンが科学観察のために南極に行ったと思いますか？ 彼は次の旅行の資金のために科学観察を利用しただけだ。科学は時に探検行為の口実になる。私は科学が目的であることは稀だと思う▽

それがそこにあるから(ピコズ・イツ・ゼア)との言葉を詳しく説明する内容が次にマロリーによって語られる。

「エヴェレストは世界で一番高い山であり、いまだ誰もそのてっぺんに達していない。その存在が挑戦なのだ。答えは、ある部分では、宇宙を征服したい人類の欲求という本能的なものではないか、と私は思う。」

「答え」というのは、なぜエヴェレストに?との冒頭の記者の質問を念頭にマロリーが話しているからだ。この冒頭部分のやりとりを一読するだけで、マロリーが「イツ(それ)」は、「人類未踏のエヴェレストという世界最高峰」のことであることが明らかになる。

後に、世間に「そこに山があるから」という登山行為一般に拡大する言葉としてまかり通るようになったのは、「ピコズ・イツ・ゼア」の一言が、言葉として実に「決まっただけ」、登山という不合理的行為を説明するのに都合のいいせりふとして、広く流布されたためだろう。

## VI

マロリー発見による波紋は、一年を経ずしていくつもの本となってあらわれた。ヘムレブ、ジョンソン、それに捜索隊の隊長エリック・サイモンソンの口述をまとめた『GHOST of EVEREST—THE AUTHORIZED STORY OF THE SEARCH FOR MALLORY+IRVINE (エヴェレストの幻影—マロリー、アーヴィン捜索公式報告)』、アンカーが作家で登山家のデビッド・ロバーツと書いた『THE LOST EXPLORER—FINDING MALLORY ON MOUNT EVEREST (失われた探検家—エヴェレストでのマロリーの発見)』、それに英BBC放送のプロデューサーで捜索隊に参加したピーター・ファーストブルックの『Lost on Everest—The Search for Mallory Irvine (エヴェレストの不明者—マロリーとアーヴィンの捜索)』。さらに、イギリスの登山史家、オードリー・サルケルドとモービッド・ブリーシャーズの『Last Climb (最後の登攀)』それに、メスナー自身もドイツ語で『Mallotys zweiter Tod

『マロリーの二度めの死』を書いた。

うち最初のヘムレブらの本は、『そして謎は残った―伝説の登山家マロリー発見記』として九九年十二月に邦訳出版（文藝春秋刊）されている。メスナーの本も前述のように『マロリーは二度死んだ』（山と溪谷社刊）として、二〇〇〇年八月出版された。

今回の捜索は一九二一年、二二年、二四年とマロリーが参加した英国エヴェレスト隊についてのヘムレブの徹底した研究をきっかけに動き出し、それが的中したことがこれらの本からうかがえる。

そして、興味深いのはマロリーたちが頂上まで登ったのかどうか、については捜索隊としては結局グレーのまま、という点だ。

ヘムレブたちが、当時の酸素ボンベの数やふたりが最後に見られたと思われる地点の写真の分析などさまざまな情報からどちらかというところ「登頂した可能性」を強調しているのに対し、アンカーは懐疑的だ。「ヘムレブは一九二〇年代の三つの登山についてまさに生き字引だったが、細かい点にとりつかれたあまり時には木を見て森を見ることができない時がある」と、やんわりたしなめている。メスナーも同じ立場だ。

ただ、どちらの立場でも共通しているのは、七十五年前のおそろしく素朴な装備で頂上直下まで迫ったイギリス人への敬意である。

ヘムレブたちの本は邦訳本と違い、変形大判のグラフィックな作りでマロリー自身と遺留品のカラー写真が大きく掲載されており、それ自体資料的価値がある（第一発見者のアンカーたちの本に写真が少ないのは、版權の問題があるからだろう）。マロリーのイニシャルの縫い取りがあるスカーフ、ポケットの中にあつた氷河用ゴーグル、マロリーがつけていたロープの一部、そして二四年当時の酸素ボンベ、家族からの手紙、ポケットナイフ、高度計、腕時計…。その衣類、用具のひとつひとつから登山というものの、本質的なものが見えてくる気がする。日本では関東大震災が起きた当時、マロリーたちは重く、保温性の低い旧式の装備で九〇〇〇近い巨人に挑戦したのだ。

東京での記者会見でメスナーは「マロリーは登頂していない。しかし、登頂したかどうかが問題なのではない。マロリーがなぜヒラリー卿より偉大な人物になったのか、どうしてこういうマロリー像ができたか、が問題だ」と強調した。そして「彼だけがこの山に自分の扉を見つけたことが重要なのだ」とつけ加えた。

二十世紀の登山史に輝かしい足跡を残して消えたジョージ・マロリー。八二〇〇呎の高所に眠りながら、ある意味で世紀末まで登山の世界を刺激し続けたその力はすごい。その遺体が発見されたことは、複雑な波紋を呼んだが、確かに登頂したかどうかは、大きな問題ではない、と思う。ヒラリーとテンジンを初登頂者とすれば、ジョージ・マロリーは、登頂リスト「ゼロ番」ともいうべき存在だからだ。

一世紀前にはまったく未知の地だったエヴェレスト。二十世紀のヒマラヤは、マロリーによってはじまり、マロリーによって幕を閉じようとしている。

二十一世紀。新たなマロリーがあらわれるのだろうか。

## 劔岳「ゲンジロウ」尾根の正しい表記と命名の由来

五十嶋 一晃

### 一、はじめに

北アルプス劔岳の長次郎谷と平蔵谷の間に二つの隆起をもった尾根がある。大正の末より岩登りの対象として登られている岩稜で、尾根の縦走とともに平蔵谷側・長次郎谷側からⅠ峰・Ⅱ峰へそれぞれ数本のルートがある。その尾根の表記が命名以来「源次郎尾根」と「源治郎尾根」の二通りの文字が使われている。

山岳団体が発行した機関誌や報告書、登山専門の出版社が発行している書籍、ガイドブック、地図などには、現在「源治郎尾根」と記されていることが圧倒的に多い。

ところが国土地理院発行の地形図は、それに尾根の名前が記されて以来すべて「源次郎尾根」と表記されており、文部省登山研修所の資料のうち、最近作成されたものはすべて「源次郎尾根」と書き改められている。

日本山岳会百年史の史料収集・整理の過程で、このあいまいさを看過できなくなり、それに関する調査をきちんと行い、正しい表記の論拠を改めて確認できたのでここに書き留めておきたい。

尾根の由来についても諸説があるので、これにも言及したい。源次郎尾根の命名にかかわる源次郎という山人は二人いた。そこで尾根に名前がついた人を特定し、その根拠を明確にしなければならない。

仔細なことや関連情報をくどくど述べるのは心苦しいが、七十五年にわたって二通り書かれている表記を、ここできちんと整理するとともに命名由来の真実を見いだすために、知り得た情報をできるだけ多く述べていると受け止めていただきたい。

なお文中「ゲンジロウ」と書いている部分は、源次郎と源治郎の両方を示す場合に用い、表記に注意を要する「次」と「治」や、その他の注意すべき文言に傍線を引いたが、引用文であってもそれは筆者が付け加えたものである。

## 二、二通り書かれている「ゲンジロウ」尾根の表記

日本登山史のうえで重要な記録や紀行を選択し、その原典を山城ごとに編集した『日本登山記録大成』がある。全二十巻で昭和五十八年、株式会社同朋舎出版から発行された。

この登山記録集は日本山岳会の協賛を得て、編集責任は山崎安治氏、編集顧問として日本山岳会の元会長、副会長などであった三田幸夫、西堀榮三郎、今井田研二郎、田口二郎、望月達夫の各氏である。その文献の「凡例」の一つとして「地名、山名は原則として五万分の一の地図により統一し、剣は劍、鎗は槍、唐沢岳は澗沢岳のようにしたが、源次郎尾根、源治郎尾根は原文のままとした」と転載時に山名、地名を統一した約束事が述べられている。

この文献では人名、地名、山名のうちゲンジロウ尾根以外は統一しているのですが、ゲンジロウ尾根の表記には殊の外注意深く編集していることがうかがえる。しかし、その理由はわからない。ただし原典以外の解説文などは源次郎と表記されている。なお凡例には記されていないが、中央アルプスの伊那川、伊奈川も一部原文のまま表記されている。地名を正しく表記するよう心掛けている人は、従来から「源次郎尾根」と書き表しているが少数だ。

ところが佐伯源次郎と同じ芦峠（芦峠寺を地元では「あしくら」と呼んで寺を省略している）で、正式所在地を示

す以外は芦峯とした）で生まれ育ち、剣沢小屋を源次郎から継いで経営管理にあたった佐伯文蔵が、『剣岳の大將文蔵』（昭和四十九年 実業之日本社発行）の中で「剣沢小屋を建てた佐伯源治郎」と題し、村の先輩で忘れられない人として源次郎のことを縷々語っている。この著書は氏名の表記に誤りがかなり多い。文蔵自身の弟であり、立山ガイドの代表の一人として第一次南極観測隊に参加した佐伯安次を安治と記しているような誤りまでみられる。

この著書が出版された当時、筆者が文蔵に会ったときには、「ライターがよくやってくれた」と言っていたので、著者佐伯文蔵と記されているが、おそらく文蔵自身は細かくチェックしていないのではなからうか。これを確かめたいと思うが、文蔵はすでにこの世にいない。

三代目平蔵（芦峯では二代目といっている）の口述で、寺林峻氏が著した『立山の平蔵三代』（昭和五十八年 東京新聞出版局発行）も源治郎と記している。芦峯では二代目平蔵（本名は屋号と同じ甚三。昭和十八年に平蔵襲名）は割合几帳面な人で文章も上手であったという世評ではあるが、平蔵自身の著作ではなく細部にわたっては確認していないのであろう。なお、芦峯では名前を呼び捨てにしているので、ここでも芦峯の人々の敬称は省略した。

また、「剣岳」および「剣沢小屋」などツルギの表記について、当リポートは剣、劔、劔、劔、劔の五種類の表記を使っている。引用文は原典のまま表記したが、これについても機会があれば稿を改めて説明したい。

『三高山岳部報告』第五号（昭和二年発行）に高橋健治氏は「八峰、源次郎尾根」と題して、大正十五年夏の登攀記録を発表している。この報告文はタイトルが源次郎尾根と表記されているが、記述内容は源治郎尾根と記されている。また同誌六号（昭和四年発行）にも高橋氏は「剣岳の東面」と題して三高山岳部の「剣岳部史」と東面を中心に各所の岩場説明を載せているが、この小見出しも「源次郎尾根」であり、説明の記述は源治郎尾根と記している。この時点でも表記のあいまいさが目立ち、確たる表記は不明のままだ。

このように著者が一人の著述でも両方のゲンジロウ尾根が書かれていたり、簡単な一文のなかでも両方のゲンジロウ尾根が表記されている文章もある。

以上のように今までは二通りの文字が使われており、最近では源治郎尾根と記されていることがかなり多いという実態がある。

### 三、正しい表記は「源次郎尾根」

芦峠寺の佐伯源次郎（本名源之助）の子供のうち、現在男女一人ずつが元気に生活を楽しんでいる。本年（二〇〇〇年）五月十二日に、そのうちのひとり立山の雷鳥荘を経営している志鷹定一と、源次郎の孫であり黒部の祖母谷温泉を経営している佐伯芳弘、元北陸電力に勤め、定年退職後は電気技術の資格を生かしながら電気関係の仕事をしている志鷹康定と私の四人で、長時間にわたって源次郎じいさんを語り合った。また源次郎の生地芦峠の人々と会って種々確かめた。その方法として、いままでの源次郎尾根に関する紀行や小論が載っている資料を示し、その表記や由来について念入りに確認してみた。それらの人々から新しい資料ももらった。

また片貝川沿い平沢村（現在は魚津市平沢）の沢崎源次郎という山案内人の名をとったという見解もあるので、以前芳弘が沢崎源次郎について調べたことがあるものの再度確認したいということと、私が改めて聞き取りを行いたいという希望から、沢崎源次郎の生地、平沢とその周辺の集落、東蔵、山女（あけび）へ芳弘と出向き、調査を行って事実を確かめた。そこでは分厚い『片貝郷土史』も拝借した。

これらの調査によって得られた結果は、いずれの観点からも「源次郎尾根」が正しいという結論が導き出される。調査の詳細は後述するとして、源次郎尾根は立山村（現在は立山町）芦峠寺の佐伯源次郎の名をとったものである。源次郎とは屋号で本名は源之助である。

立山ガイドの村芦峠には筆者の母の実家がある。実家の屋号は太治兵衛で、現在の当主は先にも述べた源次郎の孫の康定であり、芦峠では筆者のような親戚関係の者を外孫と違って親しく付き合う。また筆者は立山中学（現在は廃校）に通学していたのでその時代の友人や、実家が夏には立山案内所を併設し、芦峠のガイドの詰所になっていたこ

となどで知り合いが多い。芦峠の六十三歳以上のほとんどの人々を知っているといっても過言ではない。

その芦峠寺の雄山神社（立山町岩峯寺にも雄山神社がある）へ初詣で行って皆さんに会い、この話になると口を揃えて「ゲンジロウ尾根のジはツギ（次）であるちゃ。明治の治と書かれている文章を見るとなんとか直してもらいたいがちあ」と、いつも多くの友人知人から聞かされる。

芦峠寺に富山県立『立山博物館』がある。その資料では、「一九二四年（大正十三年）剣沢小屋の番人佐伯源之助（屋号 源次郎）が平蔵谷からこの尾根に取りついて剣頂上に達したことからこの名称がつけられている」との説明書きがあり、源次郎と表記している。

本名源之助の長男が屋号の源次郎を名乗っていた。芦峠寺の雄山神社に「舞楽石壇 昭和二十二年奉納 四十二才記念 明治三十九年生 代表 佐伯源次郎」と刻まれている碑と、神社の社殿に石碑と同じ文面が記されている木版が側壁に掲げられている。

そして本名源之助の三男である志鷹定一は、兄の源次郎については戸籍謄本できちんと源次郎が正しいことを確かめている。

魚津岳友会の設立者である佐伯郁夫氏は四高の部報『ベルグハイル』に広告がでていて、それには源次郎と書かれているという。早速調べてみると『BERGHEIL』は大正十二年に創刊されているが、四号より広告がでてくる。ただし「剣の小屋」は四号には広告がない。五号（昭和四年発行）と六号（昭和六年発行）に掲載されているとともに、広告の文面は五号と六号が異なっている。それはその中間にあたる昭和五年一月に雪崩によって剣沢小屋がつぶされ、六名が圧死した遭難史上忘れることのできないアクシデントがあったためであろう。六名のなかには四高出身者もあり、この広告の内容には微妙な相違がみられる。これを見比べてみよう。

第四高等學校旅行部、昭和四年十二月十日発行『BERGHEIL』第五号の広告にはレイアウト、文字の大きさの違いを度外視して文面のみを拾えば「剣の小屋 夏は剣・八峰・窓・源次郎等への 一日の愉快なクレッティライ！」

冬は劍澤粉雪のボーゲン 鋭きアレートへの登攀！ 富山縣中新川郡立山村芦峯寺 經營者 佐伯源次郎」と載っており、昭和六年一月三十日発行の六号は「劍の小屋 聳ゆる岩膚の誘惑 劍・八峰・窓・源次郎等への 一日の愉快なクレッツェライ！ 富山縣中新川郡立山村芦峯寺 經營者 佐伯源次郎」と変わり、六号には夏・冬という季節的な言葉、とくに冬を表す表現がなくなっている。

これらのことから源治郎と表記する名前の人は、当時の越中の山人としては実在していなく、まず源治郎と書くのは誤りであることを確定したい。

#### 四、国土地理院発行の地形図はすべて「源次郎尾根」と表記

国土地理院の地形図上の地名は、表記と同時に読み方も含めて、市町村長の提出する『地名調書』が唯一の拠り所となっている。立山村（現立山町）長から地名調書が提出され、それを地形図に表記した時点から現在まで、次のようにすべて「源次郎」と記されている。

五万分一地形図の索引図「劍岳」は、陸地測量部から大正二年七月三十日に発行されたものが最初である。このときは当然尾根の名は表記されていない。以下陸地測量部発行、大正四年、六年、昭和七年のもの、つづいて国の組織変更による地理調査所からは昭和二十一年から三十二年までに七回発行されているが尾根には表記がない。初めて源次郎尾根と記されるのは、地理調査所、昭和三十四年五月三十日発行のものからである。大正十四年に命名されてからはかなりの年数を経ているが、このときの地形図は山や谷（沢）、尾根、施設の表示が大幅に加わり、現在の二万五千分一地形図の原型を成している。源次郎尾根の表記に加え、近藤岩や三ノ窓雪溪、劍山荘までが加わっている。

地理調査所が国土地理院と改称された昭和三十五年から四十二年発行のものの表記は、すべて源次郎となっているが、二万五千分一地形図が発行されるとともに、それ以降の表記はなくなった。これは「五万分一地形図形式の運用及び五万分一地形図編集・修正・製図 作業要領」によって縮小率および面積が四分の一になるなどから取捨選択さ

れ、表記されなくなったものと思われる。一方、二万五千分一地形図は、国土地理院発行の索引図「劔岳」の昭和四十五年八月三十日発行のものから五十二年と六十二年以降は、昭和六十三年十一月三十日付で、在庫がなくなったり、一部修正を加えて四回も発行されているが、これらもすべて「源次郎尾根」と明記されている。

## 五、命名の由来にも諸説がある

日本山岳会発行『山岳』第二十一年第一号（大正十五年発行）に源次郎尾根に関する初登のリポートがある。三高の渡辺漸氏が「劔岳新登路とハツ峯」と題して「劔岳新登路―源次郎尾根」についての報告文である。それは同じ三高の今西錦司氏と大正十四年七月六日、源次郎がたどったと思われるルート、いわゆる平蔵谷のS状雪渓に取付き、途中から左に折れてⅡ峰のコル近くにでるルートであろうと思われるがそこを登り、九日には山案内人の佐伯政吉を加えて、「劔の頂上より直接に、東南に劔澤に向けて派出せる尾根」いわゆる後日ゲンジロウ尾根と命名した尾根の末端近くから頂上までを初登攀したときの記録である。渡辺氏のリポートを引くと「源次郎尾根と称する所以は、大正十三年七月別山平に新設された登山小屋の建設に従事した大工源治郎なる者の名前を取つたからである。源治郎は、或日、単独劔に登らんとして、路を平蔵澤に取つたが、雪溪半ばにして、道を間違へ、誤て右に登つた為遂に此の尾根の上半に出て頂上に達したのであつた。尤も源治郎が間違へたのは無理のない話で、平蔵澤をその儘登り切つて、平蔵澤の頭に達し、それから直角に右に折れて、脆弱な岩の上を登つて行くのよりも、右手に取つてずんずん登り詰めて仕舞ふ方が、見た所素人眼には距離から言つても時間から言つても近かさうであり、殊に同伴者も無かつたので、恐らく、その方を本当の登路と信じて登つたのであつたらしい。それ以後、芦峠の入夫中、一部の者の間に、此の尾根が源治郎尾根と呼ばれる様になつたのである。但し此の名稱は一般に認められたものでも無く、殊に以下に述べる様な理由もあるので、假に、かう名付けて置くまでで、何か適當な名稱があれば、それを取り度いと思ふ。……又、源治郎が登つた道程は、決して彼が初めてでは無く、既に大正四年七月二十二日、冠氏が初めて平蔵澤を降られた

時に此の逆の行程を取つて居られる」と述べている。

谷や尾根の命名は、山案内人を雇用した登山者あるいはその関係者が、山案内人の名前をつけることが、特に劔岳では多い。のちほど述べるが小島烏水氏がとりあげている長次郎谷、平蔵谷、源次郎尾根、金作谷（薬師岳）はすべて登山者が命名している。

冠氏は佐伯平蔵、国蔵を案内人として二十二日に平蔵谷を下降している記録（『山岳』第十年第二号、大正四年十二月発行）によってそのルートを確認した。私自身は冠松次郎氏が下降したと思われる本峰南壁を五月はじめに登ったことはあるが、当日の午後は吹雪いていたくらいで平蔵谷の雪渓が多量についており、夏の取付きと比べれば岩の上部にとりついでいるので夏とはかなり異なる。

そこで、富山県警山岳警備隊の隊員であった佐々木泉氏（現在阿曾原温泉小屋を経営するかたわら山道などの補修を請け負っている）と一緒に、冠氏の登山記と劔岳の岩場の解説書（文部省登山研修所発行）と劔岳東面・南面および源次郎尾根の写真を見比べながら冠氏が下降した道程を確認してみた。どの視点から見ても冠氏は源次郎尾根のⅡ峰近くまで下降し平蔵谷に降りたとは思えない。おそらく南壁のA3かA4付近を下降したのではなからうか。したがって源次郎が間違つて登ったルートとは異なると断定してもよい。

なお表題の主旨とは異なるが、源次郎尾根Ⅱ峰劔岳頂上側の下りで二十五坪のアップザイレンを要する。佐伯郁夫氏は、その懸垂用のピンが昭和二十年中ごろには既にⅡ峰に設置されていたことに関心をもち、このピンをだれが、いつごろ設置したのかを調べている。発表を待ちたい。

渡辺氏の報告が続く。「此の途は尾根に出るまでは傾斜が急であり、相当困難であるが、尾根に出るからは大した事は無く、其の長さも、尾根全體の三分の一にも足らない位であるから、此れを尾根全體に及ぼして源治郎尾根と稱するのは妥當を欠く様な氣もする」と、尾根のスケッチを添えて初登攀の記録を詳細に述べている。報告の最後に「遅くなつて池ノ平の方から『明治』の連中が來たので、小舎が急に賑やかになつた」と結んでいる。のちほど明大

OBの一文を入れるので、最後の部分を転載した。

この報告は、尾根全体の三分の一ぐらいいを登って尾根全体に及ぶ名称とすることには妥当性を欠くような気もする、という見解である。一応うなずける見解ではあるが、渡辺氏は佐伯源次郎が平蔵谷から尾根へ出て、その尾根から頂上へ行った状況を、直接本人から聞いていないようだ。

『山岳』第五十七年（昭和二十七年発行）に、明大山岳部OBの馬場忠三郎氏が「劔岳『源治郎尾根』の由来と当時の思い出」と題して「劔岳の源治郎尾根の由来も、その名付け親とも言うべきこの私が、當時を思い返ししながら、この辺で筆を執らせて頂き、何時、誰が、どうして命名されたかを明かにしておくことがよかろうかと想う。源治郎尾根は又源次郎尾根とも書かれ、山案内の源次郎か、大工の源治郎のどちらの名から付けられたかの二説があるので、その真実を伝えて世の誤解を後世に残さないことが、山岳界にとってあなたがち無意味でもなかりう」という書き出しで「平沢村の山男沢崎源次郎は、二十才を過ぎて間もない大正の半ば頃、斯界の先覚者なる田部重治、木暮理太郎氏と偶然の出会いから毛勝岳から劔岳へ案内した」という記述を含め、縷々命名の過程が述べられている。

馬場氏は芦峠の佐伯源次郎のことをこう書いている。「芦峠寺の佐伯源治郎は代々大工で、小小屋造りの面で山に縁を持ったようだ。彼は豪胆で意志の強い性格だった。彼が劔沢から芦峠に降る途中、別山から雄山詣りを私と二人でしたが、鉄棒を片手に黙々と歩いていったことが思い出される。大正十三年七月のこと……劔沢の小屋は新設工事中で、夏山シーズンを迎えようとして最後の仕上げを急いでいた。その大工の棟梁が山男ならぬ源治郎だった。彼は、この小屋を建てた記念にもと祠を造って劔岳の頂にまつるべく、丁度、私が八ツ峯に足跡を残したのと日を同じくした七月十日に、祠を背負って平蔵谷を登って行った。その途中でルートを誤ったのか、右手の雪溪に折れ、尾根に取付いて劔の頂上に達したのだった」と述べて、その尾根を初めて通過した経緯が記されている。翌十四年に「佐伯宗作をつれて未だ未開の鐘釣温泉から小黒部谷を遡って、小窓、三窓を経て別山北平（劔沢）小屋に歩を運んだ。たまたま小屋の外で、京都三高の今西錦司、渡辺漸の両君が、今日初登攀したのだと言って、長次郎谷と平蔵谷をはさむ中間

尾根をスケッチしているとところだった。……三高の両君は、私に尾根を指さして説明してくれた。さて、その尾根の名は？ 私ほうなづきながら、あの尾根の上部は、昨夏、源治郎がルートを間違えたとは言え、その一部に最初の足跡を印したのだから、『源治郎尾根』と名付けたらよからうと提唱した。日本の山や谷は、人名をとったところが少なくない。三高山岳部報告第五号に、大正十五年夏に登った高橋健治君が『源治郎尾根』の名で、その紀行を発表している。以来何時とはなしに、その名で呼ばれるようになった。あの日、あの小屋で折よく三高と明治の顔合わせを見たことから、大工の源治郎も劍岳にその名を残すことが出来ようとは、何んたる運者であつたらう。若し機会を得なければ『三高尾根』と命名されていたかも知れない」と書かれている。『三高山岳部報告』第五号については「二」の項ですでに述べた。馬場氏の一文には表記や由来には異論はあるが、馬場氏が命名したことは確かであろう。前述の渡辺氏のレポートには大正十四年七月六日に「劍の頂上に持て行く御宮を背負つた福松と大林區署の人とで、小屋に一寸休んで、ずんずん雪溪を降りて行つた。其の後を追つて、……平蔵澤を登り初めたが、上の方に見える大林區署の一行には仲々追ひ付けない」と報告しているように、祠はその時に揚げていることは事実であろう。

ここで気づくことは両者とも大正十三年から劍沢小屋を経営管理していた佐伯源次郎を源治郎と表記、職業は大工、渡辺氏は源治郎が単独で登つたとし、馬場氏は祠を劍岳の頂上にまつるためであつた、と述べている。これらの文章が表記や命名の由来の間違ひの源ではなからうか。事実劍岳の岩場の解説書などにはこの二文から引いた文章がみられる。

日本山岳会の発起人のひとりである小島烏水氏が山案内人について述べた一文がある。それは「早期の山案内人としての獵師銘々傳」と題し「私は、明治後期登山勃興時代に、木暮理太郎、田部重治、中村清太郎、及び冠松次郎等諸君たちが、最も信頼して行を共にした、長次郎谷の新名に記念されてゐる宇治長次郎、平蔵谷の佐伯平蔵、源次郎尾根の澤崎源次郎、金作谷の宮本金作などいふ一群を、シヤモニードの人たちに引き當て、座興的ながら、竊かにはくそ笑んでゐる」と『山の風流使者』（昭和二十四年 岡書院発行）の「山の因縁五十五年」の一題目として載

せている。ここでは沢崎源次郎が源次郎尾根に命名された山案内人であると断定している。

## 六、尾根に名を残した源次郎とは芦峯寺の佐伯源次郎

『立山とガイドたち』（昭和四十八年 北日本新聞社出版部発行）には「横一行の松尾峠遭難によって、山岳関係者や富山県当局の間で登山者の安全を確保するため山小屋を建設しようとの機運が高まり、富山県電氣局が中心になって各所に山小屋が建てられていった。その一つに大阪毎日新聞社の剣沢小屋があり、その小屋がけを源次郎が引き受けた。本名を源之助といい山案内のほか大工仕事が上手だった。大正十三年七月に別山平で剣沢小屋を建設しているとき、しんぱくという木（深山柏槇ともいう）が、剣岳の尾根にはえているようなので取りにゆこうということになり、木こりを連れて剣へ登ろうとしてコースを平蔵谷にとったが、雪渓半ばで道を間違え右に登ったので尾根の上に出てしまった。それまで誰れも、この尾根から頂上へ登ったものがなく、しゃにむに登り詰めるそのまま頂上に着いた。新ルートの開拓であり、けがの功名と言うわけだ」と記され、そのあとには「源次郎尾根」と呼ばれるようになった、とその経緯が載っている。

そして源次郎は「若い時から営林署の仕事をし、黒部の奥をはじめよく山に入った。小柄だったが体力があり、芦峯では、向こうすねのいい男」として知られ、高い木でも平気でのぼり、深山をスイスイ分けて入ったと言った。剣沢小屋が完成したあと、妻や娘婿の佐伯芳房と終戦まで管理経営したが、登山者を『とてもかわいい』と言って大切にしていた。二男の政光の話では、『山を大切にすることは登山者を大事にすることだ』と口ぐせのように言っていた。……山小屋経営の理念を築き上げた人として、いつまでも尊敬されている」と載せ、山人としての高い評価を与えている。このころは源次郎の指示で二男の政光や佐伯文蔵が雨に濡れた登山者をよく迎えに掛け出している。

この書籍の出版にあたっては、全般の記述をみると相当念入りに芦峯寺で聞き込みをしているようだ。

『剣岳の大将 文蔵』にも、源次郎尾根の由来が書かれているが、『立山とガイドたち』に述べていることとほぼ同



劔岳源次郎尾根をバックに劔沢小屋前で撮影（昭和12年）左より源次郎の妻キク、源次郎の長女ヨシエの夫芳房、源次郎（本名源之助）、源次郎の六女ササノ、志鷹ミヤ（屋号三次郎の娘）

じことが語られている。

『立山とガイドたち』の執筆者のなかには日本山岳会の会員もいて、『山岳』や『山日記』を参考文献の筆頭にあげている。その『山岳』を精査する過程で、当然いまままで述べた渡辺氏や馬場氏の見解を認識していたはずで、それには事実上一部異論を唱えている形だ。ただ、地元の新聞社が源治郎と表記しているのは釈然としない。

三男の定一は、源次郎じいさんから「小屋造りの合間をみて、小屋がけの仲間と劔へ登ろうといった気軽な気持ちで登り、平蔵谷から間違えて尾根へ出た」と聞いているという。

筆者の母フサは源次郎（本名源之助）の三女ミナが兄の妻であり、親戚筋にあたるので、昭和十三年から十六年の夏の間劔沢小屋の仕事を手伝っていた。その間、源次郎を中心に手伝いの人々や登山者と一緒に撮った写真が多く残っている。フサは、源次郎翁から聞いている話では、間違って尾根を登って劔岳の頂上へたどり



劔岳をバックに源之助の在りし日（昭和12年）

着いた。源次郎の「ジ」は「次」であり、写真の裏に記録されているメモにも源次郎ときちんと書かれている。そのころは源次郎翁といていた、という。これらの写真に記されている内容と表記は筆者も確認している。

これらの諸事項から推察すると、おそらく三高の渡辺氏や明大OBの馬場氏は、佐伯源次郎が劔沢小屋の小屋がけ、いわゆる建設現場の総責任者であり、大工の仕事が得意であったことから大工の棟梁と思い込んだのではなからうか。源次郎の表記についても注意深く聞き込んではいないと思われる。

孫の芳弘は「小屋がけといっても山小屋から炭焼小屋、岩魚釣り用の小屋、獺を目的とした小屋などがあり、これらを生活の糧としていた人は芦峠の人ならば丸太を切ってきて、誰でも小屋がけをした。また源次郎じいさんは大工仕事で上手であったとは決していえない、芦峠では並である。営林署にいたことは確かである。小屋がけといっても登山者を泊める小屋ともなれば相当大がかりにならざるをえないが、源次郎じいさんが請け負ったのは、営林署から信用を得ていたためだろう」という。

また「源次郎じいさんから聞いていた話では、じいさんが大工であったということや間違って尾根に登り劔岳へ登ったのは祠を劔の頂上に祀ろうとして登ったのではない」という。

孫の康定は小学校の五年と六年の夏休みに、同じ孫である芳弘の弟の芳丸と二十日間ぐらいつつ劔沢小屋で遊んでいた。その時にはいろいろ源次郎じいさんから劔の話を知ったり、登山客と一緒に劔岳へ連れていってもらったが、

間違って尾根を登ったことはよく聞いていたといい、定一の話と同じで現在の生き証人の一人だ。

## 七、山案内一回のみの山人、片貝川沿い平沢の沢崎源次郎

尾根に名を残したのは沢崎源次郎であるという説があり、ここで沢崎源次郎について述べよう。

沢崎源次郎は現在の片貝川の最奥の集落平沢に住んでいた。明治二十八年四月三日に生まれ、昭和三十一年五月二十一日、六十一歳で死去している。

田部重治氏は昭和三十三年に著した一文に「平蔵・長次郎・源次郎」と題してそれぞれの案内人を紹介している。ここで紹介されている源次郎とは沢崎源次郎のことで、沢崎は大正四年七月から八月にかけて、田部重治、木暮理太郎、田部の甥の南日実（第四高等学校生）氏の山案内人として大山村の宇治長次郎、宮本金作とともに片貝川南又から釜谷を遡って最高点（釜谷山と命名）に登った。つづいて毛勝山を往復したあと猫又山、赤谷山、大窓を経て池の平から三ノ窓の雪渓をつめて七月三十日剣岳頂上に立ち、剣岳北方からのルートを開拓した。その後、御山谷を下り東沢を遡って赤牛岳、黒岳（水晶岳）、野口五郎岳、烏帽子岳から高瀬川を下っている。

田部重治氏はこの一文に、沢崎源次郎は「平沢村の物品販売所で買物しようとして、そこで偶然会い、案内人として頼んだ男である。別に強い男だとしてすすめられたわけではなく、ただ、そこにいたから頼んだに過ぎない」と述べ、その山行においては山案内人としての有能な数々の行動を記し、「源次郎とはそれきり会わない……もし彼を山案内人として私達のととで、度々雇う登山家があったら、彼はすばらしい能力を発揮したに相違ないと私は思っている」と回想しており、名ガイドの素質が備わっているながらそれが埋もれていることを惜しんでいる。木暮理太郎氏も同じ見解を「黒部川奥の山旅」(『山岳』第十年第二号・第十一年第二号)に述べている。

ただし沢崎源次郎が源次郎尾根を登った記録はなく、田部重治氏や木暮理太郎氏も沢崎源次郎と源次郎尾根については全くふれていない。

前述の『立山とガイドたち』の第四章に「山歩きの巧者・源次郎」と題して沢崎源次郎を取り上げている。沢崎源次郎の生地でも取材しているようだ。その末尾に「彼はその後（筆者注・田部、木暮、南日の片貝川から毛勝山へ劔岳へ鳥帽子岳への山行）に登山家の山案内をつとめたということは、彼を知る周囲の人たちの話を総合しても出てこない。ただ彼について知り得たことは、北海道や樺太へ伐採や木材搬出の労務者となって出稼ぎに行き、晩年は片貝の山で炭を焼きながら昭和三十一年五月二十一日、六十一歳の人生を終わったということだった」と結んでいる。

筆者が山案内人を伴った登山記録を調べている範囲では、沢崎源次郎は毛勝山から鳥帽子岳への縦走以外は見当たらない。ただ一回、昭和五年五月に三高山岳部の三名が片貝川の南又谷で遭難死亡したときに、「沢崎某」が捜索に協力しているという記録があるようだ。原典は未見であり、日本山岳会の図書室には『三高山岳部報告』の七・八号が所蔵されていないのでなんとも言いがたいが、『山岳』第二十年第二号（昭和五年六月発行）の「片貝川南又に於ける三高山岳部の遭難」とか山岳遭難史を取り扱った文献では、「人夫〇名」（人数は日や搜索パーティーによって異なる）と書かれており、その人夫の一人であったのであろう。

しかし現在の魚津市平沢（旧平沢村）には十三軒の家があるうち、十軒が沢崎の姓であり、今回の調査ではこの「沢崎某」を特定することはできなかった。

馬場氏は前掲の一文の中で、田部重治氏が沢崎源次郎を「彼は見たところ小柄ながら、重い荷物を背負っての雪渓の登降や雪渓渡りがうまく、岩場も猿のように伝わるのに感心したそうだ。この山歩きにたけて剽悍そのもののような源次郎であったからには、劔岳の谷に其の名を残した名ガイドなる大山村の宇治長次郎や、芦峠寺の佐伯平蔵と並んで、劔の三羽鳥として、その名を留めさせたかっと思ふ」と感想を漏らしている。しかし、誰が名を留めたいと思ったのか、田部重治氏は自分が雇用了、あるいはよく知っている山案内人の特徴を著したに過ぎない。田部重治氏は平蔵谷を「ここは長次郎がはじめて下った谷なので、平蔵谷の名称を与えることは大きな誤解を後世に招くのではなからうかと思ふ」（『わが山旅五十年』昭和三十九年発行）と提唱しているくらい地名には相当注意深いセンスを

もっている人である。また、田部重治、木暮理太郎氏が沢崎源次郎に偶然出会ったのは大正四年七月で、佐伯源次郎が間違つて尾根を登ったのは大正十三年七月であつて、九年もの隔りがある。

ここで本年（二〇〇〇年）五月十四日に、佐伯源次郎の孫芳弘と一緒に片貝の村々を訪れ、その後も平沢の人たちに電話で確認するなど、沢崎源次郎の周辺情報を集めたので、その一部を述べたい。

村人の間では沢崎家の元祖の家であるという沢崎吉宗（昭和十年生まれ）氏は、「十年かかって五年前に家系図をつくつたが、沢崎家の先祖はもと侍で、糸魚川の不動山城が長尾為景の総攻撃により落城し、城主景貞は部下と共に越中片貝川の平沢の地に逃げ込み、そこを永住の地と定めた。平沢に現在十軒ある沢崎姓の者は、昭和三十年代までは全部親戚付き合ひをしていたが、若い世代になりその関係をやめた」と、沢崎家の由緒ある説明があつた。

平沢には昔、物品販売所がなかつたかと問うたところ、「昔、木地屋村が片貝川の最奥の村で、次が奥平沢村、次が平沢村であるが、三村とも店はなかつたと思う。三村の買い物は山女（あけび）の三吉（みよし）商店であろうと思う。現在八十六歳の三吉キミさんがやっているが、その先代のおばあさんも八十歳過ぎまで店をやっていた」との説明があつた。

沢崎源次郎の山案内については「源次郎じいさんの家は、私の家の隣で、今は空き地になっているところにあつた。じいさんが若いころ有名な登山家の山案内をしたということ、じいさんが亡くなってから聞いた。それ以外の山案内のことは聞いていない」という。

沢崎の姓の表記は「澤崎」と「沢崎」がある。郷土史においても二通り記されているが、ここでは「沢崎」に統一した。

沢崎家の先祖の話は『片貝郷土史』（平成九年 魚津市立片貝公民館発行 七四八頁）によって確認したところ間違いないようだ。

山女の三吉（屋号助作）ばあさんは周辺の村のできごとなどをよく記憶しているという評判であるが、山案内のこ

とはあまり記憶にはないようだ。田部重治氏の物品販売所のおばあさんが沢崎源次郎を紹介したストーリーを話すと、若い人を紹介したこともあったのではなからうか、という。そこで年代的には合わないので再度確認してみた。沢崎源次郎が物品販売所で偶然ばあさんからすすめられて山案内をすることになったのは大正四年であり、現在八十六歳の三吉キミさんは生まれたばかりであったので勘違いがあったようだ。情報は多角的に行う必要性を痛切に感じた。

沢崎正一氏の話に移ろう。氏は昭和二十三年生まれで、沢崎源次郎の孫秋夫氏（現在魚津の市街に在住）と同級であり、魚津市にある魚津岳友会のメンバーで、ブロード・ピークの遠征隊にも参加している。したがって山のことはいくわかり、質問の意図もわかっていて非常に的確な回答を得た。

沢崎源次郎が田部重治氏などの山案内を行ったことは蔵書として持っている『日本アルプスと秩父巡禮』を読んでも知っていた。吉宗氏や三吉ばあさんの話を聴取した段階では、田部重治氏の紀行文に間違いがあるのではなからうかとも思ったが、全く疑う余地がなく正確に当時の平沢を話す。話す内容は片貝郷土史で確認したがほとんど同じで、当時の山道や集落の様子は田部重治氏の紀行文とも同じだ。

正一氏は、田部重治氏の「毛勝山より大町まで」と題する一文に、「平澤は水力発電所があつて、奥平澤から片貝川の水を取り入れて、こゝで百尺の落差を作つてある。右手の物品販売所の札の立つてゐる家で、案内者一人を欲しいことや、米や味噌のことを頼むと、丁度そこに居合せた澤崎源次郎と云う二十二歳の若者が行かうと願ひ出て……」という記述について、当時平沢の物品販売所は実は私の祖母の実家で姓は木下であるが、屋号は次郎兵衛であった。祖母は昭和天皇と同じ明治三十四年に生まれているが、十六歳ぐらいで沢崎へ嫁にきている。したがって田部重治に沢崎源次郎を紹介したのは祖母の母であると思われる。木下家は現在町へでており平沢にはいない。

平沢村では明治四十五年一月に片貝第一発電所、大正十一年八月には第二発電所の発電開始があった。第一発電所ができる前の明治二十二年、片貝谷村が誕生した時点では平沢村の人口は二百十五名で、戸数が四十八戸であった。これは郷土史に載っている。この後発電所の建設ブームで人口も相当増えたらしく、店も繁盛していたようだ。田部

重治、木暮理太郎の山行は大正四年の夏であり、建設ブームの中間期にあたる。

沢崎源次郎の家は源次郎じいさんの子の婿である清次（故人）があとを継ぎ、その子供秋夫が現在五十二歳である。二十年前くらいに魚津へ出た。源次郎じいさんは山案内人ではなく剣岳へはその後行っていない、という。それではなぜ沢崎源次郎が田部重治や木暮理太郎から山案内人としての能力が高いという評価を得たのであろうか？ と質したところ、孫の秋夫は運動能力が抜群である。源次郎じいさんには時々ウサギの肉や岩魚をもらっていたので、猟や釣りで炭焼きをやって山を歩き、そのうえ秋夫のように運動神経は人並み以上であったのでこの山でも自分の庭のように歩くことができた。このことが山案内人として高く評価されたのではなからうか。そのじいさんが熱い風呂に入って死んだというので、びっくりしたことがある、という。

情報を総合すると、田部重治氏の紀行文のとおり、平沢村の物品販売所で、そこはあさんから山案内人として沢崎源次郎を紹介され、彼の山案内はその一回のみで、地元の平沢や近隣村では沢崎源次郎の山案内について特別に関心をもっていなかったといえる。

#### 八、立山ガイドの村芦峠寺の山人、佐伯源次郎とその家系

尾根に名を残した佐伯源次郎は、明治八年四月九日に生まれ、昭和二十三年十二月十四日七十三歳で死去した。芦峠では佐伯という姓を三分の二弱、志鷹を三分の一弱の人が名乗っており、人々は屋号または屋号と名前呼びあっている。たとえば源之助の三男定一は「定吉（屋号）の定一（本名）——さだきちのさだかず——」という。したがって本名源之助を芦峠の人々は源次郎と呼んでいた。

源之助は昭和の前半に源次郎を襲名したようだ。芳弘、康定の孫二人は、源之助と聞いたのは大人になってからで、子供のときは源次郎だと思っていた、という。源次郎の孫は芦峠に三人いるが、あと一人は定一の長男定義である。しかし定一が話の輪に入っているので今回は定義に会って確認はしていない。

屋号の源次郎は相当古い家系ではあるが、現在の源次郎が何代目であるのかははっきりしない。芦峠寺は、一二五〇年前からの記録が残っている集落ではあるが、源次郎の菩提寺は無くなったために古い過去帳は不明である。

『立山ガイドの系譜』（安川茂雄著 一九七二年発行）には佐伯源治郎、平蔵、八郎などが名ガイドとして紹介されていたり、その他の山案内人を紹介している著書には「名だたる山案内人」として源次郎がとりあげられている例はあるが、いくらか疑問が残る記述があるので、ここではその紹介を止そう。

佐伯源次郎は日本では早くから開かれた立山登拝の案内人であった中語の最後の世代に属し、孫の芳弘は源次郎も中語の経験があった、という。すなわち近代登山の山案内人以前の時代で、源次郎より少し若くて明治十一年生まれの平蔵（初代）や十二年生まれの国蔵は、中語から山案内人にかわった者のうち、登山資料には最初に取り上げられている山案内人たちである。

『山岳』第十三年第一号（大正七年発行）には「越中立山村芦峠寺の登山案内者（立山登山口）」として、二十二名が載っている。年齢は数え年で表示されており、年配の人から順に佐伯九郎兵衛（四十四歳）、佐伯福太郎（四十四歳）、佐伯義雄（四十二歳）、佐伯三九郎（四十二歳）と並び、次が平蔵（四十一歳）、国花（国蔵）（四十一歳）へとつく。ところが剣沢の小屋を建てる前のことではあるが、源次郎はこの時には数え年四十五歳であるが登山案内者としての名は出てこない。もっとも同じ年代の九郎兵衛や福太郎も登山史に登場するような山案内の実績はない。

大正十年七月富山県山岳・河川・道路案内業取締規則が施行され、山案内を行うには警察署の許可が必要になり、同規則第六条に案内業者の守るべき十カ条が明記された。それまで中語で組織していた中語人夫同盟が装いを一新して立山案内人組合を設立し、佐伯平蔵が初代組合長になっている。この過程で大正十年七月に芦峠小学校の講堂で山案内人の許可を得るための試験が行われ、百名余りの人が受験しているようだ。この合格者名簿について富山県へ問い合わせたが、公文書館には規則の県報は保存されているが、名簿等の文献はないようで、この中に佐伯源次郎が入っているかどうかは確認できない。

したがって源次郎の山案内人として貢献した実績ははっきりしない。

ただし富山県〔立山博物館〕の学芸員吉井亮一氏は、佐伯源次郎と伊藤孝一氏（日本山岳会特別会員 会員番号四八一番、大正五年七月入会）が山を通しての関係がかなり深いととらえており、それを現在追跡調査中のようである。伊藤孝一氏は大正十三年二月厳冬期の薬師岳初登頂、さらに積雪期の奥黒部領域を踏破して槍ヶ岳に至り、大正末期に開拓の登山を行った名古屋の富豪である。関係が深いというのは、源次郎の四女サチ、五女アキが、名古屋の伊藤家へ行儀見習いに出ており、孝一氏の家族付きであったということによる。その写真も伊藤家に現存するという。当時の社会的背景を勘案すると、単に知己の口利きによったとは考えにくく、源次郎と伊藤孝一氏とに親交があったとみるのが自然であろう。この調査結果の発表が待たれる。

源次郎は剣沢小屋を建ててからはその経営管理と、特別に指名があった登山者を剣岳へ案内していた。そのころは芦峠にある源次郎の家のいろりには多くの登山者がよく集まっていた。いつも五〜七人の登山者がお茶を飲んだり、煮しめなどを食べながら雑談していた様子を子供や孫たちがよく覚えてる。

ここで本旨とは異なるが、源次郎が中語をやっていたようであり、この中語について若干ふれておきたい。

中語はチュウゴといい、表記が二通りある。仲語と中語であるが、ここでは中語と表記を統一した。ガイドの前身といわれているが、中語を端的に言えば立山登拝の案内役と立山開山縁起などを語る宗教的教化の媒介役である。

『立山とガイドたち』には倉田一郎著の『強力殿』を引いて「仲語は神と人との間に介在して神意を伝え、また人のねぎごとを神に奏する仲介者で、いわば力者としての神話にある手力男命の筋を引く」と書かれ「仲語が登場した年代は明らかではないが、一山文書天保二年（一八三一年）の記録には、当時三十八人の仲語がいたとあり、門前の佐伯一族が担当して奉行所から鑑札を受けなければ営業できなかった。現在の芦峠ガイドの草分けであろう」と載っている。民俗学の定本柳田國男集第九巻に「立山中語考」が載っている。それには「中語は字の如く神と人との間に在って語る者としてよろしい」との説明がある。

芦崎寺大仙坊の主で雄山神社の宮司として神職五十年、一山文書の管理責任者であった故佐伯幸長（昭和六十二年十月死去）は、『立山風土記の丘』（昭和四十七年発行）、『立山信仰の源流と変遷』（昭和四十八年発行）など立山信仰に関する数多くの著書がある。これらの著書には「仲語と中語の両方の表記があり、このことを現宮司の令鷹に確かめたところ「父はどうして二通り使っていたのかわからない。立山登拝の案内は、本来、坊がやらなければならなかったが、それをチュウゴにお願した。他のこともありチュウゴについては現在調べている」ということであった。これも調査結果の発表が待たれる。

筆者は一山会の文書には二通り書かれているのではなからうかと思う。『越中立山古記録』として全四巻（終刊は平成四年発行）が、立山開発鉄道（株）から非売品で発行されており、筆者も一度目を通したが、古文書でもあり「はじめに」を読んだ程度で中語についての確認をしていない。筆者が「中語と表記するのは、中語は「神と人との間にあって語る者」であり、仲の表記を用いれば「人と人の間にある者」という意味ではなからうかという単純な考えからであり、筆者の勝手な責任のない解釈で中語と表記している。

さて、源次郎が誤って尾根から劔岳に達したときは四十九歳である。中語と近代登山の山案内人としての転換期で、同年代あるいはその前後で、山獄案内業（佐伯榮作が使用していたゴム印の名称より引用）として生活していた人は限られているが、源次郎はすでに劔沢小屋の経営管理にあっていた。

日本山岳会の『山日記』の初刊は昭和五年であるが、山案内人の項で「佐伯源次郎」と載っていたり、昭和五年一月、劔沢小屋が雪崩によって潰され捜索隊の一員として『劔沢に逝ける人々』（編者 東京帝國大學山の會 昭和六年梓書房発行）に記されている「佐伯源次郎」は、明治三十九年生まれ、昭和四十三年に死去した本名源之助の長男である。

二男の政光は戦前はガイドが主であった。昭和十年一月、ガイドの杉田寛治が室堂で凍死したときの登山に、文蔵と三人でガイドをしていた。戦後わずかではあるが、劔沢小屋の経営管理にもたずさわっている。

ここで屋号源次郎の家系図を示し、この一文にかかわった人々の間柄を確認したい。



源次郎（本名源之助）の父源作は山仕事と農業以外にどんな仕事を営んでいたかわからない。ただし大工ではなかった。源之助の子供は十人で、現在三男の定一と七女のナツ以外は鬼籍に入ってしまった。定一は生まれてまもなく源之助の妻キクの実家である定吉（屋号）の養子になり、志鷹定一と改姓している。屋号の源次郎は現在曾孫の俊幸が継いでいる。

源次郎の親戚や芦峠の人々の話では、源次郎の系統は大工はやっていない。源之助は杣人や木挽の作業の請け負いをやっていたが、大工をやったことは誰も聞いていないし見てもいない、という。

そして当時の芦峠の大工では利三（屋号）の系統がやっており、少なくとも利三の利一（明治二十六年生まれ、昭和六十一年春九十三歳で死去。名ガイド利雄の兄で利雄は熊撃ちの名人、内蔵助山荘を建設・経営した）は大工で、利一の弟である佐伯利秋（明治四十年生まれ、昭和四十五年六十三歳で死去）は大工で下駄職人であった。他に利一の弟子であった佐伯甚栄（屋号甚助）や佐伯嘉助が芦峠での大工であった。

源次郎の系統では源之助の長男である源次郎が製材・土木・建築業をやっていたのでいくらか大工に関係がある程度であるともいう。

芦峠での大工については利三の直系で、現在の当主である佐伯進（立山駅前千寿荘経営）にも大工の系統についての確認をしたが同じ見解であった。

## 九、まとめ

今まで述べたことを整理しよう。端的にいえば

- (一) ゲンジロウ尾根の表記は「源次郎尾根」が正しい。「源治郎尾根」は間違いである。
- (二) 尾根に名を残した人は「佐伯源次郎」である。「沢崎源次郎」ではない。

なお、沢崎源次郎が田部重治、木暮理太郎氏の山案内を行ったのは、大正四年であって大正の半ばではない。

また佐伯源次郎が劔岳へ登ったのは大正十三年であり、沢崎源次郎が唯一山案内をしたのは大正四年で九年の隔たりがある。

(三) 命名者は明治大学OBの馬場忠三郎氏であろう。地元の人ではない。

(四) 佐伯源次郎が劔岳へ登ったのは、小屋造りの合間をみて、小屋がけの仲間と劔岳に登ろうと思い、平蔵谷をつめたが、途中で間違えて尾根に登り、その尾根から頂上に達したものである。小屋建設記念に祠を劔岳の頂上に祀るためではない(源次郎本人の言い伝えを尊重する)。祠は大正十四年七月六日に芦峠で村一番の力持ちであった佐伯福松が背負い上げている。

(五) 佐伯源次郎は大工ではない。大工の棟梁でもない。芦峠での大工の系統は利三(屋号)の系統である。

(六) 佐伯源次郎(本名源之助)の山案内人としての功績はよくわからない。中語の最後の年代であり、近代登山の山案内人の時代には五十歳近くであったので、劔沢小屋の経営管理を主とした山人であった。

なお、昭和に入ってから山案内人として掲載されている「佐伯源次郎」は、明治三十九年生まれの本名源之助の長男である。

(七) 源次郎が登った登路を、それ以前に冠松次郎氏が下降しているという報告がある。したがって、源次郎が登った登路は初登ではない、という見解である。

冠氏の紀行を仔細に検討すると、本峰南壁を下降したのであろう。源次郎が登った登路とは異なる。

以上、史料・資料や現地での調査、聞き取りなどを述べたが、今後は「源次郎尾根」と正しく記されることを切に願って稿を閉じよう。

## 同志社大学山岳部の七十年

— 遠い山・旅する心 —

平林 克敏

### 山河跋涉の気風と明治時代の登山（一八七五年～一九一〇年）

二〇〇〇年を迎えた今年、同志社大学は創立百二十五周年になる。設立当初から同志社では、山野を遊行して浩然の気を養い、心身を鍛える「山河跋涉」(The playground of Kyoto) が全校生徒の間で行われていた。

明治の終わりまで同志社は、週末の土曜・日曜が休みだったので、大概の生徒は朝早くから草履履きで、愛宕山、比叡山、北は鞍馬の奥の院から南は天王山まで、東山三十六峰を歩き、なかには比叡山を越えて坂本に下り、琵琶湖の西側、比良山から蜈蚣山等、十八時間を歩き通す生徒も多かった。

この「山河跋涉」と名づけられた全校生徒の行動は、百二十年前の同志社の習慣であった。

この思想は、同志社の山登りの原点ともいえるもので、この気風の中から、多くの学生が育ち、山登りの楽しみが生まれていった。

のちに、英国人宣教師ウォルター・ウェストン（一八六一～一九四〇年）の通訳として、彼の旅の多くを手助けし

た浦口文治（一八七二～一九四四年）も、山河跋涉を同志社で八年間続けた一人である。

浦口は一八九〇年（明治二十三）同志社普通学校を卒業し、神戸組合教会の会員として神戸にいた折、福音伝播会（S・P・G）所属の宣教師として第一回目の来日中（一八八九～九六年）のウェストンに紹介され知人となり、名古屋にいたハミルトンと共に日本アルプス登山に同行したのである。

ウェストンの代表的な著書となった『日本アルプスの登山と探検』を支援した浦口の裏方とも言うべき役割は実に大きなものであった。ウェストンは記録の中で「浦口は多少学識のある考古学者である」と言い、「特に土地の慣習や迷信の調査に大変役立ってくれたので、山旅の面白さが二倍になった」と記している。

浦口はその後、英文学者として同志社大学、法政大学、立教大学等で教授として活躍していた。ふとした折から同じ英文学者でもあり法政大学教授で日本山岳会の評議員をされていた田部重治氏と語り合う中で山の話となり、田部の紹介で、日本山岳会小集会で一九三四年十一月「ウェストンと歩んだ頃」と題して講演をしている。おそらく、田部氏が「ダンテとプラトーとの愛の理想」を語り、浦口が「シェークスピアやラスキン」の研究を語り合うなど、各々の専門の話の合間に、いつしか身上話となって浦口の登山歴を知ったのではなからうかと思う。

この講演内容は『山岳』第二十九年第三号に六十三ページにわたって詳細に記載されている。

その中で浦口は、同志社当時の山河跋涉にふれ「可塑的青年期の五ヶ年間に、私の山好き癖を助長してくれた母校が、当時の日本では唯一の登山奨励学校であった事……」また、「私等の時代の登山は、ただ登らんがための山登りであった。ちょっと高い山が目につくと、あいつに一つ登ってやろうと早速登る。とにかく登る。径がひどければかえって愉快だと、がむしゃらに登る……。途中で散々汗をかく事を痛快がって登る……。至極淡泊な山登り。今から顧みると、私等の戸籍はやっぱり日本登山史に於いてその第一期の古代史に属するもの……」等とユーモアを込めて語っている。浦口十五歳から二十歳、今から百十～百十五年前の日本の若き学生の登山感を知ることができ、印象的で大変興味深い。

この山河跋涉の習慣は、校祖新島襄が米国から帰国し、同志社英学校を創立した二年後の一八七七年（明治十）から実施されている。おそらく脱国して米国に渡り、その後明治政府の遣外使節団（一八七二年）を助け、欧米の教育のあり方、その理想とする姿を視察してきた結果によるものと私は考えている。政治、産業、教育等社会システムにかかわる視察は当然の事として欧州における登山や探検思想、また、自然科学を通して培われていく青少年の野外活動や物の見方、考え方等、その理想とする姿を新島襄は見逃さなかったのだと思う。当時の欧州は、欧州アルプス登山の絶頂期をすぎ、欧州の知識層はヒマラヤ山脈をはじめ、他の秘境の地に足を伸ばした頃であったから、欧米の若い人々の活力ある姿を山河跋涉に求め、日本人学徒の将来を考えたのだと思う。

一八八六年（明治十九）、二十一歳で同志社に入学した河口定治郎（のちの河口慧海）も山河跋涉で心身を鍛えた一人であった。

百二十年前のこの気風というか、思想の中に若い学生から生まれた日本の近代登山の胎動を知る事ができる。やがてこの気風は、その後設立されていく多くの学校や、大学の学生達の山登りに大きな影響を与え、旅行部や山スキー、山岳部等の結成へと発展していく一助となったのである。

一八九〇年代（明治中頃）には京都近郊の山々はもとより、比良連峰、丹波高原の山々まで、歩き尽くしてしまっただというから、当時の学生のエネルギーは大変なものであったにちがいない。

京都府立一中で西堀栄三郎さんや今西錦司さん達が青葉会を結成（一九一六年）して、山城にある四〇〇以上の山三十を競争で登るユニークな計画を「山城三十山の山野跋涉登山」と称した事も同志社の山河跋涉から四十年後にこの思想が京都の中で受け継がれている事を示している。

### スキー部から山岳部へ（一九一一年～三〇年）

学生達はやがて、六甲山や和泉山脈、台高山脈にまで足を伸ばし、その中から特に遠くの山々を目指す学生達が

ループを作り、活動を始めるようになったが、明治の中頃には、山岳部 (Alpine Club) という概念は、欧米から派遣されてきた教授や宣教師の提案としてあったが、学生の間にはなかった。なぜなら、山河跋涉を続けていた全学生の思考性が多様化していったからである。

比叡山から坂本に下り、大津に出る者、尾関崎を越えて大津まで歩く者、その後琵琶湖や瀬田川で舟遊びをし、汗を流す者。これが水上大運動会の先駆けとなった。明治期の同志社では春秋二回の大運動会が催され、春は水上運動会、秋は上賀茂神社等で行われるのが恒例となっていた。

一八九五 (明治二十八) 年頃には、この中から、ボートレースや競泳、フットボール、ラグビー等が、欧米人教授の指導で行われるようになった。大学スポーツクラブの胎動である。

全校生徒が二十年余り続けていた山河跋涉の中から、様々なスポーツが生まれ育ち、山歩きの人数は徐々に減少していったのである。運動会の「旗奪い」を野蛮な行為ときめつけていた一人で、アルペン・クラブ設立の熱心な提唱者であったロンバート教授等は一九〇一〜〇二年頃には、「旗奪い」に共感して熱狂するようになり、「旗奪い」の前に氣勢をあげるために、今も歌い、引き継がれている同志社チアリーダーを創案するほどになっていた。

当時の外人教授達は山河跋涉を奨励しながらも、山で心身を鍛えた学生達に様々なスポーツを教え、奨励するようになっていったのである。

一九〇三年、専門学校令公布の煽りを受けて同志社大学は週休二日制から土曜半日の授業が行われるようになり、山河跋涉は制約を受け、山に行く学生は日増しに少なくなり、限定された学生達によって、登山や山スキーをするクラブへと進化していったのである。

積雪期の山歩きに苦勞を重ねていた学生達の朗報となったのは、一九一一年 (明治四十四)、オーストリアの陸軍武官レルヒによって日本に導入されたスキー術であった。

信州飯山から転動してきた前窪勝之助先生によって、一九一六年 (大正五) 同志社にスキーが持ち込まれた。

登山の先駆者達はいち早くスキー術を取り入れ、伊吹山や愛宕山で技術を磨き、信州や山陰の雪山にスキー登山を試みるようになった。同志社のスキー登山の有志のグループが結成されたのは、一九一八年（大正七）であった。

すでに一八九三年（明治二十六）には、同志社の運動部には九つのクラブがあり、なかでもボート、野球、ラグビー等は、最も古い欧米系のスポーツとして活動していたというから、スキーや登山クラブとしての誕生は、遅いくらいであると言える。

この山スキーと登山の有志がスキー部を結成したのが一九二四年（大正十三）で、伊吹保次郎らによって設立された。毎年、スキー合宿が関温泉で組まれ、夏期には、槍・穂高や剣・立山連峰に向けて登攀活動が行われていった。今回製作したビデオは、この時期のスキー合宿の古いフィルムから編成しスタートしている。

同じ年、同志社中学に児島勲次によって旅行部（のちに山岳部）が結成された。児島は、大学へ進むまでに、北アルプスの大半の山を登り尽くしたほどの猛者であった。この部員達はやがて同志社大学山岳部、高商山岳部に進み、北アルプスや台湾、朝鮮、樺太、千島の山々に足跡を刻み、同志社大学山岳部の第二次黄金時代を築いていたのである。

各大学のヴァリエーションルート開拓を初めとする精鋭的な登山が続く中で、スキー部を改め、新たな山岳部を結成する動きになったが、予科学生、松永栄吉の烏帽子から黒部側に転落する遭難事故が起り、学友会に承認された山岳部となったのは、一九二九年（昭和四）の事であった。伊吹保次郎、伊吹孝三郎、久下稔、大畑好三郎らによるもので初代部長は予科の松山武司教授が就任した。

山岳部が独立すると、残された単独のスキー部は学友会に承認されなかった。新たに競技を目的としたスキー部が発足したのは、それから十年後の事である。

以上、前述二項では、学生登山が生まれた思想的背景や近代登山に至る同志社の動きについて述べた。山岳部設立後の動きについては、戦前の活動と戦後の活動のいくつかを挙げるに止め、一九六〇年（昭和三十五）アピ遠征以降

の数多くの海外遠征については、本ビデオに収録され、報告書や単行本が出版され、『山岳』にも発表されているので省略する。主だった記録については行動の概略と、実施した前後の時代背景や、その特徴について記するに止めた。各々の活動の詳細は、DAC報告ならびに海外登山や学術調査報告書がある。文末の付表を参照頂ければ幸いである。

### 昭和初期から戦前（一九三一年～四〇年）

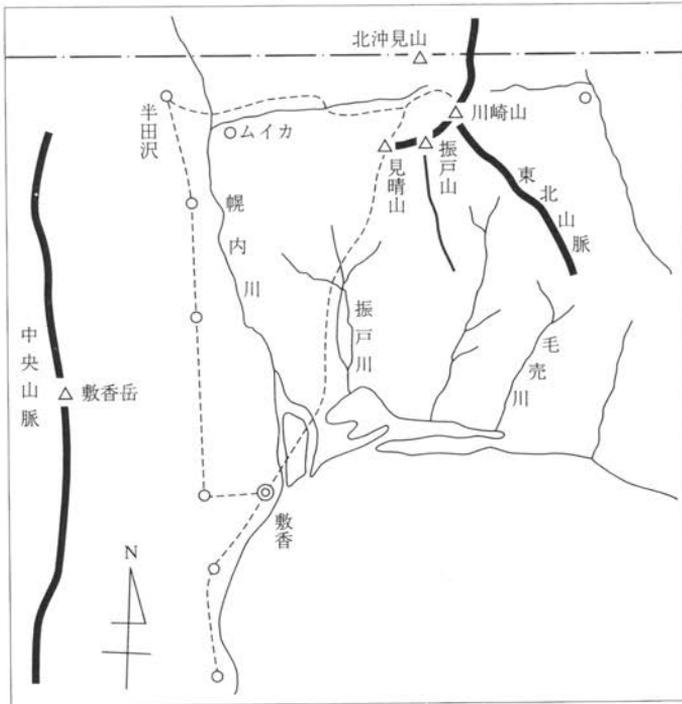
山岳部と改称された同じ年の一九二九年、関西学生山岳連盟が同志社を含む十四の大学や専門学校の山岳部、旅行部によって結成された。また、同年二月には関東学生山岳連盟が結成され学校山岳部の活動は絶頂期を迎えようとしていた。

同志社は創立翌年から積極的な活動を展開し、登山史に残る記録的な登攀を重ねていった。児島勘次や田中正男、入江保太といったパイオニアたちは、剣岳小窓尾根、鹿島槍天狗尾根、荒沢奥壁、北岳バットレスなどのヴァリエーションルートを拓いていった。

一方、大学の部室では、ヨーロッパの最新の登攀技術やアルピニズムの思潮を吸収することにも怠りなかった。「アルパイン・ジャーナル」の登山記事やヒマラヤに関する文献を丹念に翻訳し、ヒマラヤ遠征の具体的計画を考えたのもこの頃であった。しかし、満州事変（一九三一年）や五・一五事件（三三年）が起り、戦雲が日本をおおいはじめた時代でもあった。

一九三二年（昭和六）同志社高等商業学校に山岳部が設立され活動を始める。

一九三二年、この頃ヴァリエーション開拓競争に加わりながらも、国内に行き詰まりを感じはじめていた山岳部は千島や台湾、樺太へとフィールドを拡大していった。三三年には、児島勘次、小林清孝らが北千島に渡り、千倉火山列の登山を試み、三三年には、児島、入江保太らが台湾の岩壁を開拓し、三四年には児島、山本明が北朝鮮の小白山脈と長白山脈を縦走した。



東北山脈略図

一九三五年（昭和十）十二月から翌年一月にかけて樺太東北山脈に遠征、入江保太、三崎篤、西本栄一ら八名、敷香をトナカイの橇で出発し東北山脈をめざして雪の行進を続け、野営を重ねて五日目の三六年一月三日、六〇〇メートルの見晴山露营地に到着。六日、見晴山と振戸山の鞍部にテントを設け、全員スキーでトナカイ引きのグレゴリーとともに振戸山（一一〇〇メートル）に登頂。八日、幌内川の支流で雪崩に巻き込まれながらも当時の日本最北端の北沖見山に登り、入江、和田、オロッコ人ティレンティは川崎山に登るといわずらしい記録となった。

立教大学が日本で初めてナンダコート登頂に成功したのは一九三六年十月のことである。このニュースは日本の山岳界に大きな衝撃を与えた。同志社も奮い立ったが、この年の二・二六事件等、迫りくる戦火にヒマラヤの夢は挫折しはじめ、翌三七年には蘆溝橋事件が勃発、日中戦争が始まると

山岳部の草創期を築いた先輩達は、戦場にかり出されていった。

一九三六年五月、樺太、東北山脈の遠征から帰った入江保太は、同志社の田中康弘、福田源五郎を加え関西学生山岳連盟合同隊を組織し、北千島に遠征している。

翌一九三七年は、山岳部創設者の伊吹保次郎、森貞憲は入営し、入江保太は戦地に出征していった。前年、北千島に遠征した福田源五郎は奥穂―前穂高の吊尾根で墜死する。

一九三八年には、五年前に創設した山岳部先輩クラブを同志社山岳クラブに改称したが、新しいクラブの仕事は高商を含めた山岳会員十数名等を戦場に送り出すのが日課となった。

その上、悲しいことに剣岳三ノ窓で月形昇が落石により死亡し、山岳部は火の消えた淋しさとなった。

一九四〇年騒然とした時局の中にあつて、吉川貫二山岳部長率いる、高商山岳部が台湾に遠征、鈴木良彦、片岡（津田）康祐らが中央山脈を縦走した。

翌四一年、学友会が改称されて修練団となり、山岳部は山岳跋涉班と改称され、高商山岳部は報国山岳班と改められた。同年十二月真珠湾攻撃に突入していったのである。

### 戦後新たな旅立ち（一九五〇年～六〇年）

一九四九年（昭和二十四）学制改革があり、高商と各専門学校は大学に統合された。戦前まで別々に活動していた山岳部も大学に一本化され、新たにスタートした。

登山が始まって学生達が一番苦労したのは、持参する食料の確保であり、古い装備を集め、修理する事であった。多くの先輩達の中には、大切にしていた登山用具や身の回り品を戦災で失った人も多かった。焦土と化した中でも、いかなる環境にも平気で対応できる登山を志す人は、山に足を伸ばし、その数は年々増え続け、一九四七年には本格的な積雪期登山が始まったほどである。

一九五〇年復興への焦りからか、剣岳八ツ峰のヴァリエーションに登攀中に小谷真一が墜死し、年末の三十日には剣から鹿島槍の計画を遂行中、松本敏夫、中村忠吉、木田恵三が大冷沢出合で止め岩をも埋めつくす大雪崩により遭難してしまった。この事故は、戦後の遭難事故としては話題となった悲しい出来事のひとつであった。山岳部の戦後スタートは厳しいものとなった。

一九五二年（昭和二十七年）、岸田権二、津田康祐他二名が、唯一未登の稜線となっていた白馬岳から北に伸びる北方稜線をトレースする等、山岳部復活の第一歩が印されていた。この頃、鈴木良彦等を中心に戦前からの夢であったヒマラヤ研究は以前にも増して積極的となっていた。

筆者、平林は一九五三年に同志社に入學し、山岳部に入った。平林は長野県の大町高校時代から山岳部にいて、北アルプスにやって来る、各大学山岳部の伝統や気風といったものを見ていた。その中で関西の大学山岳部が一見地味に見えるが、ユニークな登山活動をしている姿に引かれ、同じ山岳部で活動していた二人の間と関西行きを決め、一人は京大に、平林は同志社に入った。

当時の同志社山岳部の気風は平林の期待と少し違っていた。続いた遭難に打ちひしがれ、パイオニアワークを求め同志社の良い伝統は、荒廃しようとしていた。焦りのためか、「しごき」の姿も上級部員の中に見られた。二年生の終わり頃には、平林や杉本和哉、古森金蔵、尾崎一郎らが中心となって同志社の良き気風の復興に努めた。

この動きを支援したのは、一年先輩の数名の部員と一級下の江上康や伊東正好、室野進、押川秋雄等の十人余りの新人達であった。それから四年ほどの間に将来の部を支える多岐な精鋭達が入部し、育っていった。

このグループが戦後の同志社の黄金時代とも言える活動を展開していったのである。

山での自由・自立の精神、自ら山を考える部の姿勢は、自由闊達、壮大な思想を育む姿に変わっていったのだと思う。自らの努力を怠る者には、「しごき」と受け止められるが、自由な考えで研鑽を重ねる者は、遅しく、新しい行動の道が開けるものだ。この両者の判断は、一にリーダーの指導教育上の責任によるものであるとの思想は、強い自立

した個を育てるために平林が喧しく部員達と議論し、構築していったものである。

これら若き同志社のヒマラヤのパイオニア達は、世界の秘境で活動を広めていたヨーロッパの人々に刺激され、ヒマラヤの未登峰へ押さえきれない情熱が沸騰し始めていた。

一九五五年には、平林、杉本が後立山全山を縦走し、翌五六年には、平林をリーダーに厳冬の烏帽子に登り、烏帽子小屋をベースに、奥穂高までの長大な極地法登山を成功させて、八〇〇〇<sup>ル</sup>峰登山の補給線を確保するに必要なシステムを研究し、着々とヒマラヤ遠征の準備を進めていった。

この年、日本山岳会がマナスル登頂に成功する。

平林はスポーツ枠の外貨では、ヒマラヤ登山の外貨割当てが受けられない当時の事情を知り、学内の教室を廻り、氷河の調査や、ネパールに点在する仏跡等の調査を計画し、ランタン谷や、チューレン・ヒマールの計画を立て、何度も関係省庁を回ったが、在学中にヒマラヤ遠征の夢は実らなかった。

一九五八年、劔岳で極地法による集中登山を展開した江上康と寺阪元雄の両名は、ヒマラヤへの思いから東京に就職を定めた。

“どの山をやるか”、内陸アジアの探検史やヒマラヤの記録をひもとき、地図を広げながら目標を探る。未探検地域へ、容易に人を近づけない辺境へ、西北ネパールへと目標が絞られ、そして、照準は一点に定まった。七二二三<sup>ル</sup>の未踏峰、アピ——。平林も東京に出て合流した。

山岳部、山岳会が一丸となって、アピに向かって動き出した。しかし、時代の状況は現在とは全く違い、外貨枠や入国許可の取得、資金や物資の調達など、日本を出国するまでに幾つものハードルを越えなければならなかった。

日本を出れば遠征の五〇パーセントは成功、といわれていた時代である。ほとぼしるような情熱で不可能を可能にし、わずか三カ月あまりで津田康祐隊長以下四人の隊員が神戸を出航したのは、一九六〇年三月十四日である。

アピへの道のりは他の遠征隊と異なる特殊事情が山積していた。第一に、この山がインドとチベットに接するネパ

ルの辺境の地に位置し、接近するためには、インド領、ガルワールヒマラヤを北上し、外国人立入り禁止地域、すなわち、インナ・ラインを通過することであった。第二に、私たちの計画の前年、一九五九年は、ダライラマ十四世がラサを脱出し（三月十七日）、インドに亡命（三月二十九日）した時であったから、中国軍の武力弾圧と制裁からヒマラヤの国境を越えてインドとネパールに脱出してくる現住民があふれ、国境地帯は厳戒体制下にあった。

さまざまな困難はあったが、登山より渉外業務に悩まされた遠征となった。

登頂の日、平林はギャルトゥエン・ノルプと共に登攀を続けた。チベット領の聖山カイラスとグルラ・マンダータ（ナムナニ峰）の雄峰をながめながらの登攀であった。平林にとってこの山は青春の心に焼付いたスタンブのように一日たりとも忘れることのできない山となった。

このグルラ・マンダータ登山の実現は、この日から二十五年の歳月を待つことになる。

五月十日のアピ初登頂は七〇〇〇以上のヒマラヤ高峰を初登頂した、マナスル、チョゴリザにつく日本では三番目の登頂となった。五月末には、ヒマルチュリ、八月にはノシヤックなど日本人の記録は、一九六〇年以降、目白押しとなっていくのである。

### サイバル登頂と西ネパール横断

一九六三年（昭和三十八）、同志社は、開拓された地域を避けるように、ふたたび秘境西北ネパールに向かった。めざす山は、七〇四〇以上の未登峰サイバル——アピの東にそびえる雄峰である。

隊長は、戦前に輝かしい登山歴を持つ児島勘次である。日中戦争の勃発の年、突然山の世界を去った。その後長く沈黙していた児島の再登場に、日本の山岳界は驚きを隠さなかった。

サイバルへのアプローチは険しく、インド平原から山麓までのキャラバンは壮絶を極めた。モンスーン期のテライのジャングルは灼熱地獄である。容赦なく雨にたたきつけられ、ヒルに吸われ、マラリヤ蚊や野獣の生息する密林を

越えてキャラバンは四十日におよんだ。雨期があけるころ、サイバル氷河舌端にベースキャンプを建設した。

許された登山期日は一カ月しかない。登路は、一三〇〇<sup>リ</sup>の氷壁から南尾根経由で頂上に達するルートを選んだ。急峻な氷壁、恐怖の岩稜、つきつきに立ちほだかる難関を克服し、二十日あまりで最終キャンプを建設する。そして十月二十一日、平林とシエルバのバサン・プタールが登頂に成功した。

登山は終了したが、西ネパール横断という大きな仕事はまだ残っていた。本隊はバジャンからジウムラに入り、ダイレクからネパール・ガンジーに、本隊と別れた福田勝一と松村多四郎は、ネパール北端の村ムグからカンジロバ・ヒマールの北をラングー河にそって、未探検の地域に足跡を刻みながら、四十日かけて五六〇<sup>キ</sup>を踏査した。

その後、サイバルは二十二年後に、スペイン・フランス合同隊により第二登頂がなされた。サイバルは大変困難な山である。

### アラスカ学術登山

サイバル登山が進行している頃、山岳部員を中心に、新たな計画が動きはじめていた。理工学研究所と合同のアラスカ学術登山である。平林が在学中、ヒマラヤ遠征を共に考えていた、西原正夫工学部教授を隊長に、総勢八人の登山隊が結成され、日本隊の足跡が残る山域を避け、未知の度合いの濃いランゲル山脈に目標をしばり込んだ。四〇〇〇<sup>リ</sup>を超える処女峰が数多く残る山脈を目指した。

一九六四年七月始め、セスナ機でナベスナ氷河上に降り立ち、さっそく主峰のブラックバイン（五〇三八<sup>メートル</sup>）の登攀にとりかかった。プリザードに悩まされながら、急傾斜の北西稜を攀り、蒼氷の壁を突破し、七月十八日、北村泰一、川井康男ら四人が登頂し、第二登を果たす。つづいて、処女峰のリーガル（四二〇〇<sup>リ</sup>）に挑み、八月三日、長谷川暁一ら四人が登頂に成功した。

その後、氷河調査、地磁気観測を行い、多くの学術的成果を収めた。

## アンデス・アマゾン探検登山

アピ登山に参加した江上康は、次の目標に南米を選んでいた。アンデスの山とアマゾンの河をつなげるところに探検登山の意味を見出す。そして「アンデスからアマゾンへ」を計画の柱とし、このプランを「A—A計画」と呼んだ。アンデスは、ペルーのビルカバンバ山群の盟主サルカントイ（六二七一<sup>メートル</sup>）に絞られ、アマゾンは、最長のウルバンバ河が選ばれた。隊は江上を筆頭に、八人の若手会員で構成された。

一九六五年三月二十日、日本をたち、ベースキャンプまで二カ月あまりかかった。

サルカントイは、インカの都クスコの西に位置する聖なる山である。未踏の北東稜を登攀ルートに選び、もろい岩と氷でできたサルカントイは手強く、いくつもの障害に悩まされながらも、頂上へのルートを拓き、六月二十一、二十二日に岩間清平ら七人がピークに立つ。さらに、里藤武と川田哲二が、サルカントイの西にそびえる未踏峰キシュアール（五七七五<sup>メートル</sup>）に登頂した。

その後、江上はじめ四人のアマゾン隊は二台のゴムボートで、緑の魔境といわれるアマゾン河一三〇〇<sup>キロ</sup>を一カ月かけて下降した。一方、前芝茂人以下五人はメリソス山群の五〇〇〇<sup>メートル</sup>の未踏峰数座に登り、半年におよんだA—A計画を完結した。

## 白い巨人、ダウラギリ

サルカントイの登頂を果たしたベースキャンプでの祝賀会の夜、だれかが「次は八〇〇〇<sup>メートル</sup>や」と叫んだ。そして全員が同じ言葉を口にし、酔いつぶれた。酔いが醒めても、ヒマラヤの巨人への情熱が冷めることはなかった。

帰国後、若手OBを中心に「八〇〇〇<sup>メートル</sup>研究会」なる研究会を結成し、カラコルムやヒマラヤの巨峰を検討するうちに、次第に難攻不落といわれたダウラギリ峰（八一六七<sup>メートル</sup>）に惹かれていく。八〇〇〇<sup>メートル</sup>峰の中で最後まで人を寄せつ

けなかった難峰である。

八〇〇〇ハチトウソウ峰は、一国の代表登山隊か、あるいは選りすぐられた国際メンバーで挑むのが慣例であった当時、一大学による攻略は同志社隊が世界で初めてであった。まして条件の悪い秋に難峰を攻撃しようという計画である。同志社隊に成功する見込みはない、という憶測が登山界に支配的だった。しかし、ダウラギリの魔性に魅せられた男たちに、ひるむ気配はなかった。

一九七〇年八月二十日、太田徳風隊長以下十二人の隊員達は、雨が降りしきるポカラを後にした。九月四日にベースキャンプが建設され、六日に北東稜の登攀が開始される。

モンズーンが明けると同時に、気温が下がり、ジェットストリームの影響を受けながら、ときに雪崩に巻き込まれ、ときにすさまじい吹雪に停滞を余儀なくされ、登攀は苦闘を強いられた。十月二十日早朝、川田哲二とシュエルパのラクパ・テンジンはピークに向かって歩きだす。不安定な雪稜を登高し、いくつもの小ピークを越える。やがて本物の頂上が目の前にあらわれた。午前十一時四十五分、二人は八一六七ハチトウソウの頂に立った。

ダウラギリI峰登頂をもって、一九六〇年のアピに始まる同志社のヒマラヤ登山は一つの節目を迎えることになる。ダウラギリで使用された酸素呼吸器は、同年春の日本山岳会のエレベスト登山のために平林と和田豊司らが開発した日型マスクにバルーンを取り付けた新しいタイプものを採用した。バルーンを取り付けた国産品の新型は、同志社隊から採用され、七〇年代から八〇年代前半の日本人の八〇〇〇ハチトウソウ峰登山に大きく貢献した。

### 山岳部の衰退

同志社がダウラギリ登頂に成功した年、アピやサイパルの副隊長で登頂者でもあった平林は日本山岳会のエヴェレスト隊に参加し、自らが開発したヘルメット式酸素呼吸器を使って最高峰の頂に立った。日本山岳会東海支部のマカール登山隊員として後藤敏宏は頂上直下にせまった。一九七〇年は、同志社のクライマーたちが八〇〇〇ハチトウソウを越え

るヒマラヤの高峰で、めざましい活躍をみせた年であった。

七〇年代に入ると、ヒマラヤの未登峰がつきつきと登られると同時に、壁の時代を迎える。アルピニズムの必然として、難度の高い登攀が追求されていった。かつてアルプスで展開された登山が、ヒマラヤという舞台で始まった。また、ヒマラヤにも観光化の波が押し寄せ、神々の座と崇められた僻遠の山々も遠い存在ではなくなっていったのである。

一方、ヒマラヤ登山に新たな潮流が生まれる中で、戦前から登山界をリードしてきた大学山岳部は衰退していった。それは登山界の趨勢であった。同志社も、ダウラギリ登頂で新しい時代の先陣を切りながらも、その後の登山活動は停滞しはじめていった。

しかし、かつてのような活気は薄れつつも、創部以来先輩達によって培われてきた登山のあり方は力強く脈動していた。

平林がサイバル登頂の著書のあとがきでこう述べている。

「必ずしもその目的が山でなくてもよい。血を沸き立たせるような魅惑的な僻遠の地でさえあれば。その向こうに千古の雪におおわれた未登の山々が連なっていれば、なおさら結構である。」この思想を受け継いだ若いOB達が、方向をチベットに転じていった。フロンティアに向ける視線に少しの曇りもなかったのである。

### 中国登山（一九七九年～八〇年）

一九七七年のヒンドゥー・ラージのガラムッシュ遠征の隊長を務めた松村隆広は、この山の登頂を終え、帰国してから同じ神戸にいた平林を助け、ナムナニ峰の登山計画に熱中し、同じガラムッシュの隊員であった宮崎貴文は帰路インドに出、アッサムから中印国境に聳える山々を偵察して帰国した。この頃（一九七八年）から同志社山岳会の新しい登山が中国領に向けて動き出した。

中国は文化大革命の終結を宣言し、そして一九七九年、中国はチヨモランマ（エヴェレスト）はじめ八峰を翌八〇年から開放すると発表した。

八〇年代にはいと、ヒマラヤでは無酸素、単独、冬期、速攻、縦走といった困難な登山を追及する傾向を強めていき、パラパントやスキーを併用したコンビネーション登山、公募登山も行われるようになる。また、多くの一流クライマーがヒマラヤに散っていった。一方で、新たに開放されたチベットの未踏峰に関心が集まっていた。

### 女王国に君臨する四姑娘山

八〇年（昭和五十五）から中国登山協会と折衝を続けてきた同志社は翌年、四姑娘山（スークーニャン六二五〇）の許可を取得した。チベット高原と四川盆地を画する山岳地帯に聳える峻峰である。

かつてこの地に女王を頂く国があった。「東女国西羌之別種。以<sub>三</sub>西海中復有<sub>二</sub>女国<sub>一</sub>、故称<sub>三</sub>東女<sub>二</sub>焉。俗以<sub>レ</sub>女為<sub>レ</sub>王」と『旧唐書』に語られる謎を秘めた国である。女王の祖先は、グルラ・マンダータ擁する西チベットの聖地から東遷してきた黄金族であった。その東女国に聳える四姑娘山もまた、様々な伝説に彩られていた。

一九八一年四月、和田豊司隊長以下七人の隊員が四姑娘山を目指した。現地の人に、鳥も飛ばない山といわれるほど、急峻な岩稜と氷壁に手のつけようがなかった。天候の不順もあって、一次隊は二人の隊員を現地に残し、二カ月後に川田哲二を隊長に二次隊が傾度六〇度のクローアールを突破し、七人が初登頂した。

平林は学校を代表して国家体育運動委員会ならびに登山協会にお礼のため訪中した。その折に再びグルラ・マンダータ登山の特別許可取得をお願いし、話題となった。

### 日中合同ナムナニ峰登山（一九八四～八五年）

チベットの最深部に位置するナムナニ峰（グルラ・マンダータ・七六九四）は一九六〇年、六三年のアピ、サイ

パル登山の折、頂上から著者平林が真近に対面した二十五におよぶ憧憬の山である。

古来よりヒンドウ教、仏教（ラマ教）の巡礼が絶えたことのない世界史的な聖地マナサ・カンダに聳える世界第二の未踏の高峰である。

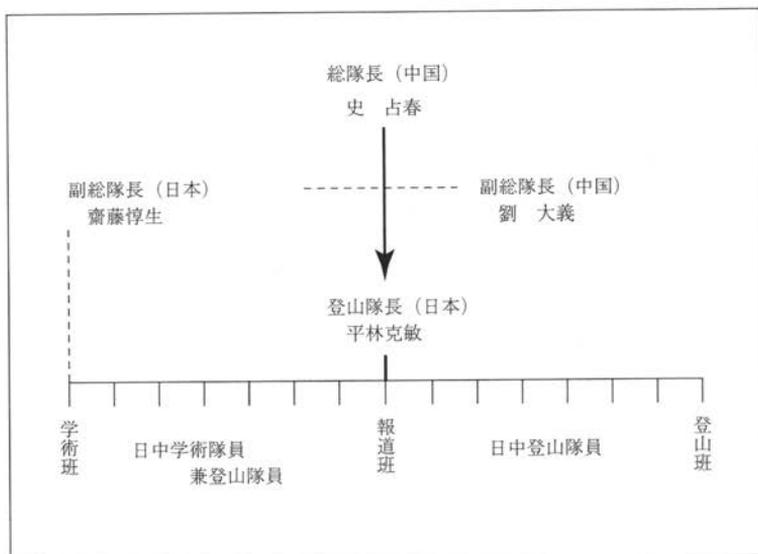
同志社が申請し折衝を始めてから、京都大学も強く希望していることから、合同登山の意志を京大に打診し、最終的に同志社、京大、中国登山協会の三者が手を結び、はじめての対等合併の日中友好合同登山隊を組織することになった。

中国側は我々との将来の関係を重視したためか、①中国隊員はすべて平林に預ける、成功させてくれ ②初日の登頂者は必ず日中同数であること、あとは自由 ③報道は出版も含めて日中同時発表が原則。この三つが明確に示され、大変やり易い運営組織が構築できた。

総隊長に史占春、隊員は総勢七十一名（日本側二十四名）にのぼった。

一九八五年（昭和六十）四月中旬、登山隊はシルクロードの要衝カシユガルをあとにマナサ・カンダへ向かった。崑崙山脈を越え、標高五〇〇〇<sup>メートル</sup>のチャンタン高原を通過して、二十五日、ベースハウスに全隊員が集結する。登山隊長は平林が務めた。二十年來の悪天候や隊員の故障はあったが、順調にルートをのぼし、二十二日アタック体制が整う。そして、二十六日、和田豊司、吹田佳晴、松林公藏、吹田啓一と四人の中国隊員が七六九四<sup>メートル</sup>のピークに立った。南の地平線上にアピ、サイバルが白い姿を見せている。振り返ると、天然の曼陀羅カイラス、聖湖マナサロワール……、聖地の風景が広がっていた。

二十八日、二次、三次アタック隊が登頂するが、最終キャンプで角谷弘司が高山病で倒れ、至急降ろさなければ命がない。医師で副総隊長の斎藤惇生の判断は早かった。史総隊長の「角谷を救え」の指令が飛び、日中隊員が角谷救出に向かった。ある者はアタックをあきらめ、ある者は酸素ボンベをもって角谷のもとに駆けつけた。CⅡで角谷は息を吹き返し、自らの足でBCに生還する。合同登山は、初登頂、一隊員の救出をとおして様々なドラマを生み、幕



日中対等の隊組織

を閉じた。

成功に感謝し、日本隊員の有志は、カン・リンポチェ（カイルス）を巡礼一周した。

カシユガルから崑崙を越え、チベット高原を渡って、ラサまでの日中合同の三〇〇〇<sup>+</sup>の学術調査も成果を納め、修了した。

この日中合同登山で作り上げた中国との関係は、その後の日本山岳会の合同登山などに引き継がれていった。中国は一国一政党の国であるから、対等な合同登山ということになれば、国対国の関係が形式的にでも整う必要があった。これは中国登山協会や関係先の強い要請でもあった。このため、櫻内義雄、橋本龍太郎両議員に私から参画をお願いし、中国に対応できる日本側の組織を作ったのである。

この登山計画の折に、ナムチャバルワのタクティックスや、アジア山岳連盟の創設、三国合同チョモランマ登山の構想がすでに生まれ、熱い議論をたたかわしたのもこの時であった。

## 遠い山・カントとその後（一九八八年〜九八年）

アッサムの高地から遙か北に聳える国境の山々を南から見た宮崎貴文には十年來の課題が残っていた。プータンの東に連なる東部ヒマラヤ山群の主峰カント（七〇五五<sup>メートル</sup>）である。

カント山群はモンスーンの影響が強く、南のインド側は深いジャングル地帯を形成し、自然の要害が人間の侵入を拒んでいた。また、国境不確定という中印間の政治問題もあった。一九六二年には世界を驚愕させた中印武力衝突が起った地域である。カントはそういう微妙な地域、容易には近づけない、未知の詰まった地域に聳えていた。

四姑娘山、ナムナニの登山を成功させて、中国登山協会と信頼関係を深めていた同志社は、一九八七年秋のカント登山許可を取り付けた。登山隊は十二人で組織し、内藤真一が隊長を務めた。隊の半数を学生がしめるため、厳しい登山基準を設け、計画は慎重に練られた。前当会会長吉村公一の、この遠征にかける意気込みは大変なものであった。出発間際になり、カント山群をはさんで中印両軍が集結したため、登山を延期せざるをえなくなるが、幸いにも緊張は急速に緩和し、翌八八年春に登山が可能となる。

一九八八年（昭和六十三）二月二十四日、チベットの古都ツェタンを発ち、降雪に立ち往生したり、高低の激しいキャラバンを強いられながら、三月五日ベースキャンプを建設。挫折と障害を乗り越え、二十四日、二十六日に岩田喬、高野晃輔ら五人がカントの頂点に達した。

登頂後、二週間にわたってカント周辺を踏査し、全日程が終了するころには、モンスーンの厚い雲がヒマラヤを覆いはじめていた。

八〇年代にチベットの主だった未踏の高峰はつきつきと登られ、観光化が進んだヒマラヤはアルプスなみのフィールドになっていく。創部以来求め続けてきたフロンティアは、もはやこの地球上から姿を消そうとしていた。われわれは中央アジアから極東に眼を転じた。

## 火の山、クリュチエフスカヤ

カムチャツカは、山々から火が噴き上げ、いたるところに温泉が湧き出る火山半島である。原生林にはヒグマが徘徊し、川にはサケやイトウがさかのぼる。最高峰はクリュチエフスカヤ（四七五〇<sup>トリス</sup>）、山裾が一〇〇<sup>キ</sup>におよび、海拔〇<sup>トリス</sup>から天に向かってそびえたつ。戦前、同志社は樺太や北千島に渡って登山を試みたが、カムチャツカにはついに入域できなかった。一九六四年のアラスカ学術登山を成功に導いた川井康男も何度かカムチャツカの登山計画を立て、モスクワへ打診するが、受け入れられることはなかった。冷戦時代のカムチャツカはソ連にとって軍事戦略上の要衝だったのである。一九八三年九月には、韓国旅客機が撃墜される事件が起こり、カムチャツカはますます緊張感を高めたが、この間にもわずかな可能性を求めて折衝を続けていた。

一九九〇年五月、来日したソ連科学アカデミー極東支部代表団と会見し、カムチャツカ登山が実現に向けて動き出した。協議を重ね、日ソ合同学術登山隊を組織することに合意し、十二月に議定書に調印した。

一九九一年（平成三）三月十五日、川井隊長ら十一人が日本を出発し、二十三日、目指すクリュチエフスカヤのB Cに集結した。真昼でもマイナス二五度より気温が上がることはない。ときおり、激しいブリザードにおそわれながらも、二十九日、角谷弘司ら三人が登頂に成功する。

その後、地質調査、生態学調査をアカデミーと合同で行い、多くの成果をあげた。

この年の十二月、ソ連邦が解体する。ソ連科学アカデミー、カムチャツカ州政府、極東ソ連軍等、この時期の外交折衝は多難を極めたが、戦後初めてカムチャツカに入り、学術登山を成功させることができたのである。

## ヤルツァンポ源流の未踏峰

ヒマラヤには、六〇〇〇<sup>トリス</sup>を越える未踏峰は、未だ数多く残っている。なかでもチベットの動脈ヤルツァンポの源

流域にそびえる山々は、あまり登山が試みられていない。一九九八年（平成十）、その最高峰ロンライ・カンリ（六八五九）に吹田佳晴らが理工学研究所と合同で学術登山隊を結成し、六人の隊員がネパール経由偵察に向かった。

途中雪崩に巻き込まれ、隊員の一人が重傷をおったが、チベット側から東北稜を六五〇〇まで登り撤収、次回に望みを託した。

同志社の山河跋涉から百二十年、近代登山を振り返って見るとき、明治の黎明期はもとより大正から戦後五十年のあまりにも早い変化と過熱した登山熱である。我々は常にその最先端を未踏の山々を求めて行動し、そしてその全てを成功の内に完結させ、次なるフロンティアを求め続け、今日に至った。

海外登山を例にとっても、その一つ一つの計画は、会や組織が決めたものなど一つもなく、その全ては、個人個人の自由な発案から始まり、やがて二、三の仲間が集まり、それを無条件で山岳会が支援し、会の事業として推進してきた。

また、未踏峰や未踏の地に聳えるしつかりした魅力ある山には、常に困難な国境問題や入国問題などがあり、登山よりこれらの難問と取り組むことが楽しくもあり時間を要したが、山岳会の気風というか伝統はこの事によって、より強固なものとなって育ってきたのだと思う。パイオニアワークとフロンティア精神、その基となる自由・自立の思想は同志社山岳会の歴史そのものであった。

いまや登山は、そのスタイルが大きな変貌を遂げるなかで多様化し、さまざまな姿を見せている。登山家のみに許された特権的な場であったヒマラヤも、万人に開かれたフィールドとなった。われわれの体内に宿る情熱を受け止めてくれる、あるいは未知なるものへの渴きを潤してくれる、確かなフィールドは存在するのだろうか。山岳部の歴史をたどってきた最後に、未来に向けてどのような展望を拓けるのかという可能性の問題に向き合わなければならない。七十年の登山の営みのなかで、十四人の岳友が命を落としていったという負の重みを考えながら……。

今、私は、学生山岳部のあり方を高所トレッキング班、フリークライミング班、山スキー班、高所登山班など四つ

の要素に分け募集し、グループ化して運営していくことを提唱している。班はグループでも良いし、「会」でも良いが、多様性を求める現代の学生には会のほうが思考の幅が広く良いのかもしれない。いずれにせよ、この四つに分けた基本となる底辺を流れる思想は「山」というフィールドを「歩き、登り、知る」ということにほかならない。これは古くからの山岳部の基本でもあったのだから、この各班グループ四つの共通部分のインターラクション（相互の関係性）の総合は、別の形の学生山岳部を形成していくものと確信している。

### あとがき

本来、「七十周年記念誌と海外登山四十年の歩み」をまとめるつもりで、分散していた資料を収集した。この資料をビデオに収めたらどうか、という意見が先行し、一九九九年秋に「同志社大学山岳部の七十年——遠い山・旅する心——」と題する五〇分のビデオが完成した。このビデオを日本山岳会会員の方々にも観て頂く機会を得たいと考え、大塚会長に相談したところ、宮下理事を初め、委員の方々の意向で山岳史懇談会の席を設けて頂いた。

したがって、本稿は私の述べた内容に加筆したものと、画像を文章に転換したものを要約した内容になっている。なお、当会の記録については、海外登山も含め、D A C 報告、各海外遠征の報告書や記録（別添一覧表）が出版されているので、本稿では要約のみとした。学生登山の発祥とも考えられる明治初期から明治中期に視点を置き加筆した。また、画像を文章に要約する事は、なかなか困難であったので、宮崎貴文が編纂中の七十年誌の一部を流用し加えた部分もあり、当日のビデオの内容と意を異にする結果となった。

懇談会の席上、全員に配付した「遠い山・旅する心」別冊、「同志社大学山岳会登山史年表」は宮崎貴文が作成したもので、当会の記録のみならず、同時期の主だった日本の登山史と各国の海外における探検・登山を収録し、当会の活動と比較して見られるよう編集したものである。この登山史年表は、ヒマラヤ・カラコルム・中央アジア・極東アジア・南北アメリカに限定されている。今回この一部を本稿に加えた。

## 同志社大学山岳会登山史年表

- 1875 (明 8) 同志社が創立された 1875 年 (明治 8)、日本の近代登山は黎明をむかえようとしていたが、純粹登山を目的とするアルピニズムが芽ばえるには、まだ長い時間が必要とされていた。
- 1877 (明 10) 同志社英学校が創立されて 2 年後には、同志社の学生のあいだに週末には比叡山、愛宕山、東山三十六峰に出かけ、山河跋涉する慣習があった。このころ同志社には登山の胎動が始まっていた。
- 1894 (明 27) 同志社英学校の学生だった浦口文治は、英国人宣教師 W. ウェストンらとともに北アルプスに登っている (明治 27)。その健脚と英語力がかわれ、ウェストンは浦口を、ガイドとしてではなく同行の友として遇している。
- 1916 (大 5) スキーが前窪勝之助によって同志社にもちこまれた。登山の先蹤者たちはいち早くスキー術を取り入れて、信州や山陰の雪山にスキー登山を試みるようになる。
- 1924 (大 13) 同志社大学に伊吹保次郎らによってスキー部が結成される。積雪期には毎年、スキー合宿が関温泉で生まれ、夏期には槍・穂高連峰や剣・立山連峰での登攀が行われた。そのころ、同志社中学に児島勘次らによって旅行部 (のちに山岳部) が結成される。
- 1928 (昭 3) 8 月 12 日、黒部源流から槍ヶ岳に向かって縦走をつづけていた 3 名のうち予科 3 年生の松永栄吉が、烏帽子岳付近から富山県側の奥の雲ノ平に転落し、9 月に遺体が発見される。
- 1929 (昭 4) スキー部から山岳部となる。伊吹保次郎らによって、この年の 1 月に創立され、部長に予科の松山武司教授をむかえて、3 月、校友会に加盟した。
- 1930 (昭 5) 6 月、児島勘次、田中昌雄が剣岳小窓尾根に登攀する。8 月、児島が奥穂高ジャンダルム飛騨尾根に登攀する。9 月 1 日、剣岳源次郎尾根に登攀していた三宅恒夫が第Ⅱ峰平蔵側を下降中、墜死する。10 月、児島、田中、小林清孝が新雪の赤石岳、聖岳に登攀。11 月終わりから 12 月にかけて、児島と田中が白馬岳に厳冬期登頂。
- 1931 (昭 6) 3 月、戎武らによって、同志社高等商業学校に山岳部が創立される。翌 32 年に関西学連に加盟する。松山部長に代わり二宮源兵教授が後任に就任。
- 1932 (昭 7) 1 月、山岳部創立者 5 人が同志社大学山岳部先輩クラブを発足する。先輩クラブは、山岳部の活動を援助すると同時に、創立以来研究を続けてきたヒマラヤ登山の実現に向けて情熱を傾けていく。山岳部は鹿島槍北壁や荒沢奥壁、北岳バットレスなどのヴァリエーション開拓競争に加わりながらも、千島や台湾、樺太へとフィールドを拡大していく。
- 2 月、児島勘次、榎本重俊が厳冬の白山に登頂。4 月、児島、山本明 (高高山岳部)、荒川より白根三山登頂。5 月、児島、鹿島槍東尾根を登って、天狗尾根を初トレースしてカクネ里に出る。
- 7~9 月、児島、小林清孝、榎本重俊、北千島のパラムシル、アライト、シュムシュ

- の島々に渡り、登山を試みる。パラムシル島南西部の千倉火山列に多くの時間を費やした。
- 12～1月、喜田亮三郎、杉本一郎、厳冬の薬師岳登頂。
- 1933（昭8）3月、児島、入江保太、早月尾根より劔岳往復。ブナクラ谷より猫又山登頂。これを機に、劔岳西面のヴァリエーションルートの開拓が始まる。
- 7～8月、児島、入江、塩見正、台湾遠征。清水山や南湖大山などで岩場の開拓。
- 12月、入江は山県一雄（立教大）とともに厳冬の北岳パットレス第5尾根を開拓する。
- 1934（昭9）3月、入江、神野錦一が唐松岳から鹿島槍東尾根、カクネ里下降後、北壁を試登する。
- 5月、劔岳集中登山。岡村正輝ほか2名が劔岳早月尾根から針木岳への縦走、入江保太ほか1名が阿曾原から劔岳。
- 7～8月、入江がジャワなど南洋諸島に遠征する。チャメン山登山。
- 7～8月、児島、金子が朝鮮の小長白山脈を縦走する。
- 8～9月、児島は、山本明（高商OB、神戸商大）とともに、朝鮮北部の甲山・長津高原遠征。安水白山や北水山、雲水白山といった2000m級の山々を縦走する。その後、児島は単独で狼林山脈の稀塞峰から白頭山—小白山—間白山—小蘆脂峰—大蘆脂峰を縦走。
- 1935（昭10）7月～8月、入江、岩田市之助、成岡英治郎（浪高）が朝鮮の小白山脈縦走、金剛山の岩壁登攀をする。
- 12月から1月にかけて、カラフト東北山脈遠征。振戸山をスキー登山、当時日本最北端の北沖見山と川崎山に登る。隊長＝入江保太、隊員＝7名。
- 1937（昭12）4月11日、奥穂高一前穂高間の吊尾根で、福田源五郎が墜死する。
- 1938（昭13）2月17日、春季総会にて、山岳部先輩クラブを改称。山岳部員たちは次々に戦場にかり出され、登山活動が次第に停滞していく。
- 7月22日、劔岳三ノ窓にて、月形昇が落石によって死亡する。
- 1940（昭15）7月～9月、高商山岳部が台湾遠征し、中央山脈を縦走する。部長の吉川貫二が総隊長をつとめた。隊長＝鈴木修、隊員＝4名。大学山岳部長に田畑忍教授が就任。
- 1941（昭16）同志社学生会は改称されて修練団となり、山岳部は山岳跋班と改称される。高商山岳部も改称され、報国山岳班として発足する。
- 1949（昭24）3月の学制改革によって、同志社の高商と各専門学校は大学に再編成され、別々に活動していた各山岳部も同志社大学山岳部に一本化された。
- 劔岳—鹿島槍ヶ岳を結ぶ未踏ルート開拓を計画し、3月、仙人谷より小窓王のルートを偵察。
- 1950（昭25）8月8日、劔岳ハツ峰のヴァリエーションに登攀中に小谷真一が墜死する。
- 12月30日、劔—鹿島槍計画の一環として、牛首尾根および東谷尾根の偵察に向かった松本敏夫、中村忠吉、木田恵三が大冷沢出合で雪崩にて死亡する。相次ぐ遭難によって山岳部の活動はしばらく停滞せざるをえなかった。

- 1952 (昭 27) 4~5 月、岸田権二、津田康祐、竹中茂、馬場太一郎が白馬岳から北方稜線を初トレースする。山岳部復活の第一歩がしるされる。
- 1954 (昭 29) 11 月、北葛岳鳩峰で野村裕と神門明が行方不明になる。厳冬期の鳩峰から針木岳の極地法登山計画に向けて、鳩峰東尾根を偵察していたときに起こった。8 次の捜索にもかかわらず、遺体は発見されなかった。
- 1955 (昭 30) 3 月、後立山全山、北葛鳩峰まで平林克敏と杉本和哉が縦走する。白馬岳サポート=白井、吉村、唐松岳サポート=馬場、江上、清水、鹿島槍サポート=古森、押川、田淵。
- 1956 (昭 31) 2~3 月、平林克敏をリーダーに 20 人の部員が、烏帽子小屋のベースキャンプから前進キャンプを C6 まで建設し、奥穂高までの長大な極地法登山を行う。
- 1957 (昭 32) 3 月、寺阪元雄、山口宏が西穂高岳から燕岳へ縦走する。
- 1958 (昭 33) 3 月、寺阪元雄をリーダーに、極地法による剷岳集中登山。早月尾根を登高し、C5 の三ノ窓からチンネ正面壁、ハツ峰下半と上半、源次郎尾根、池ノ谷二股から小窓尾根、三ノ窓尾根、池ノ谷尾根、本峰南壁をそれぞれ登攀する。9 月 25 日、前穂高 4 峰正面壁を登攀中に山下輝彦が墜死する。
- 1959 (昭 34) 3 月、福田勝一と伊東茂が北鎌尾根末端から奥穂高岳へ縦走、植西武司と上田彰二は燕岳一槍ヶ岳を縦走。
- 1960 (昭 35) 3~6 月、西北ネパールのアビ (7 132 m) へ遠征。5 月 10 日、平林克敏とギャルツェン・ノルブが 1 次登頂、翌 11 日に津田康祐と寺阪元雄が 2 次登頂を果たした。隊長=津田康祐、副隊長=平林克敏、隊員=江上康、寺阪元雄、植西武司、サーター=ギャルツェン・ノルブ。
- 1961 (昭 36) 2~3 月、利尻岳集中登山。南稜と仙法志稜を登攀し、両稜合流後に本峰バットレスから登頂する。その後、東稜から全員が登頂する。今成征三 (南稜 L)、岩間清平 (仙法志稜 L)、他 13 名。
- 1963 (昭 38) 7~翌 1 月、西北ネパールのサイバル (7 040 m) へ遠征。急峻な南尾根東壁を登攀し、10 月 21 日に平林とパサン・プタールが登頂。登山終了後、福田勝一と松村多四郎が西北ネパールの奥地を 560 km 踏査し、ポカラに出た。隊長=児島勘次、副隊長=平林克敏、隊員=福田勝一、松村多四郎、佐藤和男、岡田啓二郎、サーター=パサン・プタール。
- 1964 (昭 39) 7~8 月、理工学研究所と合同でアラスカの登山学術調査。7 月 18 日、川井ら 4 人がブラックバーン (5 038 m) に第 2 登 (58 年の国際隊が初登頂) する。8 月 3 日、北村ら 4 人がリーガル (4 212 m) に登頂。隊長=西原正夫、副隊長=北村泰一、隊員=長谷川暁一、荒川徹、川井康男、松本朗、田中正男、内藤真一。
- 1965 (昭 40) 5~9 月、アンデスアマゾン探検登山。ペルー・アンデスのヴィルカバンパ山群最高峰、サルカントイ (6 271 m) を未踏の北東稜から第 3 登し、その後メリソス・グループの登山とゴムボートによるウルバンパ河の下降。6 月 20 日、岩間ら 4 人がサルカントイに登頂し、翌 21 日には小川ら 4 人が登頂する。7 月 16 日、キシユアール (5 775 m) に登頂。8~9 月、メリソス・グループのメリソス (5 310 m)、ネパドブランコ (5 250 m) に登頂。8 月、江上ら 4 人がウルバンパ河

- 1300 km を1 カ月かけて下降した。隊長=江上康、副隊長=前芝茂人、隊員=里藤武、岩間清平、宮本光将、川田哲二、小川允巳、沢祥晃、堀江礼二、カメラマン=安倍正喜。
- 1966 (昭 41) 7 月、アンデス—アマゾン隊のメンバーが中心に若手 OB と山岳部員が集まり、「8000 m 会」という研究会をつくり、検討を始める。
- 1967 (昭 42) 8~10 月、ダウラギリ I 峰の偵察を行う。岡田敬二郎 (隊長) と内藤真一はマヤンディ・コーラ側から、河合康男と大日常男は東面側から登攀ルートを探る。
- 1970 (昭 45) 3~6 月、JAC 隊がエベレスト登頂。南壁は失敗。平林克敏が登頂者の一人となる。8~11 月、ダウラギリ I 峰 (8172 m) 遠征。9 月 4 日に BC を建設。6 日に登攀を開始し、19 日に最終キャンプ C6 を建設し、翌 10 月 20 日、川田哲二とラクパ・テンジンが第 2 登した。隊長=太田徳風、副隊長=今成征三、登攀隊長=川田哲二、隊員=河野吏、小川允巳、川井康男、西村誠夫、椎塚直人、堀江禮二、宮川清彦、和田豊司、石川博、安井忠、医師=山辻英也、サード=ラクパ・テンジン。
- 1972 (昭 47) 5 月 3 日、大キレットから南岳へ登高中に安井忠が滝谷側に転落死。
- 1977 (昭 52) 7~8 月、ヒンドゥ・ラージのガームッシュ (6244 m) 遠征。ヒマラヤ未経験の若手 OB 4 人の登山隊、8 月 11 日に BC を建設し、26、27 日に西稜から第 2 登を果たす。隊長=松村隆広、隊員=下村嘉明、高橋由文、宮崎貴文。
- 1980 (昭 55) 9 月、中国登山協会の喬加欽主席を団長に中国登山友好代表团 (史占春、王富洲、張俊岩、羅則、李友林) が来日したおりに、一行を同志社大学の無賓主庵に招待し、茶会を催す。
- 1981 (昭 56) 1 月、玉村山岳部長と吹田山岳部監督が訪中、中国登山協会と協議。当初、ミニヤ・コンカ山群の嘉子峰から、昨年 12 月に開放された四川省の四姑娘山 (スークーニャンシャン) に変更、現地を偵察した。4~5 月、南東稜からピークを目指すが、積雪とナイフリッジにルートをはばまれ、干海子氷河から南東稜につきあげるクローワールに転進。しかし雪崩の危険性が高いため撤退を余儀なくされた。その後四姑娘山、大姑娘山に登頂。高橋と角谷を現地に残留させ、登山の継続を決定。総隊長=玉村和彦、第 1 次隊々長=和田豊司、登攀隊長=吹田佳晴、隊員=高橋由文、宮崎貴文、角谷弘司、岩田喬、西村邦彦、顧問=長谷川常雄、医師=瀧俊彦。7~8 月、第 2 次登山隊はクローワールから南東稜にルートを探り、7 月 28、29、30 日に隊長をのぞく全隊員が登頂。第 2 次隊々長=川田哲二、登攀隊長=吹田佳晴、隊員=高橋由文、宮崎貴文、田川潤、角谷弘司、岩田喬、紅野慎一郎、他に連絡官、通訳など。
- 1982 (昭 57) 12 月 26 日、横尾尾根 3 ノガリーにて雪崩に巻き込まれ、石部正彦が遭難する。
- 1984 (昭 59) 4~6 月、同志社山岳会、京都学士山岳会、中国登山協会が合同で西チベットのナムナニ (グルラ・マングータ 7694 m) を目標に、登攀ルート偵察のために先遣隊を派遣した。隊長=劉大義、副隊長=井上治郎、隊員=吹田佳晴、角谷弘司、山田和人、佐々木哲男、齊藤清明、太田恒一、島津正治、北川高、他に中国側 12 名。
- 1985 (昭 60) 4~7 月、日中友好ナムナニ峰 (7694 m) 合同登山。5 月 26 日、金俊喜、

ジャーブー、吹田、松林、宋志義、ツーレントゥーチ、和田、吹田が登頂。28日、楊久輝、チーミー、陳建軍、包徳清、曹安が登頂。

名誉総隊長=李夢華、総隊長=史占春、副総隊長=齋藤惇生、劉大義、登山隊長=平林克敏、秘書長=佐々木哲男、日本側登山隊員=和田豊司、吹田佳晴、松林公蔵、角谷弘司、窪田順平、吹田啓一郎、山田和人、伊藤宏範、岩田喬、中山和俊、中国側登山隊12名、中国学術班6名、他に通信、報道班など。

- 1986 (昭61) 10~12月、東ヒマラヤのカント峰 (7055 m) 偵察。宮崎貴文 (隊長)、中山和俊、高野晃輔、中川雅幸、他に連絡官、通訳。
- 1987 (昭62) 9~11月、翌年春のカント峰登山に備えて、四姑娘山城にて高所トレーニング合宿を組む。隊長=宮崎貴文、副隊長=角谷弘司、隊員=高野晃輔、中川雅幸、野村俊輔、吉田尚、谷本達則、高須和朗、國久武揚、顧問=玉村和彦、内藤真一、藤井尋臣、医師=遠藤克昭、他に連絡官、通訳。
- 1988 (昭63) 2~4月、東部ヒマラヤのカント峰 (7055 m) 登山。3月24日、宮崎、高野が登頂。3月26日、岩田、國久、ソナムツェリンが第2次登頂。登山終了後、カント山城を広く踏査する。総隊長=吉村公一、副総隊長=玉村和彦、隊長=内藤真一、副隊長=藤井尋臣、隊員=間瀬伸一、宮崎貴文、角谷弘司、岩田喬、中川雅幸、高野晃輔、野村俊輔、吉田尚、高須和朗、國久武揚、医師=黒川智子、他に報道、高所協力隊員など14名。
- 1990 (平2) 10月、川井康男 (隊長)、宮崎貴文、角谷弘司がカムチャツカ登山の協議と偵察のために訪ソした。カムチャツカ半島のクラピフナヤまで偵察する。
- 1991 (平3) 3~6月、ソ連科学アカデミー極東支部と合同でカムチャツカ学術登山。3月29日、角谷、真鍋、野村がクルチュフスカヤ・ソプカ (4750 m) 登頂。カムチャツカ半島を踏査し、地質学および生態学的調査を行った。総隊長=平林克敏、副総隊長=太田進一、隊長=川井康男、副隊長=V. ポポフ、登山隊員=角谷弘司、真鍋光之、野村俊輔、田辺浩司、ソ連8隊員。学術隊長=横山卓雄、Y. ムラビヨフ、N. ジャーリノフ (隊長代行) 学術隊員=野田純一、大久保賢一、ソ連10隊員、他に報道など。
- 8~10月、横山、野田、大久保が第2次学術調査。
- 1993 (平5) 8月22日、奈良県奥高野の神納川南股谷にて、中村慎吾が墜死する。
- 1997 (平9) 9~10月、ヤル・ツェンボ源流域に位置するロンライ・カンリ (6859 m) を偵察。現地名はカキュ・カンリであることを確認。佐野崇 (隊長)、西田克己、安谷勇二。
- 1998 (平10) 3月中旬、佐野崇と菊池則仁 (関西石峰会) が鹿島槍東尾根から荒沢奥壁南稜に向かい、行方不明となる。5月になって遺体が発見。佐野は96年K2登頂、97年ロンライ・カンリの偵察隊長をつとめた。
- 7~9月、理工学研究所と合同で、ヤル・ツェンボ源流域学術登山。ロンライ・カンリ (6859 m) 東北東稜を試登、6000 m 付近で雪崩に巻き込まれ、2人が負傷、試登を中止。総隊長=横山卓雄、隊長=吹田佳晴、隊員=野田純一、田辺浩司、末盛亮、西田克己。

## 同志社大学山岳部・山岳会の報告書・出版物一覧

DAC 報告	記 録	刊 行 年	主 要 記 事
創刊号	1928~1929 の記録	1930 (昭和 5 年)	創部、剣岳西面と小窓尾根
第 2 号		1930 (昭和 5 年)	三宅恒夫追悼、穂高日記
第 3 号	1930 年春夏	1930 (昭和 5 年)	十月の赤石
付録	和田追悼		関温泉合宿準備号
第 4 号		1931 (昭和 6 年)	展覧会準備報告
第 5 号		1931 (昭和 6 年)	立山スキー行 (寺崎一夫)
第 6 号		1931 (昭和 6 年)	五月の山行 (児島勘次)
第 7 号		1931 (昭和 6 年)	報告の出し方 (エディターノート)
第 8 号	1931 年秋の計画	1932 (昭和 7 年)	大台ヶ原、笹ヶ峰行等
第 9 号	1932. 4~1933. 4	1933 (昭和 8 年)	冬の薬師岳 (喜田亮三郎)
第 10 号		1934 (昭和 9 年)	白雲去来抄
第 11 号	福田源五郎追悼号	1935 (昭和 10 年)	
第 12 号		1936 (昭和 11 年)	若干の樺太遠征記事と山行記録
第 13 号	山岳部の再建	1949 (昭和 24 年)	全同志社山岳部の合併
第 14 号	1950 夏山	1950 (昭和 25 年)	小谷真一遭難記録
第 15 号	鹿島遭難追悼号	1952 (昭和 27 年)	追悼と捜索記録
第 16 号	1951-1955	1956 (昭和 31 年)	北葛岳鳩峰遭難報告 烏帽子-奥穂
第 17 号	1956	1957 (昭和 32 年)	剣合宿 早月尾根
第 18 号	1957-1958	1960 (昭和 35 年)	山下輝彦追悼
第 19 号	1959-1961	1963 (昭和 37 年)	60 年春山・利尻
第 20 号	1962-1973	1976 (昭和 51 年)	安井忠追悼
第 21 号	1974-1977	1979 (昭和 54 年)	ガムッシュ特集
第 22 号	1975-1983	1984 (昭和 58 年)	石部正彦追悼
第 23 号	1984-1987	1989 (昭和 62 年)	四姑娘合宿特集
第 24 号	1988-1993	1994 (平成 5 年)	中村慎吾追悼

## 報告書・その他出版物

1. 台湾の山	児島勘次	1933 年の記録	粹書房	1934 (昭和 9 年)
1. 台湾蕃界踏査記	吉川貫二編	1940 年の記録	沢田書房	1941 (昭和 16 年)
1. 山と人	山本 明		朋文堂	1942 (昭和 17 年)
1. アピ 悲劇と幸運の山	江上 康	1960 年の記録	朋文堂	1961 (昭和 36 年)
1. ヒマラヤ サイバル登頂	平林克敏	1963 年の記録	サンケイ新聞社	1964 (昭和 39 年)
1. アラスカ学術調査報告	同志社大学理工学研究所	1964 年の記録		1969 (昭和 44 年)

- |    |  |                                  |       |  |                |
|----|--|----------------------------------|-------|--|----------------|
| 1. | ヴィルカバンバ山群と<br>ウルバンバ河<br>(ANDES・AMAZON<br>1965) | 同志社大学山岳会<br>年の記録                 | 1965  |  | 1944 (昭和 9 年)  |
| 1. | ダウラギリ主峰登頂報<br>告書 1970                          | 同志社大学山岳会<br>年の記録                 | 1970  |  | 1982 (昭和 57 年) |
| 1. | 四姑娘山 (スークーニ<br>ヤン)                             | 同志社大学体育会山岳部<br>1981 年の記録         |       |  | 1982 (昭和 57 年) |
| 1. | ナムナニ (日本文・英<br>文・中国文各冊)                        | 日中友好ナムナニ峰合同登<br>山隊               | 毎日新聞社 |  | 1986 (昭和 61 年) |
| 1. | 遙か久恋峰<br>—チベットカント峰初<br>登頂の記録                   | 同志社大学カント峰登山隊<br>1988 年の記録        | 毎日新聞社 |  | 1989 (平成 1 年)  |
| 1. | ドーヴリエ・ウート<br>ラ 夜明けのカムチャ<br>ツカ                  | 同志社大学カムチャツカ日<br>ソ合同学術登山隊<br>年の記録 | 1991  |  | 1993 (平成 5 年)  |

## その他出版物

- |    |                              |                                   |       |                |
|----|------------------------------|-----------------------------------|-------|----------------|
| 1. | 緑の秘境・白い巨人<br>アマゾン遠征記         | アンデ 江上 康・前芝茂人<br>1965 年の記録        | 講談社   | 1966 (昭和 41 年) |
| 1. | ブータン素描                       | 小方全弘                              | 芙蓉書房  | 1969 (昭和 44 年) |
| 1. | 登山歷程                         | 児島勘次<br>1930 年～1963 年の<br>児島勘次の足跡 |       | 1973 (昭和 48 年) |
| 1. | ブータン感傷旅行                     | 小方全弘                              | 茗溪堂   | 1972 (昭和 47 年) |
| 1. | 山へのあこがれ                      | 前芝茂人                              | 講談社   | 1981 (昭和 56 年) |
| 1. | 聖山巡礼                         | 玉村和彦<br>1985 年の調査記録               | 山と溪谷社 | 1987 (昭和 62 年) |
| 1. | カムチャツカ学術紀行                   | 横山卓雄<br>1998 年の調査記録               | 茗溪堂   | 1972 (昭和 47 年) |
| 1. | 遙かなり白き姑娘の微笑み                 | 吹田佳晴<br>1981 年の記録                 | 京都通信社 | 1990 (平成 2 年)  |
| 1. | チベット・聖山・巡礼者<br>—カイラスと通い婚の村—  | 玉村和彦<br>1985 年の調査記録               | 社会思想社 | 1995 (平成 7 年)  |
| 1. | 熱き心<br>—登山と企業に学んだ私の人<br>生哲学— | 平林克敏                              | ばるす出版 | 1998 (平成 10 年) |

## コンデ東峰、北東稜からの登頂

——山野井妙子&松原尚之 一九九九

松原尚之

### 一

一九九九年八月下旬、山野井妙子から突然電話をもらった。十月にネパール、コンデ峰（コンデ・リ）の北面バリエーションルートを一緒に登りに行かないかという。

山野井とはそれまで一緒に山に行ったことがなく、二、三度会ったことがある程度の間柄だったからずいぶん唐突だったけれど、この誘いには心惹かれるものがあった。なにしろ山野井（旧姓・長尾）妙子と言えば、私などが学生の頃から数々のすばらしい登山を成し遂げ、そして現在に至るまで最先端で登り続けている、日本登山界では数少ない「世界レベル」に達している登山家である。それに、これまで比較的大きな登山隊で八

〇〇〇〇峰の極地法登山をすることが多かった私は、六〇〇〇〇峰の登攀的要素の強いルートを二人だけで、かつフィックスロープ・レスで登るといふようなスタイルの登山を、以前からやってみたいと思っていた。さらには、ネパールのトレッキングガイドの仕事に年数回行っている私にとり、ナムチェの村からすぐ正面に眺められるコンデ峰の北面は、エベレスト街道に出かけるたびにその偉容を振り仰ぎ、登攀ルートを目で追ったことも二度や三度ではない、そんな馴染み深い山だったからである。九七年秋のダウラギリI峰登山以来ヒマラヤ登山を休止し、フリークライミングに興味の中心を奪われていた私だったが、「この登山には行くべきだ」。直感的にそう思った。

九月に入ってすぐ、奥多摩の山野井宅で最初にして最後の打

ち合わせを行った。二時間ほど話をした後、持っていく TENT やハーケン、フレンズ類などをそろえると、準備はこれで完了だった。翌日、翌々日と近郊の岩場ではじめて一緒にクライミングをし、数日後、私は前から予定していた二十日間のアメリカ・クライミングツアーに出発した。山野井は私がアメリカに行ってる間に一足早くネパールに飛んでしまうので、私たちがこの次に再開するのはナムチェの村でということになった。

## 二

フリーランサーである私だが、すでに決まっていた仕事の都合で、日本を出て帰るまでわずか十九日間しかとれなかった。その中で実際に登山を行えるのは一週間足らずであり、六〇〇〇<sup>フィート</sup>峰とはいえこの登山期間ではさすがに高所順応に不安があった。四〇〇〇<sup>フィート</sup>以上の高度にはまる二年間行っていない。先にネパール入りしている山野井は五〇〇〇<sup>フィート</sup>付近に二週間以上滞在し、順応に関してまったく問題がないはずだから、よけい心配だった。アメリカから帰国してネパールに発つまで日本に二週間いる間、私は何とか時間をつくり、三回富士山を登りに出かけた。二回目には頂上で宿泊し、最後の三回目はネパールへの出発前日に富士宮口から往復した。

香港経由で夜のカトマンズ空港に一人降り立ったばかりの私

の頭に「登頂断念」の文字がよぎった。空港のベルトコンベアから流れてきたのは衣類の入った小さなザックだけで、登山靴、ピッケル、アイゼン、登攀具、コンロ、シュラフ……、すなわち登攀に必要なほとんど全ての装備が入ったプラスチック樽が香港から届かなかったからである。カトマンズで荷物を待つ時間のある登山なら、大きな問題ではないだろう。しかし私には時間がなかった。なにしろ翌朝にはキャラバン基点の村ルクラにフライトすることになっていたからだ。

絶望的な気持ちになった私を、カトマンズに住む知人たちが助けてくれた。夜遅くに連絡をとった日大山岳部OBの井本重喜さんから登山靴、ピッケル、登攀具等、重要な装備をほとんど借りることができた。今回のエージェントであるコスモトレックの大津三子さんからもトレッキングシューズ他、いくつかの装備をお借りすることができた。さらに幸運なことに、翌朝国内線空港ではばったり出会ったチャー・オユー帰りの大神田伊曾美さんからもまだ足りなかった若干の装備をお借りすることができ、ヒマラヤ登攀に必要なほとんどの個人装備を、異国の地でわずか一晚のうちに、奇跡的にそろえることができたのである。井本さんがチョモランマで羽毛ズボンの上から身につけていたハーネスは私にはぶかぶかであり、一方、女性としても小柄な大津さんと大神田さんからお借りしたトレッキングシューズやオーバードレスは私にはきつきつだったが、文句のあるう

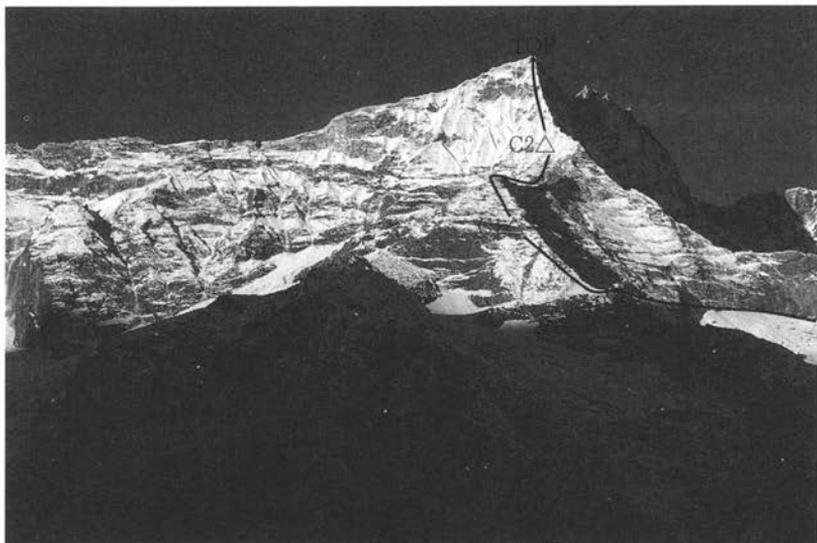


写真1 コンデ東峰の北東稜とその登攀ルート

はずがなかった。

カトマンズに着いた翌日、私は一人の少年ポーターを伴い、ルクラからのエベレスト街道を意気揚々と歩きはじめた。

### 三

ネパールには簡便な手続きと安価な登山料で登ることのできる「トレッキングピーク」が十八座定められており、コンデ峰はその中の一座である。トレッキングピークの中でも比較的ポピュラーで、南面のノーマルルートからは日本隊だけでもおそらく十隊近く（あるいはそれ以上）登っているだろう。一方、今回目指す北面はその切り立った山容からか過去に入った登山隊は数隊を数えるのみであり、私たちの探ろうとしているコンデ東峰（六〇九三<sup>米</sup>）北東稜の登山記録は、一九七八年のイギリス人パーティーによる初登時のものだけしか見つからなかった（写真↑）。

日本を出発した翌々日の十月十八日、約束していたナムチェの、とあるロッジの前で山野井妙子と合流した。

標高三四〇〇<sup>米</sup>のナムチェは、シェルパ族の故郷と謳われる、エベレスト街道の中心の村である。圈谷状の谷間にたくさんの家々——その大半はロッジと土産物屋だ——が立ち並び、多くのトレッカーや村人でにぎわう。時ならぬ大雨のため一日ナムチェで停滞した私たちは、十月二十日にターメ村へと移動し

た。

古くからのチベット交易路ナンパ・ラ(峠)へと続く山道沿いにターメはある。ナムチェからわずか四時間ほどしか離れていないのに、エベレストBCへと続く主街道から外れているため訪れるトレッカーは少なく、ちょっと寂しいような寒村のたずまいである。「ナムチェよりずっと落ち着く」と山野井は言う。標高三八〇〇の静かな村のロッジが、私たちのコンデ登山のベースキャンプとなる。シェルパもコックもリエゾンオフィサーもいない、二人だけの登山である。ターメに着いた日の夕、二日間続いた悪天候が終わりを告げ、美しい夕空が広がった。村のすぐ裏手に、降ったばかりの純白の雪をまとい、神々しいまでに美しいコンデ峰の北面がその勇姿を現した。

#### 四

私たちにとつての最初の難関は、北東稜へのアプローチルートが発見であった。情報のほとんどない未知の山の難しさというのは、往々にして、本格的登攀以前のこの探検的活動の中に見出されるものかもしれない。

はじめは放牧のための山道を辿り、それが判別できなくなってきた辺りからは、勘を頼りに適当に樹林をぬって登っていく。標高四〇〇〇を過ぎた辺りで雪が現れ、トレッキングシューズをプラ靴に履きかえる。灌木の上にわずかに積もった雪の上は

歩きにくく、また時折現れるシャクナゲの藪こぎに体力を吸い取られるが、標高四二〇〇付近で、上部を見渡せる小さな尾根上に出た。この尾根上を四四〇〇まで登ったところで正午となり、登高を打ち切ることにする。ここから左手の広い沢に下りてそれを横断すると、向こう側のリッジ、すなわち目指す北東稜に取りつくことができそうだ。

十二時半に下山をはじめ、ターメの村に戻ったのは十五時十五分だった。

翌朝再び同じルートを登っていく。とは言うものの、途中で昨日の登路をはずしてしまい、昨日より猛烈な藪こぎを強いられる。正午前には前日の最高到達点に着き、昼食後、左手の広い沢の中に下りる。沢の途中、大岩の下に、持参したロープ等の装備をデポし、さらに標高四六〇〇まで雪の積もった沢をつめる。左側のリッジには、一箇所だけ登れそうな雪のルンゼが見える。そこ以外はすべて岩壁で登れそうにはない。ルンゼの真下まで行けばはつきりするのだが、時間がないので引き返すことにする。あのルンゼに望みを託そう。ケルンを積みながら下っていく、十七時十分にターメのロッジに戻った。

翌日から二日間はターメで休養する。休養後にはもうアタックに出るのである。この二日間のアプローチルートの探索は、同時に私の高所順応も兼ねていた。四四〇〇、四六〇〇と四〇〇〇を二回往復しただけで六〇〇〇の峰のアタックに

出るのは不安がなくもなかったが、体の状態から大丈夫そうなお感じはあり、いずれにしてもこれで行かなければ仕方がないので、深くは考えないようにした。

## 五

休養日と言っても特にすることがあるわけではない。体を休めること、それが最大にしてほとんど唯一の仕事なのだから。ブラ靴さえ入れなければ四十<sup>リットル</sup>のザックに余裕でおさまる、十<sup>リットル</sup>に満たないアタック用の荷物のパッキングは、三十分で終わってしまった。

三度の食事をし、読書する。ロッジの中は夜にならないと薪ストーブに火を入れてくれず少々寒いので、外の暖かな陽だまりに文庫本を携えて腰かける。シェルパ族であるロッジの女主人は、土曜日の今日、ナムチェのパザールに子供を連れて朝から買い物に出かけて行った。主人の方は、私たちの食事の用意をする時以外、ほとんどずっとロッジの内外の掃き掃除をしている。そんな主人の姿を見るときは私は眺める。

私たちの食事の話を少ししよう。ロッジでとる夕食と言え、毎食必ずダル・パートである。「ネパール定食」と言ってもよい、ご飯に豆(ダル)のスープをかけたこの食事(それに「タルカリ」という野菜のおかずと漬物がつく)は、値段もリーズナブルで、好きなだけお代わりができるので、私たちのような貧乏

(7) 登山者にはありがたい。初めての旅行者にはすぐには馴染めないこともあるが、慣れてしまおうとネパールで食べる物の中で一番おいしく感じられるようになるのである。シェルパたちはこれを、日本人が「エッ!」と驚くくらい山盛りにして食べるのだが、私たち二人のご飯の量も、完全にシェルパたちと同量になっていた。

朝食は、ナムチェで買ってきた食パンの固まりをナイフで切り、ただジャムをつけてもそもそと食べるだけだ。ロッジで朝食を摂ってもたいした金額はかからないのだが、食パンならもっと安上がりという、それだけの理由である。二日間のアブローチ偵察時の昼食はちなみに、ロッジでゆでもらったジャガイモだけであった。

ふだん一緒に登ることの多い夫の泰史ともども、山野井夫婦の遠征時の生活は、一事が万事こんな具合である。とにかく質素で、無駄な金を使わないのだ。だからと言って、無理して儉約しているという印象は彼らにはない。日本の奥多摩の家で暮らしている時も、薪を使って米を炊き、洗濯板を使って手で洗濯をする、さらにはビニール袋でさえ破れないかぎりには洗って何度も使うという山野井なればこそ、ゆでたジャガイモの行動食も、当たり前のごとでしかないのだった。

アタック用の食糧は四日分持参することにする。朝はインスタントラーメン、夜はアルファ赤飯かアルファ五目飯、そして

スーブ。行動食はナムチェで買ったビスケットとチョコレートバーである。補食として、シエルパやチベット人がよく食べるツァンパ（日本の麦こがしのようなもの）を持って上がることにした。

休養二日目の夕方、翌日の行動に少し余裕を持たせるため、私たちはターメを発ち、一時間半ほどアプルーチルト上を進んだ小さな沢のほとりにテントを張る。聖山クンピラの山の端から、大きな大きな満月が昇ってくる。折りしも明日は、大きなゴンパ（寺）のあるタンボチェ村で、一年に一回の満月の祭礼「マニ・リムドゥ」が開かれる。

## 六

十月二十五日、偵察時同様すばらしいピーカンの下、アタックへ向けて行動を開始した。

偵察時に見上げた雪のルンゼは思ったとおり、ノーザイルで問題なく登ることができた。ひざ下程度のラッセルだ。昨日一時間半ほど先に進んでおいたおかげで——むろんそれだけではなく、アプルーチルトに習熟したこと、そして私たちの高度順応も進んだこと、等々があいまって、雪のルンゼを登りつめ、リッジ上に出た時はまだ十一時二十分であった。標高は四八五〇<sup>メーター</sup>である。情報の乏しい中で決してわかりやすいとは言えないアプルーチルトから目指す北東稜にスムーズにとりつけた

のは、豊富な経験に裏打ちされた、山野井のルート・ファインディング能力があればこそ、だった。

十二時十三分、今日の幕場と予定していた標高五〇〇〇<sup>メーター</sup>付近に着き、雪の斜面を削ってテントを設営する。一時間ほどでテントを張り終えた後、登攀具のみを携え、さらに上部へと進む。ひざ程度のラッセルだが、高度の影響で少々応える。五分ほど登った標高五一〇〇<sup>メーター</sup>で岩壁に突き当たり、そこで引き返すことにする。岩壁の基部にはほとんど整地しないでテントが張れる、小さな平らなスペースがあった。

眼下にはナムチェのたくさんの家々が、まるでおもちゃのように眺められる。その向こう、ドウド・コシ（川）の深い谷間の奥には、最高峰エベレストの黒々とした三角錐が右手のローツェとともにのぞいている。私たちの登攀ルートからは、エベレスト、ローツェというジャイアンツ、そしてアマダブラム、タムセルク、カンテガ、クスムカンといった美しい六〇〇〇<sup>メーター</sup>台の名峰の大パノラマを、常に眺めることができる。標高五〇〇〇<sup>メーター</sup>の今日のテント地まで上がってくると、マカルー、チョー・オユーという八〇〇〇<sup>メーター</sup>峰が、さらにその一大ベージュメントに加わった。

二十六日、今日も雲一つない快晴の空が広がっている。昨日引き返した岩場の基部に着くと山野井が、「先に行かせてもらっていい？」と、すぐに私に言った。今回初めてのロープを使っ

での登攀である。私も実は、クライミングの一ピッチ目のトップにはこだわりがあるのだが、彼女に先にそう言われては、「どうぞ」と答えるほかなかった。

傾斜はさほど強くないが、岩と雪のミックスのちょっと嫌らしい壁である。日本の冬壁で言えば、IV級かIV+の範囲だろうが、ハーケンやフレンズなどでプロテクションを自分でとらなければならぬ。

ロープの必要な岩場は1ピッチで終わり、そこからまたとこるところ岩の露出する雪稜をつめる。時に岩の上に薄く雪のついた箇所があり緊張を強いられるが、ノーザイルで進む。

標高五二五〇<sup>メートル</sup>で、馬の背状の痩せた岩尾根の上に出る。ここは左から合流する別の支尾根とのジャンクション付近である。ここから右手へと続く吊り尾根は、大きな岩がごろごろと積み重なった恐竜の背中のような痩せたリッジで、それが延々と続いている。一つ一つの岩自体はさほど大きくはないし、かりとした花崗岩だが、これを忠実に辿っていたら何日かかるかわからない。懸垂下降で左手の谷に下りることにする。ほぼ垂直の花崗岩壁を2ピッチの懸垂で、今度は北東稜の反対側の広い谷に下り立った。

ここからは傾斜の緩い沢の中をひたすら登っていく。あいかわらずさびざ程度度のラッセルがある。沢の中のため、風がなく、雪の照り返しが強く暑さが尋常ではない。目出帽以外の帽子を

持って来なかった私は日射病になりそうになり、やむなくオーバーズボンズを頭からかぶって歩くことにする。

懸垂を終えてから二時間ほど歩き、十三時、谷から北東稜左側の壁に入った辺りで幕営する。標高は五四五〇<sup>メートル</sup>。岩の基部の昨日よりも傾斜の強い所を、ピッケルだけで整地する。四十五分かけてテントを張り終え、空身で上を目指す。北東稜の頂上近くから落ちてきているルンゼの一本に、登路が見出せそうである。一時間弱で約一二〇<sup>メートル</sup>登り、十五時にテントに戻る。

二人入ってちょうどよいテントの中は存外快適である。水を作り、まずお茶を飲む。暑かったせいでのが異常に乾いている。たっぷりの紅茶の後、続いて薄めたインスタント味噌汁を大量に飲む。食事をし、スープを飲み、さらにまたお茶を飲み、お湯を飲む。食事の量が少ないので満腹にはなれないが、耐えられないほどではない。持ってきたツアンパがともうまく、日本に買って帰ろうか、と思った。

テントの外ではいつものまにか、峰々が赤く染まりはじめていた。エベレストをはじめすべての山が、一日の最後の光に美しく彩られる。他の山々は紅なのに、マカールだけは黄金色で、見えてまぶしいようである。そして、陽が沈み、最後にエベレストの紅がふっと消えた後、峰々の上に広がる広大な空が、紫とも青ともつかない神秘的な色をなす。「ピーン」という張り詰めた音が聞こえてきそうな、深い静寂が私たちの存在する

世界を包んだ。

## 七

十月二十七日、午前零時に起床し、二時十五分に出発する。ナムチェでの二日続きの大雨の後、今日に至るまでずっと快晴が続いている。ひたすら雪のルンゼの登高を続ける。満月から三日過ぎただけの月は明るく、ヘッドランプがいらないほどだ。雪はどこどころ固く、ところどころ深い。夜明け前はもっとも気温が下がり、ピッケルとバイルを握る手が、すぐに冷たくなってしまふ。世界が朝の光に照らされる頃、北東稜の急峻なリッジの上に出る。リッジの反対側、ターメの方角が見渡せる。



写真2 5800m 付近の不安定な雪壁を登る山野井

斜面の傾斜はもうだいぶきつく、ザイルを使っていない私たちに、緊張が高まってくる。クラストした急な雪壁にアイゼンの前爪を立てて登ると、頂上岩壁の下に出た(写真2)。

今度は私のリードである。リッジの正面はスラブ状で、アイゼンで登るのは難しい。右手に回るが、こちらも傾斜が強く手がかりがない。「これ行けるのかな?」と頭に疑問符が湧いた時、左足のアイゼンの前爪が乗りそうな、一センチ程度の小さなスタンスが見つかった。そこががんばって立ち込み、バランスをとり、右手の短いピッケルを、上方の雪に打ち込む。岩の上に薄くかぶった雪はしまっておらず、支持力に乏しいが、騙し騙しからだを持ち上げる。不安定な雪の壁にさらにピッケルとバイルを打ち込み、少しずつ高度を稼ぐ。先ほど打ったハーケンが足下になった。雪よ、崩れるな……。

このピッチを終えたところで再びザイルをたたむ。その先もスラブの上に雪がついたような感じだが、ノーザイルで登る。蹴り込んだアイゼンが雪の下の岩に当たるようなところが部分的にあり、慎重に攀じる。もう高度は六〇〇〇を越えていると思うのだが、頂上と思われるところは見えてこない。

十時、再び、ザイルを必要とする岩場に行き当たると。傾斜はさほど強くなく、技術的には難しくないが、安定していない雪に悩まされ、スノーシャワーを落としながら、山野井がじりじりと登っていく。



写真3 12時45分、頂上に着いた

次も同じようなミックス壁で私がトップに立つ。少し登ったところで、「もはや」という期待が高まる。エイリアン（小さなカム・デバイス）でプロテクションをとりながら、ミックス部を登り、弱点を縫うように雪のバンドを右に行き、左に戻る。頭上の岩の上から体を乗り出すと、予感の通り、そこが私たちの目指していた頂上だった。これまで目にするこのできなかった向こう側、ロールワリンの山々が突然視界の中に開けた。何とも唐突な幕切れだった。一段下がり、ハーケンを二本しっかりと打ち、山野井の確保に入る。彼女はまだ私が頂上に達したことに気づいていない。山野井がピッチの中ほどまで達した時、我慢し切れずに、「着きましたよ！」と口にした。

彼女が頂上に着いた時は十二時四十五分になっていた（写真3）。ナイフの先のように細い絶頂である。ザイルの確保がなければ立つことも恐ろしいほどだ。コンデ本峰が指呼の間に眺められる。頂稜の上で互いの写真を撮り合い、そそくさと下山にかかる。

ここから5ピッチ連続して懸垂し、今日最初にザイルを使った箇所まで下りきった。そこからはクラストした雪壁をクライムダウン。斜めに下降するため懸垂しなかったが、唯一少々緊張、いや正確に言えば、少しびびったところである。そこからさらに雪のルンゼを2ピッチ懸垂し、あとはノーザイルで問題なく下ることができた。十六時半にアタックキャンプに帰着する。

翌日、ターメへと下降する。懸垂は登りにザイルを使ったところ一か所ですんだ。行きに懸垂で馬の背リッジから沢に下りたところは、もっと沢の下手から馬の背リッジに回り込んで上ることができ、問題なかった。

四日ぶりにターメの村へと帰りつく。ロッジのシェルパ夫婦が、何事もなかったかのように私たちを迎えてくれる。

翌日、私たちは休みもとらず、ターメの村を後にする。ナムチュエに着き、来た時と同じように、そこで山野井と別れた。

カトマンズに戻った私に、コスモトレックの大津さんが言った。「香港からの荷物届いてるわよ」

※ コンデ峰はこれまで日本では、「コンデ・リ」(「リ」とは峰の意)、あるいは「クワンデ」と表記されているが、地元の人々は、ただ「コンデ」と言っている。

### 〈記録概要〉

活動期間 一九九九年十月中旬〜十月下旬

目的 コンデ東峰・北東稜からの登頂

隊の構成 隊長 山野井妙子(43)

隊員 松原尚之(34)

行動概要 十月十六日 松原、日本出発、カトマンズ着

十七日 松原、カトマンズからルクラへ飛行後、

パクディンまで

十八日 山野井、松原、ナムチュエで合流

二十日 ナムチュエからターメへ移動

二十一日 ターメから四四〇〇<sup>メートル</sup>まで往復

二十二日 ターメから四六〇〇<sup>メートル</sup>まで往復

二十三日 ターメで休養

二十四日 ターメで休養後、一時間半ほど移動

二十五日 五一〇〇<sup>メートル</sup>到達、五〇〇〇<sup>メートル</sup>泊

二十六日 五五七〇<sup>メートル</sup>到達、五四五〇<sup>メートル</sup>泊

二十七日 登頂後、再び、五四五〇<sup>メートル</sup>泊

二十八日 ターメに戻る

二十九日 ターメからナムチュエへ。解散

報 告 『岳人』六三三号(二〇〇〇年三月号)

## レッドメイン峰初登頂

——学習院大学山岳部レッドメイン峰登山隊の記録

棚 橋 靖

学習院大学山岳部は一九九九年秋、中国・四川省の横断山脈ミニヤコンカ山群にあるレッドメイン峰の初登頂に成功した。

この登山は山岳部の海外合宿であり、創部八十周年の記念登山でもある。

### はじめに

大学山岳部の低迷が叫ばれて久しい。学習院大学山岳部でもこのところ部員の減少、活動の低下が続いていた。若手OBたちの間では「なんとかならないかなあ。なんとかしなきゃなあ」というのがここ何年かの共通の話題であったし、「いっそ、海外に出せば息を吹き返すのでは」という意見も出ていた。そんな中で、昨年度（一九九九年）元気な一年生が三人入部し、

クラブが活気を取り戻す兆しが見られた。若手OBと上級生は、ここがチャンスとばかりに「海外合宿」をしようという方向にかたまった。

そんな折、「岳人」一九九九—（六一九号）に載った一枚の写真に興味を覚えた。横断山脈研究会の竹内康之さんがミニヤコンカ山群を一周した時に撮られたもので、「ネントーセ」（六一—二二頁）——中国・四川省、大雪山脈にある未踏峰——である。せっかく海外に行くのなら、あまり人の入ってないところに行きたいし、未踏峰なら申し分ない。また写真で見るとはなるとか登れそう。私たちはこの山を第一目標にしてリサーチを始め、登山許可の可能性をさぐった。また竹内さんにお会いして貴重なお話をうかがうことができた。

一九九九年は学習院大学山岳部創部八十周年であり、学習院山桜会（山岳部OB会）では記念登山を行うという考えがあった。そして海外合宿と記念登山を合体させることで話がまとまったのだ。

もしこの山の許可がとれなかったら、ネパールのトレッキングピークに変更するという方針で計画を進めた。四月に始まったこの計画も、成都の四川探検旅遊公司と直接Eメールでやりとりするうちに次第に具体化し、七月になって許可がおりた。登山の許可申請は一九八〇年代とは全く異なり未登峰の場合でも現地に一度も行くことなく取得ができるようになったのである。

## 地域研究

『中国登山指南』（成都地図出版社、一九九三年）によればこの山は勒多慢因 (Leduomanyin) と表記されている。これはローマ字表記 Redomain の当り字であろう。どうしてこう名づけられたのか、また誰が名づけたのかは不明である（標高は一九三三年時の六四四〇<sup>1)</sup> や一九七四年時の六七〇〇<sup>2)</sup> に対し、この本の地図に示された標高は六一一二<sup>3)</sup> である）。（編註1）横断山脈研究会の竹内さんは「ネントーセ」という名前を地元、子梅の馬方から聞いたという。私たちも登山を行った際、地元老榆林の人たちに聞いてみたのだが、「名前は知らない」と言っていた。まあ山に興味のない人が、裏山の名前を知らないとい

うのももっともなことかもしれない。私たちも確固とした現地名があるならば、その名前を採用するつもりだったが、それができなかったのので、比較的知られている Redomain = 「レッドメイン」という呼び方を使うことにした。その他の地名および標高については「岳人」六一九号の横断山脈研究会の呼称に従っている。

レッドメイン峰はヒマラヤの東、南北に走る横断山脈の大雪山系、ミニヤコンカ山群にある。四川省の成都から西に四〇<sup>+</sup>ほど行ったところ、秀峰ミニヤコンカの北約一五<sup>+</sup>に位置し、標高六一一二<sup>3)</sup>の未登峰である（この山群の位置は一一八〇―一九ページの地図参照のこと）。

レッドメインが欧米人に知られるようになったのは一九三〇年にまでさかのぼる。一九二九年にミニヤコンカ山群を踏査したアメリカ人、ジョセフ・F・ロックはこの山に関して次のように述べている。

「リウチ谷の源頭及びジェシ峠から見渡して、最も素晴らしい峰のひとつにレッドメイン・ソロがあり、その美しい雪山は二万三〇〇<sup>0)</sup>の高さがある」（註1）

一九三〇年代から注目されたレッドメインであったが、登山が試みられた記録はなく、私たちが初めての登山隊となった。思うに一九八〇年の登山開放後もこの山域の最高峰ミニヤコンカ（七五五六<sup>4)</sup>）に登山隊が集中し、アプローチがレッドメイ

ンを通らない南側からなされたため、登山家の目に触れる機会が少なかったのではないだろうか（編註<sup>2</sup>）。約七十年後、レッドメインに再び光が当てられたのは、横断山脈研究会の尽力のゆえである。

私たちが、今回この山を間近に見て一番驚いたのは、一九三〇年にこの山群を訪れたハイムとインホフの写真（註<sup>2</sup>、3、グラビアページ）と比較して氷河が大幅に後退していた点である。当時見られなかった氷河湖までできている。もちろん七十年といえば短い年月ではない。それにしてもこれほど変わっているとは……。地球が大きく変化しているという事実をまざまざと見せつけられてしまった。

## 行動記録

### アプローチ

九月七日、先発隊二名が日本を出発。E.P.I.ボンベなど飛行機で運べない物などをもって「鑑真号」（フェリー）に乗る。上海からは列車で三日かけて成都に至った（辛苦了！）。十二日、本隊九名が成田をたち、成都に到着、先発隊と合流する。成都で登山準備のち、バスで四〇〇<sup>+</sup>。西の康定へ移動、翌日老榆林へ至る。

十七日老榆林よりキャラバンを開始。登山隊十一名に連絡官、通訳、スタッフ等を加えた総勢十五人。隊荷約九〇〇<sup>+</sup>、馬二

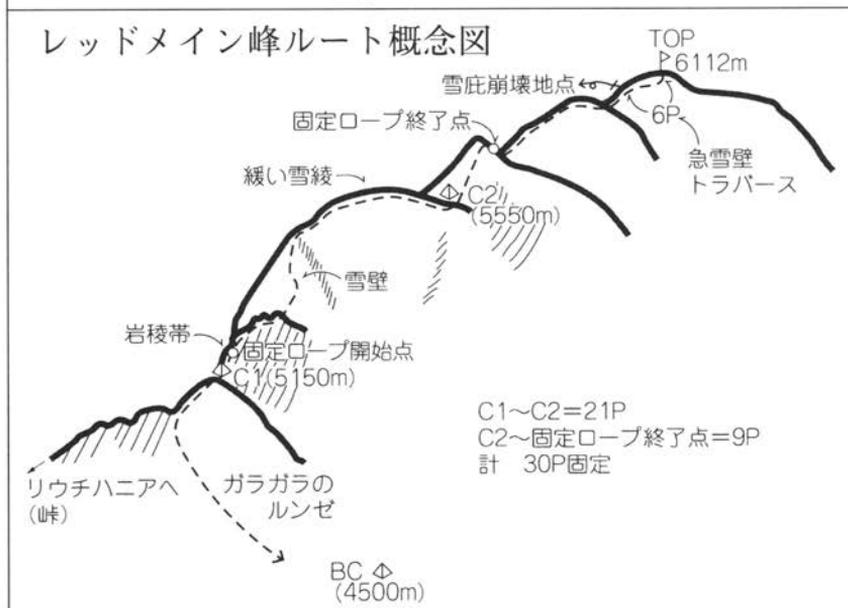
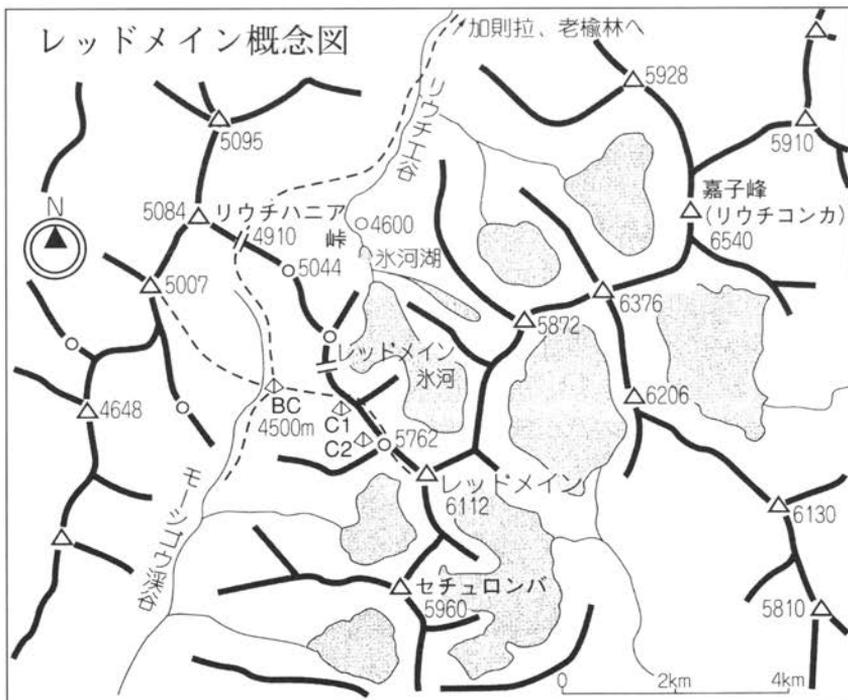
十四頭の大部隊である。また、今回は日本よりインマルサットを持参した。山の中にまで文明の利器を持ち込むのはいささか抵抗はあったが、万が一の場合は心強い。定期的に日本の留守本部と連絡をとるようにした。

ベースキャンプ予定地までは南へ向かって約三〇〇<sup>+</sup>、距離的には二〜三日の行程であるが、手前のリウチハニア（編註<sup>3</sup>）峠（四九一〇<sup>+</sup>）を越えることと高所順応のため、私たちは四日かけてキャラバンを行った。途中ヤクの放牧地にキャンプし、ヤクにテントを襲われながら（さかりのついたヤクに夜どおしテントを囲まれ、ちよっかいをかけられた）目標の山に近づいてゆく。少し季節は遅かったものの色どりの高山植物が気分をなごませてくれた。

九月二十一日、リウチハニア（峠）を越えた先の、莫溪溝<sup>モクシコウ</sup>の最奥の谷の四五〇〇<sup>+</sup>付近の草地にBCを設置する。何人かは四〇〇〇<sup>+</sup>を越えたあたりでガモフバッグのお世話になったが、まずは全員が脱落することなくBCまで到達することができた。ひと安心である。一日を準備にあて、二十三日から登山活動を開始した。

### 登山活動

ルートはリウチハニアから山頂に続いている西稜を南西側から取りつく。距離は長いが一番容易そうだ。西稜に出るまではガラガラ<sup>ガラガラ</sup>のルンゼをたどり、あとは尾根通しに進む。下部は岩





C1への荷上げをする学生たち

稜帯、上部は雪稜が頂上まで続いている。この先の状況はどうか、私たちのとったルートは正解なのか不安はつきまとうが、今まで何びとも足を踏み入れてないまっさらな尾根を歩けるのは恵まれたことであり、幸せなことである。思わず頬がゆるみ、感慨に浸りそうになる。

二十五日、西稜下部の平坦地にC1(五五〇<sup>ピッチ</sup>)を建設する。この上は痩せた岩稜帯が数ピッチ続いている。ここからが核心部だろう。固定ロープを張って行動する。ボロボロの岩稜を5ピッチほどたどるが、よい支点がとれないのがつらい。次の雪壁を6ピッチで緩い雪稜へと移る。この先10ピッチすすんだ雪稜上にC2(五五〇<sup>ピッチ</sup>)を作り、アタック・キャンプとした。

私たちの隊はOB、上級生が手薄でお世辞にも実力のある登山隊ではなかった。まして初心者である一年生を上部まで上げることを考えると、固定ロープ、固定キャンプを作って登り降りする極地法によるのが最も安全に思えた。また登山が進むにつれ、この山が当初思っていたほどやさしくないことも判明した。稜線上は北側に大きな雪庇が張り出し、反対側はところどころスッパリ切れ落ちている。下級生を含めた全員がアタックをかけるのはちょっと無理がある。下級生は固定ロープのあるC2までの行動とし、アタックは上級生とOBとで行うことにした。

十月四日、原田と田代がアタックをかける。同日、棚橋と小川はサボート兼二次アタックのためC2へ入った。アタック隊は順調に高度をかせぎ頂上に迫ったが、頂上の下約二〇〇メートルで断念する。スタカットの登攀中雪庇が崩れ、原田は持っていたザックを失ってしまったのだ。幸い二人は巻き込まれなかったものの、トランシーバーを失い、交信ができなくなってしまった。迷ったすえ二人は登高をやめ下山を決定する。連絡がとれず遭難騒ぎにもなりかけたが、C2で再会した時に、私は体じゅうの力がヘナヘナと抜けてゆくような感覚を味わった。

翌日、棚橋と小川に田代を加えた三名は二次アタックに出発。昨日のトレースにも助けられて早いペースで登ることができた。雪庇崩壊地点からは稜線上を避けて急な雪壁をトラバースした。落ちたら一巻の終わりだろう。慎重にスタカットで足場をつくりながらすすむ。そしてアンザイレンしてから6ピッチ目に最高点に到達。C2を出てから六時間半、ちょうど十二時であった。登っている途中からガスがかかり始め山頂からのパノラマは得られなかったが、この数カ月思いえがいてきた頂に立つことができたのだった。

## おわりに

今回の海外登山は山岳部の活性化をはかろうとして行われた「合宿」であった。現役部員の全員参加を前提とし、若手OB、

山岳部長が加わってなされた創部以来はじめての試みであった。海外登山という「花火」を打ち上げてそれで終わりというのではなく、これを契機として国内での合宿をより充実したものにしていけることが目標であった。それができるのかどうかは、参加した学生の肩にかかっている。登頂できた者、できなかった者、充実した者、不完全燃焼だった者。様々な思いをもって合宿は終わったが、それらの思いを今後どのように生かしていくのか非常に楽しみである。

また、登山で使用した固定ロープや装備はすべて回収し、運び降ろした。BCで燃えるゴミは燃やし、燃えないゴミは村まで持ち帰った。山は私たちが来る前とさほど変わっていないはずである。

それにしても、私達が一カ月にわたってほとんど外国人の入らない地域で登山を行えたことは、非常に幸運だったと思う。私たちは美しい四川省の山のなかで、山岳部の登山を十分に堪能することができたのだから。

最後に、この登山は多くの方々への惜しみない協力があったはじめて成し遂げられたものである。この場を借りて改めて感謝したい。

## △記録概要▽

隊の名称 学習院大学レッドメイン登山隊一九九九

登山期間 一九九九年九月七日～十月十三日  
 目的 中国四川省大雪山脈の未登峰レッドメイン峰（六一  
 一二）の初登頂

隊の構成 隊長＝棚橋 靖（36）副隊長＝原田昌幸（31）部長＝

荒川一郎（47）隊員＝小川典祐（22）田代雄嗣（23）

内野麻衣子（22）矢萩昇太郎（21）志村義明（19）

高橋寛之（19）福島拓夫（18）山根 彩（21）

行動概要 九月 七日 先発隊（田代、高橋）大阪港発

十二日 本隊、成田発

十三～十四日 成都にて準備

十五日 成都～康定（バス）

十六日 康定～老榆林（バス）

十八日 老榆林よりキャラバン開始

二十一日 B C（四五〇）入り

二十五日 C 1（五一五）建設

十月 一日 C 2（五五五）建設

四日 第一次アタック（失敗）

五日 第二次アタック、レッドメイン峰の初

登頂に成功 九日 B C撤収↓老榆林

十一日 老榆林～康定（バス）

十二日 康定～成都（バス）

十三日 成都にて現地解散

報告 『レッドメイン峰登山報告書』（学習院大学山岳部レッ

ドメイン登山隊一九九九）『岳人』六三二号（二〇〇〇年二月号）『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』二〇〇〇年号掲載予定

（註1） J. Rock 1930, *The Glories of the Minyakonka*.

N. G. M. Vol. 58, p. 385-437

（註2） A. Heim : *Minya Gonkar* 1933, Berlin

（註3） E. Imhof : *Die Großen Kalten Berge von*

*Szetschuan* 1974

（編註1） ミニヤコンカの呼び方の考釈を含めて名称についての議論は（註3）Imhofの二二一～二二二ページにある。命名者はロックである。類似の山名として Longenain, Daddomain があり、発音は Reddomain レドメインと呼ぶ方が本当らしい。  
 レッドメインに隣り合うリウチコンカ（別名ジアイ）には一九八一年と八二年にイギリス隊とアメリカ隊が訪れている（登頂は一九八二年）。  
 ハイムによるルドウシェ・ラ  
 （編註3）

## 立教大学ガツシャブルムII峰登山隊の報告

鯀 坂 青 青

### 未踏の北東稜

立教学院創立百二十五周年記念「立教大学ガツシャブルムII峰登山隊」の計画は一九九八年四月から六月にかけての偵察隊、九九年六月から八月、三ヶ月にわたる本隊派遣の二年間にわたって実行された。

中国、パキスタン国境に位置する、ガツシャブルムII峰北東稜（中国側）は未踏のルートとして残された数少ない尾根のひとつである。

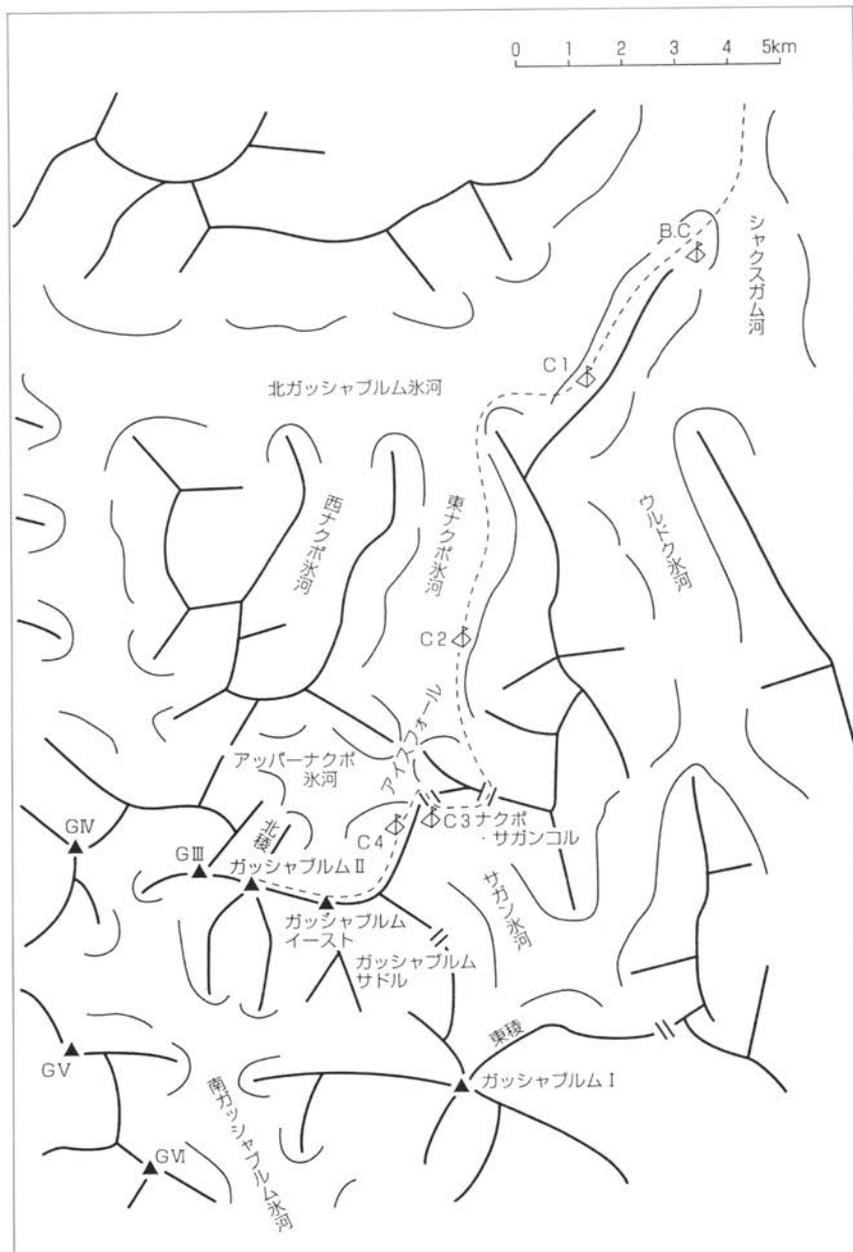
本隊は六月一日成田を発ち、北京、ウルムチ、カシユガルを経て、中国側スタッフ三名、シェルパ五名、ラクダ五十頭、ラクダ工（ラクダ使い）十五名からなる十日間のキャラバンの後、

六月十七日、ウルドク氷河末端（四二六〇メートル）にベースキャンプを建設した。

北ガツシャブルム氷河にC1（四五〇〇メートル）、東ナクボ氷河上部にC2（四九〇〇メートル）が建設され、直ちに北東稜にとりつく標高差七〇〇メートルの氷壁のルート工作にとりかかり、急斜面に頻発する小雪崩をさけながら、七〇〇メートルのロープをフィックスして突破、七月五日にはC3（五九〇〇メートル）が建設された。

C3上部の岩稜帯には八〇〇メートルのロープを張り、同十八日には北東稜ジャンクション下の六七八〇メートルにC4を建設、ほぼ荷上げも完了、あと一週間の晴天があれば最終キャンプC5を張り、アタックという所までこぎつける事が出来た。

しかしこの間七月十四日、六四〇〇メートル附近の岩稜でルート工



ガッシャブルムⅡ峰登攀ルート

作中の三隊員が上部からの表層雪崩に巻き込まれ、一名が胸部打撲の軽傷を負う事故に見舞われ、この頃から天候の周期に異変がおこり、降雪が続き周囲では雪崩が頻発するようになった。

七月二十四日には荷上げ中の二名のシェルパがC2とC3間氷壁上部の雪庇崩壊による大雪崩に遭遇、危く難を逃れたものの逃げる際に、岩角にプラブーツをはげしくぶつけ大きく破損、高所での使用は不可能な状態になってしまった。

アタックまであと一歩、この雪崩によるダメージは非常に大きく、氷壁にフィックスした七〇〇呎のロープの大半、上部岩稜帯のロープも雪崩により最上部からはぎ取られ、C3は完全に孤立状態になってしまった。

更に七月上旬には病人に付き添い、二名のシェルパがネパールへ帰国する戦力ダウン、持参した衛星電話インマルサットが故障、連絡が途絶えるというアクシデントにも見舞われ、この地域の天気図をFAXで受信出来なくなり、その後の気象判断に致命的な打撃を被ったのだった。

## 登山中止

七月二十四日、私は鈴木ドクターと共に、最終局面を見届けるため、登頂ルートが望見出来るC2へ向け降りしきる雪の中、登って行った。

「ビッグナダレ、カミング」。シェルパの叫び声が私の無線器

に飛び込んで来た。C2に着いてみると、ダワ、ラマ、ミンマ三人のシェルパは不安そうにテントの中にとじこもり、口もきかない。雪は翌二十五日も我々をこばみ続けるかのように降り続いた。

二十六日、久しぶりの晴れ間。双眼鏡で氷壁ルートの破損状況を観察した後、大木、神保、佐藤三隊との交信。

「雪崩による被害は大きい。ロープも日数も残り少ない。これ以上君達を危険にさらす事は出来ない。登山を打ち切り、下ルルートの修復を行い直ちに下山せよ。総隊長としての私の命令である」

## C3からの返事

「C3で話し合います。今夜八時に交信をお願いします」

## 私からの交信

「この失敗はすべて私の責任、私の決断は変わる事はありません。君達は全力を尽くした、何も恥じる事は無い、手を振って下山して下さい」

この送信の前、頂上を眺めながら考えた末に、自分で自分にいい聞かせるかのように、私は大声で叫んだ。「ようーし、止めた」と。傍らで聞いていた鈴木ドクターは飛び上らんばかりに驚いたと、後に聞いた。

様々な思いを抱きこの登山に参加した全隊員、その描いた夢はただ一つ、悠然と私達を見下すピラミッド状の美しい頂上。

目を閉じれば風と山のざわめきだけが聞こえ、今その夢が終わろうとしている。

## 下山

八月十日、私達の撤収に合わせ迎えに来たラクダ三十五頭のうち二頭が増水したシャクスガム河の濁流にのまれて死亡、やっとの思いでマザーダラという地点まで下山してみると、この地域では百年に一度という程の大洪水に見舞われ、道路は至る所で寸断、出迎えのジープも入ってこれないとの情報をこの地に駐屯する辺境警備隊より聞き、困りはてた末、隊荷は全てこの地にデポ、道路事情が回復次第日本へ送り返してもらおう事とした。カシユガル登山協会へ、軍隊無線でこのむねを連絡、身の廻り品、わずかな食料を各自が背負い、二五〇<sup>+</sup>先のイエチェン市に向け、八月二十日下山を開始した。

崩壊箇所の間、間にとり残されたラクダ、トラックを、通常よりかなりの高値でチャーターしたり、あるいは徒歩で高巻き、渡渉をくり返しながら、同二十四日、ようやくカシユガルに辿りつき、市内に入ってみると、橋は落ち、道路は崩れ、惨澹たる状況が洪水の凄まじさを見せつけていた。

登山隊の安否を気づかひながら待っていた自然観察隊の現役山岳部員や、立教学院、立教小学校長をはじめとする子供達とも感激の合流を果たし、ビールでの乾杯に楽しい一時を持つ事

が出来たのも嬉しい思い出の一つだった。

## G II の計画

G II の計画は九三年、立教大学山岳部創立七十周年記念事業として行われたチヨモロンソ峰（七八一六<sup>+</sup>）中国側未踏ルートからの登頂を終えた翌年、九四年から足掛け五年の計画だった。

私達は「ヒマラヤ研究会」を立ち上げ、次なる我々の目標の山について議論を重ね、その中で立教学院創立百二十五周年（一九九九年）記念事業としての遠征を行う事をまず決定し、その後二年間かけヒマラヤの様々な山域、山々を取り上げ研究を重ねてきたが、その対象となったのは、北部シッキム、ナンガパルバット、エベレスト西稜、ガッシャブルム山域、クーラカンリ、ガンカーブンスム中国側などだった。

そして最終的にガッシャブルム山域の三つのルートが取り上げられた。

- 一、ガッシャブルムⅠ峰東稜
- 二、ガッシャブルムⅠ峰東面
- 三、ガッシャブルムⅡ峰北東稜と北稜

GⅠ東稜は八九年宮城岳連隊、同じく八九年GⅡ東面偵察のベルニナ山岳会、福島隊よりの情報を頂き検討を重ねた結果、「ガッシャブルムⅡ峰北稜」を、頂上へ直接つき上げるスキ

りした尾根を目標ルートに決定した（偵察により北東稜に変更される）。

九八年、偵察隊。九九年、本隊派遣の仮計画書が九七年五月のOB総会で承認され、同八月、私が北京を訪問、仮計画書と登山許可の申請書を中国登山協会に提出。十月には立教大学総長を名誉委員長、山岳部長を委員長とする「ガッツシャブルム委員会」が設置され、大学から全面的な協力を頂く事となり、翌九八年一月には、待望の「登山許可証」が届き、学院側との免稅寄付についての手続きも終了、いよいよ偵察隊派遣に向けての準備や募金活動も活発に行われた。

## 偵察隊

九八年、偵察隊は奥原隊長以下五名、四月二十日成田を発ち、六月四日帰国まで四十五日間の活動であった。

その目的はまずGⅡ北面、北稜または北東稜への取り付き、登頂の可能性についての見極め、シャクスガム河の水量、キャラバンに初めて使うラクダの状況把握であった。

マザーグラから四日目、荒涼たる瓦礫の砂漠地帯からアギル峠（四七八〇<sup>1)</sup>）を越えると、四月下旬のシャクスガム河には全く水は流れていなかった。川幅一<sup>2)</sup>にも及ぶ石ころの平原が、上流、下流見渡す限りに続いていた。

シャクガム河に出た地点がキャンプ地だったが、水がないた

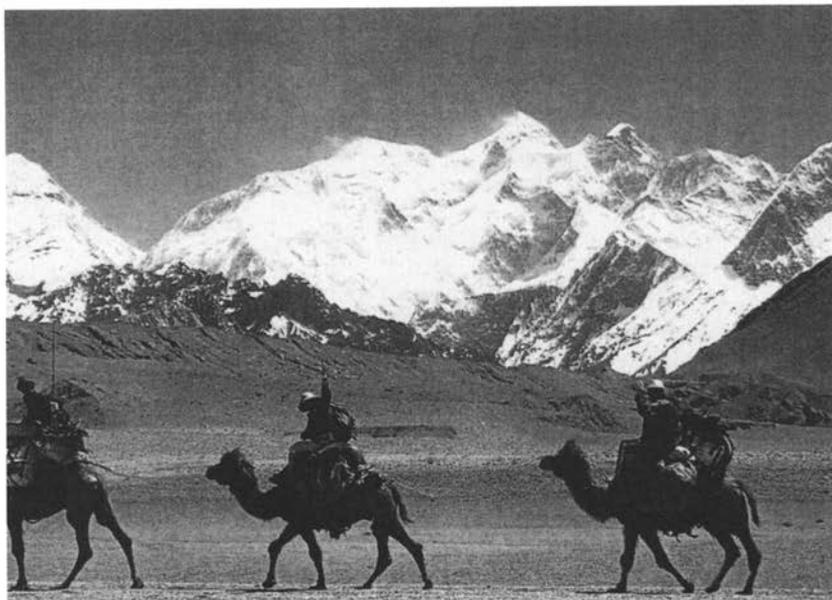
めに二日分の行程で、ドーピンジャンガルまでの長丁場。この地名はシプトンの『地図の空白部』にも記載されているオアシスで、湧き出る清水と、その流れるにそって僅かな草と、高さ二（三）の紅柳の一群が茂る、荒涼たる世界の中では、人の心をなごませる小さなオアシスであった。

ここで二泊して休養。清水で体を洗い、ラクダ達は紅柳をむさばり、長旅にしぼんでいた背中の二つの瘤がピンと立ち上がり、元氣を取り戻したかに見えた。

五月五日にはBCに到着し、いよいよ偵察活動の開始。北ガッツシャブルム氷河より東ナクポ氷河の四七五〇<sup>3)</sup>にC1建設。GⅡ北面の偵察に入ったが、北稜に取り付くには、東ナクポ氷河左岸に落ちこむ標高六〇〇<sup>4)</sup>のアイスフォールを越える以外にルートは無さそうであった。

五月十四日、午後七時半（現地時間）、東ナクポ氷河右岸でアイスフォールを観察中、GⅡ北面上部の懸垂氷河が崩壊し、高度差三〇〇<sup>5)</sup>にも及ぶ大雪崩が発生。アイスフォールを呑みこみ、その爆風と雪煙は、C1をも包みこんでしまった。

懸垂氷河が異常に多い特殊な地形、アイスフォール上部のアップーナクポ氷河に足を踏み入れること自体、極めて危険性が高く、北稜の選択は取り止め、北東稜にルートを変更するという事が偵察隊の結論であった。



シャクスガム河のキャラバン6日目、初めてガッシャブルムⅡ峰が見えた

## 本隊

ガッシャブルムとは、バルティ語で「輝く峰」、または「輝く壁」の意味だそうだ。その初登頂は一九五六年、モラヴェクを隊長とするオーストリア隊によって、南西稜よりなされた。

その後一時期、印パ戦争により入山禁止の時期があり、それが解けると、各国登山隊がバルトロ氷河に繰り出し、パキスタン側からは比較的登り易い八〇〇〇峰として、多数の隊が集まるようになった。

八四年にはメスナー、カラマンダーがGⅡよりGⅠへの縦走を果たすなど、画期的な登山が行われた山でもある。

私達があくまで未踏のルートにこだわった中国側北東稜は、東峰（七七七二<sup>1</sup>）から延びる雪稜で、下部には岩稜が続いている。

六月九日、車でマザータラに到着。テントを張っていると、クルト・ディンベルガーの国際隊が丁度下山して来た。その中に、我々が昨九八年春の偵察のあとで、秋に北東稜を六四〇〇<sup>1</sup>まで試登した、ダニエル・マズール隊員が居合わせ、私達に東ナクポ氷河源頭の氷雪壁ルートを、ビデオの映像を交えながら教えてくれた。

我々は当初、長大なるウルドク、サガン両氷河を経由して北東稜へ取り付く事を考えていたが（地図参照）、マズールの進

言を取り入れ、北ガッシュアルム、東ナクポ氷河經由の、偵察隊と同ルートを通り、北東峰へとルート変更を決定した。

シャクスガム河を溯り、右手にK2(チョゴリ)、プロードピーク、ガッシュアルム山群を眺めながら、六月十七日ベースキャンプ(四二六〇<sup>トリス</sup>)に到着。いよいよ登攀活動の開始である。

BCでは十五名のラクタ工と交渉、キロ当たり、十中国元で話がまとまり、約六〇〇キロのC1荷上げは大いにはかどるが、イスラム教徒は禁酒のはずなのに、ビールは酒ではないと、貴重な我々の缶ビールをねだられてしまった。

C1(四五〇〇<sup>トリス</sup>)の建設を終え、六月二十二日には東ナクポ氷河源頭近くにC2(四九〇〇<sup>トリス</sup>)を建設、国際隊のマズール等が三日で抜けた標高差七〇〇<sup>トリス</sup>の氷雪壁のルート工作に取りかかる。

二十七日、私達は四日をかけてこの氷雪壁を突破、五八〇〇<sup>トリス</sup>のナクポ・サガンコルに到達、七月五日、C3(五九〇〇<sup>トリス</sup>)建設、北東稜、主稜線へのルート工作に取りかかった。

同十四日、主稜線の雪の斜面で、大木君がラッセル中の雪面に突然亀裂が走り、表層雪崩が発生、三隊員が巻き込まれたが、幸いにも大木君の胸部打撲傷程度の軽傷ですみ、大事には至らなかったのは幸いであった。

七月十八日、C4(六七五〇<sup>トリス</sup>)が建設され、最終キャンプC5(ジャンクション)東峰間・七五〇〇<sup>トリス</sup>の予定)へ向けて

の荷上げもほぼ完了したが、この頃から天候の周期に異変がおこり、降雪が毎日のように続いた。

七月二十四日、東ナクポ氷河源頭の氷雪壁、雪庇崩壊による大雪崩、更に北東稜、岩稜帯最上部で起こった雪崩については、初めに述べた通り。隊は大きな打撃をこおむり、二十六日の登山中止、撤収命令を下す局面に追い込まれてしまった。

夕日に赤く染まる「遠き山、ガッシュアルムII峰」。

自然の大きな力にたたきのめされ、雪崩と闘いながらの壮絶なる登山ではあったが、未踏の北東稜ルート(中国側)は、「立教大学ルート」として是非とも完登したいとの思いから、山岳部創立八十周年(二〇〇二年)を目標に、再挑戦を思っている。

最後になったが、御支援、お力添えを頂いた多くの皆様方に心より御礼を申し上げ、報告とさせていただきます。

#### △記録概要▽

##### 隊の構成

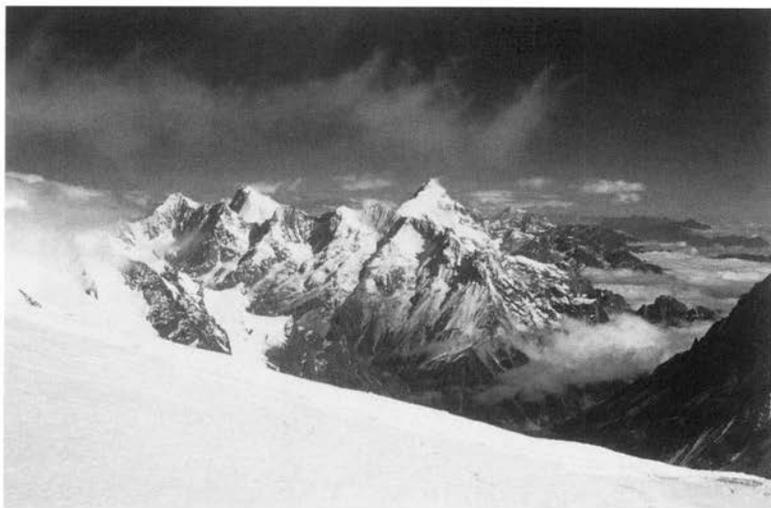
総隊長 鯉坂青青(65)、隊長 牛窪光政(55)、登攀隊長 大木哲郎(30)、隊員 神保修麻(27)、隊員・通訳 佐藤大輔(30)、顧問 古市進(68)、医師 鈴木良二(60)、連絡官 李瑞華(50)、通訳 高震(26)、コック 除書玉(35)、サーダー パサン・チリ(37)、シェルパ ミンマ・テンジン(49)、



左手の北東稜ジャンクションピンピークへ続く稜線をたどり、右の三角形のガッシュャーブルムII峰をめざす（撮影：岡田昇）



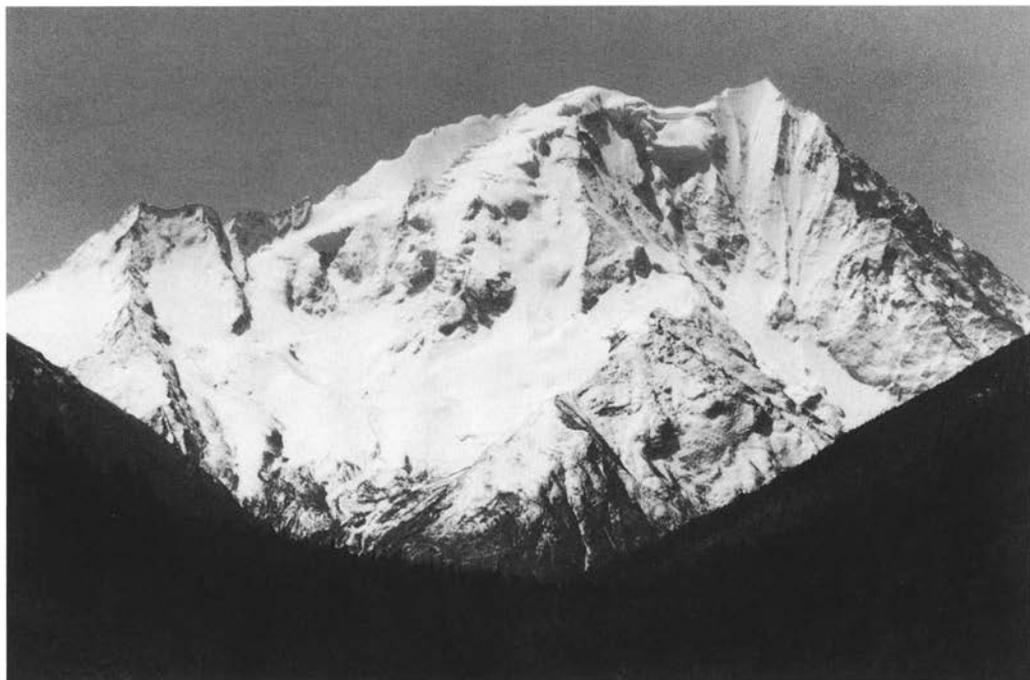
G1 <<本文は 114 ページ>>  
 格菱峰山塊の岩峰群に抱かれた  
 秘境のラマ僧院。600年の歴史  
 をもつ及谷根巴(冷泉寺、4,175  
 m)



G4  
 ニヤ・コンカ(貢嘎山)の衛星  
 峰。右端のピラミッドがMt. エ  
 ンゲガー(E-コンガ、6,618m)。  
 ニヤ・コンカ北西稜上より撮る

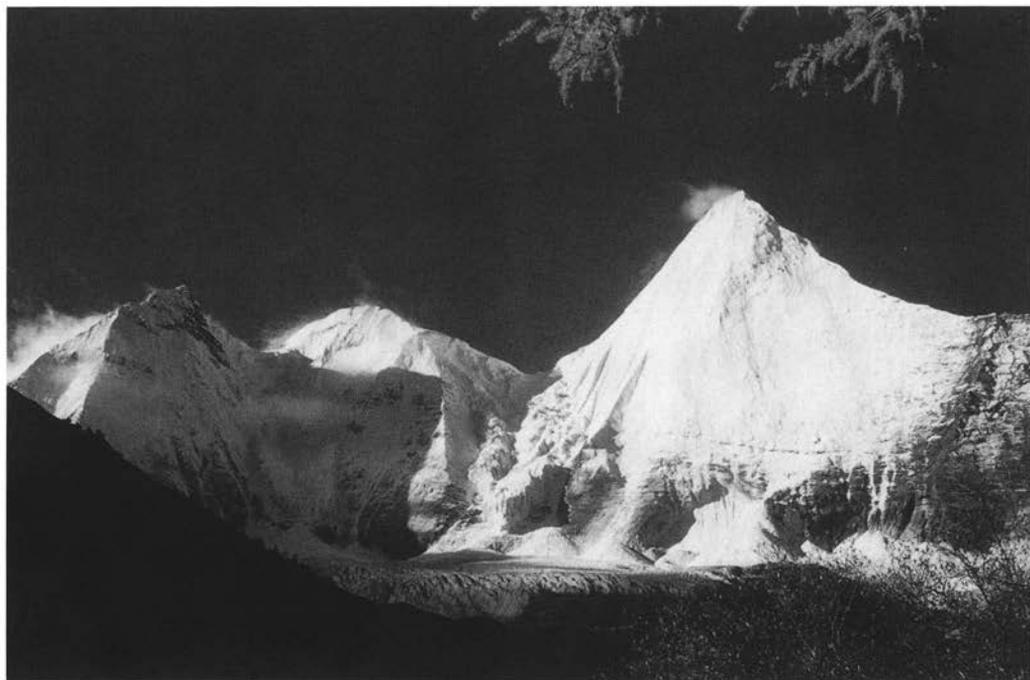


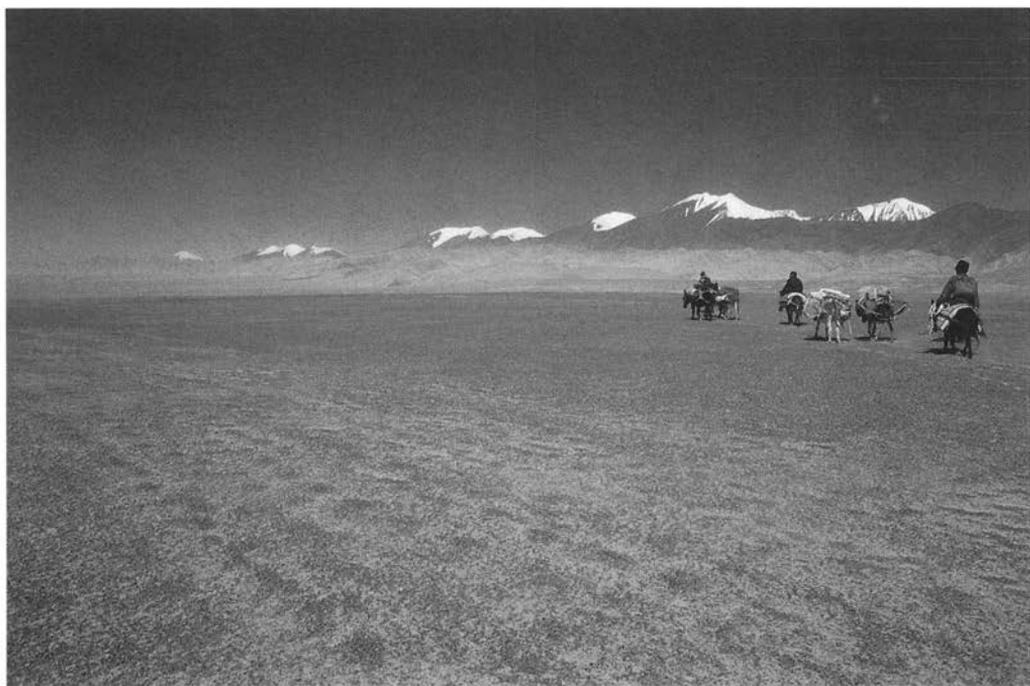
G5  
 邛崃山系、四姑娘山の北に位置す  
 る花崗岩の巨大な岩峰群の一つ  
 (5,513m) 畢棚溝の源頭に聳える



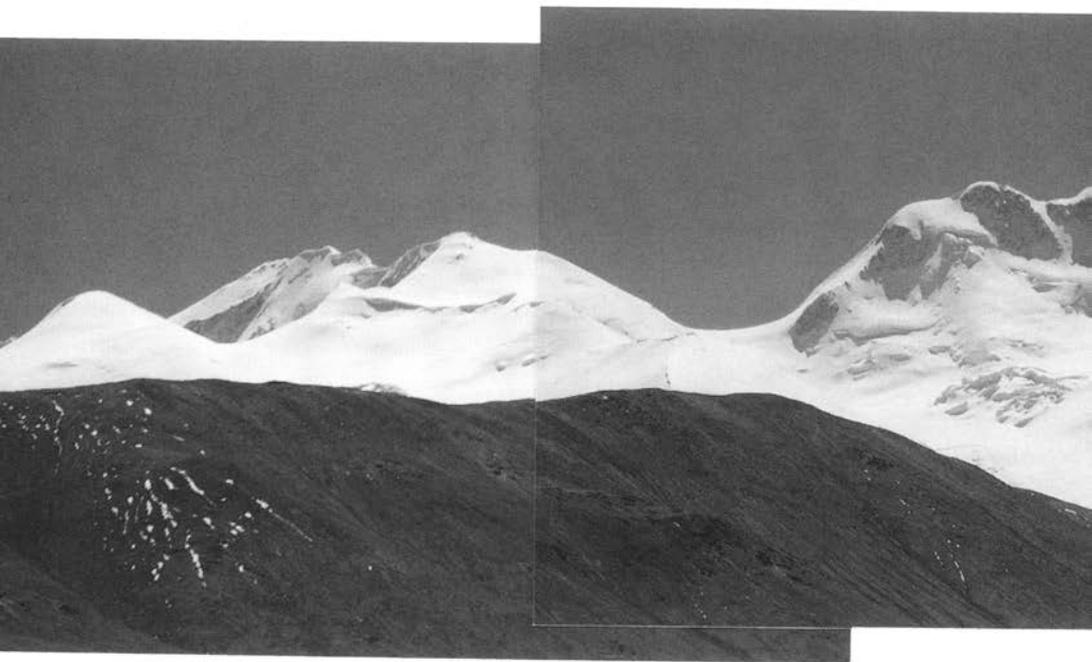
G2 昔から「ジャ・ラ」(山々の王)と呼ばれてきた大雪山山系の雄峰、海子山 (5,820 m) の北面

G3 真嘎雪山三山の中でもっとも優美かつ壮麗な尖遇勇 (5,958 m)。J・ロックが「ジャムペヤン」とよんだ四川の名峰





広大なショール・クル盆地を行くロバのキャラバン。背後の山は6,300 mクラスの“ムズターグ”



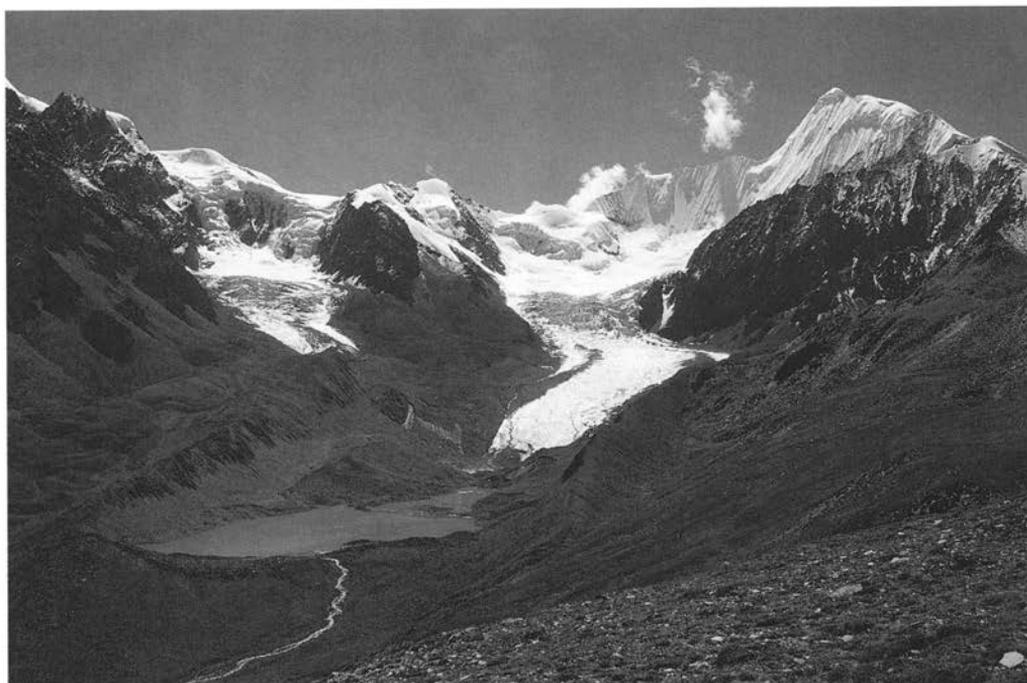
チョンムズターグ（山群）のパノラマ 右は6,740 m 峰、中央が主峰6,962 m、コルをへだてた左の山塊の奥の峰が6,942 mの第二の高峰



ベースキャンプ予定地付近、サルクンチから眺めたチョンムズターグの巨大な山群  
《この両ページは本文136ページ》



Abb.13 Hintergrund des Rudshe-Tales. In der Bildmitte der Reddomein-Gletscher, rechts die eisige Pyramide des Reddomein  
(E. Imhof ; Die Großen Kalten Berge von Szetschuan より)



1930年(上)から69年後(1999年)のレッドメイン峰とその氷河の大きさの比較

《本文は99ページ》

シエルパ アンブリ・ラマ(46)、シエルパ ダワ・チリ(27)、  
シエルパ チェリン・ドルジ(25)

#### 偵察隊

隊長 奥原 宰(42)、隊長 堀 達憲(44)、隊員 岡田  
昇(44)、隊員 佐藤大輔(29)、顧問 西川益生(66)、顧問  
鯉坂青青(65)、連絡官 李瑞華(49)、通訳 高 震(25)

#### 現役山岳部、自然観察隊、A班

隊長 高橋三奈(21) 以下五名

#### 立教学院、自然観察隊、B班

隊長 田中 司(55) 立教小学校々長 以下十二名

#### 報告

立教大学ガッシャブルムⅡ峰登山隊報告書『遠き山・ガッシャ  
ブルムⅡ峰』

(御希望の方は鯉坂青青までご連絡下さい 住所…〒151-0033  
東京都世田谷区北沢二―二六―二)

〔註…本登山は日本山岳会海外登山基金一九九九年度助成金を  
受けて実施された〕



## 中国・四川省の未踏の山々

中村 保

……「今日では、地図の上では最早何も秘密は存在しない」

と、こんな言葉を鸚鵡のように繰り返している不勉強な者たちがいる。しかし、誰もがチベット全域、あるいは遙か僻地の地、

中国西部・チベット境界のすべてに精通しているだろうか。経文を唱えながら暮らしている土着の人たちにしても、寒風吹きすさぶ荒涼たる自分たちが住む谷の外の世界は知らない……：ジョセフ・ロック (National Geographic Magazine, February 1

930)。新中国になるまで謎の山であったアムネ・マチン探査リポートの冒険の一節である。ジョセフ・ロックは四川省の高峰、ミニヤ・コンカ(七五五六<sup>トウ</sup>)を初めて本格的に踏査し、見事な写真と紀行を世に紹介したアメリカの植物採集家である。後に雲南省の麗江に住みついて納西族の東巴文化の研究に半生を

費やした。フランク・キングドン・ウオードとともに、中国南西辺境、今日でいう横断山脈とその周縁に最も多くの足跡を残した探検家の一人である。

このロックの言葉は七十年前のものだが、改革・開放が急速に進んでいる現在においても、当てはまる部分は少なくない。幹線道路から少し外れば、四川省西部のチベット族の世界には多くの未踏の領域が残されている。

本稿では行政的には四川省にはいる金沙江(揚子江上流)の東側、横断山脈東部の未踏の山と谷について概説と紀行を紹介する。文中に三葉の地図を用意したので、併せてご参照いただきたい。

## I 概説—横断山脈東部・四川省の未踏峰

近年、四川省の山が再び注目され始めている。一九九九年の秋に学習院の学生を中心とする登山隊が大雪山山系の横断山脈の最高峰、ミニヤ・コンカ（貢嘎山、七五五六メートル）の衛星峰、レドマン（六一二二メートル）に初登頂したことは喜ばしいニュースである。四川省には五〇〇〇メートル以上の山は無数にある。しかし、数多くの六〇〇〇メートル峰が全て未踏の金沙江西側の東南チベットとは趣を異にする。一九三二年には四川と関わりの深いアメリカ隊によってミニヤ・コンカが初登頂され、開放後は名峰、スチムン山主峰（六二五〇メートル）は一九八一年に同志社大により登られた。雀兒山I峰（六一六八メートル）は一九八七年に神戸大と中国の武漢地質学院との合同隊によって登頂され、II峰（六一一九メートル）は一九九七年にアメリカ人によって登られている。彼は同時にI峰の第二登も行った。一九八八年には格聂峰（六二〇〇メートル）が日本ヒマラヤ協会隊の手に落ちた。

このように登山活動は比較的活発に行われてきており、六〇〇〇メートルを超える未踏峰となると限られている。が、六〇〇〇メートルという数字に拘泥しなければ魅力のある山がたくさんあり、未知の世界へ憧憬を抱く登山家の訪れを待っている。六〇〇〇メートルに満たない山も含めて、未踏のピークと山群について西から東へ順に列記する。南北に連なる山系のほぼ中間を成都・ラサを

繋ぐ幹線道路である川蔵公路が東西に横断している。

### 一 雀兒山山塊

二つの六〇〇〇メートル峰はすでに登られ、幾つかの五〇〇〇メートル峰も一九九七年のU A I Iの隊によって登られている。が、アブローチは東面からだけで、西側は知られていない。隔絶された奥地のラマ僧院、岩峰群に囲まれた神秘的な谷があるかもしれない。広州からウルムチへの空路上から俯瞰したとき、眼下に黒々とした岩の世界が広がっていたのが記憶にこびりついている。川蔵北路が甘孜から格徳へ越える雀兒山峠の北側は、五八一六メートルのピークが地図に載っているが登山隊は訪れていない。

### 二 沙魯里山山系

この長大な山系は範囲が漠然としている。山脈というより山域を表現していると言ったほうが適切かもしれない。私なりに、この山系がカバーする境界を、北は雀兒山山塊の南東に延びる岡嘎峰山群から南は仙熱日三山の貢嘎雪山に置く。

#### (一) 岡嘎峰周辺

甘孜南側、雅碧江の右岸沿いに連なる。最高峰は五六八八メートル、小さい氷河が懸かり、岩峰が多い。一九一八年の初冬にこの雪の山嶺を望んだE・タイクマンはそのスケールに感動している。さらに南に広がるニャロン地方の山々は標高こそ高くないが、

全く知られていないだけに気になるところである。

## (一) 扎金甲博山塊

夏塞山塊の北側、措普牧場の広大な谷を挟んで、東西に比較的大きな山脈が延びている。その中心が扎金甲博山塊である。

最高峰の五八一二<sup>トイ</sup>峰、第二の高峰(五七二五<sup>トイ</sup>)、パタゴニアのフィッツ・ロイのような花崗岩の岩峰(五三八二<sup>トイ</sup>)がひときわ目をひく。東には岩と雪の城砦、哈速(五五二四<sup>トイ</sup>)が聳え、西には五五〇〇<sup>トイ</sup>クラスのピークが連なる。

## (二) 夏塞山塊

川蔵公路の理塘と巴塘のあいだ、理塘高原・海子山峠の北側の山塊である。最高峰は五八三三<sup>トイ</sup>、この山も別名海子山と呼ばれる。南面に二つの美しい氷河湖をもつ。北面は氷雪の北壁となっている。登攀意欲をそそる。公路から近いが登山情報はない。かつて中国登山協会がこの山を神戸大に提案したが、マインナー過ぎるとの判断で取り上げられなかったと聞く。この山塊の東西に五六〇〇、五五〇〇<sup>トイ</sup>のピークが連なる。

## (四) 央莫龍山塊

正しくは中国人民解放軍の十万分の一の地図にある「党結真拉」という名称を使うべきである。巴塘の東北東一五二二〇<sup>トイ</sup>のところまに位置している。BCまでのアプローチは近く、巴塘から二日のキャラバンで行ける。央莫龍とは山塊の東南東側、夏の放牧基地の名前である。最高峰の六〇六〇<sup>トイ</sup>峰から西に六

〇三三、五八三三、五八五〇<sup>トイ</sup>の三つのピークが連なる。一九九一年の日大隊の敗退以来、再挑戦されていない。南側には大きな高山湖がある。南西面からの最高峰の登攀はそう困難ではなさそうだ。ミニヤ・コンカの衛星峰を除くと、仙熱日六〇三二<sup>トイ</sup>とミニヤ・コンカの南の六〇七九<sup>トイ</sup>峰とともに四川省に残された数少ない未登の六〇〇〇<sup>トイ</sup>峰である。

## (五) 格聂峰および北西の山塊

昔の北京・ラサを結ぶ旧街道の北、理塘高原の南側の山域は広大で、しかも、最も探査が遅れているところである。言い換えれば未知の部分が多いところである。街道上のラテイ・ラ峠(三壩山)を越えた探検家は峠の北東のアルプス的な景觀に感嘆している。五七〇〇〜五九〇〇<sup>トイ</sup>のピークが数十座あるが、そのうち私が目にするのが出来たのは三分の一もない。格聂峰から谷を一つ巡って北西側に屹立する猛禽の嘴のような五九六五<sup>トイ</sup>の鋭鋒が際立っている。その先に姿を覗かせる純白の天を突く雪峰が眩しい。秘境の名刺、及谷根巴(冷泉寺)をとり囲む岩峰群が印象的である。この僧院の北東裏手に肖扎(五八〇七<sup>トイ</sup>)の鋭鋒が威圧的に迫る(グラビエ(G) 1)。

党結真拉山塊の東には、五八七〇<sup>トイ</sup>と五八六三<sup>トイ</sup>(中国名・相丘切克)の二つの顕著なピークがある。大きな氷河湖がある。五七〇〇<sup>トイ</sup>以下のピークになると、それこそ数え切れない。もう一度踏査の旅に出なければならない。

#### (6) 貢嘎雪山

この名称は貢嘎山（ミニヤ・コンカ）と同名で紛らわしいが、古くから使われていた。最高峰の仙熱日（六〇三二メートル）、尖邁勇（五九五八メートル）、夏諾多季（五九五八メートル）の何れも未登の山やまである。探検史に登場するのは一九〇九年で、フランス人のジャック・ペコーが近くの貢嘎嶺という僧院を訪れている。が、彼は悪天候のため雪山は見えていない。キングドン・ウォードは英国の王立地理学会の『ジオグラフィカル・ジャーナル』（The Geographical Journal, London, 1924）のなかの「雲南の雪山」という一文で触れているが、山についての記述は乏しい。ただし、ウォードがこの山塊を四川省ではなく雲南の山に分類していたことが興味を引く。

外国人でこの山塊を初めて写真で世界に知らせたのはジョセフ・ロックである。一九二八年に、黄帽派チベット仏教徒の四川省の拠点である木里から接近した。ロックは尖邁勇を「ジャムベヤン」と呼び、そのプロフィールで『ナショナル・ジオグラフィック』の表紙を飾った。このピークは六〇〇〇メートルには僅かに届かないが、純白な円錐形のピラミッドは美しい。その秀麗な姿が、聖なる信仰の山として崇拜する人達に畏怖の念を起させても不思議ではない（G3）。貢嘎雪山で本格的な登山が試みられたのは一九八九年になってからである。日本ヒマラヤ協会隊が仙熱日を狙ったが登れなかった。一九九三年には二

人のアメリカ人が尖邁勇を試登したが歯が立たなかった。

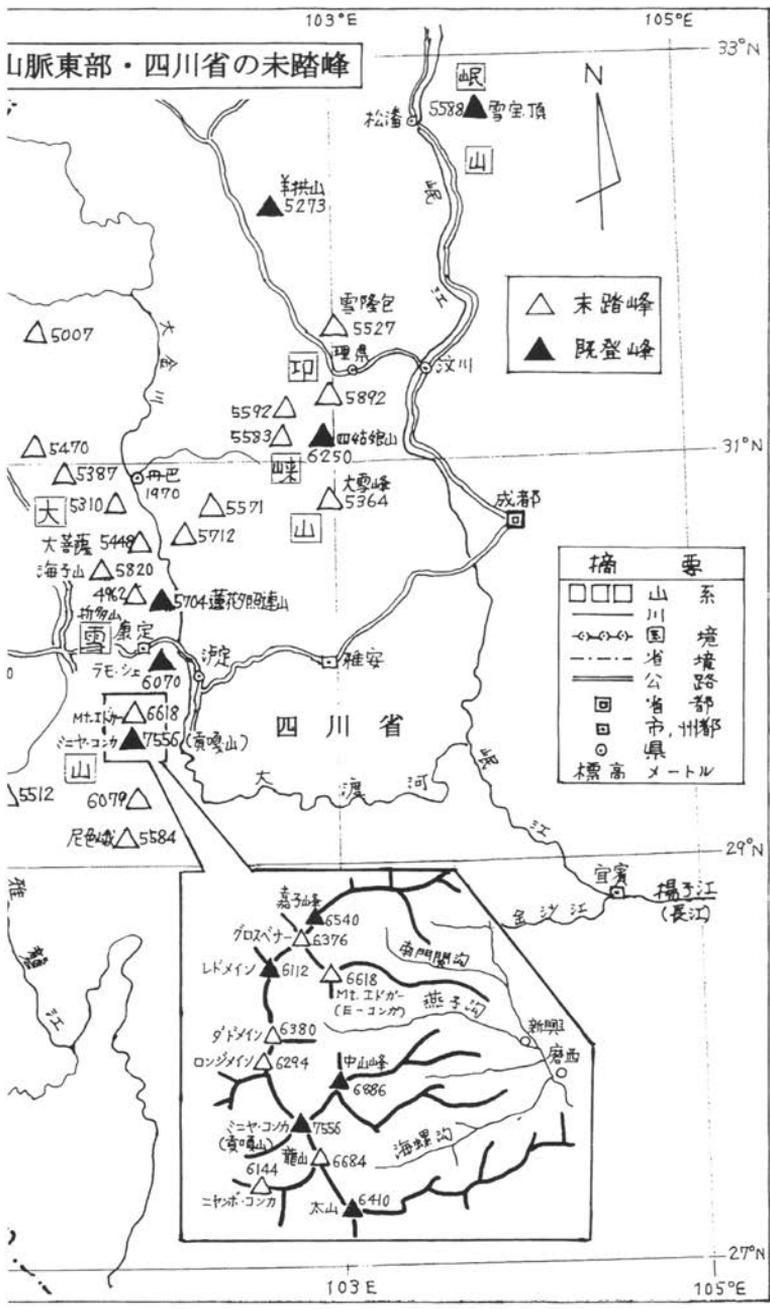
### 三 エカラ山系

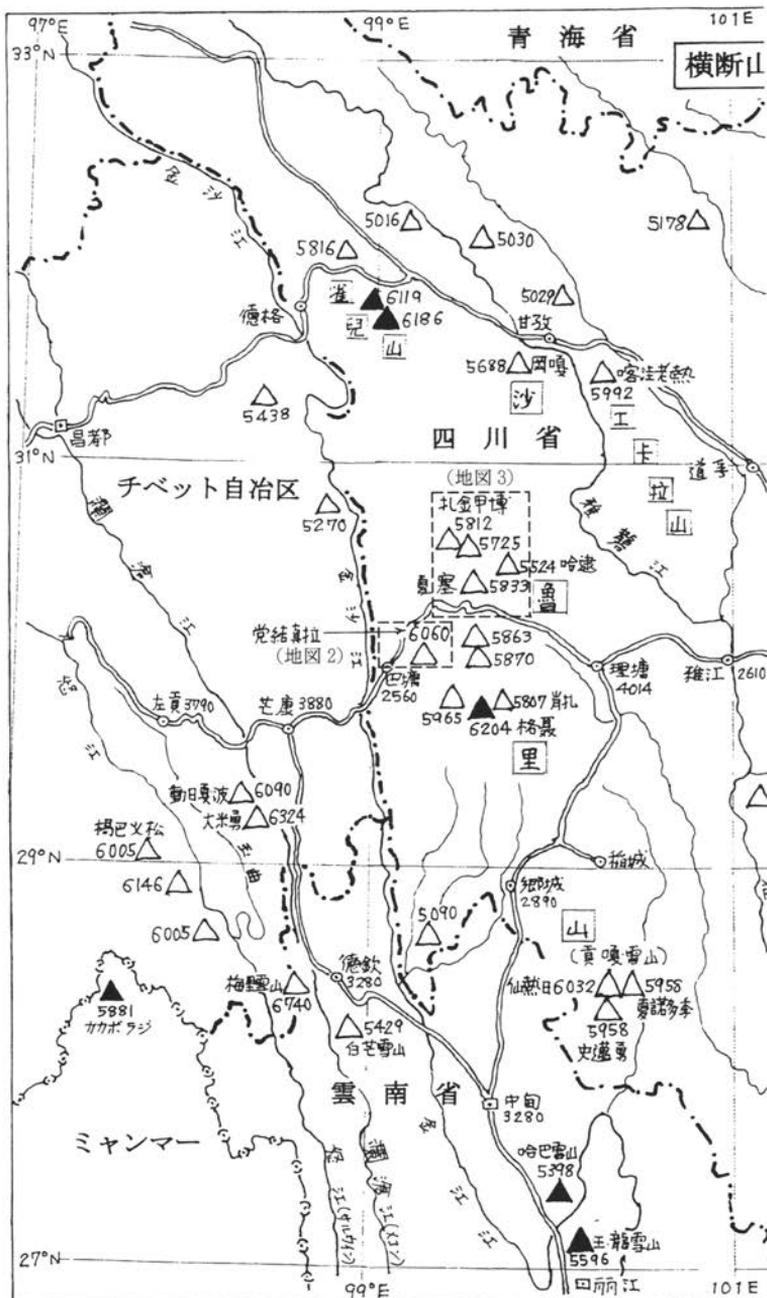
甘孜の東南三十キロのところにある沙魯里山と大雪山の二大山系に挟まれた小さな山系であるが、二つの六〇〇〇メートル近いピークには一九九八年まで誰も訪れなかった。雅砻江とその東の支流の間にある。拙書『ヒマラヤの東』では五九九二メートルの最高峰をカワ洛仁山と書いたが、中国人民解放軍の十万分の一の地図では山名は同じ発音の略注老熟となつているので、こちらを正としたい。

ただし、土地のチベット族の発音は「カワロリ」で幸福を意味するといふ。主峰の西二キロの尾根上に五九二八メートルのピークがある。北面は氷河が発達しているようだ。たおやかな雪の秀峰である。一九九八年九月に山梨岳連のパーティーが南面の偵察を行った。

### 四 大雪山山系

ミニヤ・コンカを擁する四川省では最も有名な山系である。往時は東チベットへのゲートウェイであったし、近代では太平天国の乱や長征の戦闘の舞台になったところである。チベット高原は大雪山で終わり、その東は大渡河の深い大峽谷となる。この山系の範囲も明確には言えないが、そのことには拘らない





地図 1

で山の記述を北から南の順に進める。

(一) 海子山—ジャ・ラ

海子山と呼ばれる山や峠は四川省にはたくさんある。峠だけでも四つもある。海子とは湖を意味する。海子山は普通名詞に近い。が、塔公草原の北に聳える大雪山の海子山は少し違う。標高こそ五八二〇メートルと高くないが、その目立つ山容は古くからチベット族によって「ジャ・ラ」(山々の王)と崇められ、ギル、ロックヒル、タイクマン、ハイム等の探検家が勇姿を記録に残している。交易路からはミニヤ・コンカ以上に真近に迫る存在であった。勿論現在でも、川蔵公路からよく見える。登路は北面の雪壁・雪稜にルートが求められると思う。アメリカ人が狙っていると聞くが、日本人によって登ってもらいたい(G2)。海子山から北に延びる山脈上に、地図には五四七〇メートルのピークが載っているが、どんな山か分からない。

(二) 大渡河流域

大雪山の主脈からかなり離れ、大渡河の東側の一部は邛崃山山系にはいるが、広域的に捉えてここに分類しておく。川蔵公路の北、丹巴までの大渡河峡谷の東西両側には多数の五〇〇〇メートル級の峰が存在する。左岸の無名の最高峰(五七二二メートル)など山容は特定されていない。私は一九九七年にこの地域を探り幾つかの雪山を写真に収めているが、全貌はわからない。東は長征で名高い四〇〇〇メートル級のラスの夾金山ジャオジン Shanであり、民族的にはチベッ

ト族から羌族に棲み分けが変わっていく地域である。夾金山はその東端で邛崃山系に繋がる。メジャーではないが、知られざる山域と民俗・歴史を紀行する楽しみが残されているところと言える。

(三) 折多山周辺

海子山の南、大雪山の主山脈上にあるが、五〇〇〇メートルには満たないので登山の対象としては興味が薄い。一九九三年に市川山岳会が折多山(四九六二メートル)で遭難事故を起こしている。他にいくらかでもいい山があるのに、遠征の目標として誰がこの山を薦めたのか腑に落ちない。マイナーな山域と言わざるをえない。

(四) 蓮花夕照連山

折多山の東、谷を挟んで連なる峨々たる岩峰群である。康定の北、大雪山の支脈である。最高峰(五七〇四メートル)は一九九八年九月に南西壁経由、はりま山岳会によって登られた。この山域に入ったのは彼らが初めてである。アプローチは至近である。未だ多くの五〇〇〇メートル級の岩峰が残っている。ただし、氷河は発達していないし、主峰が登られてしまった現在、優先順位は高いとは言えない。

(五) ラモ・シェ山塊

康定のすぐ東側の山塊である。山名の由来は定かではない。一九三〇年にミニヤ・コンカを中心に大雪山を本格的に探査・

測量したアーノルド・ハイムの地図には載っているが、ラモ・シェは最高峰（中国名…田海子山、六〇七〇<sup>ト</sup>）の名称で、山塊全体にたいしては打箭炉山と記している。ラモ・シェは一九九三年にアメリカ人が、蛇海子山（五八七八<sup>ト</sup>）はアメリカ・カナダ・NZ合同隊が初登頂している。残る主な未登のピークは白海子山（五九二四<sup>ト</sup>）と筆架山（五八八〇<sup>ト</sup>）などである。懸垂氷河と岩の登攀が主体となる難しそうな山である。康定の街から直接取り付けるほど便利などころに位置している。

（六） ミニヤ・コンカ（貢嘎山）と衛星峰

ミニヤ・コンカ主峰（七五五六<sup>ト</sup>）はすでに第七登までなされている。第六登までは全て北西稜をルートにとっているが、一九九八年韓国隊が魔の北東稜を初登攀し、第七登を果たしたことは特筆に価するニュースである。この記録は海外ではまだ発表されていないので、韓国山岳会に問い合わせたところ親切な報告を寄せてくれたので、纏めの部分を引用させていただく。

「大韓山岳聯盟全羅南道聯盟コンガ遠征隊（隊長…金載明三十三歳）はコンガ山の北東稜ルートを経由し、一九九八年十一月十四日午後二時頃登頂に成功した。隊長他二名が頂上に立った。一九九六年に続き再挑戦により、遠征隊は北東稜の初登を記録した。コンガ山の第七登である。が、不幸にも下山途中に一名の隊員が七三〇<sup>ト</sup>の地点で北壁側に墜落死した。遠征隊は十月八日に韓国を出発し、海螺溝氷河側（東面）からアタック

クした。三五〇〇<sup>ト</sup>にBCを設営、四三〇〇、四九〇〇、五三〇〇、五八〇〇、六八〇〇<sup>ト</sup>と五つの前進キャンプを延ばして頂上攻撃を行った。風雪に立ち向かう非常に厳しい登攀だったようだ。日本にとって悲劇の山といわれたミニヤ・コンカにおける遭難は、すべて北東稜を目指した隊が引き起している。今後のミニヤ・コンカ主峰の未登ルートとしては、より困難な南稜と南西稜がクローズ・アップされてくるであろう。衛星峰にはまだ多くの魅力ある六〇〇〇<sup>ト</sup>峰が手付かずにある。主な未登のピークを北から南に並べる。

北部—グロスベナー 六三七六メートル

中部—Mt. エドガー 六六一八メートル（E—コンガ）

中部—ダドメイン 六三八〇メートル

中部—ロンジメイン 六二九四メートル

南部—龍山（朱山） 六六八四メートル

ニャンボ・コンカ 六一四四メートル

これらの中でもMt. エドガー（E—コンガ）が一番顕著なピークである。燕子溝の北、南門関溝の南のこの山は、かつての東チベット、今の四川省の康定と巴塘に在住して四半世紀にわたり中国内陸教会（China Inland Mission）の宣教師として伝導に携わってニュージーランド人、ヒューストン・エドガーに因んで名付けられた。極めて手ごわそうな雪と岩の鋭角的なピラミッドである（G4）。

## (七) 六〇七九メートル峰

ミニヤ・コンカの南に田湾河と環河を挟んで無名の六〇〇〇メートルの山塊がある。六〇七九メートル峰である。私は数年前からこのピークに注目してきたが、アプローチが容易にもかかわらず未だ踏査されていない。プロファイリングはわからない。四川省に残された数少ない六〇〇〇メートルを超える独立峰である。さらに南に、尼色峨と呼ばれる五五八四メートルの山塊が存在するようだが不詳である。

## 五 邛崃山山系

大渡河と岷江の分水嶺に位置する。盟主は四姑娘山である。

南側の四姑娘山とその周辺はトレッカーや観光客で賑わっているが、西側および北側の岩峰群はこれから開拓されるべき岩の殿堂である。四姑娘山の北側の未だ姿を見せない幻の五八九二メートル峰をはじめとして、選択に迷うほどたくさんの花崗岩の素晴らしい未踏の岩峰（五四〇〇〜五七〇〇メートル）が訪れを待っている（G5）。渓谷も美しい。登攀クローニクルを紹介しておく。四姑娘山の主峰（六二五〇メートル）は一九八一年に同志社隊により南面から東稜を経て初登頂された。同年、アメリカ隊が圧倒的な北壁に挑んだが、五三〇〇メートルのところまで敗退している。一九九二年に南壁が広島山の会によって初登された。一九九四年にはアメリカのクライマーがソロで南壁の別のラインを登っ

ている。

主峰以外のピークに挑戦してきたのはアメリカ隊だけである。わかる範囲でアメリカ隊の初登頂を列挙する。すべて天を突くチャレンジングな岩峰である。

一九八三年——セレスティアル・ピーク（五四一三メートル、チベット名ブニユー）

一九九四年——五四八四メートル峰および五三三八メートル峰

一九九六年——五六六六メートル峰

理県の北側には、五五二七メートルの最高峰に四つの五〇〇〇メートル峰と多くの湖がある雪隆包と呼ばれる山塊がある。いずれ探査してみたい。

## 六 岷山山系

岷江の東、四川盆地の北に位置する横断山脈の東縁である。

ユネスコの世界自然遺産に認定されている九寨溝と黃龍に近い主峰の雪宝頂（五五八八メートル）は何度も登られている。すでにポピュラーな山になっており、未踏を求める領域ではない。

以上、主な山系と未踏峰を概括的に紹介した。これら以外にも、羊拱山（五二七三メートル）など、五〇〇〇メートルを超えるマイナーな山群は数多くあるが、ここでは省略する。

## II 紀行—康南の知られざる山と谷

(二〇〇〇年五・六月)

「康南」とは聞き慣れない地名だが、旧東チベットのカム地方南部を土地の人たちはそう呼ぶ。チベット族カンバの生活圏であるチベットと四川の境界領域、「川辺地区」は一九二八年に西康省となった。しかし、一九四九年の新中国成立後は廃止され、金沙江以西の漢族の少ない地域は西蔵自治区の昌都地区となり、それ以东は四川省に編入された。これは清代の行政区画にほぼ復したことになる。康南は現在の四川省の西端、金沙江の東側の巴塘から理塘高原とその周辺の地域を指す。

私は目標を康南の未踏の山域に絞って検討し、対象を下記に絞った。今回も横断山脈研究会の永井剛(六十七歳)さんに同行いただいた。

(1) 巴塘の東、未登の六〇六〇峰—党結真拉山塊と四八〇〇峰の山上湖

(2) 川蔵公路の北、扎金甲博(五八一二峰)および夏塞(五八三三峰)の二つの山塊

### 一 近くて遠い山—党結真拉

党結真拉は一九九一年の十一月に日本大学北校友会(工学部山岳会)登山隊によって北面がチャレンジされたが、不成功

に終わっている。登山記録は『山岳年鑑'92』(山と溪谷社)にごく簡単に紹介されただけである。写真・地図がないのは惜しい。このとき、なぜか山名を間違えて央莫龍としている。央莫龍は山塊東南東の谷にある夏の放牧地の名称である。山名は党結真拉である。中国人民解放軍総参謀部測繪局の地形図(十万分の一)に党結真拉と表記されているし、土地のチベット族もそう呼んでいる。

何度も訪れた川蔵公路の要衝の街、巴塘から東に直線距離で僅か一五〜二〇\*の至近のところに位置するこの未登の六〇〇〇峰と海拔四八〇〇峰の高山湖は、私にとっては文字どおり「近くて遠い山」であった。

二〇〇〇年五月二十六日、上海經由成都入りした。旅行の段取りは四川探検旅游会社ですでに整えている。Eメールとインターネットを駆使して迅速なサービスを心がけている。料金は明朗会計で気持ちがいい。四川登山協会がいまだにEメールすらもっていないのとは対照的である。最近ではリバー・ラフティングのガイドとしてアメリカで知名度が高くなっている張兄弟の弟、張少宏と我々のガイド、レニー陳正林が迎えてくれる。

### 根拠地—党巴へ

五月二十七日、成都を出発、昨年十二月に開通した二郎山トンネルを通じて康定へ。



地に採りにいくので、ポーターの確保も難しい。

(3) 明日の朝、上の村に伝令をだし、馬十頭、馬方二人を用意する。党巴出発は明後日午前十一時とする。

(4) 郷政府側の案内兼調整役として共産党書記の江措さんが同行する。

書記の参加は、個人旅行者が身の安全をはかるためには大いに役立つ。九時半に党巴を辞して巴塘（二五六〇<sup>トイ</sup>）にくたる。金沙江（揚子江上流）はもう近い。

五月三十日、巴塘で休養。青空が広がり、気温も急上昇する。谷筋は暑い。三年ぶりにラマ僧院を訪れる。奥の院にタライ・ラマの写真が堂々と飾られている。

近くて遠い道—BCへ

五月三十一日、午前七時半、早めに巴塘を発つ。問題はあったが、馬方二人、馬九頭、ヤク一頭の編成で、十時半に党巴を出発することができた。党巴の河岸段丘から東にはいる谷の南側の尾根沿いにトレイルが上っている。この道は幾つかの村落を通り、BC予定地、さらに山上湖の北側を辿り央莫龍に続いている。地図のうえで確かめた今回の予定コースである。ところが、キャラバンは谷の北側を登りはじめた。不審に思ってレニーにただしたところ、書記はこちらのほうがよい道だという。二時間半の急登で蘇巴（三三〇〇<sup>トイ</sup>）という二十四戸ほどの村

に着き、馬方の家で昼食をとる。

どうしても釈然としないので、書記に地図を示してルートの確認を求めたところ、彼は間違いに気付いた。谷を挟んで南側の道を行くべきであった。こみ上げてくる怒りを抑えているうちに、目的地が遠ざかって行くような喪失感に襲われる。一時間半ほど経って、書記と馬方が相談した結果、遠回りだが巻き道を行って対岸の村に必ず今日じゅうに着くということになった。ここからは、馬七頭、ヤク二頭の構成で午後三時半に蘇巴を出発した。不安定なガレ場のトラパス、ゴルジェの横断、胸をつく急登の難所を経て八時半に対岸の沖壩（三七四〇<sup>トイ</sup>）に着いた。十戸ほどの落着いた村である。チベット族の農家に世話になる。

六月一日、晴、午前八時八度、清々しい朝だ。東にむかって美しい溪谷が緩やかに上り、やがて顕著な二つの大岩峰に阻まれ、源頭は右に折れて南に延びている。岩峰の向こう側に目的の高山湖、亞莫措根（四八〇〇<sup>トイ</sup>）があるはずだ。村のすこし先の対岸には見事な針葉樹林帯のなかに一八四〇年代に創建された桑登寺という立派な僧院がある。

午前十時、馬五頭、ポーター七人をいれて総勢十四人で出発。ポーターは村長から若い娘さんまで、老若男女が我々のために集められた。道は谷の左岸の針葉樹林帯を上る。石楠花がおりしも満開である。上るにしたがい、樹林はまばらになり牧草地



写真1 巴塘の東、党結真拉山塊の南側の高山湖、亞莫措根（4,800 m）。初夏にもかかわらず、まだ全面凍結している

に変わっていき、無人の放牧小屋が現れる。正面の岩峰と左に連なる岩稜が徐々に迫ってくる。その奥に雪峰が見え隠れする。天気は晴れたり曇ったりで、おおむね安定している。

午後二時半にベースキャンプ（BC）到着。大岩峰の下、谷を挟んで左岸の放牧小屋をベース・ハウスとし、二張りテントを設営する。海拔四四五〇の地点である。BCに到着くなり、馬方から新たな難問を突きつけられる。村の共同作業のため、明後日の朝帰らねばならないという。金は上積みするからなんとかしてくれと、書記を通して頼んだが殆ど効果はなかった。それでも、馬方と馬は明後日の夕方までにはBCにいてくれることになった。

#### 天上の世界へ

六月二日、晴ときどき曇り、午前七時半三度。朝になって晴れてきた。気温も下がった。午前八時半BCを出発。山上湖へのトレイルは、BCからいったん谷の流れを徒渉し、正面に圧倒的に迫る大岩峰（五一四八）の裾の灌木帯を左手にトラバースし、急なガレ場を左斜め上に一直線に上る。馬にしがみついて不安定なトレイルを上る。二頭のヤクが登ってゆく。道はいったん支尾根の平坦地へでて、湖の落ち口に向かって沢筋を辿る。雨期には泥濘になるところらしい。一時間ほどで平坦地（四六〇〇）に着き小休止。黄色いメコノプシスがたくさん咲いて

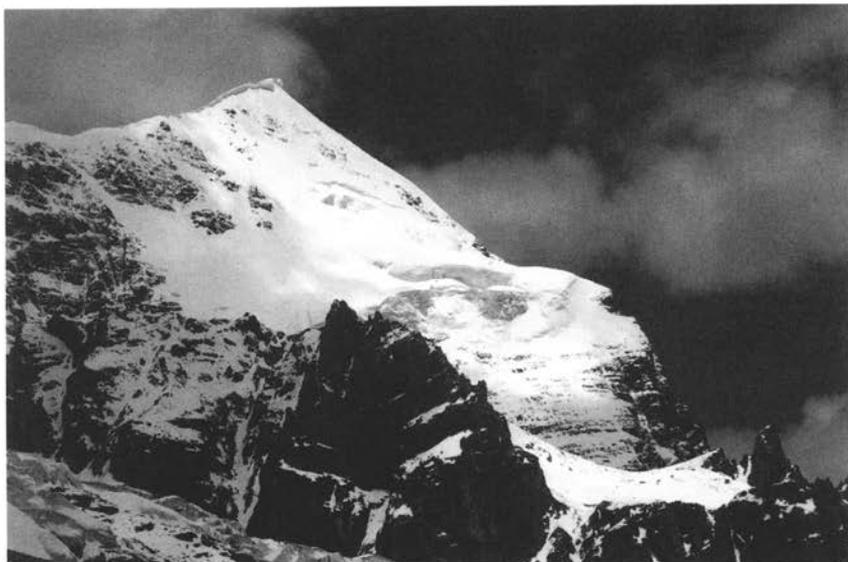


写真2 巴塘の東、党結真拉山塊の最高峰（6,060 m）。南西面の登攀はそう難しくはなさそうに見える。

いるが、「青いケシ」は見つからない。二十分ほど休んで、さらに岩のごろごろした湿地帯を直登して、十時半頃二つの大岩峰の間にてた。そこは尾根の鞍部ではなく、山上湖の唯一の落ち口になっているところであった。海拔四八〇〇<sup>1)</sup>、まったく想像もなかった景觀に文字どおり固唾を呑んだ。

私は鞍部の東に青い湖が展望されることを予期していた。が、目の前に現れたのは異様と言える光景であった。湖は全面凍結している銀白の世界である。人間や動物の気配はまったくない。完全な静寂があたりを支配している（写真真一）。一瞬、アンデス高地かアフリカの塩湖を連想した。すでに六月上旬の初夏である。一日歩いて下れば、金沙江の乾いた熱風が暑い。東チベットいや四川省カム地方の景觀の変化にあらためて感じいった。

人民解放軍の地図（十万分の一）に載っている高山湖の名称は「ヤモ亞莫措根」。「ヤモ亞莫」は湖の名前、「措措」は湖の普通名詞、「根根」は「大きい」を意味する、と冲壩村の村長が説明してくれた。ちなみに『山岳年鑑<sup>92</sup>』の日大隊の記録は、この湖のことや党結真拉の南面については一言も触れていない。

馬は湖の落ち口からBCに引き返す。我々は党結真拉の最高峰（六〇六〇<sup>1)</sup>）を写真に収めるために、央莫龍へむかう湖の北側のトレイルを、湖面を右下に見ながら東へ歩く。いきなり五〇〇〇<sup>1)</sup>に近い高所のトレックは高度順化していない身体にはきつい。十二時半、党結真拉三山（西から東へ五八三三、六〇

三三、六〇六〇(1) が視界にはいったところを最終到達点とした。六〇六〇(2)の峰の南西面の登攀は比較的容易にみえる(写真2)。書記の江措さんが感激している。神秘的な凍る湖はチベツト族の彼にとっても自然の驚異と映ったようだ。午後一時半、引きかえす。二度とふたたびこの凍結した山上湖を見ることはないだろう。人に知られたくない宝物のように思えてくる。五時BCに帰着。

六月三日、夜中に雨が降り、遠雷も聞こえた。午前六時半、三度。曇後晴。十時にBCを出発する。一応の成果を挙げたので、心地よい満足感に浸りながらゆっくり歩いて下る。途中、沖壩の村長さん宅で昼食、マントウを蒸し、家族で歓待してくれる。最短距離の尾根道を党巴へ下る。途中まで親切な村長が我々を送ってくれた。午後五時半党巴に帰着。第一ラウンドが無事終わったので、巴塘で一日休養する。

## 二 秘境の景勝地—措普<sup>ツプ</sup>牧場と扎金<sup>ジャリジン</sup>甲博<sup>ジャボ</sup>

### 新しい発見の可能性

川蔵公路の海子山峠のすぐ北側に聳える夏塞(五八三三(1))の北西に、措普牧場という広い谷と、最高峰五八一二(2)の扎金甲博と呼ばれる山塊があるらしい、という程度の知識しか私は持ちあわせていなかった。ところが、「灯台下暗し」である。通いなれた川蔵公路のすぐそばに隠れた楽園が存在していたの

である。それを教えてくれたのは党巴の郷長である。彼の情報は正確であった。

- (1) 措普牧場と周囲の自然環境は巴塘県のなかでも最も風光明媚である。
- (2) 広々とした美しい牧草地、雪山と岩峰、原生林、青い湖が見事に調和している。
- (3) 七百年の歴史をもつ紅帽派の僧院、措普寺付近の景色は九寨溝にも匹敵する。
- (4) 夏塞の北側にある銀鉱山のために車道もつくられ、アクセスが容易である。
- (5) 巴塘県政府は観光開発のための投資を前向きに検討している。

六月五日、晴。午前六時半十七度。爽やかな朝である。七時十五分巴塘出発。一日で措普牧場まで行くために早出する。川蔵公路を戻る。党巴を通過し十時十五分措拉<sup>ツラ</sup>区分岐点(三三〇〇(1))から北にむかう溪谷の左岸沿いに茶洛<sup>チャロ</sup>への道をゆく。措拉区には鉱石処理工場や水力発電所があり、区の中心は小さな街の体裁をととのえている。十一時に茶洛郷に着く。

郷の関係者に挨拶をする。ここからはレニーの仕事である。共産党書記の阿珠さんが快く対応してくれる。バター茶と昼食を振舞ってくれる。我々のトレッキングについても全面的に協力してくれた。郷政府から役人の李朝剛さんが同行してくれる



地図3 (この地図の位置・範囲はP. 118~119の全体地図を参照)

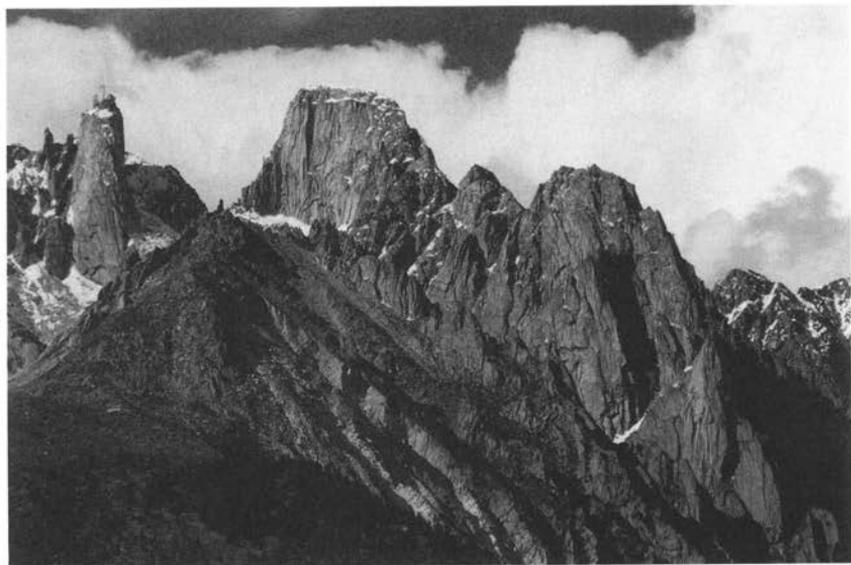


写真3 扎峰甲博山塊の花崗岩の岩峰群 (5,382 m)。パタゴニアを彷彿させるが、氷河がないのが惜しい。

ことになった。書記の阿珠さんの話は党巴の郷長が言ったことを裏付けてくれた。さらに幾つか、レニーを通して語ってもらった。

レニー「外国人が入ってきたことがあるでしょうか。自然環境はどうですか」

阿珠「外国人については、三年前に四人のイタリア人が銀鉱山を訪れました。それ以外は中村先生達がはじめてです。措普牧場周辺を巴塘県は自然保護区に指定しています。特に措普寺の下の湖は周囲を原生林に囲まれ、野生動物が豊富です。麝香鹿、鹿、熊などが生息しています。捕獲は厳禁です。措普寺のラマは湖の魚の餌付けをしています」

#### 措普牧場—ラマ僧院へ

十二時半茶浴を出発する。溪谷の左岸を上ってゆく。途中に温泉が湧いている。チベット族も温泉が好きらしい。二人の老ラマが露天風呂につかっている。谷の両岸は針葉樹と櫟の木で松茸がたくさん採れそうだ。前方と、左右の支谷の奥に五〇〇〇フィークラスの雪峰、岩峰が現れはじめる。右岸の村の中央に、措普寺と関係の深い立派な僧院がある。悪路が続くが、鉱石運搬用の道路である。補修が継続的に行われている。調子のよくないランドクルーザーがエンストをたびたび起こして苦勞する。



写真4 川蔵公路の北側、夏塞（5,833 m）の北面。措普根巴より望む。

午後には夏雲の通り雨もあるが、天気は安定している。茶落を発って三時間も過ぎたらうか、溪谷が終わり、谷は広大で平らな牧草地に融合する。海拔四〇五〇〜四一〇〇<sup>トク</sup>、西北西から東南東へ長さ約二〇\*、幅約二〜四\*の茫漠たる開けた草原が展開する。黒テントの遊牧民の世界である。その中心が措普牧場と名づけられている。

午後四時、車から降りて三六〇度見渡す。北側の正面にパタゴニアのフィッツ・ロイを彷彿とさせる花崗岩の岩峰群がひときわ注意を引く。四姑娘山の岩峰群にも共通することだが、氷河がないのが惜しい（写真3）。山裾に点在する放牧基地の数戸の村落からカンバたちが集まってくる。早速、阿珠さんが案内人の通称「馬のドクター」を探して連れてくる。

まだ陽が高いので、措普根巴（寺）へ向かう。草原を蛇行する川の流れを横切る。やがて、道路は神秘的な湖の左岸の原生林をゆく。午後五時半に措普寺に着いて今日の行程を終わる。

措普寺（四一二〇<sup>トク</sup>）は湖の奥の谷にある。名利に相応しい霧囲気の場所である。手前三方は針葉樹に囲まれ、裏手は岩壁・岩稜が屏風のように控えている。その間をルンゼ状の沢が上部の谷へ延びている。しかし、僧院の建物は、新しく建て替えられたためか、外装・内装ともけばけばしくてチベット僧院の趣に乏しい。僧院の前庭にテントを張る。

## 措普寺と活仏

六月六日、晴。午前六時半八度。日の出を待って裏手の斜面に登り、夏塞（五八三三<sup>尺</sup>）北面の姿を写真に撮る。急峻な氷雪の北壁を擁する、肩幅の広いどっしりした山容である（写真4）。登り甲斐のありそうな山だ。大勢のラマと若い修行僧が一日の仕事にてでゆく。葉草採り、薪集めなど、役割分担があるようだ。

我々は九時半にテントを出発する。僧院の裏手から花崗岩と灌木帯がモザイク状にせりあがる間を流れるルンゼを高巻きしながら谷の上部へ向かう。兩岸は手の切れそうな眩いばかりの花崗岩の岩壁である。クローワールにはまだ氷瀑が懸かっている。途中の平坦なところに小さな寺と修行僧のテントがある。数十人の若い男女が学習に勤しんでいる。表情は明るく屈託がない。南側に谷を俯瞰すれば、僧院と原生林に囲まれた濃紺の湖、そのさきの草原の向こう側に夏塞から西に連なる五五〇〇<sup>尺</sup>クラスの山々が望まれる。時空を超えて別世界に舞いこんだような錯覚にとらわれる。いたるところに「ジャングリ」に相応しい舞台がある。

地図によると、谷の上部には二つの湖があり、源頭には扎金山博山塊第二の高峰（五七二五<sup>尺</sup>）がある。湖まで登るつもりだったが、四五〇〇<sup>尺</sup>の地点から引き返した。下りでは若い尼さんの修行僧と一緒にいる。花を摘んで持ちかえるところだっ

た。僧院や自分たちの部屋に花を飾ることも日課のようだ。

午後三時、活仏とのインタビュを開始する。活仏が自ら指揮して僧院の中庭の正面に会談の場所をしつらえる。活仏の名前は根呷丁直。三十人ほどのラマ僧と修行僧が集まってくる。通訳はレニーと中国語のできるラマ僧がするが、意志の疎通は容易ではない。

まず、来訪の目的を告げ、寺の建設のお役にたてて欲しいと、二〇〇元（二六〇〇円）寄進してからインタビュにはいる。

活 仏 「日本は仏教徒の国と聞いているが、チベット仏教とどう違うでしょうか」

中 村 「基本的には違います。日本の仏教は大乗仏教、すなわち、インドからチベット、中国を経て伝播された北伝仏教だからです。（宗教談義には自信がないので、すかさず話題を変える）この僧院に外国人が来たことはあるでしょうか」

活 仏 「私がこの寺に来たのは三年前ですが、私の在任中には誰も訪れていません」

中 村 「措普寺の歴史を教えてください」

活 仏 「二六〇〇年頃に創建されました。七〇〇年以上の歴史のある由緒ある根巴です。宗派は、私の帽子が象徴している紅帽派です。四川省のなかでは徳格、甘孜は紅帽派で、理塘、木里は黄帽派です」

中村 「お寺の人員構成はどうでしょうか。また、修行僧はどんな勉強をしていますか」

活仏 「ラマは老若あわせて三十人、修行僧は男二百人、女人百人ほどです。初級は経典、歴史、チベット語を、上級に進むと医学、地理、天文などを勉強します」

記念撮影を終えて寺を辞した。五時半に措普牧場に着き、空家になっている「馬のドクター」の持家に泊まる。平屋でひと間のログハウス風の小屋だが快適である。近所から人が集まってくる。

#### 扎金甲博と措普の人々

第二ラウンドのフィールドである川藏公路北側の山々を整理しておこう。理塘高原の西縁に位置するが、行政区としては巴塘県に属する。措普牧場の長大な草原の谷をとりまく幾つかの山塊がその対象である。地図3をご覧いただきたい。北側の中心部が扎金甲博、東の端に岩と雪の独立峰的に際立った哈速(五五二四<sup>ハス</sup>)がある。西の端には白玉へ通じる交易路の峠の北に五五〇〇<sup>ク</sup>クラスの山塊が連なっている。谷の東南はすでに書いた夏塞山塊で、最高峰五八三三<sup>ク</sup>の東西にそれぞれ五六〇九<sup>ク</sup>、五五〇八<sup>ク</sup>のピークが連なる。扎金甲博の名称が載っている地図は甘孜藏族自治州地図(五十万分の一)のみである。しかし、この地図には標高は記されていない。

措普牧場のチベット族は、フィッツ・ロイのような岩峰(五三八二<sup>ク</sup>)を指して、ジャーシンチャム(Prince)あるいはジャーシンジャボ(King)と呼んでいるが、山名の特定には曖昧なところもある。私は五八一二<sup>ク</sup>を最高峰とする山塊全体を扎金甲博とするほうが当を得ていると思う。山塊の南西は顕著な岩峰が目につくが、氷雪は少なく氷河の発達は乏しい。最高峰の頂上付近のクローワールにかかる懸垂氷河の他には氷河は見られない。しかし北面は分らない。

六月七日、晴。措普牧場を西へ、扎金甲博の最高峰にできるだけ近づいたために、日帰りのトレッキングをする。午前九時、馬五頭、馬方二人が来て出発。今日も「馬のドクター」が案内してくれる。私は白馬にまたがり意気揚揚と牧草地を進む。広い草原の谷、ヤクと羊の群、放牧者の黒テント、チベット犬……東チベット高原の典型的な風物詩に心ゆくまで浸る。フィッツ・ロイの岩峰は遠ざかり、五七二五<sup>ク</sup>の雪の頂上が顔をだす。最高峰の南東面は幅広い急峻な側壁となり、数条のリッジとクローワールとなっている。が、山容は魅力がない(写真5)。

十一時に小休止、昼食。馬方たちは薪をひろい湯を沸かしバター茶をつくる。草地に大の字になって空を見上げ目をつぶる。至福のひと時である。馬方に起こされて我にかえる。馬上でうつらうつらしながら進む。と、突然身体が宙にはね上がった。馬が跳び上がった走りだしたためである。気がついたときには、



写真5 扎金甲博山塊の最高峰（5,812 m）の南面。措普牧場より望む

柔らかい草の上に尻から着地していた。岩や石の上に落ちなくて幸いだった。少し痛みは残ったが大過なかった。

午後一時すぎ、黒テントが集まっているところを今日の最終地点とする。テントの一つに入り、冬虫夏草の検分と値段の交渉をする。質の良いのは一匹三元が相場である。ついでに四方山話をしながら、彼らの習慣や生活ぶりを聞き出した。

- (1) 黒テントの住人は女性と子供だけである。彼女たちの仕事はヤクの世話（乳搾りも）、冬虫夏草採り、子供の面倒をみることである。一年中テントで暮らすことが多い。男は村の家に残っている。畑仕事や柵を作ったりする（男の貢献度は小さいようだ。「馬のドクター」は、子づくりが男の一番大きな仕事だ、と笑いながら言っていた）。
- (2) 平年の措普牧場は冬場でも積雪は五〇センチ程度で、草を食べられるので家畜は放牧される。去年は未曾有の大雪でたくさんの家畜が死んだ。政府はヘリコプターで食料や薬を届けてくれた。

午後二時半、黒テントの皆さんに別れを告げる。ほんとうに感じのいい人たちである。五時過ぎに小屋に帰る。夜は雨となり雷鳴が轟く。天気が変わりつつある。我々の旅は終わったことを告げているようだ。

六月八日、午前七時八度。雨は上がり、朝靄が美しい。岩峰群に去来する霧が夢幻的に変化し、墨絵の世界をつくりだして

いる。水汲みなど設営の手伝いに雇った青年の母親の話を聞かせてもらおう。チューシさん、五十七歳。彼女は十歳のとき重慶にゆき三年間勉強して戻ってきた。その頃、中国のチベット侵犯が始まり、この一帯も激しい戦場となった。一九五九年にここで父親と長兄が殺された。次兄は刀で腹をえぐられ重傷を負った。親戚の人たちもたくさん殺された。チューシさんはなんとか逃げのび、母親のところに身を寄せたという。中国による弾圧の記憶はカンパたちの脳裏から容易には消えないのであろう。当時アメリカCIA（中央情報局）はチベット支援のために、二百五十人のカンパを密かにアメリカに連れてゆき、コロラド州の秘密基地で訓練をし、ゲリラとしてチベットに送りこんだ。この工作は失敗に終わったらしい。二百五十人の中に措普の出身者もいたかもしれない、とチューシさんの話を聞きながら想像した。

「再見、措普のみなさん」。八時半、ドクター、馬方その他の大勢の村人に見送られて帰途についた。未踏の山との対面は刺激的であるが、人々との温かいふれあいは旅の成果をより豊かにしてくれる。この日は理塘に泊る。

六月九日、康定泊。キリスト教会を訪ねて、老宣教師とインタビューする。このことは別の機会に書きたい。六月十日、成都帰着。成都に着いてから成都を発つまで、十八日間の全ての費用はUSドルで一人二六〇〇ドルであった。

△おもな参考地図▽

- ・中国山峰図（一：一六、〇〇〇、〇〇〇）
- ・青藏高原山峰図（一：二、五〇〇、〇〇〇）
- ・甘孜藏族自治州地図（一：五〇〇、〇〇〇）
- ・康定県、理塘県、瀘定県地図（一：二〇〇、〇〇〇）
- ・中国人民解放軍総参謀部測絵局（一：一〇〇、〇〇〇）
- ・一同右（一：一五〇、〇〇〇）
- ・旧ソ連製の地形図（一：二〇〇、〇〇〇）
- ・一同右（一：一〇〇、〇〇〇）
- ・DMAAC（USA）—TPC（一：五〇〇、〇〇〇）

△記録概要▽

活動期間 二〇〇〇年五、六月

目的 ① 党結真拉山塊の偵察

② 扎金甲博、夏塞の偵察

隊の構成 中村 保・永井 剛

行動概要 五月二十七日 成都出発

六月一〜三日 党結真拉山塊

六月五〜八日 措普牧場周辺

六月十日 成都着

## チヨンムズターグの偵察

—西部クンルンの未知の領域を訪ねて

崑崙を親しみを込めて「コンロン」と読むのはどうやら日本人のみで、中国語の発音は Kun Lun であるし、欧米でも Kun Lun と表記するので、ここでも「クンルン」を使いたい。

クンルンが登山の対象になったのはごく新しいことで、それまで日本で「崑崙」といえば憧れの対象、未知の領域、漢詩的世界でしかなかった。一九八六年に東京農大隊が七一六七<sup>1)</sup>の最高峰に登る以前の、外国人が知り得た山の情報といえば A・スタインの一九〇一年と一九〇六年の探検報告だけだった。とはいえスタインのクンルンに関する報告は大変すぐれたもので、一九二三年にスタイン隊の測量成果を纏めインド測量局から発行された縮尺一インチ八マイル・マップのうちの、西部クンルンを範囲とする四枚は、クンルン山脈の基本地図として長らく

その地位を保った。

登山と平行するように始まったのが、中国科学院による一連の調査で、登山を司る登山協会とは別に多くの調査隊を未知の山岳地域に送り込んでいる。山岳地域に関する情報という点で、科学院のもたらす情報こそ価値がある。科学院隊がクンルンに初めて入ったのは農大登山隊の前年の一九八五年であり、「クンルン氷河の研究」をテーマにしていた。この隊も、一九八七年の大規模な本隊も日中合同調査隊で、経費の多くを日本側が負担する形で実現させたものである。

言うまでもないが、クンルンには人民解放軍によって測量された正確な地形図がある。空中写真撮影は一九六〇年代末から一九七〇年代初めに行われ、図幅は一九七〇年代中に出来てい

児 玉 茂

る。登山や調査時にはこの一〇万分の一の地形図が特別に利用できたが、一般には上述のスタン地図や、アメリカ製の航空図で憧れを膨らませる他はなかった。ソ連の崩壊後間もない一九九三年に、旧ソ連製のシリーズ地図群が放出され、秘密の扉が一気に開いたのは記憶に新しい。その後は中国内奥の山岳地域を訪れる登山者の誰もが、この地図を持参するようになった。人民解放軍の地形図もアメリカ製の航空図も、旧ソ連製の地図も並べてみると皆大変良く似ていて、異なるのは標高と地名、山名くらいのものである。情報源が同じでないとすれば、独自に資料を集めていたということになりそうだ。

クンルン山脈として知られる大山脈はタクラマカン沙漠の南縁、チベット高原北西縁を形作る延長二〇〇〇<sup>+</sup>の山の連なりを指すが、少なくとも西と東の二つに区分けする必要がある。

この中で標高が高く、氷河を多く残す山々の連なりが「西部クンルン」で、西クンルンの東半部を占め、この部分だけでも東西幅三五〇<sup>+</sup>に達する大きな山群である。クンルン山脈の西端はどこか、また東端はどこかを決めるのは地学的にも歴史名称的にも大変困難である。東クンルンにあるウルグムズターグは孤峰と言うのが相応しいし、西クンルン西端はサリコール山脈などと呼ばれ、そこにはムズターグアタやクングール山群が含まれる。ウルグムズターグの東で大山脈は東と南東方向の二手に分かれ、クンルン山脈という名称は南東方向の山脈の名とな

り、タクラマカン沙漠をなおも取り巻く山脈はアルティンターグ山脈となる。アルティンターグ山脈はクンルンではないのかと言え、クンルンでもあるというのだから解りにくい。この辺りの地質構造論についてはリヒトホフフェン以来の長い論議があり、単なる呼称の問題ではない。ただ登山という観点からは西部クンルンが断然その対象になる。

西部クンルンは、二本の東西方向に平行する山脈から成っていて、北側の、タクラマカン沙漠側は言わば前山に当たり、本山は南側・内側の山群である。かつて詩にうたわれた崑崙は麓から可視できる前山であり、スタインがクンルンの最高峰K5を特定したのも前山である。スタインは内側の本山に入り氷河の連なる山群をそこに見出したが、正確な地図にすることはついに出来なかった（地図1参照）。西部クンルンの最高峰七一九七六<sup>+</sup>が外国人の目に初めて触れ、写真に撮られたのは一九八五年が最初であろう。中印紛争あるいはチベット動乱の時期に新疆と西藏を結ぶ軍用道路が作られ、クンルン山脈の前山を勞せず越せるようになって初めて、本山の精度の高い地図化も可能になった。だからスタイン以後人民解放軍以外の者が本山を眺めたのも一九八五年が最初であろう。

西部クンルンの登山史は簡単で、しかも日本隊だけが入っていた。前山はアプローチの問題がないため小さな登山隊が既に数隊訪れ二峰が登頂された。本山は前記の軍用道路を使う事で、

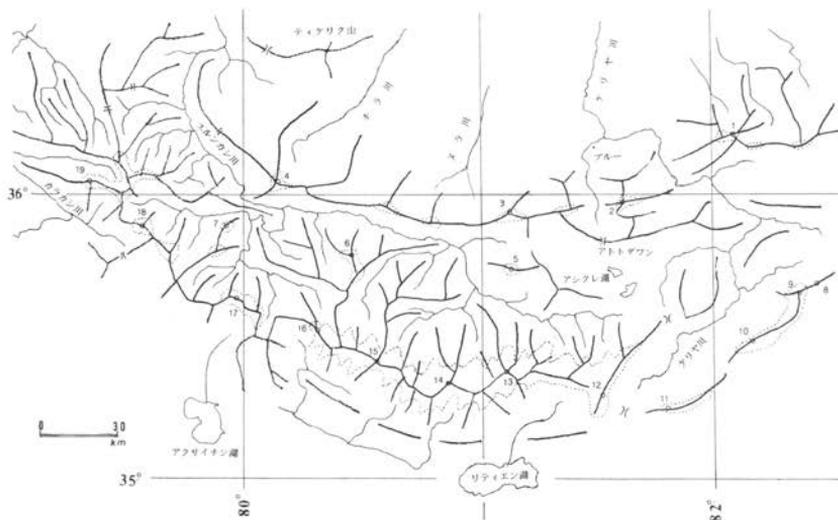
表1 西部クンルの高峰の位置と高度比較

探検資料 *AMS	および および	ONC ブースマン(山高-78年)	RGS 1/300 万地図	中国 青藏高原山峰図	旧ソ連 1/20万地図	H.A.J 登山小史
*6600m		1) 20990 (36.13/82.02)	6700	6697	6743	1987*
*6657		2) --- (35.59/81.33)	---	6488 Kataklik	6507	1994*
*6511		3) 22120 (35.57/81.08)	---	6544	6457	
23890ft K5. Huztagh	スタイン	4) 21380 (36.03/80.07) Huztagh	6710 Huztagh	6638 Huztagh	6643	1990
*6339		5) 21530 (35.45/81.10)	---	6350	6200	
---		6) 22880 (35.36/80.24)	---	6827	6765	
---		7) 21600 (35.53/79.58)	---	6386	6284	
*6352m Chong Huztagh	ヘディン	8) --- (35.50/82.28)	---	---	5629	
22700	デージー	9) 23160 (35.39/82.20) Cung Huztagh	6978 Qong Huztagh	6962 Qong Huztagh	6920 Qing Huztagh	
*6462		10) 21330 (35.30/82.11)	---	---	6478	
*6355		11) 20910 (35.15/81.48)	---	6372	6320	
22150	スタイン	12) 22590 (35.18/81.30)	---	---	6765	
---		13) 23060 (35.23/81.06)	---	6903	6840	1988
*7206		14) 23230 (35.19/80.56)	7120	7167	7160	1986
---		15) 21190 (35.25/80.34)	---	---	6525	
---		16) 21700 (35.39/80.16)	---	6564	6359	
23310 Cholpanglik Huztagh	スタイン	17) 21600 (35.35/79.57) Cholpanglik	---	6510	6642	1989?
21971 E58	ジョンソン	18) 22910 (35.51/79.35)	---	6744	6804	1865?
*6804		19) 21790 (36.02/79.18)	---	6222	6851	

\*西部クンル地域の登山が開放されたのは1985年頃からで、日本からのみ登山隊が9隊入っている。

\*登られている高峰は、①以前から注目されていた街道に近い山、②幹線道路および軍用道路が使える山に限られ、アプローチが長く日数を要する内陸部の高峰や、道路から遠い高峰は依然として未知・未踏である。

資料：上記5種の地図類の他、日本ヒマラヤ協会の雑誌「ヒマラヤ」1995年各号を参照した。



地図1

経費を別にすればアブローチ問題はやはりない。最高峰を含め三隊が南側から三つの山を登っている(表1参照)。

西部クンルンの東端に、標高は僅かに低いもののクンルン第二の高峰を含む高い山々と氷河を戴いた山群がある。この山群はスタインのルートからも遠く外れ、一九八五、八七年の調査隊の範囲外にあり、戦後は外国人が入ることはできなかった。古い文献をひも解いてみると、一八九三年に西部クンルンへ東から近付いたデュトルーイ・ド・ランの探検隊がある。報告書の地図帳を見ると、この山群の北端の雪山にチョン・ムズターグと名を与えている。チョンはトルコ語の大きいの謂であり、ムズターグは氷雪の山である。標高は記されていない。

次にこの地域にやって来たのはインド測量局のデージー大尉で、英領インドの背後の広大な未探検地域の地図化が彼に与えられた使命だった。一八九六年から一九九年までの丸四年間を北西チベット、ヤルカンド川上流域、西部クンルンで過ごしている。チョンムスターグ山群の麓にやって来たのは一八九八年夏のことで、この山群の南半のみを地図化し、さらに複数の山の標高を載せ、その内の最高点の標高を二二七〇〇<sup>1)</sup>としていたが、北半については山名の記載も地形表現もなされていない。

この山の名前と標高がほぼ特定されたのは、ヘディンの『南チベット』の地図帳においてであり、この時の標高は六九二〇<sup>2)</sup>である。ヘディンの一九六六年の浩漭な報告書の中の地名

索引の説明文には [Chong Muztagh mountain range] とあり、特定の山ではなく氷雪のある山群の呼称としているようだ。

\*

この山、チョンムズターグは西部クンルンを調べた者ならば誰もがマークする山かもしれない。例えば一九八二年の『アルパイン・ジャーナル』にブースマンという人が「チベットおよびその付近の山々」という記事を載せた(翌年の『山岳』に水野勉さんの翻訳を掲載)。この中にも Chong muztagh として特定され、二四〇〇<sup>3)</sup>よりも高いかもしれないと注目すべき山になっている。一九八七年にRGSが発行した三〇〇万分の1の地名索引付き地図『中央アジアの山々』には、本山から少し離れた位置に六九七八<sup>4)</sup>の Chong Muztagh が良く目立つ。

この山に最初の登山隊を送ったのは京都大学である。既に一九八五、八七年と本山調査隊に隊員を送り込んでおり、ケリヤ峠を車で越しさえすれば「チョン・ムズターグ」は登れるはずだった。八八年の登山隊は前二回と同じ新蔵公路をアブローチに選んだ。八五年の時も車でケリヤ峠越えを目指したが途中で引き返した経緯があり、登山隊はケリヤ峠を越えられる前提で計画が立てられた。しかし四輪駆動車で越えるルートを見付けする事ができず、やむなく他の山に転進した。京都大学は次の目標を雲南の未踏の雪山・梅里雪山に変えたので、その後この山を対象にする者はいなくなつた。

私たちがこの山に関心を持ち始めたのは一九九八年である。

なかなかメンバーが集まらず、動き出すのはさらに遅れた。南側からのアプローチは最初から取らず、別のルートを考えた。

まずはデージーやスタインが使ったブルー（ポルー）から、アトト峠（現在の中国名は硫黄峠）を越し、広大な盆地（そこにある一つの湖の名をとってアシクレ盆地と呼び慣わされている）を通って、ケリヤ川源流部に出るといふものである。幸いなことに一九八七年の調査隊には別動隊があり、都立大の岩田修二さんが別動隊の一人としてこのルートを辿ったことを知り、早速相談に伺った。調べてみるとその後このルートを辿った隊が二つあり、いずれも日本隊である。遡れば一九一一年に大谷探検隊の橋瑞超がアシクレ盆地に入っている。この橋については、深田久弥は次のように書いている。「橋の北部チベット入りは、わが国の中央アジア探検史で特筆すべき事跡であるが、彼の紀行『中亜探検』では、そのルートを地図上はつきりたどることはむずかしい。もし彼がもっと地理的に正確な記録を残したら、彼の功績はもっと世界的になっただろう」。

一九八七年の調査隊分隊は隊員だけで十人という規模で、ロバを使った輸送問題にも悩まされ、分水界の南側ケリヤ川に入り込むことは出来なかった。その後の日本隊もアシクレ盆地を往復しただけなので、ケリヤ川に入り込むことは一つの挑戦になった。とはいえこのルートはかつての交易ルートの一つで

あり、地元の人が利用しているに違いない。

一九九九年五月、木野広明、稲葉英樹の両君がブルー・ルートからチョンムズターグ峰へのアプローチを試みた。予想通りロバのキャラバン運営は難しく、悪天候や寒さにも悩まされたが、アシクレ盆地を通り、さらに二つの峠越えをしてケリヤ川源流部を下り立った。途中でチョンムズターグ峰が見える所はなく、ケリヤ川を下ってさらに接近する他はない。六月五日、きりぎりしに日程を延ばした最後の日に、あと二十五\*まで近づいて写真を撮った。しかし鮮明な写真とは言い難く、チョンムズターグの謎を解明するまでには至らなかった。

\*

チョンムズターグは近付き難い山だからこそ、今日まで探られず、登られずに残った稀有な山であるという位置付けが出来上がった。是非この山に登りたいという意思も明確になった。ブルー・ルートのキャラバンには難渋したが、季節が違えば状況は違うとは思えなかった。それは、八七年夏の状況を聞き知っていたからである。私たちは川の増水前に山の麓に立つ事を考え、五月、六月を登山期に設定した。なるほどこの季節なら、渡渉が出来ないために山を目の前にして戻らざるを得ないということがないと判断できたのは収穫であった。しかしそれにしてももっと別なルートはないものかと考え、思い付いたのがカラサイからのアプローチである。

西部クンルンの本山に入るには、前山をどこかで越さなければならぬ。ところが峠越えの可能な弛みは三カ所しかないことが判っている。一つがブルー・ルートのアトト峠・アシクレ盆地である。西にはホータンへの交易ルートが通るヒンドウタシ峠がある（ホータン最初のイギリス人となったジョンソンは、ヤクブ・ベグの反乱でこの峠が閉鎖されていたため、より本山に近い峠を苦勞して越えてホータン入りした。スタインはこの曖昧な記録を頼りに、ジョンソンの峠を見つけようと三度も挑戦したがついに越えられる峠を発見する事はできなかった）。三番目の峠はケリヤの東二〇〇\*にあり、地域の中心であるホータンから離れ過ぎていたために余り顧みられない事がないウレーシュ峠である。

かつてチョンムズターグの麓を通った二隊のうちのデージャーが、一八九八年にカラサイという寒村からこの峠を越えて麓に入っていた。記録は古いが、このルートが通れることだけは間違いないだろう。ニヤ（現在の中国名は民豊）まで西域南路の幹線道路を使うが、そこからは道路記号がないのでオフロード走行だろうか。カラサイまで行ければ何とかなりそうに思えた。地質構造図を何気なく見ると、私がこれから辿ろうとするルートには、中国全土の地質構造を探る上で第一級にランクされる重要な構造線が入っている事が解った。この構造線の名称は阿爾金断裂帯／アルティンターグ大断層である。丁度良い文献は

ないものかと捜したが、まだまだ充分に調査をされた形跡がないようだ。明治大学の小崎尚先生の所で中国科学院地理研究所編のランドサットの写真集を見せていただき確認したところ、これ以上ない明確な構造線―地形的には構造谷であることが解った。この構造線は北東―南西方向に直線的に延びており、これを辿れば自然にチョンムズターグの北麓まで行けそうに思える。

\*

九月一日、私は一人で東京を立った。テンシャン山脈東端近くのボグド・オーラ（ボゴタ山）以来十八年ぶりの中国・中央アジアの山であるが、この長い時間経過の中で、外国登山隊への受入れ態勢に大きな変化があった。北京の中国登山協会を通さずに直接現地に許可申請ができるようになったことが一番大きい。もしかしたら地元の人たちと隊が組めるのではないかと期待し、ウイグル語を少しばかり勉強した。大きな隊では融通がきかないと思うが、漢人抜きで隊を組みたいという希望はすんなり通った。通訳はドリクンさんというホータン師範学校の地理の先生で、私にとってこれ以上ないというパートナーを得た。コック兼食糧係として和田寶館の若いコック、アブラット君にも同行してもらうことにした。ホータンを出外れるともう聞く人もいない。全ては自分で判断し行動を決める事ができ、この上ない自由を得た感じがした。当面の問題はカラサイに行き着く事である。

デージーがカラサイにやって来たのは全くの偶然で、ブルー村からの入山を中国人官吏に拒まれたからだ。村とは別の権力機構が当時も働いていたのである。数日をかけて到着したカラサイは何もない貧しい村で、洞穴のような住居に人々は暮らしている、とデージーは本 (In Tibet and Chinese Turkestan) に書いている。現在のカラサイも何もない、人口五〇人程の寒村である。話を聞いてみると昨年までは六八〇人の人口があったが、すぐ下の村キャントカイに移住してしまったそうだ。この急激な変化は地方政府の政策転換によるもので、放牧中心の経済から農耕中心の経済へと村人の生活を変えてしまおうというこゝろらしい。そう言えば、途中に通過したどのオアシス村にも村の外縁に新しい規格住宅が建てられているのが目についた。カラサイに現在も住んでいる人々は、新しい暮らしを拒んでいる老人の家族ばかりで、村には活気がなかった。

到着した夜の交渉では奥に入ってもよいという者が数人あったが、翌朝になると行くという者は老人一人になっていた。キャントカイへ行けば人もいるので、希望者をそこで募ることにして一八\*を戻ることにした。昨夜聞いた話では、一九七八年に十五人がヤベルウングルに放牧に行ったが、七九年は草がなくて入らなかつた、というように村人の幾人かは私が向かおうとする谷筋へ入って放牧をしていることがはっきりした。谷に誰も入っていないどころか、村人の領域であるのかも知れない。

私はデージーの本の部分コピーと付図を携えてきた。赤線で示されたルートには現地名と標高が記してある。地名があるということは、地元の人が既にそこへ入っていて必要な場所を特定しているということに他ならない。あとはデージーの記した地名と記述の確認だけが残されたということか。

ボゴタ峰へ行った時、周囲の草地に暮らす人達はカザフ人だった。今接している人たちはウイグル語を話すウイグル人である。一般的、教科書的にウイグル人は農民あるいはオアシス住民で、カザフ人とキルギス人は山地に暮らしていて牧畜を生業にしているとされているが、ウイグル人にも牧民は沢山いる。ウイグル人という概念をカザフ人やキルギス人の場合より広く取る必要があるようだ。O・ラティモアの『アジアの焦点』の付図には、生活パターンを異にする二タイプのウイグル人(平地ウイグルと山地ウイグル)の分布が明確に示されているし、スタインの本の中にも「チベット人のようなウイグル」という表現があった。すなわち系統的かつ地域的差異の大きい人達を一括してウイグル人と呼んでいるということになる。ドリクンさんのウイグル語はホータン方言なのだが、カラサイではニア方言に変わっていた。同様に民族音楽テープを聞いても、ホータン、アクス、クチャでは全く違う音を出しているように、長い歴史の中でそれぞれの特徴が違いとなって現れている。

ホータンやニヤの町中ではカラサイという村の名さえ知る人

はいなかったが、カラサイに着いてみると町とは全く異質の情報に満ちていた。それは最も知りたい山の情報であり、村の人々の歴史である。ロバ雇用の交渉を行いながら、様々な人から沢山話を聞き出した。例えば「キルギス人の作った道」は次のような興味深い話である。キルギス人というのはキルギス軍のことで、一九三一年にカシュガルからホータン、ニヤを経てカラサイへ来て山へ入った。ラクダとウマに乗った千人の兵隊でクヤック一帯で三年間も駐屯していた。このことが思わぬ結果をカラサイにもたらした。この時トランコージャの峡谷部の道を広げたため、ボスタンからクヤックに楽に入れるようになった。奥の谷に入るルートはカラサイのウレーシュ峠に限られていたのに、この道が作られたお陰で、ボスタンが谷の入口の村としての地位を得て、カラサイが寂れてしまったのだ。一九三一年といえは新疆省の金樹仁政府のイスラーム政策に反抗して、回族の馬仲英が軍事活動をハミで開始した時である。キルギス軍は早速に西域南路を通じてクンルンの山中に進出し、出陣を待ったと思われる。キルギス軍の引き上げた一九三四年は、馬仲英がソビエトへ亡命し、鎮圧軍の司令官盛世才が政権を奪取した時である。

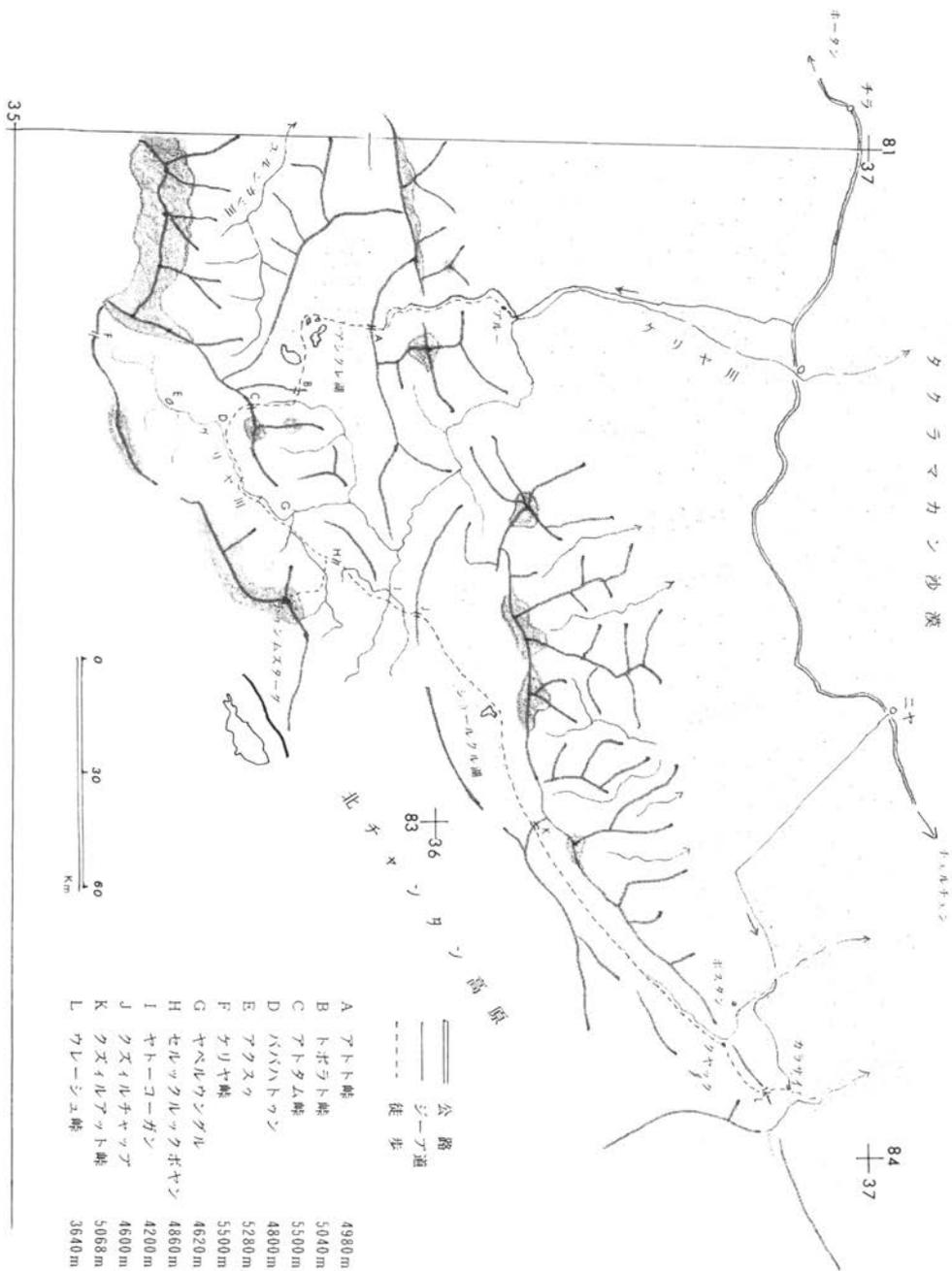
九月八日、私たち三人に、放牧経験のある村人三人とロバ十二頭でカラサイを出発した（地図2参照）。

カラ・サイとはウイグル語で「黒い川原」という意味で、サ

イは水流の少ない川も指す。カラサイ川を詰めて最初の峠（ウレーシュダワン）を越える。越えた先の谷は直線状の断層谷の北端部分にあたり、およそ三〇〇<sup>+</sup>。先まで明瞭な断層帯を追う事ができる。これから進もうというセレクトトゥズ川は約六<sup>+</sup>。幅の地溝となっていてクンルン山脈を北東―南西方向に切り裂いている。ちなみにセレクト・トゥズとは「黄色い真っ直ぐ」という意味である。デージーはセロック・トゥズと書いて「黄色い塩」の意味だと記しているが、塩はトウーズだ。

地図にあるクヤックは村ではなく放牧小屋のある場所すぎないが、ウレーシュダワンからの谷（バシム川）とクヤック川とセレクトトゥズ川が十字に合流して勢いを増し尾根を穿って深いゴルジュを作る。この川は北へ流れてトランコージャと名を変えやがてタクラマカン沙漠に消える。セレクトトゥズ川は両側の谷から押し出された膨大な堆積物で埋まっているが、一筋の流れが時に一〇〇<sup>+</sup>もの垂直の崖を作りその直下を流れている。谷底の幅は狭い所で五〇<sup>+</sup>程しかない。崩壊物の中を走っていると羽の赤が目立つ中型の鳥が土壁に止まった。アルプスの岩壁の鳥ウォールクリーパーがこんな所にいた。今にも崩れそうな高い崖を見上げながら谷底を渡渉を繰り返しながら進み、崖の崩れて低くなった部分から堆積物の上の面上る。

ヤーリックはイネ科の草の多い広大な放牧地だが、ヤーリックとは「高い崖の続く所」という意味で、谷側はどこも高い崖



地図2 西部タムルン チョムンヌターグへの2つのアローチ



セレックトゥズ川の川原。右手の谷が本流でしばらくは狭い谷底を行く

になっている。扇状地の組み合わせによる緩い傾斜地を奥へ進むと、谷筋に平行する堆積物が出てくる。これは氷河性のモレインに違いなく、扇状地堆積物と折り重なるようにして（形成時代の順序は明瞭）広い面を作るようになる。このあたりがキュツカンで植生も急に乏しくなる。放牧もここが限界で標高は四〇〇〇<sup>トール</sup>である。支流の谷では頭の白いジョウビタキ *Phoenicurus erythrogaster* を良く見た。雌雄が十羽前後で一緒に行動している。

キュツ・カンとは「青い鉈山」の意味で旧ソ連製の二〇万分の一地図にも鉈山記号が付いている。かつて金が採掘された。ちなみに西部クンルンは「玉」の産地として古くから有名である。玉というのは変成岩の一種で、カルシウム角閃石系の鉈物の針状結晶の集合体である。途中の川原や押し出して玉に成り掛かった（玉でない）石がいくらかでも転がっていた。緑泥片岩や蛇紋岩も多く、この山脈が容易ならぬ変動を受けて現在の姿になったことを物語る何よりの証拠である。この辺りから先は鳥も少なくなるが、目立つのはスノーフィンチ（ユキマシコ）の二百羽もの群である。一塊になって鳴きながら移動してゆく。クムブラックのクムは沙漠のこと、ブラックは泉である。日本人の沙漠のイメージは吹き寄せられた砂丘であろうか。日本に沙漠は存在しないので、漢語表現を使うのが良い。四〇〇〇<sup>トール</sup>を越えるこの辺りの沙漠は「高寒荒漠」という用語が使わ

れる。全体が砂地といえは砂地であるが、粒の大きさは様々で、一抱えもある岩、様々な色、形、大きさの礫があり、それぞれの構成物が一定の面積を持っており、全体はモザイク状に仕上がっている。驚くのは扇状に広がった川原が沢山あること。いつ洪水があったのか―昨日か百年前か―解らないが、そこはごろごろした石、岩で構成された正に川原である。全く潜らない表面が固まった砂地、どこから転がって来たのか、あるいはその場所が風化して今の大きさまで小さくなったのか、大岩が砂地に突き立っている。四六〇〇<sup>ト</sup>のシヨールクル盆地ではこのような荒漠がおよそ八〇〜九〇<sup>ト</sup>が続くが、おおむね平坦でロバは一気に四〇<sup>ト</sup>を歩く。日射しを遮るものは何もなく、強烈な太陽に照らされた側の気温は二五度を突破しポケットに入れたチヨコレートが解け出した。日陰側の気温は一〇度以下のままて金属ボタンが冷たいという極端な状態も経験した。

沙漠の泉はどこにでもあるわけではないが、「高寒荒漠」に入ってからクムアット、ガングットルック湖、クズイルアットダウン、シヨールクル湖、クズイルチャップの五カ所にあった。ちなみにクムブラックには泉がなく地名だけらしい。泉は氷河の山からの伏流水が表出したもので、小川になって流れているところもある。氷河というものも同じ原理で存在しているのだが、沙漠というものも一朝一夕には出来ない―雪が多量に降れば氷河がきたり、降水が全くなければ沙漠になるといふほど

単純ではない。沙漠に泉の水一滴が存在する背景には、少なくとも数十万年の年月がかかっているはずだ。

この「高寒荒漠」にはかなり大きな湖が二つある。降水が極端に少なく日射量の大きい場所にたとえ湖ができたとしても直ぐに干上がってしまうだろう。なぜこのような場所に湖が存在し得るのかといえば、氷河の山(Mountain)が存在するからである。両方とも氷河の融水で涵養されている。流入量と蒸発量の収支は二つの湖では違っていて、シヨールクル湖は濃度の高い塩湖であるが、ガングットルック湖は淡水に近い。そのためガングットルック湖にはたくさんのカモが羽を休めている。ガングットルックのガングットはアカツクシガモ *Tadorna ferruginea* のことで、「アカツクシガモが沢山いる湖」という意味である。シベリアからインド平原へと渡る時期(九月)に、かなりの大群がこの湖を中継地にするらしいが、今回は三百羽程が見られただけだ。

シヨール・クルとは文字通り塩類の湖という意味だが、湖北にすばらしい泉と黄緑色の淡水藻が揺れ動く小流がある。肉厚の赤い草や濃い緑色のクッション植物がどこよりも高密度に点在する。流れの脇にはミズゴケ様の草が生え、踏むとジュと水が染み出す。沙漠の中の目。湿った砂地には無数の足跡。

「高寒荒漠」に植物は乏しく、種数も十種以下かもしれない。目につく草本はキク科ヨモギ属 (*Artemisia*) ばかり、灌木と



塩に縁どられたショールクル湖。盆地の北側を限る山々の標高は約 6,300 m

いっても高さが一〇センチ程のトゲのある小灌木で、アカザ科 *Ceratoides* 属の *C. compacta* ばかりである。この小灌木はウイグル名でヤブカックという。ヤリック付近ではヤブカックは尾根状の高まりに群落を作っていたが、目立つ存在ではなかった。「高寒荒漠」にまで来ると、植生密度が圧倒的に低くなるとともに、もし植物が生えていたとしても、そのほとんど全部がヤブカックという場所が多い。高さは一〇センチだが根は深くて五〇センチ以上掘らねば抜けない。太い幹は直径五く六センチのものがある。ヤブカックは沙漠におけるほとんど唯一の木で、燃料として使え、しかも五〇〇センチを越える氷河の周辺部にまで生えている。この地域を旅する上でヤブカック程重要な植物は他にない。ロバはこのヤブカックも旨そうに食べる。

クズイルチャップ（「赤い回廊」という意味）の峠を越えるとケリヤ川流域に入る。ケリヤ川本流の最も北の三本に分かれた支流は、ヤトーコーガンで合流してすぐに深いゴルジュに流れ込む。ヤトーコーガンは広大な川原で殺伐とした所だが、周囲の斜面には植物が目立ってくる。少し登って行くと水流も現れたが、流れの縁は白く凍りついており、ロバたちは鼻先で氷を割って水を飲んだ。水流に近い川原の礫は剥離した板状のものが多く、それらがあまり明瞭ではないが規則的に並んでいる。モレインのような丸い低い盛り上がりもあって、ここは乾燥景観よりも周水河景観を示している。アザミ類など下部では見ら

れなかつた大きな草本が四、五種も生えており、それが一面に花を咲かせている場所さえあった。こういう場所には動物のフン（野生ヤクとチルールのフンが多い）が沢山落ちており、足跡も無数に付いている。

今までほとんど植物が生えていなかったのに、なぜここに来て急に植物が豊かになったのだろうか。標高は四七〇〇以上はあるし、乾燥条件も少しも変わらないのである。支流に入つて間もなく水流が現れたのが示唆的で、周囲を見回しても乾き切つた裸山ばかりで氷河の片鱗すら見当たらぬ。その裸山は表面に礫を載せていて傾斜の緩い山ばかりである。この礫は乾燥風化によるものではなく、周氷河作用によつてできた礫に違いない。すなわちこの辺りは過去に氷河（アイスキャップ）に覆われ、それが消えた後に形成された礫原なのである。そして現在も地中には永久凍土を残しているはずで、それが少しずつ解け出して水流を作っていると考えれば説明がつく。

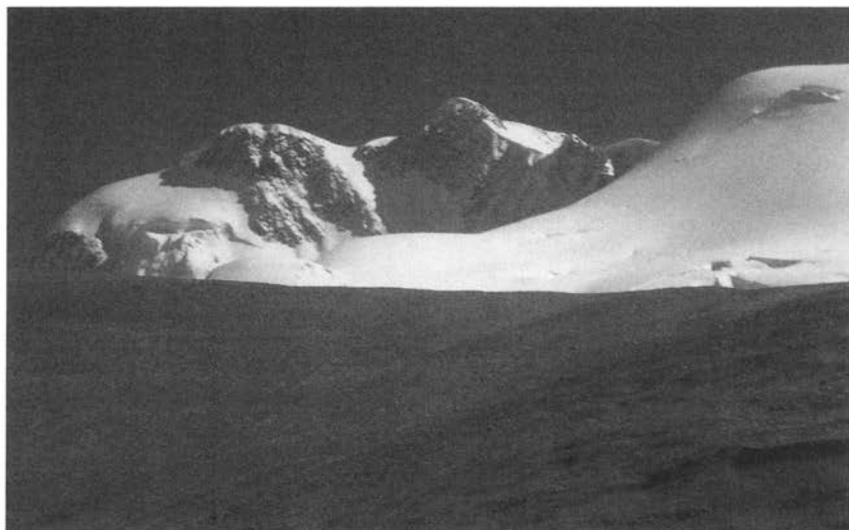
行く手になだらかな弧を描く峠が見え、何となくその辺りが薄黄色くなつてゐる。「黄色く、うなじのような緩い地形」を意味するセルクックボヤンは、イネ科の黄ばんだ草が密生した場所に付けられた名で、この草をクローラン（野ロバ）が好んで食べるといふ。草の目だつて増えたヤトローコーガンから先は、大型有蹄動物の恰好の生息地らしい。往きも帰りにも雄のチルローが堂々と走り去るのを見たし、小さな塩湖の対岸にはこ

ちらを警戒しながら五頭のクローランが草を食む姿があつた。ウサギはやたらにいて、それを捕食するキツネも見た。

デージーの本の中に出てくる地名の中で最も目的の山に近いのが「ヤペルウングル」なので、初めはベースキャンプをその辺りに想定した。五月の偵察の到達点をヤペルウングルとしたのはそのためである。しかし二〇万分の一地図を見ても、チョンムズターグ主峰の登山ルートは北面にあり、北側からアプローチした場合ヤペルウングルは遙か先にあつて意味のない場所である。カラサイで奥の情報を聞いた時、九日目がヤペルウングルで、八日目がベレクレク、七日目がヤトローコーガンであつた。デージーの地図に地名はないが、ベレクレクこそがチョンムズターグに一番近い場所であらうと想像できた。カラサイからは八日目でBC予定地に到着できることが解つた。

実際にはベレクレクの半日行程前の、セルクックボヤンの平坦な分水界を下り切つた川原、サルクンチがチョンムズターグに一番近い。サルクンチとは「風が吹く所」の意味で、夕方に到着したこともあつて強い風が吹きまくつてゐた。一帯はケリヤ川の広大な川原で、遙か南西のケリヤ峠から続く盆地になつてゐる。目の前には真っ白い巨大な山群チョンムズターグが一杯に広がつてゐた。

大きいという意味の Chong Muz は氷、tagh は山であつて、チョンムズターグという名の山はもともとない。かつてヤペル



チョンムズターグ主峰(6,962 m)のアップ。周囲の山々とは少し違った風格を持つ

ウングルやベレクで毎日この山を眺めていたロバ方たちも「チョンムズターグ」という言い方を今初めて聞いたそうだ。デュトルーイ・ド・ランが名付け、ヘディンの一〇〇万分の一地図や旧ソ連地図、人民解放軍の地図に山名が記されたことで固有名詞化したのであって、漠然と「大きな氷雪の山」で十分結構だ。もともと名前がないのに「ウズターグ」だの「ムーシュムズターグ」だの「チオン・ムズターグ」だのと、おかしげな命名がクンレンには多い。地元の人は氷雪の山は *Muztagh*、白くない山は *Tagh* と呼んで用が足りている。

グラビアで示した写真はセルックルックボヤン付近からのチョンムズターグ山群の全景である。六九六二メートルの最高峰は他の峰と違って頂上付近に岩場があり、雪の付き方も複雑で最も登攀価値が高そうだ。BCはサルクンチの川原に置き、ABCを氷河の下部のサイドモレインに置き（ここまではロバで荷上げができる）、二本ある尾根をそれぞれに登る。右の尾根は主峰と六七四〇メートルに繋がり、左の尾根は六九四二メートルの第二の高峰に繋がっている。ABCから前進キャンプをそれぞれ一つ出し、上部のルートを見定めて一気に攻撃をかけるという方法をとれば、六九〇〇メートル以上のピーク三つと六八四五メートル、六七四〇メートルに登れるだろう。

〔参考文献〕

- Dutreuil de Rhins J. L. 1897-99, Mission Scientifique dans  
La Haute Asie, 1890-95, 3 vols & 1 Atlas  
Deasy H. H. P. 1901, In Tibet and Chinese Turkestan  
Stein M. A. 1903, Sand-Buried Ruins of Khotan  
Stein M. A. 1908, Mountain Panoramas from The Pamir and  
Kuen Lun  
Stein M. A. 1912, Ruins of Desert Cathay 2 vols  
Hedin S. 1922, Southern Tibet, Vol. X Maps 1  
Stein M. A. 1923, Memoir on Maps of Chinese Turkestan  
and Kansu, from the surveys made during Sir Aurel  
Stein's Exploration 1900-1, 1906-8 & 1913-15  
Ambolt N. P. & Norin E. 1966, Reports from the Scientific  
Exploration to the N. W. Province of China vol. 47  
Higuchi K. & Xie Zichu ed. 1989, Glaciological Studies in  
West Kunlun Mountains 1987  
オーエン・ラティモア『アジアの焦点』 一九五一 弘文堂  
大谷探検隊『シルクロード探検』 一九六六 白水社  
中尾正義 崑崙の氷河偵察行 『AAACK時報』一〇号  
中島暢太郎 京都大学崑崙学術登山隊報告  
『AAACK時報』一一号

△記録概要▽

隊の名称	早稲田大学チヨンムスターク第二次偵察隊
期 間	一九九九年 九月一日～十月一日
隊の構成	隊員 児玉 茂、(通訳) ドリックン・アブリミテイ、 (ロック) アブラット、(ロバ使い) ヌリ・イブラ ヒム、ジウムラホン、レジエツプ・スケンデル
地 域	西部クンルン チヨンムスターク山群

## 日本山岳会 会員数と会費の推移

南川 金 一

日本山岳会は二〇〇五年に創立百周年を迎える。百年にわたる本会の歴史を語るに当たって、まずは基本的な事柄について項目毎に調査・整理しておくべきだと考えてとりまとめたのが本稿である。今回は会員数と会費の推移についてとりまとめた。会費は定款（または規則）上の規定に関わることであるから、会費の改訂は、即定款の改定であり、定款の変遷について述べるのが本来であるが、それでは会の基本的な性格の変遷にまで及ぶ大きな問題であるので、ここでは定款上の会員に関する規定の変遷と会費の額の推移をとりまとめるに止めた。

会員数の推移などという事柄は、会にとっては最も基本的な事であり、過去の会員名簿や印刷物を調べればすぐに判りそうなものであるが、現実には、会にも過去の会員名簿すらすべて

が揃っているという状況にはなく、予想外に困難な事柄であった。本会の歴史を調べるに当たって、『山岳』『会報』を除けば、史料は極めて乏しいからである。本論に入る前に、その事に少し触れておきたい。

『山岳』第二十五年第三号は「二十五周年回想録」を特集して、本会創立時の回想記を載せている。会設立の中心的役割を果たした小島烏水は「日本山岳会成立までに、同志の人々は何十回となく会合した。恐らく何百通という手紙のやり取りをやったろう。（中略）それが今日では貴重な史料になるべき筈で、私は珍藏のあまり、渡米の際も持ち回らずに宅に残して置いたのがいけなかったので、関東の大震災で（中略）家族は付近の竹藪に避難した。その留守に、避難者だか、暴徒だか知らない

が宅に闖入して（中略）書齋から幅物や書類を失敬して去った。その書類の中に右の山岳会関係の分、凡べてと、初代広重の肉筆日記があったことは、返す返すも残念である」「というわけで、私の手許の史料は殆ど散逸してしまっている。だから、私は記憶を辿ってこの文章を書く」と記している。このことが山岳会の歴史を知るに当たったの第一の不幸とすれば、その第二は、創立間もない一九〇九年から十年間にわたり事務所が置かれた横浜の高野鷹蔵宅が関東大震災により全焼してしまったことであろう。発起人の一人である高野鷹蔵の自宅にも貴重な資料が保管されていたはずである。その第三は、虎ノ門にあった戦前の山岳会ルームが一九四五年の東京大空襲により全焼してしまった事である。東京およびその周辺に在住した草創期の会員の中にも同様の被災者が少なからずあり、そうした事が本会に関する史料収集を難しいものに行っているとと思われる。

## 一、会員数の推移

山岳会は一九〇五（明治三十八）年十月発足した。旗上げはしたものの、「こういう会を作ったところで果たして会員が集まるかどうか、自分達以外に山に登る人が幾人いるか、雑誌を出すにしても売れるだろうか：」（『山岳』第四十四年、武田久吉「日本山岳会の創立と小島鳥水君」という時代であり、どのくらいの入会者があるものか見当もつかない状態でのスター

トであった。そこで、「七人の発起人は夫々の知己関係を訪ねて入会勧誘に全力を尽くした。高頭君は郷里の親戚配下の人達をそれこそ片端から入会させて会員獲得に奔走」（『山岳』第五十三年、武田久吉「高頭君の想い出」）するなど、発起人が努力して予想以上の入会者を見た。

本会の最初の会員名簿は『山岳』第二年第一号の付録として出されたもので、一九〇七（明治四十）年二月二十日現在で四百十八人の名前が載っている。発起人に次ぐ最初の入会者の高橋恒磨は一九〇五年十二月の入会であるから、その後約一年の間に約四百人の入会者があったことになる。その意味では前掲のような発起人の心配は杞憂だったといえる。

ただ、登山思想が普及していない時代であり、発起人らの勧誘を受けて入会しても、継続的に会員になるとは限らず、次年度以降の会費の納入率の低下という形ではね返ってきた。

その反省として、手当たり次第の入会勧誘を改め、一九一〇（明治四十三）年からは、入会に際して会員二名の紹介を要する、という紹介者制度が採られることになった。紹介者制度はその後三名の紹介を要するなど若干の変遷はあるが、この時の導入以来、今日まで続いている。この紹介者制度の意義について、『山岳』第十四年第二号の「会報」欄に「入会申込者及び紹介者に告ぐ」の一文が載っている。その精神は今日にもそのまま通用すると思われるので、ここに抄録しておく。

「本会に入会を申し込まれる場合には、必ず会員の紹介を要するものなれば、紹介者は入会希望者に対して本会の性質、入会手続き、入会後の権利義務につき充分の説明をなし、入会の手続きを誤り又は本会を了解せざるために生ずる入会後の失望及び義務違背等の起こらざらん様、予め注意し、入会者が万一義務を履行せず、又は会員たるの体面を傷つくるが如き行動を敢えてなしたる場合には、その紹介者が本会に対する責務を負うの覚悟あることを要す。(中略) 右は会員の選択を厳にし、単に流行の所謂登山熱に駆られて一時的好奇心より入会を欲するが如き、軽佻浮薄なる徒を避けんがためにして、敬虔真摯なる山岳愛好者の来り投ずるとあらば吾人は双手を展きてこれを歓迎するに吝ちかならざる也」。

山岳会にとって、紹介者制度導入の意味合いは大きなものがあった。入会者の定着率は格段に高まったからである。すなわち、一九二一(大正十)年の名簿に名前が載っている七百六十人について調べてみると、紹介者制度導入以前の入会者の定着率は三割程度であるのに対して、それ以降の入会者のそれは七〇八割にのぼっている。

曲折を経ながらも会員は漸増を続け、一九四一(昭和十六)年には千名を突破した。

戦後の日本山岳会はいち早く再建の取り組みが進められた。戦争により失われたものの回復とともに組織の拡大が進められ

た。一九四六年六月の常務理事会で、「本会の現状に鑑み、かつ又現下の情勢に応じ、会の機能を拡張し、全国的に会員を拡張し、全山岳人を包含せる組織の上に多角的なる活動を開始する」ことを決めた。この方針のもとに会員の拡張が行われ、その結果、入会者は大幅に増加した。

当時の会報と会員名簿によって確認できた戦後十年ほどの会員数の推移は、別表のように明確に把握できない年が多いばかりでなく、数字にバラツキが大きい。一九四六(昭和二十一)年は千二百四十人であるが※1にあるとおり二百三十一人が住所不明であり、実質の会員数は約千人である。これは戦争または戦災によるものである。会報No.150に一九五〇(昭和二十五年)年の会員数は二千七百十二人と記され、※2のような内訳が記載されている。この間に会員の人数は千五百人も増えたにもかかわらず、会費納入者は千七十人と、一九四六年とそれほど変わらなかったことを物語っている。そして戦後最初に出された一九五二年の会員名簿の掲載会員数は千百七十七人にすぎない。会報No.173には会員一九五四年は約二千六百七十人と記され、※3の内訳が付いている。会費を納入している会員数はむしろ減少している。一九五八年の戦後二回目の名簿では千二百二十二人であり、この十二、三年は会員数は増えたものの、その定着率は思いの外低かったといえる。

一九六〇年頃から着実な増加に転じ、一九六四年に二千人、

1964	昭和 39	2 104	3/31	1983	58	3 889	3/31
1965	40	2 097	3/31	1984	59	3 955	3/31
1966	41	2 427	3/31	1985	60	4 006	3/31
1967	42	2 440	3/31	1986	61	4 139	3/31
1968	43	2 571	3/31	1987	62	4 210	3/31
1969	44	2 751	3/31	1988	63	4 348	3/31
1970	45	2 989	3/31	1989	平成 1	4 447	3/31
1971	46	3 070	3/31	1990	2	4 508	3/31
1972	47	3 188	3/31	1991	3	4 677	3/31
1973	48	3 316	3/31	1992	4	4 917	3/31
1974	49	3 148	3/31	1993	5	5 007	3/31
1975	50	3 251	3/31	1994	6	5 264	3/31
1976	51	3 341	3/31	1995	7	5 424	3/31
1977	52	3 474	3/31	1996	8	5 499	3/31
1978	53	3 391	3/31	1997	9	5 665	3/31
1979	54	3 454	3/31	1998	10	5 737	3/31
1980	55	3 539	3/31	1999	11	5 865	3/31
1981	56	3 649	3/31	2000	12	5 915	3/31
1982	57	3 760	3/31				

※1 5月20日現在の会員総数1243人、うち231人は住所不明（会報 No. 135）

※2 1949年度まで会費納入1070人、その他連絡ある者540人、49年3月以降連絡なき者400人、通信に対し返信なき者500人、住所生死不明202人（会報 No. 150）

※3 連絡のとれる会員約920人、うち会費納入の可能な者740人。53年度に会費納入済み718人（会報 No. 173）

※4 30年史とは『山岳』第30年第2号「日本山岳会30年」（黒田孝雄）

※5 50年史とは『山岳』第51年「日本山岳会50年史」（沼井鉄太郎）

※6 1960年以降は事業報告書または総会資料による

日本山岳会会員数の推移					1935	10	872	12 月末
1906	明治 39				1936	11	898	12 月末
1907	40	418	2/20	名簿	1937	12	894	1937 年名簿
1908	41				1938	13	927	1938 年名簿
1909	42	575	2 月末	30 年史	1939	14	930	1939 年名簿
1910	43	607	1/27	名簿	1940	15		
1911	44	607	2/15	30 年史	1941	16	911	名簿
1912	45	595	4 月	30 年史				8/26 1 000 名突破
1913	大正 2	564	3 月	30 年史	1942	17	1 193	昭和 17 年名簿
1914	3	582	3 月	30 年史	1943	18	1 216	5/14 総会
1915	4	580	7/19	名簿	1944	19	1 276	5/14 総会
1916	5				1945	20		
1917	6				1946	21	1 243	※1
1918	7				1947	22		
1919	8				1948	23		
1920	9	749	3/1		1949	24		
1921	10	760	3/1	名簿	1950	25	2 712	3/22 ※2
1922	11				1951	26		
1923	12	717	10/15	名簿	1952	27	1 117	10 月末 52 年名簿
1924	13				1953	28		
1925	14				1954	29	2 670	※3
1926	15	698	11/1	名簿	1955	30	2 851	12/14 50 年史
1927	昭和 2				1956	31		
1928	3	694	11 月末	30 年史	1957	32		
1929	4	688	12 月末	30 年史	1958	33	1 222	3/31 1957 年名簿
1930	5	729	11 月末	30 年史	1959	34		
1931	6	792	11 月末	30 年史	1960	35	1 689	3/31
1932	7	772	12 月末	30 年史	1961	36	1 888	3/31
1933	8	809	12 月末	30 年史	1962	37	1 874	3/31
1934	9	819	12 月末	30 年史	1963	38	1 967	3/31

一九七一年に三千人、一九八五年に四千人、一九九三年に五千人の大台を突破して、現在は六千人を目前にしている。

## 二、会費と会員制度の推移

山岳会は一九〇五（明治三十八）年十月十四日、発起人七人によって発足した。『山岳』第一年第一号が翌年四月創刊され、同号で山岳会規則が公にされる。会員は正会員、特別会員、名誉会員の三種とし、会費は正会員は年一円、特別会員は年三円以上とされた。

会がスタートして四年目の一九一〇（明治四十三）年最初の会費の引き上げがなされた。正会員の会費を二円とし、新しく入会する会員から新たに入会金二円を徴収することとした。『山岳』第四年第二号にその理由が述べられている。その中で、従来の会費は雑誌（『山岳』）の発行のみを目安としたものだったが会費収入は雑誌の印刷代にも足りず、費用の不足は役員が補った、と述べている。そして、学術団体幾つかの例をあげ、従来の山岳会の会費はそれらの団体の雑誌購入費にしか当たらないことを説明している。すなわち、東京地学協会は年会費六円、「地学雑誌」代二・六五円、東京動物学会は年会費六円、「動物学雑誌」代三円、東京化学会は年会費五円、雑誌代四・二円、天文学会は年会費二円、雑誌代一・八円であると。それらと比べると、山岳会の新会費が『山岳』の配布を受けて二円という

のは、ずい分遠慮した額だといえる。二円に引き上げて、それで費用が十分に賄えたわけではなく、「役員が当分猶多くの費用を、これからも負担することは従来と変わらない」とも付記されている。そして、新たに設けられた入会金二円のうち、一円は会員章の鑄造費に当てられ、一円は基本金に組み入れて積み立てておく、と説明されている。

前記の役員の負担は、誰がどのような負担をしたのかは不明であるが、発起人の一人である高頭仁兵衛のことについては忘れてはならないであろう。山岳会設立に際し、山岳会に年間千円を向こう十年間提供することを約し、自分が万一の場合を考慮して山岳会を受け取り人とする一万円の保険に加入したというのである（詳しくは『山岳』第五十年、志村烏嶺「日本山岳会創立前後之見聞」参照）。千円といえは、当時の会費で千人分であり、今日の会費に置き換えれば千二百万円、十年間で一億二千万円という驚くべき額である。それが当初の約束どおり十年間で終わったのか、その後も続いたのか、それを明らかにする資料・証言は残念ながら見当たらない。

三回目の会費の改訂は一九二〇（大正九）年で、正会員の年会費は三円、入会金は五円となった。この時をもって特別会員が廃止された。廃止の理由は「従来特別会員に対しては何等特殊なる待遇をなさざる状態にありたり。会の本旨とする所よりしても、そのいたずらに名義のみを付与するの不当なるを思い、

これを廃止して、会員には何等の等差なき事とせり。且つ、従来特別会員の選挙によりたる幹事の選挙も、会員全般による事とせり」と説明されている（『山岳』第十三年第三号）。この時の改正で、それまでの会費が入会の月から起算されていたものを、一月からの起算とし、年度初めに前納すべきこととした。

さらに、この時の改訂では、それまでの会員章の付与を貸与に改め、翌年四月一日から新会員章（現在の正章）裏面に会員番号を刻して貸与された。本会の会員番号はこの時に始まるのであるが、会員番号については稿を改めて述べることとする。

また、一九二〇（大正九）年九月の評議員会において、規則の第十五条として、「正会員にして一時に金百円以上を納付したる者は、爾後会員籍を有する間会費納入の義務なきものとす」を新設した。

一九二八（昭和三）年からは正会員の会費が年六円となった。その理由を、「その後（大正九年の改正後）諸物価の騰貴はほとんど停止するところを知らずという有様であった上に、本会の基礎を鞏固にする為にはせひとも基金をつくらなければならぬ。『山岳』の如きも頁数が減じ写真版が少なくなるもの止むを得ない次第である。今後も充実した『山岳』を刊行しようとするれば、如何としても会費を値上げするより方法がない」と説明している（『山岳』第二十二年第一号）。

一九三〇（昭和五）年は、前年の十一月に集会室兼図書室が

開設されたのにつづいて、『会報』『山日記』が創刊された、日本山岳会の歴史上重要な年である。この年には会を財団法人化すべく協議が重ねられた。この財団法人化は会の基本財産が少なすぎるとして受理されず、その後取り下げられたが、財団法人を前提として会則の変更がなされた（従来「規則」がこの時点から「会則」となった）。新たに会長、副会長が置かれることになり、会員規定の中に初めて「終身会員」が設けられて、「一時金百円以上を納めたる者」とされた。

一九四一（昭和十六）年は本会が社団法人化された年で、法人化に伴い「会則」は「定款」となった。

戦後の最初の十年間ほどはインフレの昂進で会費は毎年のように改訂された。

会員制度において最初の変更は団体会員制度の創設である。一九四八（昭和二十三）年度の会員総会で決定された新定款では、「団体会員に関しては別にこれを定める」とし、「団体会員細則」が設けられた。団体会員は十名以上の会員を有する団体とされ、役員に選挙される資格はなく、総会における議決権は団体の代表者のみとされた。団体会員制度の目的を「日本全国の登山者を一応直接に間接にか日本山岳会に結びつけて強力な活動の基礎をつくる」というところに狙いがある」と説明している（会報No.141）。

一九四九（昭和二十四）年度の改訂からは通常会員、団体会

員の会費に東京と地方で格差を設けたり、東京周辺在住の会員には「ルーム維持費」という名目の会費も設けられてやや複雑になる。その推移は別表を見てもらうことにして、以下には特筆すべきことだけを記しておく。

一九五四年の定款改正で「賛助会員」が設けられた。この規定は現在の定款にもあるが、今日まで賛助会員の入会はない。

永年会員が定款上に規定されたのは一九六七（昭和四十二）年である。「本会入会後在籍五十年に達した者は、永年会員として会費を免除する」と規定されている。この制度のそもそものは、一九六五年十月十四日舉行された六十周年記念式典において「会に五十年以上在籍の会員には、表彰を行い特別のバッヂ（銀の輪をつたけもの）を作って贈呈したい。今後はこれを制度化し毎年次晩餐会の席上で表彰する」とこととした（会報No. 244）もので、六十周年記念式典では二十七氏に永年会員章が授与された。これを受けて一九六六年の総会で前記のとおり定款に盛り込まれた。

定款上の規定には属さないが、一九六五年六月の理事・評議員会で、退会者の復活措置が決定された。「積極的に会費未納により宙に浮いている人を会員として復活することに努力する」として、①旧番号による復活は一回に限る。二回目には会員番号は新しくなる、②今年度は昭和三十六年以前に会費未納により会員資格を喪失した人のみを対象とする、③復活会費は入会

金と同額の三千円とする、等謳われている（会報No. 241）。

なお、これに先立って、一九五三（昭和二十八）年に、五二年度以前に会費滞納のため資格喪失した会員の復活措置がとられている。「二十七年以前（含二十七年）の会費滞納のため会員たるの資格を喪失されたる古い会員の方々の中には本会と致しても永年の親交を断つ事は如何にも忍び難く、この際もし御本人の御希望あらば、金五百円を納入願って会員として復活していただく事。：ただしその際、会員番号は旧番号の判明せるもの以外は新番号による」とした（会報No. 170）。

いわゆる夫婦会員制度が決定をみたのは一九七六（昭和五十一年）年度総会で、七十七年度から実施された。定款上では普通会員の項の中に「但し、婚姻関係にある者が共に通常会員の場合に限り、申し出により、いずれか一名の年会費を減額し：」とし、第九条の但し書きの中に、この会費減額者は「山岳」および「会報」の配布を受けない旨、謳われた。

以上に会費と会員数の推移を見てきたが、何分にも膨大な『山岳』と『会報』のバックナンバーの隅の方に書かれている記事の中から材料を拾い出すという、時間と根気を要する仕事であり、重要な事柄の見落としや誤記・誤解も少なくないものと思われる。正確な「日本山岳会百年史」のために、大方の叱正を得てできるだけ完全なものにしていきたい。

規則・会則・定款における会員規定および会費の推移

		会員規定	会費
1906	明治 39	正会員 特別会員 名誉会員	会費年 1 円。 会費年 3 円以上。 役員の推薦による。会費は徴収せず。
1910	43	正会員 特別会員 名誉会員	会費年 2 円。入会金 2 円。 会費年 3 円以上。 役員の推薦による。
1920	大正 9	正会員 名誉会員	会費年 3 円。入会金 5 円。 幹事の推薦による。
1920	9		正会員にして一時に 100 円以上を納付した者は、爾後会費納付の義務なし。
1928	昭和 3	正会員 名誉会員	会費年 6 円。入会金 5 円。一時に 100 円以上を納入した者は爾後会費納付の義務なし。 幹事会の決議により推薦。
1931	6	通常会員 終身会員 名誉会員	会費年額 6 円。入会金 5 円。 一時金 100 円以上納めたる者。 役員会において推薦したる者。
1941	16	通常会員 終身会員 名誉会員	会費年額 6 円。入会金 5 円。 一時金 100 円以上、または入会後満 10 年以上の通常会員で一時金 60 円以上を納めたる者。 役員総会において推薦。
1943	18	通常会員 終身会員 名誉会員	会費年額 10 円。入会金 5 円。 一時金を 200 円以上、または入会後満 10 年以上の通常会員で 150 円以上納めたる者。 同前

1947	22	通常会員 終身会員 名誉会員	通常会費 30 円。入会金 20 円
1948	23	通常会員 団体会員 終身会員 名誉会員	年額 50 円。入会金 50 円 年額 50 円。入会金 100 円。団体会員登録手数料 1 名につき 10 円 制度は残しておくが新たな申し込みは当分受けない
1949	24	通常会員 団体会員 終身会員 名誉会員	東京支部在籍者 250 円。地方支部在籍者 150 円。入会金 300 円。 東京 250 円。地方 150 円。入会金 1 000 円。団体会員登録手数料 20 円。
1950	25	通常会員 団体会員 終身会員 名誉会員	300 円（全会員共通。基本額 150 円、山岳 150 円）。入会金 300 円。 300 円。入会金 1 000 円。団体会員登録手数料 20 円。
1952	27	通常会員 終身会員 名誉会員	基本会費 600 円。ルーム維持費 150 円（東京・千葉・埼玉・神奈川居住者）。入会金 500 円。
1953	28		52 年度以前に会費滞納のための資格喪失した会員の復活措置。500 円納入により。
1954	29	通常会員 終身会員 賛助会員 名誉会員	基本会費 800 円。ルーム維持費 200 円（東京・千葉・埼玉・神奈川在住者）。入会金 500 円。 入会金 500 円および終身会費（一時金）5 万円を納める個人または団体。 本会の事業を後援し、特別な寄与をなしたもので評議員会が推薦した個人または団体。 役員総会が推挙し適当期間適宜方法で本会内に公示し会員の総意を確かめた上決定。



		永年会員 名誉会員	同前 同前
1976	51	通常会員 終身会員 賛助会員 永年会員 名誉会員	東京・神奈川・埼玉・千葉在住者 8 500 円。その他国内在住者 6 000 円。国外 25 米ドル。入会金 1 万 5 000 円。 入会後 10 年以上在籍した個人会員。10 年以上 20 万円。20 年以上 15 万円。30 年以上 10 万円。40 年以上 5 万円。 同前 本会入会後在籍継続 50 年に達した者。 本会に対し特に功労のあった者のうちから、名誉会員推薦規定に基づき評議員会が推薦した者。
1977	52		通常会員で夫婦会員の場合、申し出に基づきいずれか 1 名の会費を減額。東京・神奈川・埼玉・千葉在住者は 5 500 円、その他国内在住者は 3 000 円に。減額者には「山岳」「山」の配布はなし。
1987	62	通常会員 終身会員 賛助会員 永年会員 名誉会員	東京・神奈川・埼玉・千葉在住者 1 万円。その他在住者 9 000 円。夫婦会員の減額会費は東京・神奈川・埼玉・千葉在住者 7 000 円、その他在住者 6 000 円。 入会後 10 年以上在籍した個人会員。10 年以上 25 万円。20 年以上 18 万円。30 年以上 12 万円。40 年以上 5 万円。 同前 同前 同前
1996	平成 8	通常会員 終身会員 賛助会員 永年会員 名誉会員	1 万 2 000 円。夫婦会員の減額会費は 8 000 円。入会金 2 万円。 入会後 10 年以上在籍の個人会員。10 年以上 30 万円。20 年以上 22 万円。30 年以上 15 万円。40 年以上 6 万円。 同前 同前 同前

## 図書紹介

田口二郎著

### 『山の生涯―来し方行く末』

茗溪堂 上巻 一九九九年九月刊

下巻 一九九九年十二月刊

A5判 上巻 三五七ページ 八五〇〇円

下巻 三四二ページ 八五〇〇円

田口二郎さんは甲南山岳会、東大山の会の先輩であり、日本山岳会の名誉会員である。一九一三年東京に生まれ、一九九八年五月二十三日八十五歳で死去した。その没後、ちょうど一年目に世に出たこの本は遺稿集のようで、そうではない。すでに十五年前から企画され、三人の編集者、池戸誠二郎（東大後輩）、平井吉夫（甲南後輩）大森久雄の諸氏の行き届いた配慮とご本人の意志が明確に伝わってくる誠に見事な著作集である。著者は一生を通じて遊戯としての登山の実行とその背景の思想の追求に飽くことがなかった。そして、生活の手段で

ある実業の面でも立派な業績を残して生涯を終えたが、その多彩な人世の中のそれぞれのステップで多くの文章を残した。それらが上下二巻八つの章別に配置されて、田口流の登山の考え方（あるいは近代登山の流れといった方がよいかも知れない）が語られ、それに関わった人物、書籍が論じられ、また論説、紀行なども加えられている。

以下、章立てと主要な項目を列挙してみる。

上巻 I 青春の山……甲南の山登り、春の穂高生活、春、北

岳へ塩見岳間の縦走

II スイス時代……回想のヤング尾根 スイスの氷と岩の話。エミール・シュトイリ。サミュエル・ブラヴァ

ンド。アイガー北壁五十年、スイス思索と読書の四年

―回想笠信太郎……

III 山の随想、豪胆な著者たち、「ばんだい号」寸感、終戦身辺 オデルさんの話、登山今昔、現代登山の源

流―ポニントンとメスナー、登山史上の稀有の人―ラ

インホルト・メスナー……

IV 山の本「人間ティルマン、その生涯」三田幸夫著

「わが登高行」近藤等著「アルプスの名峰」……

下巻 V マナスル、マナスルあの頃―パーソナル・ノーツ、

マナスルはヒマラヤに咲いた古典の花

VI 山の人たち、伊藤恩、高木正孝、楨有恒、三田幸夫、

渡辺漸、加藤喜一郎ら十九名の人達

Ⅶ異国にて、チトーのユーゴを行く、ラスキ教授の思  
い出、ダーズリン近況、新疆の旅、など

Ⅷ来し方行く末 ある商社員の思い出、昭和三十年代  
のインド、半盲となり幻覚を見る、一九八七年一月、  
五月

項目については私の勝手に列挙したに過ぎないが、これらの文章を読んで浮かび上がってくるのは田口さん独特の解釈、洞察力によって炙り出される日本の近代登山史である。克明な事蹟の積み重ねを好む人には非難されるかも知れないので外史とでもいっておこうか。そして、思想史の趣すら感じられるのである。

出版の時期は冒頭に記した通りであるが、大勢の読者の目に触れるのは今年二〇〇〇年になってからであろう。二十世紀の最後の年に田口流登山外史によって日本の登山の流れを振り返り、改めて自分自身の登山の中味を吟味してみるのも面白いのではないかと考えている。

ここまでを杓子定期的な図書紹介とすれば、後は蛇足かも知れない。私の心の中の田口二郎像を重ねて内容の説明をしたい。田口さんは甲南という七年制高等学校の山岳部の非常に特徴のある風土で育った人だ。三年制の旧制高等学校に対して、中学、高校一貫の七年制高等学校というものがあつた時代である。

私立では甲南、成蹊、武蔵、成城、学習院は宮内省管轄だから少し違ったかも知れないが、公立では浪速、富山、東京府立、国立では台北、東京などである。この七年という在学期間は山登りのような自然と接して経験を積み重ねて行くようなスポーツの育成にはよく合っていたのだろう。甲南、成蹊、学習院、浪速、富山、にはそれぞれ注目すべきクライマーが育つたのは故なしとしない。特に甲南はロックガーデンの麓といつてもよい岡本に校舎があり、岩登りは裏山の遊びでもあつたらうか。そして伊藤愿という稀代の達人に率いられ、田口兄弟が揃つた甲南山岳部は、関西流の「えーしのボンチ」の集まりとは一味も二味も違う集団であつたようだ。この辺のことが「甲南の山登り」以下の「春の穂高生活」、「北穂の飛騨側」などに記されているが、二十歳前の堂々たるパイオニアワークである。甲南、田口らによって命名された瀧谷の各尾根の名称は、東京の浦松さんには趣がないと貶されたようだが、早稲田の積雪期瀧谷の報告にも継承され、今日に到っていることは衆知の通りである。その後東大では高木正孝さんと出会い、後年のスイスでの活躍に継がれるのだが、それ迄には多少時間がかかる。卒業後、暫く日本鋼管に勤めたが、すぐ辞めて、英国を経てスイスに赴き、兄一郎と共に思う存分山登りをした。戦中戦後は朝日新聞記者となり、スイスで笠信太郎氏の手足となつて活躍した。敗戦後、辛酸をなめて帰国するのだが、この頃の活躍振りには山は

勿論のこと、新聞記者としても充実していて羨ましい限りとい

う他はない。山登りとマルクスボーイがあまり矛盾しない時代、向こう意気の強い青年アツカからキレ者の記者、あるいは紳士に変身しつつあった時代とでもいうべきであろうか。その頃のことII「スイス時代」の記事にあるが、下巻III、「異国にて」の中にある「チトーのユーゴをゆく」「ラスキ教授の思い出」などの労作もこの時代のものである。私が田口さんを知るのは帰国後の昭和二十四年晩春のことである。日本山岳会の会合が神田の交通博物館で行われたことがあった。私も山田二郎さんも入会直後で、この集会の隅に坐って田口さんのヴェッターホルン北壁初登攀の話聞いたのである。その内容はあまり覚えていないが、講演の直前、洗面所で顔を合わせた。田口さんがおもむろに鏡に向かって少し薄くなりかかった髪を撫でつけている姿を見て成程ヨーロッパ帰りの紳士とはこういうものかと感心した覚えがある。浦松さんはヴェッターホルンの西稜だが、田口さんは北壁、時間と技術の進歩を感じさせるものがあつた。登山記録としては「回想のヤング屋根」だけで、後はアマッターの死、エミール・シュトイリ、サミュエル・ブラヴァント、などグリンデルヴァルトの山案内人達を語りながら、日本人の活躍振りを説明しているものが主である。田口さんは戦時中に楽しい、よい山登りをしたことを書くことにこだわりがあつたようだ。田口さんの登山記録としては近藤等著「アルプスの名峰」

を見た方が早いという。

山のことではないが、「スイス、思索と読書の四年」回想笠信太郎も私の好きな文章である。マナスルのキャンプで二人だけでいた時、笠さんの処で豆腐作りに苦勞したことや、フォンデューの話から、ふと真面目な話に転換する姿を見ていただけにこの文章の意味が分かるような気がするのである。後年、山とは全く関係ない話をしながら、「ロベール・ギランの『ゾルゲの時代』」という本を読んだんだが、あの頃の日本は本当に面白い時代だったようだね」といわれてきょとんとした覚えがある。笠さんがかばった尾崎秀実とゾルゲ事件を田口さんがどう考えていたか分からないが、晩年日本鋼管の販売会社伊藤宗二商店の社長の席に坐っているながらも新聞記者の魂は失っていないかったようだ。

Ⅲ、山の随想についても興味あるものが多いが、現代登山の流れを説明してポニントンとメスナーを論じている部分は読みごたえがある。ポニントン『現代の冒険』の翻訳者として当然であろうが行き届いた考察が述べられている。

Ⅳ、山の本の項目の中では「人間テイルマン・その生涯」にひかれた。前の章の「オデルさんの話」にも関わるがシプトンとの交流を思い、名著『ネパールヒマラヤ』の最後の句、「力がおとろえる時、それを補ってますます勇気をふるわねばならぬ。このきびしい戒律が守られない時、人はヒマラヤ登山とい

う高い努力の舞台から身を引かねばならない」という言葉を見過して、昔この本を買った頃のことを思い出すのだ。

下巻、V マナスルの章は私も当事者の一人であったので懐かしい思いと、当時田口さんと新米であった自分との感じ方の違いを探るのに興味があった。そして、自分の知らなかった観察や考察を含めて後に書かれた「マナスルあの頃―パーソナル・ノート」には心打たれた。一次から三次まで、三回とも参加したのは辰沼、依田、加藤、村木の四人であったが、今残っているのは私だけになってしまった。登頂の後、加藤喜一郎は『山に憑かれた男』を著し、その中に田口さんのことを書いているし、私は三年後、ヒマルチュリの報告書の中にヒマルチュリを考えるきっかけのひとつであったエピソードとして田口像を記している。当時現場の師匠ともいべき田口さんに対する尊敬と憧れの思いは二人とも同じであったが、ここでは加藤の文章を紹介しておきたい。「田口さんは外人なみに英語が上手で能力のある人であった。親分はだの、からだのがっちりした人で物事の決断がはつきりと早かった。それが僕には魅力だった。性格的に似ていたせいか非常に親しみを覚えた。そして非常に可愛がってもらった。こちらが何か話しているとき独特なあいづちを『うんうん』とうっている。かざりけりない奔放などころが好きだった。アイスフォールの道つけは、田口さんの努力と功績だった」

ノースコルで私がへたばって、田口さんと六四〇〇のキャンプに下りて、テントにもぐり込んだ時のことである。寝袋やマットレスを整理していると、「おい村木、もっとアングネームにしようや」カトマンズ以来英語使いで終止していた田口さんにふとドイツ語が戻ってきた。スイスでの生活を思えば当然のことだが暫し呆然、それからスイスの話が聞き易くなった。しかし、山登りの話は少して、食い気と色気の話ばかりであった。

VI、山の人たち。田口さんの得意な人物論といってもよい。そして大部分が追悼に属するものであるため、面白いと同時にそこはかかない哀愁が漂っていて心に沁みるものがある。十九名のお名前を見ながら半数の方がマナスルに関係した人々であることに気が付き、田口さんの辿られた時の流れをふと思った。スイスで十年余も過ごされたが、その前の時代を含めて晩年までの間が自然につながっているのだ。これも山登りの効用というべきか、そして、松方三郎さんのお名前が無いことを不思議に思ったが、今はただ術もない。

最後の各務良幸さんのことは隠れたアルプスの先蹤者の紹介として重要である。次の「今西寿雄君の御霊に」の文について少し付け加えたい。今西さんのお別れの会の直前、会員である小原夫人と山口節子さんの手を経て私の許に届けられたものである。私は弔辞を読むことになっていたが、二つ読む訳にもい

かず、田口さんのお名前と一部を加えて弔辞とし、全文は奥様にお渡ししたものである。その時この文章を見て、叙事詩にも似た格調の高さに驚嘆した。後になって田口さんが鷗外の「扣鈕」という詩が好きだったという岡澤祐吉さんの話（『山』一九九九年十一月No.六五四号）を読んで納得するのである。後にはⅦ、「異国にて」、Ⅷ、「来し方 行く末」と続くのだが、ユーゴのこと、ラスキ教授については先に触れた。「ユーゴをゆく」はコソボ紛争、アルバニヤ、セルビア民族問題で今もゆれるバルカン半島の難しさを予見した見事な報告である。新疆の旅も棄て難い。オールドボーイの夢想と日本人の西域憧憬の不思議さをのべている。私も昔、シプトンとティルマンに仕えたガルトゥェン・ノルブから話を聞いてカシユガルという響きに一種のときめきを感じた覚えがある。しかし、この旅の成立については少し疑問が残った。

Ⅸ、「来し方」については実業の分野での田口さんの活躍振りが伺える。鉄鋼業の偶にいたのでこの頃の岸本商店の仕事がいかに程戦後の日本にとって大切なものであったかは私でも少しは分かる。そして脇村義太郎先生の思い出にある石炭もそれにつながるものであるが、この節では田口さんが急に温和な優等生に豹変されたように感じて戸惑うのである。しかし、この章の庄巻は「半盲となり幻覚を見る」の一節であろう。田口さんの探求心、好奇心、更にはチョッピリ好色心まで動員して己

の状態と周囲を観察する姿が生き生きと描かれている。仏説にいう五蘊を総動員してもなお、人間田口二郎は空を悟らずという処か、しかもこの後、『東西登山史考』を上梓されたことを思うと、死に到る迄精神活動の衰えなかった著者田口二郎を今更のように尊敬するのである。

「行く末」については観念であって具体的な文章は無くてもよいような気がする。これまでながながと私ごとに近いことばかり書いてまとまった図書紹介にはなっていないことは先にお断りした通りである。

この本は百名山を志す方々や、ガイドブックで健康登山を志す方々には無縁のものかも知れない。しかし、この文を書き終えた今、少しでも大勢の方々に読んでいただきたいという思いが募るのである。定価も高いがちょっと山行を減らせば勘定は合うし、体の健康とバランスをとって心の健康には充分役立つ筈である。そして、蛇足の蛇足になるが、村山雅美さんによる懇切に行き届いた「追悼田口二郎」（『山岳』第九十四年一九七ページ）を脇においてこの本に向かわれることをお奨めしたい。

（村木潤次郎）

オーレル・スタイン 著  
山口静一・五代 徹 訳

### 『砂に埋もれたホータンの廃墟』

白水社 一九九九年十一月刊

A五判 四八八ページ 七六〇〇円

中央アジアの偉大な探検家、オーレル・スタイン（一八六二～一九四三）の三次に渡る中央アジアの探検調査の足跡については、白水社版の『中央アジア踏査記』でその概要を知ることができる。一九〇〇年より始まり一九一六年に終わる第一次から第三次までの探検調査行をこの本で読むと、更に詳しく、それぞれの踏査行を知りたくなる。というのは、『中央アジア踏査記』では三次に渡る各探検調査のすべての行程が始まりから完結まで述べられているのではなく、各踏査行のハイライト部分がつなぎ合わされ、中央アジア全域について語られているからである。

本書『砂に埋もれたホータンの廃墟』では第一次踏査行の全行程、すなわちその準備段階も含め、一九〇〇年五月二十九日にスリナガルを出発し、一九〇一年七月二日ロンドンに到着するまでが、濃密かつ精緻を極めて述べられている。とはいえ、

本書は副題で「中国領トルキスタンの考古学者・地理学的探検旅行の私記」と記されているように、一般向けに書かれた紀行である。本書には原書巻末に折り込まれたカラー地図がそのままだらで復元され、添付されている。地図の西端のキリク峠より始まり、踏査行の東端になるエンデレの廃墟までの西域南道の詳細図は、本書を読み進むためには不可欠のものである。

スリナガルを出発したスタインは、われわれにもなじみの深い町や村や峠、ギルギット、フンザ、キリク峠などを越えてパミールに下降して行った。そしてタシクルガンからムズターグ・アタの西面に至る。「七月十七日、起きて見ればすばらしい快晴だった。一片の雲も、また霧もなく、巨大なムズターグ・アタの山塊がわがキャンプの上にそそり立っていた。その斜面登高計画の機会を私はずっと待っていたのだ」と書いている。彼はヤンプラク氷河を経て二万フィートあたりまで登ったが、ここから下山することになる。この地点からの景観は素晴らしいものであった。「北方にはいくつかの氷と雪の山塊が聳え立っている。地図によれば、これこそトランスアライ山脈のカウフマン山をはじめとする巨峰群に間違いない」。トランス・アライ山脈というのはザアライ山脈で、カウフマン山というのは最近日本からも多くの登山者が訪れているレーニン峰のことである。

スタインはゲズの隘路からカシユガルへ抜け、カシユガルで

は英国外交代表部のマッカートニー氏夫妻から「きわめてあたたかな歓迎を受けたのである」。

当時カシユガルは南下政策をとるロシアとインドより北上する英国との、いわゆるグレード・ゲームの接点であり、ロシア帝国からは総領事M・ペトロフスキーがこの地に派遣されていた。ロシア領事館は英国代表部の建物から半マイル程の距離にあり、スタインが「夕方涼んでいると、よくロシア民謡が風に乘ってときれときれに聞こえてきた」と書いている。

パミール越えの強行軍の疲れを癒し、中央アジアの猛暑をさけるため、八月一杯をマッカートニー氏邸で過ごし、九月四日ホータンに向け出発した。ヤルカンド、カルガリクを経て、十月十日ホータンに入った。

ホータンに着いて、まず着手したのは、古代遺跡の調査ではなく、南方に聳える峻険なコンロン山脈の踏査であった。われわれ山岳派にとっては、興味深い踏査行であるが、彼が主目的にしていた古写本の発見や古代遺跡の発掘に入る前に、なぜホータン南部の未知の山岳地形図を作成する為に危険極まりない山岳踏査をせねばならなかったのであろうか。

当時のインド総督ジョージ・カーゾンには自らもパミールを探索した探検家でもあり、スタインの今回の探検踏査の実現に大きな影響力を持った人物である。スタインのコンロンの未踏査地帯の調査には、カーゾンの何らかの示唆があったのだろう。

とはいえ、スタインは考古学者ではあるが、探検登山が大好きであった。既にムスタグ・アタに試登しているし、第三次の踏査行ではパミールの中央部を北から南へ、更に南から北へ縦断するという探検さえも行っている。コンロンの探検も彼にとっては興味のある踏査行であったのだろう。

本文のちょうど半分の二一九ページまでが、パミールやコンロンの探検行にあてられている。

ホータンに戻ったスタインは、いよいよタクラマカン砂漠の南辺の古代遺跡を求めて、無人の流砂の中へと分け入って行った。

「十二月七日の朝、霧がかかり肌を刺すような寒い日だったが、われわれは砂漠の冬の行進に出発した」。目指すは最初の発掘踏査地のダンガン・ウィリクである。酷暑の砂漠より厳冬の砂漠の方が発掘に向いているのである。目的地はホータンの北東四日の距離にあった。

ここの仏教寺院の遺跡では、化粧漆喰の小さな浮彫塑像が多数発見された。また、彩色された板絵や、ブラーフミー文字や中国語で書かれた多くの古文書や木簡が次々と出土した。それらの古文書の中に記載された日付で、これらが八世紀のものであることが判明した。この村が見捨てられたのは、恐らく「灌漑用水を十分に遠くまで運ぶことが困難になったため」であり、「水のない運河の跡や灌漑用堤防などはいまだに見分けること

ができて、ダンダン・ウィリクの土地が最終的に砂漠のなかに没入していったその過程をもっともよく説明していた」とスタインは書いています。

次にスタイン一行は、ケリヤを通過してニヤの廃墟に向かった。ニヤの遺跡からはカローシユテイー文字の書かれた木簡が続出した。これら木簡のあるものには封泥が刻印されていて、驚くべきことにその刻印は、ギリシャ神話に登場する女神パラス、アテネ像、エロス座像や立像、ヘラクレス像などであり、古代ギリシャの文化が、西域南道の村々にまで及んでいたことを証明していた。

次に向かったのは、ニヤ遺跡の更に東にあるエンデレの廃墟である。この廃墟に行くには一度ケリヤに帰り、西域南道に沿ってチェルチェンに向かって東行し、エンデレ河に出て、この河に沿って北へ向かって砂漠の中へ入って行くのが常道であったが、スタインは砂漠を西から東へ横断する直線ルートをとった。スタインが考古学者のみに留まらず、探検家としても卓越した力を示した一例であろう。エンデレではサンスクリット語で書かれた紙の文書、ブラーフミー文字で書かれた紙の巻き物、そして特に重要なことは、チベット語で書かれた仏教教典が得られたことである。これは、「チベット文書のうち今までに知られている最古の標本」であった。

その後もスタインはケリヤ上流にあるカラドゥン遺跡の探査

などを行い、四月十九日ホータンへの帰途についたが、スタインは「砂漠の調査が完了した」ことに対し大いなる満足感に浸ったのであった。しかしながら、頑強なスタインも冬の砂漠に晒され、ひどい風邪をひき、肺炎にまでなりかかったのであった。

五月一日、すべての収集品をラクダやポニーに積み込み、ホータンからカシユガルに向かって出発した。カシユガルでは「約八ヶ月ぶりにマカートニー氏のチャイニ・バーク（中国風庭園）であたたかい歓迎を受けることになった。ここで再梱包された古代遺物はすべて十二個の大きな箱に納められ、ロシア領事館の税関に差し出された。

インドからカシユガルに入って来た時は、カシユガル駐在ロシア総領事ベトロフスキーには会うこともなかった。しかし、帰路は同氏の親切な助力によって、ロシア領西トルキスタン經由で帰国する準備を滞りなく行うことができた。ベトロフスキーは東トルキスタンの歴史と古代遺物の研究に情熱を傾けた人で、スタインはロシア領事館を訪れ何度も有益な会談を行った。スタインはカシユガルからアライ山脈を越え、口領フェルガーナ盆地のオーシに出た。

このオーシの町は今では登山者達がパミールに向かう中継点になっている。ここから飛行機かバスでアライ谷のドラウト・クルガン經由でレーニン峰のBCに入るのである。

帰途スタインは中央アジアの町マルギランとサマルカンドに立ち寄るが、ここでそれぞれの町の知事であるチャイコフスキー将軍とメディンスキー将軍に親切に処遇され、それぞれの博物館に収蔵されている古代遺物を調査する特別な機会を与えられた。その後、スタインは汽車でカスピ海東岸のクラスノヴォツクまで行き、カスピ海を汽船で渡り、石油の町バクーに出た。バクーからは汽車で南ロシア平原を北上し、チェコのクラコフ、ベルリンを経由して、ついに一九〇一年七月二日ロンドンに帰還した。

驚くべきことに、砂漠の砂の中から掘り出した古物類や八百枚余りのガラス版写真はこの長途の旅でも損傷を受けなかったという。

本書の冒頭には「やさしい心づかいを筆者に与えつつこの世を去った、わが兄を記念して、このわが旅行記は、まず彼のために書かれたものであることを、絶ゆることなき愛と悲しみの心をもってここにします」と記されている。十九歳半上の兄エルスストは父親代わりにオーレル・スタインの面倒を見ていたが、彼の第一次踏査が終了した二年後の一九〇三年に亡くなったのである。

(田村 俊介)

江本嘉伸 著

『能海寛のうみゆたか チベットに消えた旅人』

求龍堂 一九九九年六月刊

四六判 三二二ページ 二〇〇〇円

高山龍三 著

『河口慧海—人と旅と業績—』

大明堂 一九九九年七月刊

A五判 二二二ページ 二八〇〇円

十九世紀から二十世紀初頭にかけて、嚴重な鎖国をしくチベットに入国を競った求道僧たちの旅語りのなかでは河口慧海かわらゑの『チベット旅行記』が人口に膾炙されている。

海外旅行とはいえ、船と徒歩が旅の主体の時代に「仏教の原典を求める一心」で、あらゆる困難を次々と克服していくスリリングな旅を口述筆記したという平易な文章は、当時普通だった「候文もうごぶん」のどっつき難さもなく実に楽しく読むことができる。未知の領域であったチベットの踏査記録は英訳出版もなされたことから世界中の注目を集め、仏典を求める河口の本来の目

的よりも、その過程である「ネパール・チベット探検」の分野で世界的に高い評価が定着している。従って、この旅行記をベースとした地域研究や行程の検証・民俗学・動植物学等、宗教上以外の研究・出版も盛んであり、ヒマラヤを目指す登山家・探検家のバイブル的存在としての価値は今も変わっていない。

一方で同じ時代にチベットを目指した人々のなかには、初志を貫徹できずに撤退したり、そのまま消息を絶ってしまった旅人も少なからずあったであろうことは想像に難くない。

能海寛も帰還を果たせなかった求道僧のひとりである。

少年の頃から旅好きで向学心に燃え、几帳面な性格であったという能海の遺稿集は『能海寛遺稿』として、その十七回忌に相当する大正六年（一九一七年）に発刊された。その後一九九八年に江本氏の解説つきで復刊され、続いて標記の研究・解説書が一年後に刊行されたという経過を辿っている。

今回はほぼ同時期に、高山龍三氏の河口慧海研究の書も刊行されたので二つの労作を対比しながら読ませていただいた。

まずは各々の内容の一端を紹介してみよう。

『能海寛 チベットに消えた旅人』

能海は明治元年（一八六八年）島根県にある真宗大谷派の寺家に生まれ、十一歳で得度し僧となった。十九歳から京都で英語を学び、二十二歳で東京の哲学館（現、東洋大学）に入って梵学者南条文雄と出会い梵語（サンスクリット語）を学ぶ。

南条は英国のオックスフォード大学に留学時、比較宗教学を講じていたマックス・ミュラーから「チベットにはインドで廃れてしまった仏教の原典がある。仏教を理解するためにはチベットにいくべき……」と、入蔵を強く勧められたが果たせず、その使命を若く優秀な教え子に託したのである。

能海は二十六歳の時「西藏探検の必要」という決意宣言を雑誌に発表し、その六年後の一八九八年十一月に神戸を出航する。帰らなかった旅人の記録は旅先からの手紙や残っている日記等が重要な資料となる。本書ではこれらの他に一世紀前の新聞等を詳しく対比・解析・検証・集約して多くの謎を解明しながら、「能海の生い立ち／東西本願寺／南条とマックス・ミュラー／反省会雑誌（中央公論）／入蔵宣言／河口と能海／結婚と出立／入蔵を競う四人／寺本婉雅／チベットに立つ／それぞれの一九〇〇年正月／義和団事変とチベット大蔵経／運命の雲南／能海ミステリーを追って／参考文献／年表／人名索引」、等々に組み立てている。特に「能海の最期」に関する情報が一九二三年の仏教専門紙にあることを突き止め、現地検証等を経て「一世紀前、日本人で初のチベット入り能海寛の『最期の地』確認」という見出しで、読売新聞編集委員でもある著者によって報道されたのである。消息不明となった一九〇一年四月から、実に九十八年も後の一九九九年二月一日のことであった。

〔著者・江本嘉伸氏の言葉から〕

「私たちは帰ってきた旅人の言葉で物事を理解する。しかし、帰れなかった人には、必ず伝えたかった言葉があるはずだ。その旅人の心をできればいまによみがえらせたいたい。」

『河口慧海―人と旅と業績』

河口は能海より二歳年上で、慶応二年（一八六六年）に大阪の樽桶製造業の家に生まれ、家業を手伝いながら（親の嫌う）勉強に打ち込んだ。十五歳の時『釈迦一代記』という伝記を読んで発心、酒と女色を絶ち「非時食戒」つまり、精進料理を一日に朝・昼・二食のみという戒律を實行し、ヒマラヤ越えの旅行中や僧籍を離れた時期を含め、八十歳で亡くなるまで厳格に守り通したという、並外れて強靱な精神と体力の持ち主である（高野山等での修行時ならともかく、これらの戒律を日常守っているお坊さんは一体何パーセントいるだろうか？）。

二十三歳で上京して哲学館に入學、前記の梵学者南条文雄の薫陶を受けているが、能海との接点は明確ではないとのこと。本書は河口の多くの著書や新聞・講演録等の膨大な資料から検索し独自の考察を加えたもので、その内容は「河口の旅と生涯／河口とネパール／日本人初のネパール訪問と大王に献上した日本の經典の現地確認記／河口のチベット観／グライ、パンチェン兩ラマとの出会い／英訳本を含む旅行記の成立過程／外国文献にみる河口／日本人の河口評価と師や弟子等との関係／河口のもたらした思想や文獻や請來品／著作や論考のリスト／

年譜・索引」等々、河口の人となりや時代背景・他の史実との関連等、裏話を聞くような内容も多く興味を尽きない。

〔著者・高山龍三氏の言葉から〕

「慧海のもっとも重要な点は、宗教者としての一生であろう。排仏棄釈、仏教の衰退を憂えた慧海は、異境に仏教の原典を求め、既成宗派を越えて在家仏教さらに正真仏教を提唱し、釈迦への帰依を説き実践した。紆余曲折の生涯もその一点に収斂する」

両書から、能海と河口の違いについて注目してみよう。

当時の日本は、欧米の列強に伍して明治の建國をリードしてきた志士達の旺盛な知識欲を、主として欧米留学や他の国々の旅行・探検等によって吸収・消化してきた。

一方で、明治維新の王政復古による神仏分離令を突き付けられた仏教界は、生き残り策としての構造改革を迫られていた。このため仏教の原点を見つめなおす気風が高まり、中国語訳の經典しかない現状とその翻訳の不整合を憂い、梵語の原典を得ることによって仏教の神髓を直接学ぶべく、鎖国のチベットをめざした二人の発心にはその大義名分も情熱も大差がない。

しかし、結果的に失敗と成功を分けてしまったのは、ラサをめざす旅の方法論であり、二人の旅行内容を対比すればその違いが成否の差として見えてくるのではないだろうか。

〔遠征の形態〕

能海は宗派代表としての、今という海外出張業務として合法的な入蔵をめざしている。これに対し、河口の場合は宗派や僧籍を離れ、資金も友人から調達する等、全て自らの判断と責任で行動できる様に段取りしており、旅先での変更や決断が自在である。また、僧としての説教や医学知識を生かした治療等による喜捨（料金ではなく）で収入を得ながらの旅は（現地民を味方にする）僧ならではの巧みで合理的な旅の実践といえる。

#### 〔語学学習〕

渡航前の学習は両者怠りないが、河口はネパール語・チベット語を子供達からの俗語や方言等を含め、旅の途次であるインドやネパールで三年がかりで吸収につとめた。後にラマ僧とチベット人等と名乗って潜入しても見破られない程であった。

#### 〔入蔵経路〕

チベット国境から首都のラサまで入るには両者共密入国以外での到達は不可能となり、各々決死の覚悟で潜人を敢行する。

河口は当初から「ヒマラヤ越え」の計画であり、チベットからネパールに出てきた人々から得た情報をもとに「関所や蛮賊が少なそうな間道」ということで選んだ、ダウラギリ北方の（蛮賊も嫌う）雪の峠越えを大変な苦勞の末成し遂げる。しかも、入蔵後は往復四〇〇以上の遠回り？ をして、「カイラス詣での帰り」を装い、ラサ入域に成功するのである。

能海は中国側で入蔵路を穿鑿したのち雲南省からの入蔵を決

意し、最後となった書簡を発送後潜人を敢行して消息を断つ。以上から、両者の成否を分けた主な原因として、「遠征形態の違い」と「判断力の差」をあげることができよう。

河口はヒマラヤに憧れ、ネパールからのヒマラヤ越えを自身で計画したのであり、雪の高山に単身（と羊二頭）で果敢に挑戦していく壮絶な姿には何の迷いもなく、そのこと自体に身命をかける姿勢がある。しかも、折々の旅の歌は（巧拙は別として）自然を畏敬し愛でる心情と精神的な余裕すら感じられる。また、数年にわたる一人旅で大小様々な事件に対処してきた経験の積み重ねから、慎重さ・用心深さに対する感性は人一倍研ぎ澄まされていたことが随所にうかがえるし、その後の適切な行動判断に大きな役割を果たしたことは疑いない。

〔河口の歌と本人の補足から〕（内と一部句読点評者追記

「空の屋根、土をしとねの草枕 雲と水との旅をするなり

しかし、これからの旅はこの歌のようではなかったです。実はこの歌はこれまでの旅に適合して居るので、これから後の旅（ヒマラヤ越え）は「空の屋根、雪をしとねの岩枕」で、雪と岩との間を旅するような訳でございました。」

能海の方は、同宗派の東本願寺出の僧・寺本、外務省所属で目的の違う成田、それに従者とのチームで行動しており、旅の報告義務や費用送金問題、同行者や領事館との関係、結婚三カ月で別離している妻への思い等々、異国にあっても本国との絆

や、身近にいる日本人とのもたれあいと軋轢で、孤独感は少ないかわりに警戒感や慎重さがやや不足していた様に思われる。例えば、チベット犬に噛まれる、中国人に騙される、ラマ僧を殴る、馬や物品の盗難・強盗、等々のエピソードは河口も同様に経験しているが（口述時に読者を意識した表現を心がけたとしても）、おおむね適切・冷静に対処し自力で解決している。能海はチームとしての入蔵をめざしたが、四川省巴塘<sup>パダング</sup>で金沙江の流れを前に撤退を余儀なくされる。その後、青海省經由に転身するもならず、正面からの入蔵はいずれも不成功に終わる。

最後は雲南省大理府から単身での潜入を図り、「不惜身命今や極めて僅少なる金力を以て深く内地に入らんとす……」という、焦りの心境を色濃く漂わせた手紙を発信後消息を絶ち、結果は（運悪く）蛮賊の手にかかってしまうのである。

能海が身の危険をうすうす感じながらも突入した原因は、危険度の判断の誤りや、問道選定の経験不足に加えて、強い使命感・義務感から本国側の（無言の？）プレッシャーを感じて、精神的に追いつめられたためではなからうか。

「能海の歌から」

「のぞめども深山の奥の金沙江

つばさなければわたりえもせず」

仏教の原典を真摯に求めた二人の旅の目的は同じだったが、その原典をどう活用するつもりかで、注目すべき記述がある。

能海は「日本語の經典作成」をめざしていたという。

河口もそれに近い考えをもっていったようであるが、更に在家らしく、多くの宗派を統一した「釈迦宗」を提唱している。

評者は常々、「意味のわからないお経」が日本の仏教から大多数の国民を乖離させてしまった原因だと思っているが、僧侶だけではなく我々一般の仏教徒にも分かる「口語のお経」とし、更にキリスト教・イスラム教等の他、一部の仏教国にもある「聖書やその類」が広く頒布され、殿様商売を廃した「地道な布教活動」をやれば、仏教の再興隆も可能だと思っているのである。

仏教界を知らない仏教徒のざれごとではあるが、これらの改革は、詐欺まがいの宗教やさんだ人心に悩む現代社会を建て直すための思想の根幹となり得るものであり、宗派のエゴや權威主義を棄て、時代の求めに応じた社会的な役割を果たす、「身近で心のよりどころとなる仏教」への変身を期待したい。

両書の総体的な感想として、著者の江本氏が能海寛、高山氏が河口慧海を論じてはいるもの、お互いに相手の研究対象を熟知し・意識した上での記述も多い。両著者各々の長年にわたる研究と自らの足で稼いだ検証をベースとした蘊蓄の深さ・広さは限りないものがうかがわれる。

（若松 林治）

ウォルター・ウェストン 著・三井嘉雄 訳

『ウォルター・ウェストン未刊行著作集』全三巻

郷土出版社 一九九九年十一月刊

A5判 上 三三七二ページ

下 三三八ページ 七〇〇〇円

一九八〇年代前半に始まった、日本におけるウェストン研究は、かなりの成果をあげたが、現在でも一部の人々によって熱心につづけられている。筆者もかつては、研究者たちの後に付いてうろちよろしていたが、エネルギーが続かず落伍してしまつたので、今だに執拗なウェストン研究が続いていることは驚きである。そのうちでも、三井嘉雄氏と田畑真一氏の二人は、ずっと間断なく研究をつづけている。その成果のひとつが、この本である。

ウェストンについては、詳細な年譜が『山岳』誌上に連載され、その著書四冊のうち三冊は『日本アルプスの登山と探検』『日本アルプス再訪』（あるいは『極東の遊歩場』『知られざる日本を旅して』）などとして邦訳されている。書簡も『山書月報』と『山書研究』誌上にかなり紹介されている。また、今度の本と同じ訳者によって登山日誌が邦訳されて『日本アルプス登攀

日記』として発表されている。更に、(ウェストンの見た明治・大正の日本)という写真展も開かれた。したがって、ウェストンについては『Japan』(一九二六年)だけが邦訳されずに残っているだけで、研究も(ウェストン伝)が出れば終わりかな、というくらいに思っていたところ、この本が発行されて驚いている。ウェストンの著作目録はすでに故安江安宣氏によって『山岳』誌上に発表されていたが、その内容を知ることがむつかしかった。四冊の著書は別として、現在では入手が困難な雑誌新聞などに掲載された文章を読むことはむつかしかった。少なくとも、筆者にとって、そんな機会は殆どなかった。

それがこの二巻本によってウェストンの殆ど全部の著作を読むことができるのである。(凡例)にあるように、殆ど全文が原著にそのまま収められた文は除かれたとしても、著書四冊以外の著作の全体がこの二巻に収められたといつてよい。『アルパイン・ジャーナル』『ジオグラフィカル・ジャーナル』『ジャパン・ウィークリー・メール』『ナショナル・ジオグラフィック・マガジン』『山岳』などは当然としても、『タイムズ』『ジャパン・ギャゼット』『スコティッシュ・ジオグラフィカル・マガジン』『英国湖水地方の原野と岩登りクラブ・ジャーナル』などに掲載の文章もある。更に『英国アイルランド人類学学会ジャーナル』『オストアジアティッシュ・レントシャウ』まで拾っている。特に、後者はドイツ語雑誌である。また、すでに日本語に

翻訳されて発表されたもの、すなわち、『アサヒ・スポーツ』『東京朝日新聞』に掲載の文章まで集めている。徹底した編集である。

この『著作集』をざっと読んで感じるのは、やはり内容の重複であろう。ウェストンの場合、四冊の著書の間でもかなりの重複した内容が見られるのが特徴である。重複はわずらわしいが、その反面、わかりにくい箇所が他の文章によってわかりやすくなる得点もある。前述したように、訳者が殆ど全文が重複しているようなものを省いてこうなのだから、そのままではもっと重複がひどいのである。この『著作集』が発行されるまでは、筆者は「ウェストンがたいへんな書き魔だ」と信じていた。彼の長い人生を考慮しても、たいへん多くの文章を発表している。特に『タイムズ』には多くの文章を寄稿している。その数の多さに驚いていた。しかし、『タイムズ』へ寄稿した文章はすべて短いものであることを知って、熱心なライターであることは認めても、「書き魔」という考えを訂正した。ウェストンくらいの分量の文章を書いた登山家は他にもたくさんいる。めずらしいことではない。まして、その多くに重複が存在するとしたら、彼の場合は内容的にそれほど多くはないのである。

ウェストンの著書を読んでも感じたことだが、この『未刊行著作集』を通読しても強く感じるのは、彼の親日的感情である。

彼は日本の山々が好きだったばかりでなく、古い日本の文化や田舎の人々を愛した。そして、ヨーロッパ文明に侵されて日本の古き良き風習が減びつつあるのを嘆いている。彼は近代日本の工業化、商業化した姿を嘆き、田舎の伝統的な日本の姿を愛した。ほくら日本人からみれば、蟲屑の引き倒しの点も見受けられるが、彼の親日感情はよくわかるし、彼の指摘で納得できる点も少なくないのである。そして、すでに逝ってしまった古い日本の面影を、彼の文章から知ることができる。

この本を読んで、登山記録としての新しい情報を得ることはできないが、ウェストンの日本そのものについての熱き思いを知ることができる。その意味では、『ジャパン・ウィークリー・メール』掲載の「飢饉」「飢饉救済基金」や『ナショナル・ジオグラフィック・マガジン』掲載の「日本の田舎の様子」など、多面的なウェストンの人間像を知るのに役立つであろう。しかし、ここではふれていないが、ウェストンは個人的レヴェルでの日本観では妥当性を保持しているが、政治問題あるいは国家観となると、極めて保守的であり、妥当性を欠く意見を吐くのである。

もちろん、いままでも英語でしか読むことができなかった多くの登山関係の文章を読むことができるのはうれしい。

いずれにしろ、この『未刊行著作集』は読み物というよりは資料集であって、楽しむための本ではない。だからこそ、訳者

はわずらわしさを覚悟の上で、地名や人名その他のローマ字を漢字だけではなく、必ずカタカナで併記しているのである。これは同じ訳者による『日本アルプス登攀日記』でも、すべてカタカナでルビをふっている。これは資料として扱う正しい方法である。筆者が『日本アルプス再訪』で採った方法は、資料として扱うことではなく、できるだけ読み易くすることであった。

読んでいて気になった点を若干述べてみたい。上巻一七二ページに、「妙定寺という神社で……その神主」とあるのは、少し説明が要るのではあるまいか。日本語としては、寺が神社で、そこに神主というのは、わかりにくい。これは問題の箇所、田畑氏は『ウェストンの北岳』の中では、妙定寺を寺として扱っている。そして、調査して、当時の住職の名を大野泰忠であったとしている。筆者が訳した『日本アルプス再訪』の中では、ウェストンは妙定寺という名を記してはいないので、どちらかというと神社らしく書いているので、筆者は神社として訳した。ひょっとすると、神仏混合なのかもしれないが、わかりにくい。ウェストン自身統一して書いていない。

下巻三六四ページに、アルプスでアーノルド・ランの一行につかまって質問されたことが書かれているが、ランは一八八八年生まれだから、ウェストンと会ったとされる一八九六年にはまだ八歳のはずだから、たぶんウェストンの勘違いであろう。

同じ下巻の三六〇〜一ページにスイスのホテルを皮肉ってい

る詩が載っている。これは、ある登山者客がホテル備えつけのノートに書いたとされている。ところが、『日本アルプス再訪』では、スイスが日本に変わっただけの詩が載っている。ひょっとすると、日本のホテルを皮肉った詩は、ウェストンのフィクションかもしれない。

また、著者の『日本アルプス再訪』（九八ページ）での誤訳を教えられた。これは上巻二三七ページの「誤植」の中で、ウェストンは日本の案内板に「気が触れたり、病気に感染した、あるいは泥酔し Parson (牧師) の乗車はお断り」と書かれていたことが載っている。これは Parson (人) とすべきところを間違えて Parson (牧師) となっているのが、おかしいのである。それなのに、筆者はそれに気が付かず、Parson として訳してしまった。それではウェストンが述べている案内板の内容のおかしさが伝わらない。お粗末である。

もう一つ希望を述べさせてもらえば、『タイムズ』掲載の記事の中で、日本人にはわかりにくいものが含まれているので、いささかでも注を付していただければ、ありがたかった。

最後に本文の字の大きさにふれておきたい。普通は九ボくらゐの大きさにしているが、ここでは、たぶん十ボの大きさにしている。筆者のような老人にはじつにうれしい。本というものは読みやすいように作られるべきなのだから。

ウェストンの未刊行の著作を簡単に読めるようにしてくれた

訳者の労苦に対して謝意を表したい。

(水野 勉)

中島 寛 著

## 『二期一会の山、人、本』

中島昭子 一九九九年四月

A5判 四三八ページ 非売品

「七月末の暑い日、安曇野穂高町から常念に登った。そして高くそびえる有明山を一つの想いで見上げた」

有明山は二二六九<sup>メートル</sup>、登り出しから標高差一〇〇〇<sup>メートル</sup>、しかも厳しい登路の山である。『二期一会の山、人、本』の著書・中島寛さんは、四月三十日、直腸から肺への癌の転移が発見され、既に手術は不可能で、残された生きる時間の少ないことがはっきりした。その中で、中島さんは、五月二日有明山に独りで登った。その山行記が冒頭の有明山の紀行文である。本書の冒頭に有明山の記があることは著者の本書というか、山登りに対する気持が強く読む人の胸を打つ。

一九八八年五月有明山に登った著者は五カ月後の十月この世を去った。

中島さんが病床についた、それも病状は非常に厳しいとの知

らせを受け、当時山岳会の百年史の仕事の中島さんと一緒にやっていた私は、松田雄一さんと病院にお見舞いに訪れた。

中島さんは既に病状の進展を予測しホスピスに入院していた。恐る恐る病室に入った私が見たのは、ベッドの上にあぐらをかき、ワープロを叩いている中島さんだった。その時中島さんは残り少ない生きることの出来る時間の中で、この本の原稿を書いていたのであった。ワープロを打つ中島さんには何の悲壮感も無く、次々と原稿を打っていた。

編集メモで本書の編集をされた方々が書いておられる様に、まさに本書の本当の編者は中島寛さんその人である。

本書は、随想、紀行、書評、追想、論考、翻訳、座談の項目で、中島さんが一九五三年(十五歳)から一九九八年(六十歳)の間、一橋大山岳部・日本山岳会の仲間達とまた独りで登った山々約二百の山行について書かれているが、中島さんの山登りの中でも大きな意義を持つ一九六一年のプブラヤ山群を中心とするアンデス登山と、一九六九年から一九七〇年にかけてのエベレスト南西壁の記録が無いことは残念だが、この両記録は著書がいつている通り、既に公式記録で総てを述べている。

『二期一会の山、人、本』の題名の通り、本書は中島さんが登った山、そこで会った人々、そして本と中島さんの山登りがある。中島さんの山登りの足跡は日本の山々に始まりアンデス、ヒマラヤ、カナディアンロッキー、ブラジル、ボリビアの山、

そして香港の山、キナバルと本当に世界中に広がっている。しかも凄いのはこの間中島さんは四回の癌につながる大きな手術を受けている。山に登ることは生きることだと思う。中島さんが六十歳で終わった生涯を生き生きと生きた記録がこの本である。山に登ることは生き生きと生きることだということだが、本書に含まれる数多くの山行で表現されているが、本書の巻末の山行譜を読むと、仕事の面でも山登りと同様常に前向きな仕事をされている。山登りと同様、長期信用銀行の中心的なスタッフとしてブラジルのサンパウロ、ニューヨーク、香港で仕事をし、そしてそこを基点としていろいろな人に会い、世界の山々を登っている。

その記録も本書に留めるところである。御自分の仕事のことを開発エコノミストとっているが、山登り、仕事共に中島さんの人生は常に前向きだった。

山行の記録と共に中島さんの登山者としての秀れた一面を示しているのが書評、論考、翻訳の稿である。

優れた登山者は未知のものに対する技術的、体力的力が必要であるが、何よりも人間の知的活動としての登山に知性は欠かれないものである。山行記録と共に本書の中の半分以上の部分が、中島さんの山登りに反映された知性が表現される内容になっていることに深い感銘を受ける。

中島さんは生前、日本山岳会の百年史の編纂委員長としての

仕事を、宝幸水産社長という激務の中で精力的に務められた。一時期私も一緒にその仕事をさせて頂いたが、本書に示されている中島さんの登山に対する知的考察が、百年史編纂の大きな推進力であった。中島さんもライフワークとして百年史編纂に取り組んでおられたが、志半ばで故人となられたことは残念でならない。

中島さんはこの本の題名を、「二期一会の山、人、本」とされた、その一生の中で人に会い、山に会い、本に会った。そして六十歳という短い人生を前を向いてしっかり想い、行動した。本書は単なる過去の記録ではない。巻頭に有明山を据えた著書の想いは本書の中に強く表れている。

中島さんは冒頭に「私にとって過去を振りかえって懐かしむというのは、どうも性に合いません。過去を見つめるとすれば、将来のために、現在の自分の位置を確認するためだと思っと思っています」と書いている通りの気持ちで、死がはつきりと迫ってくる中で、これからまだ登るといふ気持ちで本書をまとめられたと思う。中島さんは登山という行為を実践し、かつ知的に理解し表現出来た、現在の日本山岳会の中でも数少ない優れた登山者である。中島さんはもっと書きたかったに違いないと思う。

百年史もそうだったに違いない。しかし天は優れた人に時間を与えてくれなかった。

(田辺 寿)

松本徂夫 編著

## 『遙かなり秘境 可可西里』

NHK出版 一九九九年十月刊

A5判 二七八ページ 三〇〇〇円

タイトルは長く、さらに、『……崑崙を越えて、日中可可西里学術探検隊記録』と続く。「可可西里」とは、崑崙山脈から分かれた南支脈の総称で、……モンゴル語の〈青い高原〉の意味だという。……」。

一九八五年、松本氏は青蔵高原登山研究会と京都大学探検部をまとめ、揚子江源流に日中友好唐古拉山脈学術登山隊を組織、主峰の各拉丹冬雪山（六六二一メートル）に初登頂した。それは『遙かなり揚子江源流』（NHK出版、一九八七年）にくわしいが、この遠征のときに、次の目標の一つとして、可可西里が浮かびあがったという。このあたりからして、松本氏の青蔵高原に対する並なみならぬ執念、また造詣の深さがうかがえるというものである。

紹介  
本書は一九九四年に行われた日中合同九州大学可可西里学術探検隊の、一般向けの報告書である。これまでのいきさつから、自分が隊長を引き受けることになった、とあるけれど、仕掛け

人はもとより松本氏であった。探検の実施から、この報告書の刊行までに五年の歳月が流れているが、いわゆる、鮮度が落ちているという感じは少しもない。それは全力投球による内容の濃さと、当該地域の情報不足をカバーしていることによるものである。

第I章は「可可西里高原のツンドラ」と題して、この地域の概説と探検史をまとめる。いまから百年ほど前のボンヴァロ、ド・ランス、リトルデール、ウエルビー、そしてスヴェン・ヘディンをくわしく紹介する。最後には、ごく最近の登山隊や調査隊にもふれている。

第II章は「憧憬の高原」。専門的な学術調査報告で、松本隊長を中心にして、地質、火山、水質、気象、植物、動物の項目が続く。一般読者を意識して、かなりくだいての記述ではあるが、むずかしいところは飛ばしていこう。

第III章は、青蔵高原の民族と食生態、砂金採りの話、高所順応、シルクロードのいまむかし、と展開する。ここでは、現代のゴールド・ラッシュの話が興味深く語られている。しかし、ドキッとするのは、北村副隊長の高山病である。高度の影響による脳梗塞というけれど、急速に高度を下げることでできない青蔵高原で、生命は風前のともしびであった。砂金採りに来ていた現地の若者も高山病で死亡していたといい、四八〇〇メートルの高度でも決して悔えることはできない、という教訓である。

第四章は松本隊長による「文明の路・シルクロード」で、蘭州からのアプローチの旅行記。その中の「夜光杯」の項には、思わず、ニヤリとしたくなる。その原石を顕微鏡とX線で調べたら、蛇紋岩であったといいつつ、王翰の詩を引用する。

葡萄の美酒 夜光の杯

飲まんと欲すれば 琵琶馬上に催す

酔うて沙場に臥すとも 君笑うこと莫れ

古来征戦 幾人が回る

口をとがらて、夜光杯を傾ける松本隊長の顔が彷彿としてきた。

最後の第V章は「夢の地を踏む」として、東崗札日(六一〇二トメ)の登山記録である。残念ながら、時間不足のために、試登と偵察にとどまった。時間があれば、この東峰も主峰の崗札日(六三〇五トメ)も確実に登れたであろう。惜しいことをした。

各章や節の末尾には、ていねいに引用・参考文献が揚げられている。これは前著『遙かなる揚子江源流』と同様に、次なるステップへの大きな足掛かりとなる。科学者松本氏の面目躍如たるところである。

そして、旧制三高の「かよえる夢は崑崙の……」と口ずさむ松本氏は、大いなるロマンチストである。そうでなければ、十年間も計画を練りあげることではできない。次なる計画を抱いて

か、この夏も青海湖から内蒙古を踏査したと聞く。さて、いかなるロマンが次に生まれるのか。

(薬師 義美)

## 『ヒマラヤへの道・Ⅱ(山の仲間50年の軌跡)』

電電九州山岳会(吉松哲俊) 一九九九年十月刊

A5版・四一〇ページ 二三八一円

『ヒマラヤへの道・Ⅱ(山の仲間50年の軌跡)』は、三十年前の一九七〇年(昭和四十五年)に出た、『山の仲間 ヒマラヤへの道』(以下Ⅰ巻という)の続編という意味を持たせたものと思われる。というのは、Ⅰ巻は電電山岳連盟編で、Ⅱとは発行母体が若干違うからである。Ⅰ巻は、ヒムルン・ヒマールの登山報告書をかねた、電電公社傘下の十数団体山岳会全体の約二十年の記録であった。

今回のⅡは、電電公社の九州山岳会の単体の出版で、電電九州山岳会の五十年の活動史となっている。ただ、Ⅰ巻においても、ヒムルン・ヒマールは電電九州単体のヒマラヤ遠征であったし、国内の活動も電電九州の記録が際立っていた。記録に限って言えば、Ⅰ巻も電電九州の報告書であり、Ⅱは、その三十年

ぶりの出版といえる。

ヒムルン・ヒマール(七二二六頁)の登山は六三年(昭和三十八年)ブレモンズーンに実施された。おしくも登頂はならなかったが、当時、ヒマラヤ登山は日本山岳会や全日本山岳連盟の選抜隊か、有力大学の山岳部といった限られた隊だけのものだった。そもそも外貨に制限があって、ヒマラヤ登山ができるのは年に二、三隊しかなく、職域団体、しかも九州の支社の山岳会が遠征を実行することは、考えられない時代だった。

だが、電電九州山岳会は国内においても当時から精力的な登山活動を続け、とくに鹿島槍ヶ岳北壁正面尾根の冬季初登攀(五八年十二月)や五龍岳GⅡ尾根(六十年一月)の厳冬期初登攀などの実績をもって、全日本山岳連盟の派遣隊という榮譽を獲得したものである。当時、職域山岳会がこれだけの登攀をするのも希有のことだった。

私事になるが、私も同じころ鹿島槍北壁正面尾根や五龍岳GⅢ、GⅤ尾根などを登っており、白馬から鹿島槍にかけての後立山に興味をもっていた。そのため、当時から電電九州の名には注目していた。新幹線もないころ、九州から北アルプスまで登りに来るのは、現在ではアルプスやヒマラヤ登山をするくらい大変なことだったろう。多数の会員をもっていないとできないし、そのためには有力な会員を擁している必要がある。それがヒマラヤ登山につながったのだと思う。

私がヒマラヤ登山をしたのも、同じ年(六三年)ブレのヌンブル)であり、ますます親近感をもつにいたった。「ヒマラヤへの道」という題名は、どこかで聞いたと思う方がいるかもしれないので、蛇足ながら補足しておく。『ヒマラヤへの道』(京都大学学士山岳会の五十年、今西錦司編)は八八年(昭和六十二年)の出版で、題名としては、はるかに電電九州山岳会のほうが先輩なのである。

「ヒマラヤへの道」という本の題名の通り、冒頭の章は「ヒマラヤ遠征」である。三回のヒムルン・ヒマールのほかに、八〇年ブレにネパール東部のクスム・カングル(六三六九頁)の第三登に成功、八三年にネパール中部の七〇〇〇(七〇〇〇)峰カン・グールの冬季初登頂に成功した記録が載っている。これだけ海外遠征隊を出せる職域山岳会は、現在でもあまりないのではなからうか。なお、八〇〇〇(八〇〇〇)峰では、チョー・オユーとシシャパンパの連続登攀を目指したカトマンズクラブ隊に、日本山岳会熊本支部・設立三十五年の一環として参加した隊員の報告(チョー・オユーに登頂)が載っている。

電電九州にとってヒマラヤといえば、やはりヒムルン・ヒマールであろう。「ヒマラヤ遠征」の章の冒頭に「執念の山 ヒムルン・ヒマール」を置き、この章の過半のページを使っている。ヒムルン・ヒマールは八三年に弘前大学とネパールの合同隊が初登頂し、先を越されてしまった。そのため冬季初登頂を目指

して、八四年十一月十二月に第二次隊が弘前大ルートに、八八年の十一月十二月には第三次隊が別ルートから挑戦したが、いずれも成功しなかった。電電九州にとって、ヒムルン・ヒマールは執念の山になってしまったようだ。

なお、八三年、ネパール政府はヒムルン・ヒマールをネムジュン(七一三九<sup>ノ</sup>)と名前を変更し、この山の三、四<sup>ノ</sup>北方の山(七二二六<sup>ノ</sup>)に、新たにヒムルン・ヒマールという名をつけた。名前の変更は、この本によるとボーダーラインに関係していることだろうと推測している。新しいヒムルン・ヒマールには、九二年十月に北海道大学隊が初登頂した(ヒムルン・ヒマールの初登頂)『山岳』第八十八年／一九九三年)。

次の「国内の山々」の章には、五つの登山記録が報告されている。鹿島槍北壁正面ルンゼ、剣岳・小窓尾根から小窓王南壁登攀などが行われたが、六八年一月には剣岳で遭難者を出した。三番目の章は「海外の山々」として、おもにアルプスとヒマラヤのトレッキングの紀行である。「山と人」の四番目の章には、二十六名も多数の会員のエッセイや紀行、回想が収められている。こういふなかには、いろいろな山への考えが垣間見られ、なかなか興味深いものがある。

この会でも五十年の間に、何人かの方が亡くなっている。「故人会員を偲ぶ」の章で、三人の故人の想いが語られている。ほかに鹿島槍北壁正面尾根を冬季初登攀した小畑尚久氏も

夏の赤沢岳で転落死し、ほかに山で亡くなっている会員がいるが、この方たちの追悼はI巻の「山に眠る岳友たち」に載った。

最後の章「山岳会五十年の歩み」に、会の推進者的な役割になった善行久親氏の梗概「山岳会五十年」と「五十年の年表」をつけて終わっている。本文では重点記録に絞っているが、「年表」は二十七ページにわたる詳細なもので、五十年の活動内容がよく分かる。

善行氏は巻頭の章にも、十四ページにわたり「岳人に贈るリーダシップ十訓」という文章を載せている。初めてのヒマラヤ遠征を前に西堀栄三郎先生から饒別にいただいたという「リーダシップ十訓」に詳細な解説を加えたリーダ理論である。氏が三十年にわたり、この「教え(十訓)」の精神を理解し、実践しようとしたというだけあって、教えられることの多い内容である。

最後に本書の感想であるが、前書と同じくヒマラヤ登山と国内の登攀のミックスとなっている。それにエッセイ、トレッキングが加えられ、通常ある「山岳会十年誌」とは趣がちがっている。一般に記念誌は、何年にもわたる合宿報告が詳細に書かれ、辟易する分量があったり、堅苦しいものが多い。その点、前書も本書も、主な活動記録に重点を絞り、あとは紀行とエッセイである。読んでみて親しみがもてる構成となっている。

最近はある程度、国内の先鋭的な登攀や、ヒマラヤ登山を實踐している職域山岳会があるかもしれない。だが、このように記録的な登攀をし、かつ立派な記念誌を出した職域山岳会を私は知らない。登山界全体のレベルのなかでは、必ずしも傑出した記録ではないかもしれないが、どこにでもできる二流の記録では、決してないと思う。その上、部外者が興味をもてる記念誌をまとめるのが、また、むずかしいことなのである。その意味で職域といわず、山岳会の模範であると考え、ここで取り上げ紹介した次第である。

(小浜 浩三)

秋月俊幸 著

## 『日本北辺の探検と地図の歴史』

北海道大学図書刊行会 一九九九年七月刊

B5判 四〇五ページ＋各種索引・文献

八三〇〇円

介 紹 書 図

日本北辺の地図についての、著者究竟の大作であり、紛れもなく、北海道とその北方地域―樺太、千島、沿海（沿海州）地方―の探検と地図作成史についての基本資料として座右におくべき基本文献である。

北海道をとってみても、その地図上の姿には、我が国の地図史上もっとも転変の激しいものとして、研究者のみならず地図趣味の人々の間でも興味をひいてきた。例えば、十七世紀の国絵図や日本図では、現代からは想像できないような、中央部に一つ目の大きな沼を配した島とされていたこと、などなど。

また、その周辺を見れば、十八世紀末までの、蝦夷地と樺太やカムチャツカとの混同、樺太が大陸の一部か否か（間宮林蔵らの調査は一八〇八年）など、世界の地理・地図学史の中でも、もっとも変化に富み、かつ興味深い地域の一つであろう。

著者は、ご勤務の北海道大学付属図書館北方資料室の資料を中心に、日本で作製された古地図のほか、ヨーロッパ、ロシア、中国のものを詳細に比較検討してその相互関係を明らかにし、当時の歴史的、地政学的背景の中での、地理的探検と地図作製の係わりを詳細に説明されており、一方では、著者独自の研究見解を述べられたところも少なくない。

ここで、内容紹介のために、目次の章項目を紹介する。

日本北辺地図の特徴／日本における初期の蝦夷地図／イエズス会士エンジェルスのエゾ地図／フリースの航海とエゾ地図／ロシア人の千島地図／北辺地図の進展と新たな「空白」／日本における北辺地図の曙／欧州航海者たちの日本北辺探検／日本における北辺地図作製の進展／北辺図における未知の探検／幕末期の蝦夷地図／地図作製の新時代

本書には英文要旨が付されているが、本書が前述のように、北辺地図の総大成である観点から、掲載までに大変な努力があったと思われる百七十点にも及ぶ収録地図に、英文説明のないところが惜しまれる。なお、巻末の、人名・地名・事項索引、分野別参考文献、地図・図版一覧、北辺探検・地図年表は、この地域と地図などについての基礎資料として重宝できる。

一方、盛り込まれた知識は読み物としても楽しめ、北辺の探検と地図に夢をいだける時代を彷彿とさせるような書である。表紙は、間宮林蔵著作中の絵を用いた爽やかな仕上がりとなっているなど、装幀者にも敬意を払いたい。(長岡 正利)

Chris Bonington & Charles Clarke

TIBET'S SECRET MOUNTAIN The Triumph of Sepu Kangri

Weidenfeld & Nicolson, 1999

240×162. 254 pp. £20

ボニンントンがこの本の前に出した“Sea, Ice and Rock” (1993) は、かつて単独無寄港で世界一周を成し遂げたR・ノックスジョンストンとの共著で、氷山の漂うグリーンランド東岸への航海と、未知の岩峰登攀を記したものであり、晩年のテイ

ルマンの行動を思い起こさせるものがあつた。

ボニンントンは三十数年前に“*I chose to climb*”という決意表明のような題名の本を書いて以来、プロの登山家として毎年のように注目すべき登山を繰り返してきたが、今や(一九九九年で)年齢は本人も驚く六十五歳。ボニンントン自身のみごとな写真で構成された“*Mountaineer—Thirty Years of Climbing on the World's Great Peaks* (1989)”を含めて既に二、三冊自伝風の登山記を書いているので、今後の自分の登山の行く末も見えているのかもしれない。

表題の本を手にとった時、日本人にとって珍しくないチベットの六〇〇〇<sup>1)</sup>峰の登山記であり、結局登頂も逃しているし、そのアタックにボニンントン自身が参加していない。あまりわくわくするような本ではないらしいと思った。そして何よりもカパーの写真に写っている年老いたボニンントンの姿…。ボニンントンの登攀能力の低下は、一九八二年にボードマンとタスカールを含む四人の隊で果敢に挑んだエヴェレスト東北稜の時にその徴候があつたが、その登攀力の代わりに何かを加えることでその後の登山の質を維持したと思われる。

それは例えば、昨年紹介したカパディアを仲介としたインドヒマラヤでの登山である。ヴェナブルズ、サウンダースら気心の知れた若手クライマーと組んで、標高はあまり高くはないけれど、登山が試みられたことがない山に自由な方法で登山する

というものである。とはいえ一時ポニントンにも大いなる迷いがある、あれだけ記録的な登山を繰り返していたにもかかわらず、自分自身はエヴェレストの頂上にまだ立っていない。既に登り尽くされて久しいこの山にさらにルートを拓く程の情熱も能力もない。しかし登っておきたいという俗物的な衝動も押さえ切れず、ノルウェー隊の一員としてネパール側の一般ルートから二百三十六人目の登頂者になった。この迷妄を経て書かれた本が『The Everest years (1987)』という本であった。

開放された「中国の山」に関してポニントンは、一九八〇年と一九八一年に早速イギリス人を代表して訪れ、コングール初登頂に成功した。(この時の本『Kongur』の副題はChina's Elusive Summitと「中国の山」という認識である)。その翌年に上述のエヴェレスト東北稜(彼らは「チョモランマ」という別名を使うことがない)を試みたが、ボードマンとタスカーを失って失敗に終わった。この「中国」での二回の登山には本書の共著者のクラークもメンバーに加わっていた。クラークは一九七五年のエヴェレスト南西壁隊まではクライマー兼ドクターであったが、その後は登攀からは遠ざかり、もっぱらポニントンの相談役にまわっている。

今回の「チベット」本はポニントンとクラークの共著であり、未知の山セブ・カンリへの一九九六年夏の偵察行から、九七年春の登山、九八年秋の登山までの、この山を巡る一連の活動を

纏めたもので、活動全体も二人の合作である。全十五章のうち第六章はクラークが書いている。ポニントンの担当はほとんど登山活動に関わる部分であり、前述したように一九九八年の最後のアタックには本人が参加していないので、その部分についてはV・サウンダースの記述を引用している。ちなみに、このサウンダースの文はヒマラヤン・ジャーナル五十五巻(一九九九年)と同じである。

一九八二年に、エヴェレスト東北稜を目指して成都からラサへ向かって飛び立ち、機中から、延々と続く未知の山群の中に抜きん出て高い雪山が見えた。中国の登山開放後間もない当時は、限られた山以外に近づく事のできる日がいつ来るか予想もできなかったし、また情報があったとしても十九世紀の文献以来何も加わっていないと考えられた。この辺りの山の場合は、ユックとガベがモンゴル方面から旅を続けてニンチェンタンラ山群を越えラサへ入った一八六四年の報告があるだけだった。改革開放政策が進んだためか、省や自治政府への権限委譲が急速に行われ、チベットにおける登山状況も大きく変化した。今や相手是北京ではなく、チベットの機関(旅行会社)との直接交渉が可能になった。さらにヨーロッパ方面からやってくる者にとって都合なことに、カトマンズからラサへの航路も開けた。すなわち「中国の山」へではなく「チベットの山」に直接訪れることができるようになった。ポニントンとクラークが

ラサを初めて訪れた一九八二年は、文革時代の名残がまだ感じられたが、新しく登場した胡耀邦総書記の民主革命の時代となり、民族の自主性を重んじた経済開発と文化の見直しが行われ始めていた。その後天安門事件など揺り返しもあったし、それとは別に中国化が進行し、チベットへの漢人の流入は留まることなく続いていて市場経済化も急激である。クラークは十四年後のラサの様子を、「コンクリートとガラスのビルが立ち並び、スーパーマーケットや銀行やデパート、ファッション店、カメラ店などが中心街を占領している」と描写している。中国政府による統制の雰囲気はチベット中を覆っているらしい。訪れた各地域の状況についても結構細かい記述がされている。

セブ・カンリはニンチェンタラ山群の東端に近いところ、北緯三二度、東経九四度付近にある雪山で、一九八七年のRGSの三〇〇万分の地図では七三五〇と表示されている無名峰だった。ポニントンがこの山の写真を初めて見たのは登山計画ができた一九九六年で、写真集(チベット登山協会編集の『雪域神山』(一九九五)『Immortal Mountains in the Snow Regions』)を見せてもらった時だった。セブ・カンリという名もこの時初めて知った。標高は六九五六メートルとなっていた。

一九九六年夏、ポニントンとクラークはその後もずっと同行することになる通訳兼ガイドのパサンとラサで合流し、北へ向かいサルウィーン川源流の町ナクチュエを過ぎ、チャムドへ向

かう幹線道路からはずれてディルの町に着く。ここで思いがけず女性郵便局長から、この山の麓までピクニックに行ったことがあるという情報を聞くことができ、写真集とは異なるアングルの写真まで見せてもらった。北面からのアプローチの問題はこれで一遍に解決してしまう。キングタという村まで車が入り、今では二日のキャラバンで山の麓に入れることが判った。

セブ・カンリの麓まで行ってみると、そこには美しい氷河湖があり、その湖畔が絶好のベースキャンプ地になりそうだ。周囲一帯は良質の牧草地で、放牧生活を営む数家族の生活の場にもなっていた。さらに半日戻った所にはゴンパがあってラマ僧たちが生活しているし、上部の氷河モレイン中にはセブ・カンリを隠遁地に選んだ隠者まで住んでいることがわかった。

この湖の名前はサムツォタリン(秘められた湖と呼ばれており、セブ・カンリはセブカングラカルブが正しい名で、白い雪の神という意味を持つ。周囲の高い峰はみなセブ・カンリとは家族関係にある名が与えられていて、妻、息子、娘が並び立っている。登山ルートは、娘(セアモ・ウイルミトック(青緑色の花の意味)の岩尾根に取り付き頂稜に出て頂上に至るといふラインが考えられた(一九九七年隊のルート))。

次に、山の南側も見ておくためにナクチュエまで一旦戻り、イーゴン・ツァンポー川の上流域にあるジャリに入った。この辺りまではサルウィーン川流域を探ったR・コールバックとJ・

ハンブリートレーシーが一九三五年にやってきたが、雪山のことは何も触れていない。こちら側の道路事情は悪く、セブ・カンリへのアプローチは北側のように簡単ではなかった。それでも親切なチベット人たちに助けられ、ポニーに乗ってごく近くまで行けた。そこもまた放牧地になっていたからである。ポニントンはこの偵察行は今までに全く興味深い旅だったと言っている。

さて、一九九七年の本隊は七人（登山メンバーは四人）で臨んだ。今や常識化しつつあるが、衛星通信機器を利用して山の中から情報を発信するというアイデアを考えた。さらにそれをテレビやラジオ番組として売る事で資金調達をする事になった。メンバーの一人ジム・カレンは番組制作者として同行する。彼は丁度ポニントンの伝記の執筆に取り掛かっていて都合が良かった（伝記は本年五月に発刊された）。それ程困難ではないと思われた登山だったが、雪質が悪く、天気も悪く、さらに病人も出てあっさりとは諦め、翌年出直す事になった。季節は秋の方が良さそうだという結論になった。

一方ベースキャンプでは隣人たちとの交流にクラークは忙しい日々を送った。特に瀕死の病状にあった牧民の妻を手術——それも専門外の手術なので本国の専門医に電話で相談した上で執刀した——して命を救ったことで恩人として処遇され、今まで以上にこの土地と人々に親しみを感ずるようになった。

一九九八年の隊はこれまでの経験を踏まえて臨んだが、さらに深く地域を知るために、ベースキャンプに別のルートから入る計画をたてクラークが担当した。ポニントンは今回もスポンサー探しに奔走するが、幸いナシヨナル・エクスプレス社の全面協力を得て、登山の模様をテレビで放映する算段をした。ウェブサイトも公開されて日本でも開いて見た人も多いと思う。

クラークは若いE・ロバートソンとともに本隊が出発する三週間前にラサに着いた。ナクチュエを通してチャムドまで行き、方向を変えて東側からセブ・カンリに近付こうというのである。同行するのはパサンと二人の運転手で、五人以上でなければ入域の許可が出なかった。雨がよく降り道路の状態は悪かったがなんとかチャムドまで着いた。チャムドはチベット解放前の東チベットの中心だが、漢人政府への抵抗が非常に強いことで知られていた。大きな町で、現在も以前と同様にメコン川本流（ザ・チュー）とヌゴム・チューの合流部に、幾度も破壊の憂き目に遭った大きな僧院が建っている。もちろん文革時にも破壊されたが、他の多くのゴンパと同様に再建されている。現在これらのゴンパへの訪問は警官などがある場合は歓迎されず、写真に撮ることも許されない事が多いらしい。

この本の巻頭に、少し異質な感じのするアコン・トゥルク・リンポチュエという地位の高いラマの謝辞が載せられている。ダライラマとともにチベットを脱出し、現在はスコットランドの

ダンフリースに住まうラマをボニントンとクラークが出発前に訪ねていた。クラークたちはチャムドに近いこの師のゴンパ、ドルマ・ラーカンを一日訪ね、献納した。彼らの意図は詳しくは解らないが、チベットとその文化に親近感を持ち尊重しようとしていることは伺える。

車道の終点はツォカで、二人の運転手とはここで分かれ、ポニーを雇ってさらに西のセブ・カンリを目指す。前回の偵察時には地図といっても空港で手に入れた旅行地図しかなかったが、今回は旧ソ連製の二〇万分の一地図(ソ連政府の崩壊によって一九九三年頃から出回った極秘地図群の一つ)を持参した。GPS計器との組み合わせで、何時でも自分の位置が確認できた。太陽電池を使つての本国との衛星通信によって孤立する不安もないが、冒険もなく、チベットの「未知の山」という期待は一時の幻想だったことを知ることにもなった。

この夏は非常に雨が多く、キングダからベースキャンプへ向かう途中の橋も流された。八月末にベースキャンプに到着したクラークは早速ラサに來ているボニントンに直接連絡を取り、状況を伝えている。ベースキャンプには隣人たちが沢山集い旧交を温め合ったの言うまでもない。

登山の方は、メンバーの異なる五人で臨みサウンダースがリードした。ルートは尾根ではなく、前回達した別のリッジを目指して氷河を奥まで辿り、次の氷河の上部を大きく回り込んでゆ

くので、三方所にキャンプを必要とした。雪は深くラッセルを交替しながら登るしかない。ボニントンはこの行程で若いメンバーから遅れてしまい追いつくことができない。二回目のアタックには参加せずベースキャンプでの指示にまわっている。三人になった登攀隊はさらに二つに分かれ、グラハム・リトルは主峰の右側にある鋭い三角形の「娘」に裏側(西)から登頂し、スコット・ミュアーとサウンダースが主峰をねらったが、強風と寒気で進めず、頂上直下で引き返さざるを得なかった。

セブ・カンリでの三度の登山活動はこれで終わった。ディルに引き上げ打ち上げを行った夜、気の毒にもボニントンは町の野良犬の群に足を噛まれてしまう。周囲には誰一人おらず彼の哀れな境遇を思う場面かもしれない。最後のページに「私は同様のチャレンジを今後もするつもりでいる。否、実際すでに計画もたてている。それは新しい友人を作り、古い友たちとの旧交を温めるものである」と書いている。セブ・カンリは様々な思い出を作り、自分の経験のなかでも特別な位置を持つだろう。いつの日かふたたびあの「秘められた湖」に登山を目的とせず訪ねて、そこに住む思い出深い人たちとの再会を果たしたいものだと言っている。

(児玉 茂)

ヴォルフラム・マンツェンライター Wolfram Manzenreiter 著

『日本アルピニズムの社会的構造』*The soziale Konstruktion des japanischen Alpinismus*

ウィーン大学東アジア研究所日本学科学科発行

二〇〇〇年刊

十七<sup>セ</sup>×二十四<sup>セ</sup> 三〇〇ページ

定価・二八〇オーストリア・シリング

介 紹 書 図

外国における日本研究が進展いちじるしいことはわかっているが、本書のように登山を中心テーマとする本格的な研究論文が分厚い書物となってあらわれたことが過去にあったとは寡聞にして知らなかった。オーストリアの首都ウィーンは、中欧で（プラハ大学の次に）二番目に古い大学であるのだが、この都会がアルプス山脈東北端の裾に位置することを理由にすれば、アルプス圏内の最古の大学と言うことができる。ウィーン大学東アジア研究所日本学科学科の三十六番目の発行物が、ヨーロッパ・アルプスの登山の影響を受けてはじまった日本の近代登山の歴史と現状を詳細に論じるものであっても、不思議ではないのかも知れない。しかし、私の予想を超えて日本の登山の現状分析にまで踏み込んでいる点で注目にあたいるし、私たち日本人の目をさませる刺激的な見解をふくんでいて興味津々の書物

である。

ヴォルフラム・マンツェンライター著『日本アルピニズムの社会的構造』には「近代登山における文化、理念、スポーツ」という副題がついている。サブタイトルから察せられるように、社会学の方法を使って日本における登山の社会的な立場と機能を分析することを主たる目的としている。そして、この点に本書の特色がある。

「国破れて山河あり」という文句がモットーとしてかかげられた序章から始まる。四方を海に囲まれた島国で日本人が山と川に民族国家としてのアイデンティティを感じてきたこと、山国に住む日本人が自然の恵みの基点である山に特別な感情を抱いてきたことが語られる。アルプスの山々を醜悪で危険な邪魔者としか見なかったヨーロッパが近代に至ってようやく高山に美を感じると同時に挑戦の対象とした。これがヨーロッパの近代登山つまりアルピニズムを生んだ。これと逆に、日本人は山に美を感じて崇拜し、信仰登山の対象としてきた。つまり、ヨーロッパとはまったく異なる山岳観を日本人は持っていた。

長い鎖国の時代が終わって、明治時代に日本は近代化、つまり西欧化の道を進みはじめた。山岳も西欧化の洗礼を受けて、信仰から切り離されたスポーツ登山がはじまった。日本政府に雇われた西洋人による日本山岳の発見が、ウェストンを通じて日本山岳会を誕生させた。本国イギリスではあまり高く評価さ

れなかった人が「日本アルプスの父」と呼ばれていることに著者は注目する。アルプスの国の一つであるオーストリアに生まれ育ってアルプスでの登山を体験した著者は、日本の登山の歴史がヨーロッパの登山史とは性質のことなるものであるらしいと感じた。

日本山岳会の誕生が象徴するスポーツ登山の誕生と隆盛の歴史そのものは、ヨーロッパでのアルピニズムの歴史に似ている。だが、著者の目には、その歴史の内容がヨーロッパにはないもののように見える。一つは、大学山岳部を中核とする若者たちが登山のイデオロギーとスタイルを決定した過程である。もう一つは、戦争時代に突入した日本で国家の中央集権的な教育の中に登山が組み込まれようとしたことである。

文人と自然科学愛好者の結集として生まれた日本山岳会は、やがて大学の山岳部を基盤とするスポーツ登山の時代に入り、冬季登山や岩壁登攀のアルピニズムの時期を迎える。だが、日本の山が登り尽くされるに及んでヒマラヤへと展開していった。ヒマラヤ・ブームが終わる頃には、冒険としての目標が喪失して若者たちが登山から離れ、代わって中高年登山が盛んになった。

このような日本の登山の様態の歴史を、著者は日本人による登山史とはまったく異なる視点から分析する。広範にわたる論述の中でとくに目立つのは、忍耐の美德といった種の精神的な

意義づけによるイデオロギーの形成が、文部省などによる教育行政とあいまって押しすすめられてきたことについての詳細な分析である。もう一つには、私的な知的エリート集団として発足した日本山岳会が、やがて大学山岳部を機軸として野心的海外登山への道をひらくエリートを集めたのに対抗するかのようになり、左翼的な勤労者スポーツの組織として労山が生まれ、それと別個に行政的な指導のもとで全岳連が組織されるなどして、日本の登山界を独特なセクシヨナリズムが支配するようになった、と著者は言う。

さらに著者は、主要な山岳雑誌の内容を分析してマスメディアが登山界のトレンド作りに重要な役割をはたしてきたことを実証しようとした。私たち日本人が思い至らずにいることから光を当てていることの意味は小さくない。日本人の立場から反論も弁解もあつてしかるべきだろうが、重要な示唆をあえてくれる刺激的な研究の誕生を私は率直に歓迎したいと思う。

著者は日本の登山史を次の四つの時期に分けた。西洋式の登山の思想と実践を「お雇い外人」たちによって学んだ人々が日本山岳会を結成する前後の十年（一九〇〇年から一九一〇年）、急速な普及によってスポーツ化をとげる三十年（一九一〇年～一九四〇年）、戦争時代の後、大衆化と細分化が進んだ二十五年（一九四五年から一九七〇年）、ブームが去った後の時期（一九七五年まで）。この時代区分は私たちの常識となっている

日本登山史の区分とは意味合いがちがう。日本山岳会の結成や困難な登攀あるいは海外遠征の成果といった登山史の表層にあらわれた事件を区切りの目安としないで、もっぱら登山と社会の関係の変化に区分の基準が設けられている。

初期においてはエリートたちが英国山岳会をモデルとして自由によりヴェントな登山を楽しもうとした。その段階では文人と自然科学者が日本山岳会の中核をなしていた。信仰登山の世俗化は、しかしながら、大衆化とともに国家の介入を招くことになった。軍事国家化を目指す国家が身体と精神の訓練に登山の価値を認めた。さらに、大学や旧制高校の山岳部が主体となって登攀の記録を競いあったことによって、一定の集団組織の中で先輩と後輩という上下の身分関係が醸成された。戦後に政治的に左翼の側で結成された労山の場合にも、労働とスポーツの関係づけのイデオロギーによって、日本的な登山の意義づけが継承されることになった。冒険を競うことから遭難死を美化し遭難者を英雄視する風潮が生まれた。他方、遭難の頻発が行政による規制を招いた。さらに、都道府県単位で登山者集団を統括する全岳連の出現にともなって、日本の山岳界を代表する資格をめぐる日本山岳会との確執が生じた。後に至っても全岳連を構成する個々の団体は、学校の山岳部と同様に閉鎖的な集団であろうとするのであった。

これら、日本的な登山者集団が、個々に伝統を継承してアイ

デンティティを持つようとしてきた結果、日本の山岳界全体に通ずるべき普遍的な登山観あるいは方法論といったものが成立しにくい状況となって今日に至っている。論者はこうした歴史的な状況を関西の大学と社会人の山岳会についてのケース・スタディーによって明らかにしようとした。

一九八〇年代以降の社会的経済的な変動が日本人の価値観にも影響をあたえた。経済成長いちじるしい日本においてレジャーの有効活用が叫ばれるようになった。禁欲的で肉体的な苦痛をともなうスポーツである登山は、その時点で若者たちの興味を引きにくいものとなっていた。初登頂、新ルート開拓などの名誉をともなう山行の可能性がないにひとしくなった時、若者たちはしだいに山から遠ざかった。これに代わって登山の主たる実行者は中高年の世代にシフトした。

このような意識変革あるいはトレンドの変化を、山岳雑誌ないしは山岳書がたくみにリードしていた。これらのメディアの影響力はあなどりがたいものであった。論者はメディア研究の方法を使ってこの現象を証明しようとした。

マンツェンライター氏の精細な調査と分析にもとづく日本登山の歴史と現状の社会学的な考察の結論を要約すれば、次のように言っていだろう。日本山岳会創立の時点では日本古来の伝統と日本人社会の枠組みからの解放を意味していたかに見える近代登山ではあったけれども、しだいに学校、後に職場、さ

らに地域を単位とする小集団の中のヒエラルヒー（上下関係）が基調となった。それは日本の社会の構造からの解放とは逆の筋道をたどって、登山という名のスポーツにおいても日本ならではの構造を生むにいたった。この理論を逆転させて、登山の歴史とその実態を組織論の観点から見ると、日本人の社会の縮図ではないのか？

このように問うているかに見える本書を読みながら、私は、学校または職場を単位として対抗試合を行っている日本独特のスポーツのありかた全体について考えこまざるをえなかった。少なくとも欧米では、オクスフォードとケンブリッジの競艇試合などわずかな例を除いては見られがたい競技の形態が日本のスポーツ界に充満している。学校からも職場からも、さらには地域集団からも解放された状態で自由に楽しむのがスポーツだ、ということ常識以前の通念であると思っている人から見れば、たしかに日本の登山の世界は独特の世界であるように見えるだろう。

登山とは日常的に社会生活からの自己解放の行為であると感じている多くの日本の登山者は、自分たちの登山行為が日本的な慣習と伝統に束縛されていると聞かされれば、どう反応するだろうか？ マンツェンライター氏の論証を刺激剤として受けとめて、日本の登山の歴史と現状をめぐる問題に私たち自身が答えるべきではないかと思ふ。

（宮下 啓三）

## 会報「山」図書紹介一覧―一九九九年―

### ●四月号（六四七号）

- 大垣山岳協会編『美濃の山 一〜三巻』（ナカニシヤ出版）  
丸山直樹著『ソロ 単独登攀者 山野井泰史』（山と溪谷社）  
ブクレーエフ&デウォルト共著・鈴木主税訳『デスゾーン 八四八M―エヴェレスト大量遭難の真実―』（角川書店）  
佐伯邦夫著『山とスキー大全』（シー・イー・ビー）

### ●五月号（六四八号）

- 羽根田治著『空飛ぶ山岳救助隊』（山と溪谷社）  
堀込静香編『沼田真・自然との歩み―年譜・著作総目録』（信  
山社サイテック）

The Indian Mountaineering Foundation

INFORMATION HANDBOOK (November 1998) IMF 1998

### ●六月号（六四九号）

- 小野有五著『ヒマラヤで考えたこと』（岩波書店）  
川喜田二郎著『川喜田二郎著作集別巻―私の人生論・年譜・著  
作目録・総索引』（中央公論社）  
中浦皓至著『日本スキー もうひとつの源流―明治四十五年北  
海道―』（北海道大学図書刊行会）  
松坂良一編『一九九七年チャジャマ峰登山報告書 遥かなり

曲阿加吉瑪』(新潟県山岳協会)

●七月号(六五〇号)

小荒井実著『湿原の花と山 改訂新版』(歴史春秋出版)

傘木徳十著『山歩き五十年―蹟きながら―』(東京新聞出版局)

小浜浩三著『妻と二人の山歩き―心得編』(光人社)

コーポルト会編『コーポルト―七十年―』(コーポルト会)

●八月号(六五一号)

野田四郎著・画文集『山・森・花』(私家版)

安東浩正著『チベットの白き道』(山と溪谷社)

●九月号(六五二号)

小崎尚著『大地に見える奇妙な模様』(岩波書店)

近江百山之会編著『近江百山』(ナカニシヤ出版)

田澤拓也著『空と山のあいだ』(TBSブリタニカ)

日本山岳会東海支部編『東海山岳 第八号』(日本山岳会東海支部)

佐瀬稔著『残された山靴』(山と溪谷社)

児平隆一文と写真／望月康、藤井晴雄、久保田竜平写真『南アルプス』(静岡新聞社)

●十一月号(六五四号)

深田クラブ編『深田久弥の研究 読み、歩き、書いた』(新ハ

イキング社)

中島寛著『二期一会の山、人、本』(中島昭子発行)

江本嘉伸著『能海寛 チベットに消えた旅人』(求龍堂)

白旗史郎著『山岳写真撮影テクニク』(山と溪谷社)

向一陽『島の山探訪記 島のつべんから島を見る』(山と溪谷社)

田口二郎著『山の生涯―来し方行く末―(上)』(茗溪堂)

●一月号(六五六号)

池原等著『とやま県境踏破』(桂書房)

野口健著『落ちこぼれてエベレスト』(集英社インターナショナル)

W・ウェストン著／三井嘉雄訳『ウォルター・ウェストン未刊

行著作集』(郷土出版社)

●三月号(六五八号)

岡村治信著『自然にあそぶ心―山歩きと豊かな人生―』(原書房)

小西郁子著『小西さんちの家族登山』(山と溪谷社)

松本徃夫編著『遥かなり秘境 可<sup>コ</sup>可<sup>コ</sup>西<sup>シ</sup>里』(NHK出版)

オーレル・スタイン著／山口静一、五代徹訳／加藤九祚解説

『砂に埋もれたホータンの廃墟』(白水社)

John Biggar THE ANDES-A Guide For Climbers- (アンデス社)

BERG 2000 (Alpenvereinsjahrbuch Band 124)

## 加治甚吾氏（一九〇八～二〇〇〇）

加治（旧姓広瀬）甚吾先輩は慈恵医大山岳部の揺籃期に現役だったが、学生時代の山歴は地味であったと聞いている。卒業後、母校の耳鼻咽喉科学教室に入局され、また、いち早く日本山岳会に入会し、日本最初のヒマラヤ遠征である立教大学のナンドコット遠征に際して医薬品の調達は全て加治先輩がされた。

太平洋戦争中は陸軍軍医として南方に派遣され、日本軍が惨敗した、かのインパール作戦にも参加されたりして一九四七年に復員、間もなく結婚され加治姓を名乗られることになった。

一九四九年、湘南病院に副院長として赴任され、院長、名誉院長を歴任して一九八七年に退職されている。

私とは学年で丁度二十年の開きがあり、私が現役の頃は雲の上の先輩であった。頭ごなしに叱られる怖い先輩が多いなか、加治先輩はじゅんじゅんと諭されるタイプで、現役には取っ付き易い先輩であったし、自校の殻に閉じこもってはいは駄目だ、

外の登山界の空気にも触れなさいと日本山岳会の行事には会費は全て御自分もちで現役を誘って下さり、私も何度かその恩恵に浴した。高輪にあった御自宅は鬱蒼とした木立に囲まれた広壮なお屋敷で招かれてビックリしたことを覚えている。

一九七二年、慈恵医大のアラスカ遠征が企画されると、賛否両論ある中で積極的に賛意を表されたばかりか、資金面でその殆どを提供され計画は実現した。遠征には御自身もオプザーバーとして参加され、オモチャのようなバイパスロープカブでブラックバイン峰のBCまで入られた。BC滞在中、私がお供をして氷河上をC1の途中までアンザイレンして登られたが、実に楽しそうなお顔であった。BCでの登頂祝賀会で、氷河の氷がオンザロックの中でピチピチ音をたてるのを無邪気に喜んでおられた。

一九七六年には山岳部OB会主催のネパールのトレッキングにも参加され、ホテルエベレストビューで高度にやられたメンパーのお世話をされたと聞いている。

一九八〇年の慈恵医大ガネットシユヒマールV峰学術登山隊には七十二歳で学術班隊長として参加、キャラバンルートで精神的に診療活動、研究活動を行った。「長尾君、見て御覧住民達の耳の中を。実にきれいだよ。耳垢栓塞なんてないよ」と感心したように話されていた。

カトマンズでは、私の病院の患者でもあった日本大使に公邸

で晩餐に招かれたが、そんな社会的なことには不慣れな隊員達は、加治先輩の後を金魚のウンコのように行って行った思い出がある。

晩年は奥様と二人で葉山にお住まいだったが、「脚立から落ちて腰椎の圧迫骨折をした。診察に来い」と電話があり、参上すると、長年院長をしていた湘南病院に奥様と二人で入院しておられたり、奥様の腰の具合が悪いから診察に来いと電話があつて参上すると、待ちかねて暑い夏の日にかの外に出て待つておられ、自ら駐車場まで誘導して下さったりした。その折、御夫妻に葉山マリーナのレストランで御馳走になったのがお元気な加治先生にお目にかかった最後であつた。

今年には年賀状が来ないと気にしていたら、一月十三日御逝去の訃報であつた。二十歳の年齢差にもかかわらずなにかと可愛がっていただき、二度の海外遠征にも御一緒させていだいてたくさんの思い出があるだけに淋しさで一杯です。謹んでご冥福をお祈りいたします。

略 歴

- 一九〇八年 神奈川県横須賀市に生まれる
- 一九二五年 逗子開成中学校卒業
- 一九三四年 東京慈恵会医科大学卒業
- 一九三五年 日本山岳会入会。会員番号一五九三。紹介者高木

文一・黒田孝雄。一九八五年永年会員に

一九七二年 慈恵医大アラスカ・ブラックバーン峰遠征隊にオ

プザーパーとして参加

一九七六年 ネパールトレッキング

一九八〇年 慈恵医大ガネッシュヒマールV峰学術登山隊に学

術班隊長として参加

二〇〇〇年一月十三日 逝去、享年九十一歳

(長尾俤夫)

高橋宏一氏(一九一二〜一九九八)

高橋宏一さんは、一九一二(明治四十五)年五月五日、滋賀県坂田郡鳥井元で生まれ、旧制静岡高等学校から一九三三(昭和八)年東北帝国大学法文学科に進み、三六年卒業されている。日本山岳会には一九三八(昭和十三)年に中村謙・岡田喜一両氏の紹介で入会しており、会員番号は一七六三番で、数少ない一千番台の会員であつた。

私が高橋さんにお会いしたのは、一九八九(平成元)年二月にお茶ノ水のホテル聚楽で開催された東北大学の会東京支部総会の席であつた。高橋さんは、大学卒業後三菱鉱業に入られ、

戦後の財閥解体で改名された大平鉱業から現在の三菱金属鉱業を定年退職後、親戚がなさっていた岡谷不動産の仕事に就けた関係から永く名古屋に住んで居られたので、東京支部会にはこの時初めて顔を出されたと思う。この会の前年、八八年に高橋さんは日本山岳会の永年会員になられ、その時の感想を会報第五二三号（平成元年一月号）に次の様に述べられている。

「大学在学中は身を挺して山岳部の再建に努力すると同時に、あらためて東北の山々を無雪期と積雪期に登山して、記録を整備しました。岩登りも指導者がありませんので、前穂高で仲間だけで研さんしました。当時その仲間たちとの話題はいつかスイスアルプスに登山したいということでした。当時はヒマラヤはまだ話題になりませんでした。その時から約五十年経った数年前に、当時の仲間の鈴木稔、佐々篤夫両君と女房を連れてスイスアルプスに遊び、ユングフラウに行き、マッターホルンの国境の大雪原をあるいて、希望を達成して涙を流したことは一生の喜びです」。

高橋さんが大学に入られ山岳部に入部された一九三三年頃は、谷川岳の一の倉沢、幽の沢、更に前穂高屏風岩で初登された名クライマー小川登喜男氏（故人、会員番号一三二八番）を始めとして、強力な部員が卒業して部を離れた二年後の沈滞した時期であり、新人部員を指導してくれる先輩も少なく、活気のある部活動は見られなかった様で、高橋さんは、前述の同期の鈴

木稔氏（故人）等数人で集まって山行を試みていた様である。

鈴木さんは、高橋さんの事について東北大学山の会々報第十二号（一九八四年）に、「高橋宏一、初めはムスコ（ドラムスコ）より始まり途中からソーサイ（総裁）となる。マメタン、ガキ、モレコンなどと活躍、気分のさっぱりした男、部員の世話指導に充分努力してくれた。岩もなかなかのベテラン、記事など細々と記してくれた。ヒュッテン・ブーフ、ルーム日誌など細々と整理してくれた有難いメンバー、頑張りもなかなかきく、スキーもA級、頼もしい相棒の一人」と述べている。ムスコ、ソーサイは、勿論高橋さんの渾名で、マメタンは鈴木氏の事の様である。また、「我々新人はグループを作り山行を試み、スキー山行、或は岩登りを行って居った。然し、岩登りは全く初心者で、スキーも下手、専らレール・ブーフを片手に努力したものであった。岩登りは専ら鎌倉山を道場に、夏は穂高湖沢に合宿、時に霊山、或は天狗岩などにルートを求めて居った。又スキーは蔵王帝大ヒュッテに合宿、春休み、体育週間などには各グループ毎に岩手、飯豊、朝日、鳥海などに夏登山、スキー登山を行って居ったが、結論として、部全体の団結を欠き、主将として部員の統率、指導力を持った先輩がなく、又アカデミッシュの色彩なく只東北帝大山岳部の名のもとに同趣味の者がパーティを作り、三、三、五、五、の同好会風に山行を行い、岩登り、スキーを楽しむ形態をとって居ったものであった。勿論技術の向

上研究を目的として更に体力訓練であったことは疑う余地はない……」と当時を回想されている。高橋さんが永年会員になられた時の感想に述べられた「身を挺して山岳部の再建に努力……」には、この様な背景があったのである。

高橋さんは、一九九八（平成十）年の二月に浦和市の自宅で脳梗塞で倒れられ入院、加療後良くなり退院するまでになられたのだが、肺炎を併発され同年四月三日永眠された。

高橋さんに近い先輩は勿論、同輩、後輩の方々も殆ど世を去られ、高橋さんを知る方も居られない事から、日本山岳会の後輩であり、現在山岳部の部史編纂の仕事を進めている山岳部の後輩として、高橋宏一先輩の追悼の辞を述べさせて頂きました。ご冥福をお祈り致します。

（塩澤 厚）

## 鳥居 亮氏（一九一六～一九九九）

私が日本山岳会に入れていただいたのは国鉄での定年を迎えてからのことだった。その後勤めることになった会社が偶々当時の山岳会のルームに近かったものだから、半どんの午後になると何となく顔を出すようになっていた。

ある席上「あなたは片岡君じゃあなかですか」と突然後から鹿児島弁で呼びかけられ、おどろいて振り返ってみたら鳥居亮君だった。実に三十幾年振りかの出会いだったのである。おどろきもしたが実に嬉しかった。

私達二人は昭和十四年からの三年間、同級生として九州の学校に居たのである。といっても鳥居君は航空工学科、機械工学科の私とは同じ工学科だからといってもクラスは別、何の関係もなかった。それでいて、別に山岳部で一緒などということでもなかったのに、どういう訳か山にだけはいつも彼にくっついて行っていたのである。

熊本の第五高等学校（旧制）時代の彼は既に山岳部員として立派な実績も積んでいたし、その頃にはもう日本山岳会にもちゃんとはいっていたのである。一九四二年入会、一九三四番という古い番号だった（紹介者は江崎悌二・山田光男氏）。私は高等学校も違ったし、東京では前に日本ハイキング倶楽部にはいてもいたが、別に山での出会いなどということも全くなかった。それがあの三年間だけ、山では大体彼と一緒にいたのである。彼が山のベテランであったからというのほもちろんであるが、彼はそういう魅力を持つ男であったからだとしか言いようがない。

それに彼は五高時代に、彼等の修練の場でもあった阿蘇の根子岳であるのろい岩が禍したのが、ザイルを結んだ仲間の一人

を亡くしているということもあったせいか総てに慎重で、立派なリーダーとして頼り切って彼にくっついて行っていたのである。

そういった学生時代を終えてからは、既に戦争も始まっていて分かれ分かれになったまま全く会うこともなく過ごしてきていた。

それがバツタリ日本山岳会のルームで顔を合わせたというのである。ご縁があったとしか言いようがない。

彼も戦争中休会ということになってしまっていたのを復活させて貰って、私同様時々ルームに顔を出していたということらしかかった。

おかげで私はまた昔のように彼にくっついて歩くことが出来るようになったという訳である。

その頃の彼は神奈川工科大学にいて、山での環境保全という見地から、風力や太陽光線そして小規模の水力を使っている発電などと、彼の専門のブレードから、そういったものの開発と実用化とに取り組んでいたらしかった。

やがて奥穂高の穂高岳山荘に研究室を造って貰い、いろいろと設備を整備して、風力と太陽光線併用のハイブリッドシステムの有効性を確かめるための実験研究を積極的に進めてきていたから、度々穂高への登山を繰り返していたわけである。今ではそれ等は全国百四十個所以上にもなる山小屋等に設置されて

いるというほどの普及を見て、立派に実を結んできています。

その「山岳地域における自然エネルギー利用の実用化研究」というのは、認められて一九九四（平成六）年に第三十一回秩父宮記念学術賞を共同研究者である森武昭・木村茂雄氏と共に受賞している。

あの真面目な鳥居亮さんが、御臨席の秩父宮妃殿下の御前で、記念賞を拝受している時の感激に満ちた顔を私は忘れられないでいる。彼はこの受賞を大変喜んでいた。

秩父宮記念学術賞受賞の最低必要条件が「山を愛し、自から山に入って行った研究」であるとは聞いていたが、正に彼は山を愛し、山に入り続け研究をしてきた。それまでも幾度か登っていただろう穂高に、この実験研究のためにせせと登り、籠り続けてきたのである。

ところが或る年の秋、穂高岳山荘から戻ってきた彼に「いや、全く大変だった。もう僕にはあの山荘まで登る力はなくなってしまうたよ」と訴えられて返す言葉もなかった。ずい分つらい思いをしたようである。もうすっかり体調をくずしてしまっていたのである。

やはりそれが最後の穂高行きになってしまった。そしてその頃からルームにも殆ど顔を見せなくなっていた。

一九九九年の七月「下旬に（北海道に）行って、ひと月かふた月位の予定です。その頃にはアンコ餅の集いがあるよう

すが、足かけ八年もかかった山研の水車が漸く動きだす頃になると思います」と山研に行けないという断りを言ってきたのに、北海道にも行けずに入院してしまっただけ。

そして新しく山研に点る灯も見ないままだった。

(片岡 博)

## 吉永孝行氏（一九一〇～一九九九）

一九四一年入会、会員番号一九七一、五十九年という会員歴を有する吉永孝行氏は一九九九年七月一日、八十八歳で逝去された。

福岡県在住ながら福岡支部には所属しておらず、加えて高齢でもあり、会員に同氏を知る人が見付からなかったので、御遺族に伺うと長男の晏明氏が父親の山に関係する資料を送ってくれた。以下はそれを元にまとめたものである。

吉永孝行氏は一九一一年福岡県三藩郡鳥飼村（現在は久留米市）に生まれた。吉永家は久留米藩御用達の木蠟問屋で隆盛であったが、幕末の混乱の中で倒産したため、孝行氏ら兄弟も苦勞して育った。苦学して久留米の日本ゴム株に入社、同社退職後は日本ゴム生活協同組合の役員を務めた。

山登りでの吉永氏の活躍の舞台は日本ゴム山岳部と久留米山岳部であった。御息が送ってくれた資料の中には日本ゴム山岳部の部報『樁火』があり、昭和十年発行の第三号はB5判、活版刷り八頁という立派なもので、その巻頭には吉永氏の「万年山のことども」が載っている。万年山について歴史的・地質学的に考証したものである。同山岳部発足の時期、それに吉永氏が関わったのかどうかは分からないが、この時期にはすでに吉永氏は部の中心的なメンバーだったようである。また、同号の「会員消息」欄には吉永氏ら三氏の「久留米山岳会入会」の記事があり、その活動は職域山岳会から地域山岳会へと広がったようだ。久留米山岳会は一九六〇年に創立三十周年記念行事を実施しているから、その創立は一九三〇年であり、吉永氏はその草創期からの会員であったことになる。

前述のように、日本山岳会には一九四一年、橋本三八・月原俊二両氏の紹介で入会している。この年は日本山岳会が社団法人化した年であり、それを機に積極的な会員増が計られたようであり、吉永氏の他にも福岡県からの入会者が多い。

一九四八年の第三回国体は福岡で開かれた。登山は四コースからの久住山への集中登山で、この時吉永氏はCコース（久大線南由布駅をスタートして南登山口へ下山）のリーダーを担当し、「副リーダー」二名とその他に指導補助員を数名おき、隊員の連絡に当る。また笛の吹き方をいくつか決めておき連絡する

こととした。幸いに何の事故もなく無事終了した」と書き残している。この第三回国体について、本会の会報第一四三号は「秋の好晴に恵まれた九重の山々と高原の自然美を満喫する愉しい山行であった。…本大会の準備及会期間を通じ尽し得ぬ献身的努力を重ね、もって大会を成功裡に完遂せしめた福岡支部の方々及その他関係山岳人に感謝の意を表する」と報告記事を載せ、出席理事として松方、藤島、谷口、関根氏らの名前を記している。それを裏書きするように、吉永氏のアルバムには、久住山頂で挨拶する藤島敏男氏、同山頂での関根吉郎氏、石岡繁雄氏（登山に先立つ講演会で講演のため参加）の写真が収められている。

この頃のことであろうか、晏明氏は「父は日曜日は必ず久大線の一番に乗り、帰りは夜中でした」と思い出を語っている。

ところが、一九五三年九州を襲った台風は吉永氏の生活を一変させる。一晚に六〇〇<sup>リットル</sup>という集中豪雨により筑後川が氾濫、吉永氏の自宅も一か月半にわたり水没状態になり、その後始末に疲れて結核を患い入院、山登りは不可能となった。それ以降は日本ゴム山岳部、久留米山岳会、福岡県山岳連盟で後進の指導、登山界の発展に力を尽くした。

一九九一年の日本山岳会永年会員章受章に当たって、「今迄会のために何等貢献することなく、永年会員となり面映ゆい感じです。『菊薫る永年会員拝受する』」との所感を寄せている。

しかし、「五十年、六十年と会費を払い続けてくれたことも会への立派な貢献である。そのような古い会員は追悼欄に経歴を書き留めておくべきであり、適当な執筆者が見当たらない時は編集者が調べて書くべきだ」とは、筆者が『山岳』の編集を担当するようになった時に、三十年ちかくにわたり本誌の編集に携わった望月達夫名誉会員からいただいた教育的指導であり、不適任ながらも敢えて筆を執った次第である。

（南川金一）

## なかの 中 埜 愛 三 氏（一九一五～一九九九）

残念なことに、私は中埜氏とは面識がない。年齢にして丁度二十年の開きがあり、氏が最も活躍されたのは、名古屋高商山岳部時代の一九三三（昭和八）年頃から、卒業後は名高商山岳部のOB会である其堪（きたん）山岳会々員として、一九五〇（昭和二十五）年名古屋（春日井市）を離れられる頃までで、私が登山を始めたのが一九五一（昭和二十六）年なので、出会うことはなかった。それでもなお執筆を引き受けたのは、当時の名古屋近辺の岳人のホームグラウンドである鈴鹿、中央アルプスのパイオニアとして活躍された中埜氏らは、ある意味で我々

東海岳人全体の先輩と考えるからである。

中埜氏は一九一五（大正四）年三月十二日名古屋に生まれる。名古屋近辺の秀才が集まる愛知一中を卒業後、一九三三（昭和八）年名古屋高等商業（戦後名古屋経済専門学校と改称され、学制改革により五〇年名古屋大学経済学部となる）に入学、山岳部に入部。

名古屋高商山岳部は開校の翌年の一九二二（大正十一）年に創部されていたが、名古屋の登山界に知られるようになったのは、丁度中埜氏が入学した頃からで、名古屋山岳会、中京山岳会、八高山岳部らと伍して中央アルプスの開拓を中心に近代的登山を展開していた。

卒業後も宮崎平四郎氏、大山友太郎氏らと共に、休眠状態だった其堪山岳会を再興し、現役の強力な人的、財政的な支援を行い、OBと現役の連携による山行が活発に行われ、特に中央アルプスに大きな足跡を残した。

その中で中埜氏も参加した主な記録に、一九三八（昭和十三）年三月初、中旬にかけ正沢本谷から、積雪期末踏の細尾沢に入り、大滝を越えて細尾カールに達し、細尾沢と玉の窪沢をわけている細尾尾根に取りつき稜線に幕営、さらに木曾駒頂上近くに雪洞を建設し、ここをベースに三の沢岳、伊那前岳、茶臼山などを往復した。三月に延べ十八日間、内雪洞生活六日間の登山は当時としては画期的な壮挙であり、中央アルプスの雪洞生

活第一号ともいえるものである。

一九四一（昭和十六）年一月二日より十二日かけ、池山尾根をたどって空木小屋をベースにして空木岳に登頂、連日の猛吹雪に悩まされ、帰途池山尾根で二晩のビバークを強いられ、また、雪崩にも遭遇する厳しい登攀であった。伊那側からの空木岳の厳冬期初登頂であった。

やがて戦争も激しくなり、名高商山岳部の合宿は一九四三年三月の太田切本谷を避行し、空木岳の登頂をもって終了した。一九四五（昭和二十）年に豊子夫人と結婚。終戦になってまた登山が再開できることを願って、三菱重工（三菱水島航空機製作所）を退社し、名古屋（春日井市）へ戻って知人の経営する新興織物に就職し、早速母校山岳部の復興に尽力し、一九四六年四月、名古屋経済専門学校山岳部は復活、その年の夏中央アルプスを縦走し、一九四七年七月には宝剣沢を避行し、宝剣岳岩場の東面三本、西面に五本のルートを開拓した。写真はその時のものである。

その年の冬には中埜氏らは遠見尾根に戦後最初の冬山合宿を行い、五竜岳に登頂した。当時現役であった大和幹夫氏（前愛知岳連副会長）は、終戦直後の物の無い時代、現役はリヤカーを引いて、OBの家を廻って装備や食糧を集めて合宿を行った。特に監督をされた中埜さんには物質面、指導面ともにたいへん世話になった。温厚な性格だったが、一石で厳しい面もつ人

だった、と話されていた。

一九四六年から一九五〇年の間、春日井市に居住中は、正月休みはすべて母校山岳部の合宿に参加されたため、奥様の豊子さんはその頃のことを、「自宅に電話がない頃のこと、電報が届いた時の連絡先を記して、重いキスリングを担いで出かけました。新米主婦の私は幼児を抱えて淋しい正月を過ごし、予定より帰宅が遅れたときなど、自転車の音がする度に事故を知らせる電報かと緊張したものです」と筆者宛ての手紙に書かれていた。

当時の中埜氏は名古屋山岳会代表で本会々員跡部昌三氏らと親しく交遊され、愛知岳連の前身である中部山岳連盟の運営にも関わられた。名古屋を離れ、サンヨー商会、蝶理、ヤマモトなどで繊維及びアパレル関係の仕事をされ、七十歳で退職された。一男一女をもうけられたが、家族旅行はすべて山のある所で、宝剣岳千畳敷に行った時には、遺骨の一部を宝剣沢に投げた。奥さんと話された。宝剣岳をはじめ中央アルプスは中埜氏にとって思い出の深い、特別な山なのであろう。

一九九六（平成八）年十二月に満八十一歳で永年会員になられた時は其堪山岳会の忘年会（幹事）と重なり欠席されたが、後日バッジと記念品を入手された時は大層喜ばれ、「自分はずいぶん危ない目にあっている。山で死ぬものと思っていたが長生きしてしまった。若くして戦死した山の仲間にはすまない」と

奥さんに話されたそうです。

一九九九年九月二十七日、八十四歳で逝去。山に魅せられ、山を愛した一生でした（奥様）。一九四六年十二月入会、会員番号二四七八番（紹介者 跡部昌三、塚本繁松）。

（中世古隆司）

## 野田 福五郎氏（一九二〇～二〇〇〇）

戦後復刊された山日記三冊（第14輯～第16輯）の編集委員として活躍された野田福五郎氏（一九四七年入会、会員番号三〇七九）は二〇〇〇年四月二日、入院先の静岡市立病院においてすい臓ガンのため逝去された。享年八十歳だった。

私の山の盟友ともいうべき野田君の死去の知らせを受けた時、私の周りにあった一本の巨木が無くなったような寂しさに襲われた。在りし日の彼との山での生活の思い出は尽きないが、周囲を見回してみると、山岳部時代一番接触のあったのは私であり、六十年以上も前のことを思い出しながら追悼文を書くことにした次第です。

一九三七年四月、私の一年後輩として、彼は日本大学予科理科山岳部に入部した。その当時の山岳部は元気に動き回る行動

力のある集団であった。一九三九年の一月には、神山勉リーダーのもと、彼は入来、大塚等若手のメンバーと冬の穂高に入っており、四〇年一月の冬山岳沢合宿の際には中心メンバーとして参加、同年四月には佐藤耕三氏以下二十名のメンバーで天狗のゴルから槍への極地法登山に参加し、佐藤リーダーのもとアタック隊の一員として槍への往復に成功している。この時彼は食料係として綿密な食料計画を立案して実施したことで、仲間から高く評価されたことを覚えている。

これに先立つ一九三九年の七月には、私がチーフリーダーとなつて夏季剣岳合宿を総勢三十九名で行つた。錚々たる猛者達の中にあつて計画の立案から、準備、実行、事後処理に至るまで、いつも私の片腕となつて補佐してくれたのが彼だった。人間性豊かな彼は、誰からも愛され、信頼される素晴らしい人間であつた。

彼は私と同様、山岳部の中では何時もサブとして終始した男だったが、私と違うところは、協調性があり、波風を立てたことはなかった。リーダー会などで議論続出した時でも、彼が笑いながらいう短いが、的をとらえた一言、二言が議論を結論づける切っ掛けになつたことが幾度あつたことか。

一九四〇年の夏はわが部にとって大変な年になつた。涸沢で行つた夏季合宿終了後の奥又白生活で、将来を嘱望されていた彼の一年下の入来重弘、上関徹也の両君を四峰正面壁で失つて

しまつたのである。その後始末で彼が奔走している間の翌年三月には、私は卒業して就職し満州に赴任してしまい、彼との山岳部での生活は終わった。その彼もその年の十二月、戦争中の非常時の措置で繰り上げ卒業となり、軍隊に入隊した。

日本山岳会は戦後の再建に立ち上がり、一九四七年、山日記の復刊に当たり、私達の仲間である神山勉氏がその編集業務を引き受けることになつた。それに伴い神山OBの号令一下、十六名の桜門山岳会（日大OB）会員が日本山岳会に入会して協力することになり、野田君も日本山岳会に入会して、以後三年間、山日記編集委員として崎田照OBの補佐役として山小屋の調査などに精力的に活躍した。

一九四八年十一月の日本山岳会主催による富士山での冬山技術講習会の時も、彼は神山OBに声をかけられて、真島恒雄OBとともに初級班のリーダーとして参加したが、氷雪技術については神山OBからみっちり仕込まれていただけに、その腕を買われたものであろう。

一九五四年からは静岡県の大井川町の工場勤務となつたので地の利が悪く、それ以降は本会とは疎遠になつたが、『山岳』や『山』の熱心な読者であり、しばしば感想を伝えてきた。

晩年の彼とのつき合ひは、シルバーOBの仲間とのハイキングの他、毎年一回、熱海か沼津で開催されるシルバーOB懇親会で旧交を暖めるだけになつたが、いつも顔を合わせれば話は

山岳部時代の思い出になった。

山岳部時代は、今では考えられないような服装で、脚にはゲートルを巻き、鉾の付いた登山靴、リュックサックはキスリングであった。脳裏に浮かぶ野田君の姿はいつも山岳部時代の姿である。

野田君よ、八十歳を過ぎるとどっちが先だ後だといっても仕様がない。今度逢う時は、腰を置ちつけ語り合おうではないか。心よりご冥福をお祈りして追悼の言葉とさせていただきます。

#### 略 歴

一九二〇年一月二日 東京市高輪南町において野田正一氏の五

男として誕生。高輪小学校、麻布中学校を経て、

三七年日本大学予科理科に入学。山岳部に入部

一九四一年十二月 日本大学工学部機械工学科卒業

一九四六年 戦地から復員。碌々産業(株)に入社。本社、大阪支

店、高輪工場を経て静岡工場へ。八〇年静岡工場  
長を最後に定年退職

一九四七年 日本山岳会入会。紹介者初見一雄・神山勉

二〇〇〇年四月二日 すい臓ガンのため逝去。享年八十歳。

(星野辰雄)

〔付記〕野田福五郎氏が九九年六月入院した静岡市立病院では、奇遇にも山本朋三郎名誉会員と同室であった。手術後移っ

た四人部屋には、山本氏が居り、「静岡支部長の山本さんですね」の一言で二人は何十年来の旧友の如き間柄になった。それからの入院生活は、野田氏が十二月五日に退院するまで、山の話で楽しい日々であった。その後、山本氏も退院し、術後の検査のため通院していたが、ある日病院で野田氏の家族に出会って野田氏が再入院していることを知り、病室で再会を喜び合った。この時は野田氏も元気で、山本氏が今年は年次晚餐会に出席するという話をしたところ、羨ましがられ、皆さんよろしくとの事であった由。悲報に接したのはその数日後のことだった。

(松田雄一記)

## 丸 山 彰 氏 (一九一七～一九九九)

一九九九年(平成十一年)七月十二日、折しも満八十二歳の誕生日の日に脳梗塞のため逝去された。

一九四九年、故榎有恒、百瀬慎太郎両老の紹介で日本山岳会に入会し、丁度半世紀となる。

この間、大町高校(旧制大町中学)の教諭として、天与の教材・北アルプスの麓で、多くの学徒を育て、山を訪れる都会や他県からの人々と親交を深めながら、「地元の山岳文化」に貢

献した類い稀な会員を失った痛手は大きく、残念の極みである。私が郷里に帰り、最後に先生を見舞ったのは亡くなられる一週間前であった。大町病院の病床に私が近づくと、すぐに気づかれ、にんまりとほほ笑んで「又、帰るだかい」と言つて、静かに目を閉じていた。私はこの言葉を何十回聞いたことか、山の往き帰りに、生家に立ち寄るたびに交わす「さよなら」のかわりだった。地元から多くの教え子を送り出し、一人一人の成長を喜びながら、何時の日か郷里に帰つて来てほしいと言う期待と淋しさを共有している言葉であった。「また帰つてしまふのか」、私に山の素晴らしさを教えてくれた恩師の最後の言葉であった。

教育者として、先生の熱い思いから生まれた全校登山は、いまだに大町高校の伝統として五十有余年にわたり引き継がれている。旧制大町中学が新制高校に改められた一九四八年六月に、この行事はスタートした。北は白馬から南は燕岳まで八班にわかれて実施された。四百二十一名が参加し生徒全員が残雪の北アルプスの頂に立った。先生はこの時の思いを回顧録の口述テープの中で次のように語っている。

「私は中学時代から札幌一中の雪合戦と、夜を徹して二十四時間歩く、甲府中学の行事が羨ましかった。この学校にも特色がなくはないけれど、あれに匹敵するものは何かないかと考えていた。昭和二十一年五月、鹿島槍登山をした五十名の生徒で

はあったが、大町中学の生徒にとって、技術的なことはともかく山に登ること自体は余り苦勞なことではない。子供の頃から山を駆け回り、山というものが身に付いていることがわかった。そこで弱い生徒は生徒なりに、何らかの形で生徒全員を山に登らせよう、せっかくこれだけの山が聳えているのだから、せめて一晚山の中に寝て、山の空気を吸って、山を知る機会を設けることができないかと思った。また、物象部や生物部に協力してもらって、自然科学的な山の気温だとか地温、溪流の水温なども同時刻にそれぞれの山で調べることができたら面白いとも考え、こんなことを一つの憧れともしていた。当時学校には生物の羽田健三先生（後に信大名誉教授）がいたので相談すると、それは面白いとすぐ賛成したくれた」。

また第一回開催直前の大町高校新聞に自らの思いを次のように記している。

「動機として私は前から大町を中心とした安曇野の文化というか、そうしたものが自然なかんずく山によって育まれ、形づけられ我々の中に生きていることを感じます。私たちの心の中には山が大きな誇りとして生きているのですが、目の前には時には、さほどにも感じないのです。これをもう一度新しい広い眼で山を見直したら、そこにある美しさ、深さ、厳しさといったらよいか、そうしたものの偉大さに驚嘆し敬服せずにはいられないと思います。大町高校の特異性といったものは山を観る

こと、即ち山へ入って行って深く極めることによって生まれま  
す。山は必ず我々に何かを与えるでしょう」。

大自然のなかで体験し、そこから教えられることの必要性を  
説き、全校生徒に実地で悟らせようとした先生の卓見は見事と  
いう他ない。この思想は昨今になって叫ばれている、青少年教  
育のありかたの根幹を示すものである。

当時先生は大町高校が全校登山を続ける中から「大町高校へ  
いけば北アルプスのことなら何でもわかる」という山岳館を学  
内に創設することも考えていた。これはその後、大町の青年と  
高校生を中心に準備が進み、山岳博物館として一九五一（昭和  
二十六）年に結実したのである。

大町山岳博物館の職員として、先生と共に博物館の将来を考  
えた私の後輩、峯村隆氏は「大町と丸山彰先生」と題する追悼  
文を『山と博物館』第四十五巻第六号のなかで次のように述べ  
ている。

「麓に暮らす山好きの使命は、山に魅せられ訪れる遠方の人々  
を快く山に誘うことである。それは直接の同行案内であり、間  
接の情報提供でもあろうが、人と山で結ばれたことを喜びとし、  
我を押しつけず各人の山に対する姿勢を尊重し、地の利と親切  
とを惜しみなく提供することであろう。それが心底できる人を  
私は『山麓の正統派岳人』と呼びたい」。

彼はそう語り、百瀬慎太郎と小学校長を務めた平林武夫先生

を挙げ、三人目の正統派岳人は、丸山彰先生だとしている。ま  
ことにもって同感である。

近代登山の目ざましい発展にヒマラヤ登山等が加わった影響  
からか、日本の山の美しい景観と、その山麓に住み、日本の山  
岳文化ともいうべきものを地道に育ててきた地方の人々の山に  
対する思いや活動を軽視する傾向が見受けられる昨今、語り尽  
くせないほどの丸山先生の功績は、「ただ山に行き、登って帰  
ればよし」とする多くの岳人がもう一度考え直してみる良い機  
会であろうと思う。

教職者として山麓の岳人として、先生を慕い大町を訪れた人々  
との出会いの中から多くの知遇を得たのだと思う。

大町に疎開していた楨有恒氏、山行を共にした深田久弥氏、  
女子高校の校歌を作詞頂いた尾崎喜八氏、さらには作家で登山  
家の浦松佐美太郎氏、山麓のスキー場を開き、最も昵懇であつ  
た福岡孝行氏、山岳画家の山川勇一郎氏、山岳写真家の田淵行  
男氏、その他塚本開治、船越好文、内田耕作：各氏など、数え  
きれないほどの人とのつながりを、家族ぐるみで接し親交を深  
め、これらの人々と郷土大町との仲介役として地元文化の向上  
や教え子達の将来に役立てた人は他にないのではないかと思う。  
先生の個々の山歴について、今ここに述べるまでもないが、  
スキーの分野においても創始者の役割を果たし、スキー場の調  
査・開発に対して、当初から環境問題をも含めた助言を与える

# 追 悼

OBITUARY



▲高橋 宏 一氏  
TAKAHASHI Koichi  
(1912~1998)



▲加 治 甚 吾氏  
KAJI Jingo  
(1908~2000)



▶鳥 居 亮 氏  
TORII Akira  
(1916~1999)

▼吉 永 孝 行氏  
YOSHINAGA Takayuki  
(1911~1999)



◀中 埜 愛 三氏  
NAKANO Aizo  
(1915~1999)





◀丸山 彰氏  
MARUYAMA Akira  
(1917~1999)



▲野田 福五郎氏  
NODA Fukugoro  
(1920~2000)

▶広羽 清氏  
HIROHA Kiyoshi  
(1925~1999)



▼岸田 権二氏  
KISHIDA Kenji  
(1918~1999)



◀池田 知幸氏  
IKEDA Tomoyuki  
(1909~1999)





▶松長晴利氏  
MATSUNAGA Harutoshi  
(1909~1999)



◀堀内章雄氏  
HORIUCHI Akio  
(1933~1999)



▼増江俊三氏  
MASUE Shunzo  
(1932~2000)

◀武田満子氏  
TAKEDA Mitsuko  
(1932~2000)



▶宮崎辰雄氏  
MIYAZAKI Tatsuo  
(1911~2000)





▶安田 武氏  
YASUDA Takeshi  
(1927~1999)



▲矢田目 昇氏  
YATAME Noboru  
(1933~1999)



▼洲 寄 幸 久 氏  
SUSAKI Yukihiisa  
(1933~2000)

◀相 沢 甚 平 氏  
AIZAWA Jinpei  
(1940~2000)



▶和仁古 昇氏  
WANIKO Noboru  
(1916~1999)



など積極的な発言を惜しまなかった。また、中信高校体育連盟スキー講習会をスタートさせ、多くの選手を育てている。自然を教材に人を育て、導いた功績は計り知れないものがある。

新しい世紀の創始者としての役割を果たす人材は、机の上の勉強や書物の中から育つものではない。知って覚えて認識しているということは何の意味も持たないのである。

丸山彰先生は、教諭という言葉の幅を広げた教育者であり、現場感に根差した体験を通して培われる人の生きざま大切さを世に問うた一人であったと思う。

この先生の実想は、今年七月末に奥様と有志によって刊行された『雲の湧く峰 霧流れる谷』と題する追悼集に詳しい。

私たちは得難い人を失った。五十年の教えと交友に想いを馳せ、お別れとします。

略 歴

一九二七（大正六）年七月十二日 長野県下伊那郡に生まれる。

大正十四年大町へ移転

一九三〇（昭和五）年 大町中学校入学、卒業後北安曇郡平小

学校教員となる

一九四二（昭和十七）年 早稲田大学高等師範部入学

一九四四（昭和十九）年 早大中退。郷里に帰り、大町中学校

の体育の教官となる

一九四六（昭和二十一）年 大町中学校五年生有志五十人を連れ鹿島槍登山を実施。この登山が全校登山の走りとなる

一九四八（昭和二十三）年 大町中学校全校登山創始。以降、伝統となり今日まで継続されている

一九四九（昭和二十四）年 日本山岳会入会（会員番号三〇九八）。紹介者榎有恒・百瀬慎太郎

一九五一（昭和二十六）年 大町山岳博物館創立、初代協議会委員。以降、博物館の囑託として終生登山分野で助力

一九五八（昭和三十三年）年 大町北高等学校に転任。女子学生のスキー並びに登山に尽力

一九七六（昭和五十二年）年 第二十回全国高等学校登山大会総監督（登山隊長）を務める。翌年退官

一九九五（平成七）年 大町山岳博物館顧問に就任  
一九九九（平成十一）年 七月逝去。享年八十二歳

（編者注：丸山彰氏追悼集『雲の湧く峰 霧流れる谷』は日本山岳会図書室に保管されている）

（平林克敏）

## 広羽 清氏（一九二五—一九九九）

相棒広羽清を偲んで

—明大山岳部を二人三脚で再建の基盤を築いた頃—

ホノルルマラソンを無事故で完走、ルンルン気分です。帰宅して待っていたのは広羽の奥さんからの訃報であった。

平成十一年十二月十六日午前八時頃死去であった。パーキンソン病との闘病十余年、年毎に弱っていく彼を見ていつかくるであろう現実には覚悟はしていたものの、改めて通夜・葬儀のメモを前にして、心の芯の冷えて行くのをどうしようもなかった。

その日から六ヶ月程前になる或る日、広羽を見舞おうと仲間二人と連れだって日吉の自宅を訪ねたことがあった。

ベッドに寝たきり、点滴の食餌療法、目を閉じかすかな呼吸。血気盛んなダンディな広羽の面影はひとかけらもない、余りにも変わり果てた無残な姿にただ息をのむばかりであった。

奥さんは傍らから「耳は聞こえておりますから何でも話しかけてやってください」と。

三人共顔を見合わせて暫く押し黙っていたが私は心を決してつと立ち上がって彼の耳もとに口を寄せ、力を込めて話しかけた。

「おい、広羽、おれ大塚だよ、分かるか……」彼は微かに頷いた。「おれはな日本山岳会の会長になったぞ、JACCの会長だ……」彼はうっすらと目を開け唇を微かに動かした。

奥さんは「ほら大塚さん、本人聞こえているんです、分かっていますよ……」といって彼の手を握った。私も彼の手を取り顔を擦った。

仲間も交々名前を呼びあって魂の交流をした。私ら四人は五十余年前、春の杓子尾根、厳冬の穂高巒岩登攀の仲間だった。

私がJACC会長になったことを一番知らせなかった一人に広羽がいる。そして誰よりも喜んでくれるのも彼に違いなかった。彼とは一九四三（昭和十八）年、予科一年の泉校舎でMACCに入部、以来同期の桜として一九四八年卒業まで続く。

戦雲の影が濃く学窓を覆うなかで私達は三年生の助川さんに連れられて、一九四三年十二月穂高の岳川谷に向かったが雪崩の咆哮と猛吹雪にテントに閉じ込められただけであった。明けて四四年の春も同じメンパーで白馬の杓子岳に行ったが大デブリと重いラッセルで気も挫け追い返された。

この山を最後にMACCは部活を閉じた。そして部員のほとんどが兵隊に、残った現役は装備と本の疎開に従事した。私たちにはもう山はなかった、明るい青春も未来もなかった。

広羽は習志野の陸軍戦車隊、私は第三期陸軍特別操縦見習士官として熊谷陸軍飛行学校にそれぞれ入隊、軍務に服したが幸

い四五年秋には共に無事復員した。

東京は焼け野が原、私の家は本郷の湯島、広羽は神田の司町で共に戦災に遭う。校舎も荒れ果て、からくも残った部屋は薄汚れてがらんとしていた。

四六年春、新学期が始まりM A Cにも新しい部員が入ってきた。特に戦後の民主主義・男女平等の波は大学の体育会にも及び、なんと八名の女子部員が入部、部員は十五名となった。そして部員会の席で大坪先輩から私が主将、彼が主務に推薦されて部の復活にたずさわることになった。

今思っても不思議でならない。あの頃主食は配給、外食も衣料も切符制だった。今日の糧をどうするか皆な血まなこになっていた。いわゆる「手から口へ」の社会不安と混乱を背景にした厳しい世相のなかで、若々しいフレッシュな新人がたくさん入って来たことが。

彼らの前で、広羽も私もリーダーの推薦を受けて身の引き締まる思いに緊張した。もうただひたすら「山」に向かおう、二人三脚でやるしかない二人で話し合った。もうこれで終わり、と最後の「山」と思った穂高の豊岩尾根や白馬の杓子岳が再建の課題として浮かんできたのだ。

おおげさに言えば、「戦いに国敗れたが、山河あり」である。もう誰に遠慮もなく、M A Cの自主で部活ができる、死んだはずが生きて帰るこれからは余祿の人生だ、残る学生生活を力いっ

ばい「山」に打ち込み悔いを残さぬようにしようと、「山」と部活を生活の中心に据えてかかった。

とにかく再建といっても極端なはなしすべては零からのスタートといってよかった。頼りの旧部員も四六年秋に繰り上げ卒業で部を離れて行った。二人の二人三脚は四八年春の卒業までの二年間続いたが今振り返ってもあの若さのエネルギーの凄さに驚くばかりである。その詳細は「炉辺七号」にM A Cのふみあととして記録されているのでここでは省くが二人の青春のノスタルジーだ。

戦後初一九四六年の夏山合宿は穂高の濁沢でどうやら全員十五名が二週間無事に計画を消化した。合宿の食料調達が山行を支える最重要任務であったが広羽は持ち前の闊達さで十二分にやってくれた。配給米を誰も持ってこれなかったからだ。ヨチヨチではあったがM A Cは着実に一つのステップを踏んだ。その年の冬山・スキー合宿は八方山寮で新設の明治大学高専山岳部の新人を含めて行われたが、ここでも彼のマネージャーとしての活躍が合宿を裏から支えてくれた。冬の後立山は厳しく計画は満足に消化できなかった。それでも積雪期の風雪に採まれた体験は四七年春山合宿極地法での杓子尾根登山成功に生かされ、二人三脚の、否M A Cの課題の一つは完了した。

四月からの新年度は二人三脚の最後の一年、勿論最終の目標は厳冬の岳川谷の豊岩尾根の新ルートから奥穂高への登攀であっ

た。五月の残雪の岳川合宿、夏山合宿、秋の偵察と荷揚げ。総ての訓練と準備は最終目標に向けられた。我々の大きな障害は「金」、皆な金欠で経済失調、冬山に備え合宿費の積み立て計画も立てたが、日常生活はそれどころではなかった。総費用の十萬円の工面が大問題であった。頼みは大学の体育会しかない。テントや登攀用具、食料などの共同装具の他に個人の靴や装備などは金があっても物が無いものもあり大変であった。マネージャーの彼の肩にずっしりとのしかかった。一年中つき纏った「金」は冬山出発にもまにあわず、本隊の出発を数日延期せざるを得なかった。それでもなんとか都合をつけ帳尻を合わせた。どうやったのか詳しいことは記憶の遙かかなたで分

からないが、主将が出発できず体育課に日参して苦境を訴えた心情と迫力に、学校側の理解を得、暖かい支援をうけることができた。今でも決してあの光景は忘れられない。キャッシュで十萬円を体育課長から受け取った時の感動を、広羽と共に飛び上がって喜んだ部室でのことを。

厳冬の穂高は厳しかったがチームワークとファイトで乗り切った。装備も食料もおそまつでジャンダルの基部、県境稜線に張ったC2には内張りもなく、飛騨側からの烈風を受けテントの中は冷凍庫となっていくが燃料も少なく居住性は最悪となっていた。加えて食料も割り当てで、餅をもう一切れ食わせろ、といって怒鳴りあう場面もあった。ハブニングの連続で、登頂

成功後の下山撤収の際新人が掴んだ這松もろとも、私の目の前からアツと一言残してコブ沢側に滑落、消えていってしまったのが一番であったが、尾根の末端まで下りてみると彼が独りぼつんと立っていた。とんだ茶番的一幕であった。

広羽との二人三脚で走り抜けた戦後の再建に賭けた二年間、戦前からの宿題も果たし、何よりもいち早く立ち直り成果を上げることが出来たことに明治大学山岳部員としての誇りを彼と共に分かち合いたい。卒業後のそれぞれの人生航路は全然別の世界であったが、垣辺会での楽しい集まりでは必ず一緒であった。

彼は一九九七（平成九）年に日本山岳会の五十年在籍の永年会員の榮譽に浴したが病重く、伝統ある銀縁の永年会員章を壇上で受けることは出来なかった。私ばかりでなく多くの会員が彼の病を心配してくれた。

人生のほんの一コマに過ぎない青春の一時期に二人でやった「山」は今でも私の矜持として支えてくれている。

広羽よ、ありがとう。安らかに眠ってくれ。

（広羽氏は一九四八年入会。会員番号三二五七。一九四九年三月の冬山講習会では中級班のリーダーを務めた。一九八八〜一九九一年評議員に就任）

（大塚博美）

## 岸田権二氏（一九一八～一九九九）

一九八八年一月二日、脳出血のため自宅で倒れ、術後十二年余り療養生活を続けておられたが昨年十月十八日、肺炎を併発、逝去された。享年八十二歳だった。

日本山岳会員をはじめ、大阪の山仲間では大変顔の広い人だった。私は岸田さんを山歴や記録で知っていると言うより、むしろ、大阪の山好きな方々との間で愉快な話題を広げている先輩の一人として見続け、もう四十七年になる。

私が最初に岸田さんと会ったのは、同志社大学山岳部に入部した年の夏の終わりだった。山とはおよそ縁のない大阪梅田の三角ビルの最上階にアラスカという高級レストランがあった。眩いばかりの銀食器の並ぶフルコースは勿論はじめてだったし、田舎から出てきた当時の私には戸惑うことばかりだった。緊張もあってか、話の内容はさっぱりわからなかった。要は山岳部の気風や上級生は親切かどうか程度のことだったのだと思う。尽きることの無い岸田さん独特の技術は、その後四十数年少しもかわることがなかった。柔和で育ちと人柄良さから万人に好かれる人であった。

JACの方々は無論のこと、関西登高会や関西山岳会、各大

学の山岳部の先輩の方々との交友関係は上下の隔たりなく誰とも親しく話し、「ゴンちゃん、ゴンちゃん」と愛称で呼ばれる事が常であった。

「何処であっても、山行を共にしても、楽しく嬉しくさせてくれる人でした。大阪の古い山仲間を彼を知らない人はありません。市役所勤務ということもあるでしょうが、実際の広い人でした。また彼を知る人達は、彼を悪く言う人はありません。皆に好かれる人柄でした（中略）おしゃべりの武器は記憶力が良く、古い方々の事も、山行のことなどよく覚えていて、豊富な話題の持ち主だったと思います。ゴンちゃんの年代は戦争をはさみ、戦前、戦後の人達と交友があり、私も色々と古い話を教えてもらいました」。

この一文は、岸田さんの古い友人、当会員でもあり、関西登高会の浅野清彦氏が本稿を執筆する私によせてくれたものです。

岸田さんは山を歩き、楽しむ事もさることながら、山を通して広がっていく人間関係をこよなく慈しみ、大切にしていた人であったと思う。

一九四九年（昭和二十四年）学制改革によって同志社の高専と各専門学校が大学に再編され、戦前まで別々に活動していた山岳部が大学山岳部に一本化された頃からOB会の動きも活発となった。この頃から岸田さんの戦後の動きが始まった。

一九五二年（昭和二十七年）の四月には、当時未踏の白馬岳から北に連なる北方稜線を現役を連れて初トレースに成功している。翌、五三年一月には関西登高会の第七回冬期合宿に参加し、洞沢からの放射状登山の奥穂のリーダーとして活躍、同年夏には四国で行われた第八回石鎚山国体にJACの金坂一郎、加藤喜一郎、梶本徳次郎氏等と共にリーダーとして活動している。又、この頃、JAC関西支部の中核として故篠田軍治、今西寿雄氏等と共にマナスル登山の支援等、積極的に動いておられた姿が印象的であった。

私が初めて岸田さんと山行を共にしたのは、北葛岳で二人の学友が行方不明となった一九五四年十一月中旬の捜索の時であった。私は二人の猟師と大白沢の上部、鳩峰で野営していた。葛温泉から直登して来た岸田さんが若いOBに闇の中でビバークをさせていた。私が迎えに下っていった時は火を起こし、悠々とバナナを食べていた姿が今でも鮮明に思い出される。翌日の捜索も虚しく終わった。その夜、緊急で炊事用具も整っていないので、鉄鍋で雑炊を作っていたところ、猟師が鉄鍋をひっくり返してしまった。岸田さんはニコニコしながら、火の中から焼けた飯と具をひっぱり上げて食べていた。それから、二日間厳しい行動を共にしたが、どんな時でも天性の明るさを失わない人であった。

アピ登頂から帰って、次の目標を西ネパールの第二峰、サイ

パルに決めて準備を進めていた一九六三年（昭和三十八年）の春、私は岸田さんに隊長を引き受けて頂けないかと、大阪市役所の横の喫茶店でお願ひしたことがあった。コーヒーと煙草を片時もはなしたことのない岸田さんは、相変わらず焦点をそらした話に私を誘い、コーヒーをすするのであった。ヒマラヤに大変な興味があったが、一度たりとも自ら行くとは言わなかった。今だに私の計り知れない部分である。

同志社は、それから何度も海外登山をしているので、岸田さんにお願ひするチャンスはあったが、岸田さんは全く関心を示さず、楽しい山仲間と山行を共にし、海外登山から帰って来た人達から話を楽しそうに聞き、又、語っていた。

私が参加する海外登山を一番暖かく静かに見守っていてくれた先輩でもあった。私がエベレスト登山の準備で走り廻っている五年余り、又、日中合同登山で多忙をきわめている時、いつもコーヒーをすすりながら、ゆったりとした時間を作ってくれた人でもあった。

山に登るのかどうかは別として、上高地にもよく出かけ、なじみの人達と話し、山への想いを深めていったのだと思う。ゴルフもなかなかの腕前で、私の会社の製品を愛用し、スコアーが良くても悪くても私と重ねて話の種になっていたようであった。

マクマホン・ラインの国境問題で、中印間の小競り合いがあ

り、カント峰の登山が一年延びたが、この前年一九八七年九月、岸田さんを団長とする二十名の同志社の表敬団がチベットに行き、友好の絆を強め、カント峰登山の許可取得を確実なものとした。この時、チベット自治区の主だった方々が全員出席する大宴会で岸田さんは酒豪ぶりを発揮し、帰ってから血圧が上がするなど体調を崩したようであった。それから四か月後の一月二日、正月の祝い酒をたしなみながら倒れられた。

十二年余りの療養生活の間に、三か所病院を替え、リハビリを続けられた。この間に病院を訪れる関西の古き良き仲間の姿が常にそこにあった。

同志社大学山岳会の副会長として、海外登山の創世期を支え、輝かしいクラブとして今日あるのも「クラブの人間関係」を最も大切にされた岸田さんの人柄によるものであった。

思うに、岸田さんは、日本山岳会関西支部と共に歩き、戦後を築いた重鎮の一人であった。

今は亡き、関西の山登りを築き育てた見識に満ちた良き先輩の方々を私に引き合わせて下さったのも岸田さんであった。これほど円満で誰からも好かれた岸田先輩と山への思いを共にしてきたことを喜びとし、お別れとします。

一九一八（大正七）年 大阪市東成区に生まれる

略 歴

一九三八（昭和十三年） 同志社専門学校入学。山岳部に入り

北アルプスの山々を登る

一九四一（昭和十六年） 同校政治経済学部卒業。同年七月徴

兵、中国へ出征

一九四五（昭和二十年） 終戦と同時に帰国

一九四七（昭和二十二年） 日本山岳会入会（会員番号三三〇

四）。一九四九～五八年関西支部委員。一九六二～

六五年関西支部常務委員

一九四八（昭和二十三年） 大阪市役所に奉職

一九七四（昭和四十九年） 大阪市役所定年退職

一九八一（昭和五十六年） 日本山岳会評議員を四年務める。

評議員退任後、関西支部監事。一九九九年まで支部

評議員。一九九七年日本山岳会永年会員に

一九八七（昭和六十二年） 九月 康格多山峰（カント峰）登山

隊表敬団長として許可取得のため、ラサ、シガツェ

訪問

一八八八（昭和六十三年） 一月二日 脳出血のため自宅で倒れ、

手術後長期療養生活（十二年余）

一九九九（平成十一年） 年十月十八日 肺炎を併発、逝去（八十

二歳）

（平林克敏）

## 池田知幸氏（一九〇九～一九九九）

石川支部第二代支部長・池田知幸先生は一九〇九（明治四十一年）年金沢で出生された。

小学生の頃、旧制四高生遭難で有名な奈良ヶ岳を知って以来山好きになったと何かで読んだ記憶がある。

一九三〇（昭和五年）年、四高を経て金沢医科大学（現金沢大学医学部）へ入学。さっそく旅行部（山岳部）委員となった池田氏は、ファイト一点ばりではなく医学部らしい上品な登山を行うことをモットーに、石川の山を中心に毎月二回の行事を計画、ほとんどの山に参加されている。

三一年もほぼ同じペースで、大きいものでは伊折―雷岩―池ノ谷（早月より剣往復）―三ノ窓―真砂沢―八ッ峰上平・下半、源次郎と最近の合宿と似たものもある。年末から翌年一月六日まで永井喜一郎をガイドとし他二名と白山へスキー登山。雪洞使用で元旦に室堂、三日に頂上へ。元旦に白山へスキーで登ったパーティーの最初らしい。

三二年、一月に続き三月にもスキーで白山へ。以降も土・日曜はほとんど山行に充当。紙数の制約でその膨大な活動のほとんどを割愛せざるを得ず誠に残念である。

三三年四月白山へスキー登山、途中の小屋でガス中毒や悪天候のため、白山―北方稜線―妙法山―飛騨側へ下山。『山岳』第二十八年第三号に報告がある。

この頃金沢医大の大里内科では「登山エネルギーの代謝研究」をテーマに一九二八年より高山医学の研究を続け、その傍ら山岳診療も行っていった。池田氏はこれに魅かれ一九三四年卒業後大里内科へと入局、その後実験を立山に固定したこともあり、以降毎年四十日くらい立山へ入山。天狗、室堂、剣沢小屋の巡回診療を行い、立山山岳診療の草分けとなった。

一九三七年日華事変で共同研究者が応召後も四一年まで続け、当時の立山の診療日記が金沢大学医学部十全山岳会部報『木馬道』一号（昭和三十八年）に出ている。またこの辺りについては、『木馬道』十五号・立山山岳診療所開設四十周年記念号で小林宣泰氏の記事に詳述されている。

四三年七月、召集直前に白馬登山、八月に応召、シユタイグアイゼンを古鉄として供出、「生還を期さなかった」と氏の文章にある。

一九四七年第二回国体を機に石川支部が結成されるも参加されず。再三の参加要請を断りきれず四九年一月日本山岳会に入会（会員番号三三六九番）。

一九五〇年四月第二代石川支部長となられ六四年までその重責を担われた。

五三年三月白山尾添尾根極地法登山。アンナブルナ初登以来ヒマラヤのための極地法が国内で流行の頃で、当時の石川支部の理事には故深田久弥氏の名も見られ、池田氏の文章では深田久弥、小林雄次郎両理事は裏日本の藪山の視野から国外まで目を開かせてくれた会の至宝的存在と述べている。さらに駿河台のルームでの学歴など口にしない礼儀等のクラブ精神は支部でも守ること、職域代表や同窓会代表がその背景を踏み台に力を競い合う愚から脱し、地方国体の運営等は各県毎の組織にまかせ、日本山岳会は関与すべきでないとの持論は現在に通ずるものがある。

一九五五年白山国定公園化から六二年国立公園に到るまでも山以外の事に苦勞され、六〇年日山協が出来るにあたり、中央と地方の実情がくいちがい、いろいろなしこりもあり大変だったようである。

六四年国立社会保険病院勝山病院長として福井県に出られ石川支部長を辞されたが、以降も私達は白山周辺や福井の山に入る時は勝山のお宅へ立ち寄り、よく差し入れをいただいたものである。

福井支部設立の際も「僕は石川支部だから」と加入を辞退された後日伺った。奥様によれば何事につけても石川支部であり、金沢人であり、石川支部の行事には折にふれて丁寧なお手紙をいただき、海外登山をはじめ支部行事には率先して多額の

御寄付をいただいた。

金沢での石川支部五十周年の記念式典には奥様ともども御出席いただき、感謝状を贈呈出来たこと、祝賀会での演壇前で古い会員と楽しそうに手拍子で歌っておられた姿、笑顔が今でも脳裏に焼きついている。

勝山病院を辞された後も名誉院長として病院での診療にあたられ、その傍ら御自宅でも池田医院として訪れる人を診られた。一九九九年九月十二日、診療中に突然心筋梗塞に倒れ救急車も間に合わず、「死ぬなんて本人も考える暇はなかったでしょう」と奥様の言、最後まで幸せな方であった。

この稿を書くにあたり多くの方から御教示いただいた。想像をはるかに越えた御活躍と御苦勞に今までの自分の不明を恥じ、同時に執筆者の責任と光榮を痛感した。古い会員によれば、先生は支部会員の活動に何の干渉もされず、何かがあれば蔭で黙って尻拭いをしてくれた懐の深い人であったということである。私たちにとりひたすら優しい慈父的存在だった池田氏に、いずれも個性の強い先輩山男達が私淑したのも少し判る気がする。

でも先生の本音は、「個人の山歩きの思い出として、私は河本氏と二人とも頭の天辺から足まで例のアメリカ中古装備の見すばらしい姿を並べながら、ガモフからモーム、河本氏の脱俗的な驚くべき高邁な弁舌を承りつつ、弥次喜多道中と称してヒョロクラ、ヒョロクラと各地を徒歩で遍歴した頃が最も懐かしい」

(石川支部二十周年記念誌『峰』より) この辺りにあったような気がしてならない。九九年本会永年会員になられた。

池田先生本当に有り難うございました。

(津田文夫)

## 松長晴利氏 (一九〇九〜一九九九)

一九九九年十二月二日、松長晴利さんが逝去されたとき長男宗利さんから電話があった。聞いておきたいことがあったのに、もう永久にできなくなつた。

松長さんを知ったのは、松長さんが会長をしていた「愛媛山の会」に私が入会した一九五〇(昭和二十五)年からで半世紀に及ぶおつきあいである。

松長さんは一九〇九(明治四十二)年三月二日生まれで、薬局を経営していた。日本山岳会へは村井米子さんの紹介で一九四九(昭和二十四)年十二月に入会、会員番号は三七一六号であった。一九九九年永年会員になられた。

松長さんが、山岳会と直接かかわりをもったのは、一九五三年十月、石鎚山で行われた第八回国体であろう。当時は、日本山岳会が国体運営の責任をもっていた。愛媛県山岳連盟の理事

長をしていた松長さんが二十歳近く年下の私ら若輩を指揮して無事終了した。その後、松長さんの活躍の場は翌五四年結成された全日本山岳連盟(後に日本山岳協会に発展)となる。日山協の理事、副会長、顧問をつとめた。その間出会った本会会員の武田久吉、松方三郎、今西錦司、加藤泰安(伊豫大洲藩主の後裔)ら各氏の話をよくしてくれた。

十数年前、今西錦司さんら一行が四国の山に登りに来たことがあった。松長さんは行動をともしないで、そのときのことを折にふれて話していた。その後、松長さんが相談したいことがあるからというので自宅を訪ねると、一通の手紙を見せて協力を頼まれた。その手紙は、一九八九年十一月三十日付、京都の伊藤潤治さんから松長さんに宛てたものでその内容は、

「暑中お見舞い申し上げます。本年は、お元気で傘寿をお迎えになりおめでとうございます。」

―(中略)―

ところで登山の方はさておき、小生かねてより、高頭仁兵衛著『日本山嶽志』の山山を地形図に位置付けの念願を持ち図上彷徨をこころみてきました。けれども、かつては郷土でその名のあった山でも、わずかな歲月の間で、思いがけない変遷を感じさせて、てこずらされました、なかなかすんなり運ばず、錦地伊予國領でも次の如く迷子をかかえており、この際これらの所在点・標高・現在の呼称等ぜひお世話になって明確にいたし

たくご厄介をお願いに及びました。

一、小田山 伊予國上浮穴郡・土佐國高岡郡二跨ル、上浮穴郡  
 参川村大字本川ヨリ三里ニシテ其山頂ニ達ス

—(以下十七山名とその説明略)—

どうもご災難でしょうがご助力のほどよろしくお願いいたします  
 す

というものでした。

松長さんと意見をかわしたり、自分で調べたりして二、三年  
 が過ぎた。苦勞しながら、一つの山が判ると面白くなると共に  
 伊藤さんの雄大な構想に感心して、直接情報や意見をかわした  
 りもした。十八座の山のほとんどが判明するころ、私の関心は  
 この日本山嶽志から離れて、日本山岳会会員「高橋恒麿」に移っ  
 た。高橋恒麿は松山市出身で会員番号で発起人七名に次ぐ八番  
 で、入会は、これも発起人七名に次ぐ一九〇五(明治三十八)  
 年十二月である。発起人のいる東京都、神奈川県、新潟県から  
 遠く離れた四国愛媛県松山の地で、山岳会のできるのを何で知っ  
 たのであろう。『日本山嶽志』からではないと思う。松長さん  
 が武田博士の話をしていたのを思い出す。松長さんは日山協の  
 理事や副会長、顧問をしていたとき、会長の武田久吉氏から、  
 松山出身の「高橋恒麿」のことを何か聞いていたのではないだ  
 ろうか。日本山岳会の発起人である武田久吉氏は、会員番号八  
 番の「高橋恒麿」の名前が頭の中にあつたものと思われる。松

長さんが所蔵されていた山岳書のほとんどは私が譲り受けてい  
 る。その中に「伊豫文化史の研究」景浦稚桃著という書物が混  
 じていた。松長さんは「高橋恒麿」の名を知らされて、この  
 人のことを調べようと思っていたのでなからうか。私がそう考  
 えるようになったころ、松長さんはすでに入院されており、あ  
 の抜群の記憶力もご家族の話では、大分衰えたということであつ  
 た。お元気なときにこのことをお聞きしておくべきだったと思  
 うが、今となっては、もうそれもできない。

日本山岳会創立百周年記念事業として仮題『(新)日本山岳  
 志』の編纂が計画されているようだが、松長さんと一緒にした  
 伊藤さんから依頼の「日本山嶽志」の伊予国の山山の調査の成  
 果を松長さんと共に確かめることもできなくなった。謹んでご  
 冥福をお祈りする。

(池田 悟)

## 堀内章雄氏 (一九三三〜一九九九)

堀内章雄さんのこと

一九九九(平成十二)年一月十一日、堀さんが入院していた清  
 瀬市の国立療養所東京病院で亡くなったという知らせを、事務

局の田村典子さんからいただいた。夕刻には通夜、翌朝には茶毘に付され、遺骨は故郷信州に帰られるとの事であった。前年、兵力（渡辺）、小原俊、丸尾祐治さん達と見舞った折の痛々しい姿に、再起はないだろうと思っていたものの、訪れるべき時が来たかと思った。ナンダ・デヴィ隊の仲間達に連絡をとって、あわただしく療養所内の霊安室に駆けつけた時には、堀さんは安らかな顔をして生花に包まれていた。長い闘病生活と狭い交友関係を反映してか、枕頭には、松田雄一元副会長、水野勉、児玉茂、永田秀樹、田村典子さん等十指に満たない友人達で寂しい限りだった。

二月六日、須坂市で行われた告別式には、七三年信濃支部アンナブルナー峰登山隊の関係者、ナンダ・デヴィ隊を代表して桐生恒治さん等が参列してくれた。また、斎藤惇生会長（当時）が心のこもった弔辞をご用意して下さった。

堀さんは、一九三三（昭和八）年三月三十日、長野県須坂市春木町に、八人兄弟（男四・女四）の長男として生を享けた。

一九五一年県立須坂商工高を卒業後、大阪大学を目指して市役所で臨時職員を勤めながら浪人生活を送られたそうである。阪大受験に失敗し、五五年三月、後続する弟妹達を勘案し、地元の日通運株式会社に入社され、その後東京へ転勤、川崎病により退職されるまで勤務された。

一九七四年秋、待望のガルワルヒマラヤ解禁との情報を得、

翌七五年から私達は鹿野勝彦さんをプロジェクトリーダーとしてナンダ・デヴィ縦走を目標に活動を開始した。不幸な結果に終わった信濃支部創立二十五周年記念事業アンナブルナ登山隊から帰国後の堀さんは、ネパール協会等で交際のあった鹿野さん、近隣に住む（当時は杉並区に在住）梶正彦さんとの関係もあり計画当初から登山隊を支援してくれた。当時ナンダ・デヴィ浪人であった私は、堀さんが勤務されていた日本通運大井埠頭コンテナ輸送支店で、メッセンジャーボーイとしてアルバイトをさせてもらった。堀さんは経理係長で、眉間に縦皺を刻んだ融通の利かない直言居士の存在に、課長、他の係長、主任達をはじめ全員が気を使っていた。インテリの堀さんは、少しブルーカラーを軽視する傾向を持っており、経費清算等の杜撰さにはしば口をとがらしていた。昼休みにソフトボールをする私達を腕組みをしながら、苦虫を噛んだような顔をして、決してゲームに参加する事なく見学していた。ナンダ・デヴィ隊の準備会は、平日はルームを拝借、週末は名古屋から上京する鹿野隊長の下北沢宅で行われていた。堀さんは私達事務局の会計から事務一般のすべてを取り仕切るとともに、縦走に最適な時期を選ぶために、デュブラ「もしかある日」、ママ「ヒマラヤの五ヶ月」、ガンサー「神々の御座」、シプトンやティルマンの記録から細かく気象データを拾ってくれた。隊荷の集積・梱包場所として大井埠頭支店の確保、夜間梱包用コンテナ、投光機の手配、

品川支店からのクレート梱包用木枠のもらい受け、輸送船舶の予約、ベンガル湾同盟への申請等、輸送・梱包担当であった私を指導するとともに、奔走してくれた。

日本通運を病氣退職された堀さんは、元々好きな道でもある登山、探検等洋書の輸入販売を思っていた。慣れぬ手付きでタイプをたたき、在庫リストを作成して送付してくれたこともあったが、病状が悪化する一方で、洋書の需要も大きくなかったし、所詮、殿様商法で開店休業の状態であった。『岳人』や『山と溪谷』誌上で新着洋書紹介の欄を担当していた時期もあった。

長く先の見えない闘病生活を続ける堀さんと、日常に追われる私の関係は、段々と疎遠になって行った。時折届く音信は、末梢神経障害による麻痺のため判読が困難になってきた。それに伴って、山岳会の登山計画、会務や私個人に対する辛口の論評には不愉快なものが多く、行間に不快感が漂うものが増えてきた。気晴らしに葉書を書きたいからネパールの絵葉書を用意しろとの注文もあった。堀さんは自己表現が下手で、好き嫌いが激しく気難しい人ではあったが、はにかみ屋で思いやりのある優しい人であった。

堀さんは幼い頃から戸隠山等故郷信州の山々と親しみ、一九五七年、小山智氏の紹介で本会に入会（会員番号四五八三）。

この前後、単独で徳本峠から槍ヶ岳、槍ヶ岳から雲の平、後立山等の縦走記録が残っている。一九七三年、信濃支部アンナブ

ルナ登山隊に参加。一九七八年、西堀栄三郎会長（当時）のお供でネパール、インドを訪問、ヒマラヤンクラブ二十五周年記念式典に参列して以来、ヒマラヤンクラブ終身会員となる。

一九八一年から四年間、水野勉理事のもとで『山岳』の編集委員として会務に貢献された。

（伊丹紹泰）

## 武田満子氏（一九三二～二〇〇〇）

武田満子さんは一九三二年千葉県登戸町に生まれ、一九五一年県立千葉女子高校を卒業して地理調査所に入所された。六〇年に地理調査所が建設省国土地理院になって測図部に勤務され地図づくりに携わった。測図部では本会の五百沢智也会員とも一緒であった。定年退職後も測量会社・榎かんこうに勤務され、やはり地図に関係する仕事をされた。

山登りは、出身高校の山の会・オカリナ山岳会に所属し、一九六五年深田久弥・加藤泰安両氏の紹介で日本山岳会に入会（会員番号六〇四五）している。一九五八年以降、中央アルプスや尾瀬、夏の北アルプス縦走などに出かけられ、国土地理院に勤められた後もオカリナの仲間や職場の同僚とともに残雪期

の後立山や飯豊連峰、奥秩父の縦走を行い、六一年十月には八幡平で実施された第十六回国体に参加された。その後冬の仙丈岳や富士山にも登っていたが、六八年以降は体調を崩されたこともあってか詳しい記録は残っていない。

日本山岳会では図書委員会、自然保護委員会、科学研究委員会に所属して活躍された。とりわけ地図に関する専門的知識は山岳会にとって貴重であり、会報に寄稿したり、三水会などで講演を引き受けていた。会報No.310には「富士山の三角点と高さ」と題して富士山頂にある二つの三角点の測量の歴史を解説、No.527には「見落されていた福岡県の最高峰」を寄せている。また、(株)地図協会の「地図の友」にも度々山と地形図に関する論考を寄せていた。

特筆すべきは、二万五千分の一地形図全数を揃えて図書室に完備したことであろう。全国で四千三百面以上もある二万五千図が全数揃っている所は国会図書館以外にはあまりなく、日本山岳会図書室でそれを随時引き出して調べることができるようになったのである。もとより、全数を揃えて整理するための費用と時間は半端なものではなく、その約半数は国土地理院が新しい図に差し替えるために入れ替えたものを彼女の顔でもらい受け、不足分は新しいものを買い足した。時間の方は、彼女が住んでいた土浦から足繁く通ったことはいうまでもない。これについては会報No.632に報告記事を書いている。

最近では有志閑談会の世話人を引き受けて充実したクラブライフのために尽力された。その後体調を崩し、療養しながらの生活と伺っていたが、二〇〇〇年を迎えて間もなくの一月十六日、土浦市の自宅で心筋梗塞により逝去された。

今年の彼女からの年賀状には、秋に散った朴の葉の裏表を観る山小屋の御主人の姿と、「裏を上」に散っているから今年はずが多い」という言葉を引かれて、「自然を深く見つめるその姿に、静かに心がゆらぎました」と書かれていた。

心から御冥福をお祈りいたします。

(松永康子)

## 宮崎辰雄氏(一九二一～二〇〇〇)

日本山岳会会員、兵庫県山岳連盟会長、前神戸市長の宮崎辰雄氏は、二〇〇〇(平成十二)年二月二十二日、午後五時二十分、呼吸不全のため神戸市立中央市民病院で死去された。享年八十八歳。

二十二日の夕方のテレビ放送のテロップで訃報が流れ、逝去を知った。ただ呆然とするばかりで、正に「巨星墜つ」としか言いようがなかった。

宮崎氏は一九三七年神戸市に採用され、助役を四期務めた後一九六九年より一九八九年までの五期二十年間にわたって神戸市長を務められた。半世紀以上もの永きにわたり神戸市政に携わり、神戸の発展のために尽くされた。「最小の市民負担で最大の市民福祉を実現する」との理念に基づき、福祉、環境、文化、国際港湾といった様々な分野の都市づくりで先駆的な行政を展開し、全国自治体のみならず各界からも注目を集めた。都市経営者としてのその偉大な業績は高く評価されていた。

一方、山好きの市長として全国的にも有名な方であった。

宮崎氏が私たちにとってかけがえのない人となったのは、一九六七（昭和四十二）年、神戸・シアトル姉妹都市提携十周年記念に、兵庫県山岳連盟として最初の海外登山隊をアラスカに派遣するにあたり、当時神戸市助役であった宮崎さんに団長をお願いしてからである。神戸・シアトル両市の登山家が合同でボナ山（五四〇〇<sup>フィート</sup>）の隣にそびえる四四〇〇<sup>フィート</sup>の未踏峰に挑んだ。宮崎さんもラッセル氷河のベースキャンプまで入られ、現地で指揮をとられた。日米双方の若い隊員のチームワークと天候に恵まれ、無事登頂を果たし「マウントコウベ」と命名した。また未踏のピークにも登り「ミヤザキピーク」と命名した。そして、帰国直後の総会において兵庫県山岳連盟の第三代会長に就任された。その第一声に「会員から遭難者を出さない、これが会長としての私の一番の願いである」と言われたのが印

象に残っている。以後三十三年間の長きにわたり会長としてご指導を頂いたことは、兵庫県の山岳界が深く感謝するところであり、日本の山岳界に対しても貢献されたものは計り知れない。神戸登山研修所建設に際し、初めは日本山岳会の東京・お茶の水にあった三角の形をした小規模の集會室程度に考えていたのが、宮崎さんの鶴の一声で現在のような立派な施設となった。この時の資金集めを始め、後年の数回の海外登山隊の派遣、スポーツライミング・ワールドカップ神戸大会の開催など、種々の事業計画実施において、宮崎さんのご尽力なくしてはなし得なかつたものは枚挙にいとまがない。

また、「山で死ぬな」「若い者はどんどん海外の山を目指せ」と口癖のように言われ、ご自身も寸暇をさいて、アラスカを始め、キリマンジャロ、ヨーロッパアルプス、ヒマラヤトレッキングにも行かれた。国内では剣、槍、穂高は言うに及ばず、近畿圏を含む有名山岳の殆どに登られており、利尻富士、立山の山岳映画にも出演された。

一方、日本山岳会には一九六七年八月に入会。日本山岳会が一九七〇年、エベレスト登山隊を派遣した際には、各自治体に呼びかけ、各都市から補助金を集めるなど貢献をされた。

著書『私の履歴書』によると、「山に親しんだ直接のきっかけは、小学生のころ父が時折つれていってくれた裏山、六甲山だ」と述べ、山について次のように語っている。私は兵庫県山

岳連盟の会長をしているからいっばしの岳人扱いされるが、私にとつての山は六甲山だ。六甲山への愛着がすべてといつてもいい。近代登山は六甲山から始まったとされ、著名な登山家も輩出している。藤木九三氏が大正時代に開拓した菅屋ロックガーデンが、日本のロッククライミング発祥の地である。また、新田次郎の小説『孤高の人』のモデルとなった加藤文太郎氏も六甲育ち。加藤氏は兵庫県浜坂町の出身で、植村直己さんの生まれた日高町にほど近い。ともに単独行が多く、若くして山に逝つた。これも奇縁というのだろう。そんな先鋭的な登山家の活躍を身近に聞き、山への関心は強まる一方だった。学生のころから市役所生活の初めにかけて、週末は信州行きの夜行列車によく乗ったものだ。そのころ夢に描いた海外遠征が実現するのはずっと後だった……。

まだまだ、山岳界のためお力添えを頂きたかったのに残念です。心から御冥福をお祈りします。

#### 略歴

- 一九一一（明治四十四）年九月三日 神戸市に生まれる
- 一九三〇（昭和五）年 姫路高校中退
- 一九三六（昭和十一）年 立命館大学専門部卒業
- 一九四一（昭和十六）年 立命館大学法経学部卒業
- 一九五三（昭和二十八）年 神戸市助役

一九六七（昭和四十二）年 日米合同登山隊団長として、アラ

スカ登山。兵庫県山岳連盟会長に就任。日本山岳会に入会。会員番号六三三一。紹介者津田周二・林茂

一九六九（昭和四十四）年 神戸市長に当選

一九七一（昭和四十六）年 エベレスト山麓トレッキング

一九七二（昭和四十七）年 国連人間環境会議政府代表。キリ

マンジャロ登山

一九七八（昭和五十三）年 仏、レジオン・ドヌール勲章受賞

一九七九（昭和五十四）年 名城大学から法学博士号を授与さ

れる

一九八三（昭和五十八）年 中国天津市榮譽市民に推挙される

一九八九（平成元）年 全国市長会特別功労者表彰。神戸市長

退任。西独、功労勲章大功労十字章受賞

一九九〇（平成二）年 兵庫県功労者表彰（地方自治功労）。

勲一等瑞宝章受章。神戸市名誉市民に推挙される。

一九九七（平成九）年 兵庫県功労者表彰（国際協力功労）

二〇〇〇（平成十二）年二月二十二日 逝去、享年八十八歳。

正四位に叙せられる。

#### 主な著書

『市民都市論』（昭和四十六年）日本評論社

『市民都市の創造』（昭和四十八年）勁草書房

『人間環境都市への実践』（昭和四十八年）日本評論社

『あじさいの心』（昭和五十一年）海文堂

『あすの都市経営』（昭和五十三年）勁草書房

『都市の経営』（昭和五十四年）日本経済新聞社

『欧米地方自治権の研究』（昭和五十四年）勁草書房

『私の履歴書』（昭和六十年）日経事業出版社

（兵庫県山岳連盟 森川 列）

## 増江俊三氏（一九三二～二〇〇〇）

会員番号六三三四、石川支部第五代支部長の増江俊三さんは、二〇〇〇（平成十二）年一月二日永眠された。享年六十七歳であつた。

およそ病とは縁のない人だと誰しもが思うほどの快活な人で、半年たった今でもヒョイと目の前に現れそうな気がする。

本来なら私よりも、増江さんの昔からの事を良く知る仲間や先輩は沢山いるのだが、長年増江さんのもとで事務局を務めた事をふまえて、氏の思い出を書き記しておきたい。

増江さんは明治大学山岳部出身で、家業の木材販売業をしなから山を登っていた。私が石川支部に入会した頃は、日本山岳

会は本部・支部会員制度だったので、支部会員の数も多かった。当時増江さんは支部の役員をされ、若手のリーダーをまとめる立場だったから、新米支部員の私達からすれば眼光鋭く怖い存在だった。記録を見れば、昭和三十年代の剣岳西面に向けての活動が一際目立ち、その頃増江さんが鍛えた若手が、更に私達を育ててくれた時代である。「いけんたん（剣岳池ノ谷）登るくらいで、アイゼンなんかつけるな！」とでかい目をさらに大きく開いて、怒鳴っていた声が、今でも耳に残る。

増江さんは判断力と決断力の鋭い人だった。一九六九（昭和四十四）年の元旦、山は猛烈な風雪となり、支部に加入していた金大山岳部が剣岳北方稜線の赤谷山に閉じこめられた。十一日間に及ぶ救助作業で、フラフラになって馬場島に下山した私達を迎えたのは「下山するぞ！」の一言であつた。皆疲れているのにと腹立たしく歩いたが、白萩発電所避難小屋まで下りると「この方が広くて体が休まる」と皆の体を気遣い、馬場島の混雑喧騒を事前に読んでいたのだった。

一九七一（昭和四十六）年、東部ヒンドウクシユの最高峰テリチミール（七七〇八<sup>メートル</sup>）に遠征した時、増江さんは隊長を務めた。BCに到着し目指すディルゴル南西稜を目前にした時、上部大雪田末端には巨大なハンギングアイスが迫り出していた。突然その舌端が崩れ落ち、南西稜全てを飲み込むような大雪崩を目にして、隊長はルート変更を決めた。南西稜を目標

にしてきた隊員は、目標変更にも当然面食らう。隊長の「登頂は果たしたい。しかし、全員無事に山を下りてくるのが一番の願いや！ でなければワシは日本に帰れん」の言葉が一番印象に残る。隊長としては皆が下山する迄、眠れない夜が続いたことであろう。登頂を果たしベースキャンプに降りてきた私達を待っていた言葉はこの時も「ヨー帰ってきた、サア明日降りるぞ！」の一言であった（この時BCではもう食料が尽きていた）。気ぜわしい隊長だったが、増江さんが隊長でなかったら、成功もまた無かったと思う。

一九七八（昭和五十三）年四月九日、支部総会で増江さんは第五代支部長に選ばれた。それから一九九七（平成九）年に至るまで、実に十九年間の長きにわたり支部の面倒を見てこられた事になる。私が事務局を担当してからも十余年の歳月が流れた。考えてみれば私は、増江支部長に反発しながら事務局を務めて来た。なぜかこの人には「右」と言われるとつい「左」と言いたくなる。仕事が忙しくて事務が疎かになると「忙しいから出来ない」と言うのは言い訳や！ 忙しいからこそ時間を惜しんでいろんな事が出来る」。正論だけに返す言葉が見つからない。で、事が成ると「ありがとなー」と人懐っこい笑顔が憎めない人でもあった。

一九九五（平成七）年十月には日本山岳会創立九十周年北陸ブロック記念式典を無事に終え、九七年には石川支部も創立五

十周年を迎えた。記念式典やトレッキングの準備に奔走していたある日、増江支部長から電話が入った。寝耳に水の支部長交代を告げられて激昂した私に、増江さんは不治の病を告げられた。石川支部の五十周年はいわば「俊三さんの集大成」と考えていただけに、言葉がでなかった。会員全員の協力で、何とか五十周年の記念式典を終えることが出来たが、私には大きな後悔が残った。出席出来ないと思っていた増江さんから、式典の前夜電話が掛かり「式典には出られないが、パーティーには顔を出すよ」と言われた時、準備に疲れていた私は、増江さんの真意も理解せず、パーティーでは挨拶の一言もして貰わなかった。後で思えばきつと増江さんは、参加して頂いた方々に心からお礼が言いたかったのだ。それが自身のけじめと考え重い病をおしてまで来てくれたのだと思う。その気持ちにくみ取れなかった自分のふがいなさに、今更ながら情けなく、残念でならない。それから旅立たれるまでの二年間、病院に会いに行くと、必ず奥様が付き添っておられた。献身的の一言では言い尽くせないほど、想像を絶するご苦労が有った事であろう。お元氣なときには毎年ご夫婦で、シルクロードの旅を楽しんで居られた。元氣になったら次は何処へ行こうと夢見て居られたのだろうか。今となれば目を輝かせて聞かされた、数々の土産話も懐かしい。「人生は奥の細道やぞ。最後の友達はおみさんしかおらん」といわれた言葉が俊三さんの心境の全てを物語って

いる。

最後まで死を受け入れることなく、その氣迫たるや凄まじい物が有った。十九年もの間、支部を守り、大きな声でいつも皆の気持ちを明るくしてくれた「俊三さん」。こよなく山を愛し、酒を愛し、仲間を愛した石川支部の豪傑はあまりにも早く逝ってしまったが、今も私達一人一人の心に檄をとばしてくれている。深くも、誠に心暖かな人間味の有る人であった。

(増江氏は一九六七年入会、紹介者小林雄次郎・真田昌孝)

(中川博人)

## 安田 武氏 (一九二七～一九九九)

### 登山装備とのかかわり

安田さんは、まず京都大学農学部林学科で林産化学を専攻し「闊葉樹混合パルプの製造」を卒論研究の課題とし、卒業後さらに東京工業大学で神原周教授(本会会員神原達氏父君)のもとで、合成繊維とくにアクリル繊維の製造研究に携わった。その安田さんを登山用繊維装備の材質と利用開発の研究に引きつけたきっかけは、なにであったのだろう。安田さんは、日本織物加工をのちに創設した安田三男氏の長男として京都に生まれ

たが、多くの山の先達を輩出した京都一中に学び、新潟高等学校で青春の日を過ごし、一九四七年京都帝国大学に入学。戦後間もない京都大学に伝統のある旅行部とは別に、藤平正夫(元本会会長、チョゴリザ登頂)、伊藤洋平(元本会東海支部長)、林一彦(サルトロカニリ登攀隊長)らによってあらたに創設された山岳部に入った(平井一正、AACKニューズレターNo.8、一九九八年)。入部したときにはかつての白頭山遠征隊の装備が部室に整理されており、グレンフェル布地のすばらしいテントが印象に残ったと話している(安田武・ヒマラヤ登山と繊維一九九七年 放送大学講義)。在学中の山行の記録はあまり残っていないが、四七年春には藤平、林らと冬季鹿島槍の天狗尾根を目指したが風雪と深雪で小屋岩下で引き返した。一方、山岳部同期の川口、岡本を中心に妙高の京大笹ヶ峰ヒュッテの修理、再興がはかられ、高校時代すでになじみのあった地域でもあったので、これに協力した。その後、五二年厳冬の伊藤洋平を隊長とする北海道知床半島の岬からの縦走のために、ナイロン地にポリ塩化ビニル樹脂をコーティング加工したテントを試作したあたりから、安田さんの登山用繊維とのかかわりが明らかになってくる。かなり重量はあったが、防風効果が良好と判断して、京都大学士山岳会の今西寿雄率いる一九五三年のアンナプルナII遠征では、東洋レーヨンの布地をもとに丸山工業にコーティングを依頼した。東京工業大学での研究経験を

活かして、企業の研究室で仕事を始めた頃である。しかしジェット気流の強風で、テントは破られ登頂はできなかった。このあたりの遠征との関わり、とりわけ登山装備の改良に同じように強い関心を持っていたアンナブルナ隊員の脇坂誠との緊密な交流、資料の検討などが安田さんを高所装備研究へとさらに強く駆り立て、この世界でのパイオニアとして情熱を傾けるきっかけになったのであろう。五七年には、脇坂らが中心となって

推進したチョゴリザ遠征隊が実現し、その装備の準備係の中心となってナイロンと綿交織の布地によるヤッケ、さらにテトロン・綿交織布地やビニロンによるテント試作、新たに製作したナイロンタフタによる国産羽绒服の試作に力を注ぐ。チョゴリザ頂上で平井が着用していた緑のヤッケの素材は、このとき試作のナイロン・綿のウインコルで、藤平が着用しているオレンジ色のヤッケはテリレン製である。わたくしはこの隊の装備係を担当した。安田さんにお供して、関西のめばしい繊維会社はおおかた廻って、原材料の提供にはじまり、試織と強度テストを依頼する日々をともした。安田さんは会社の社長室であれ、研究室であれ、はばかりなことなく訪問して、高所装備改善の重要性を説き、材料試作についての協力を熱意をもって依頼され協力をつきつきにとりつけられた。装備については、先年亡くなった土倉九三さんにも指導をうけたが、安田さんのまず材質開発から始める方法と、土倉さんの登山装備の専門店の協力を

得て機能的、総合的に装備の改善をはかり能率よく準備をすすめよという指示の間で、若い後輩として少々気疲れも覚えたことを、いまではなつかしく思い出す。

ついで六二年のサルトロカニリの遠征では、テトロン布地がさらに改良された。この布地はカラコラムと名付けられて、その年、堀江さんの太平洋単独航海のマーメイド号の主帆としても活躍、当時の国有鉄道の作業衣にも採用されたときいた。それに先だっては日本山岳会マナスル登山隊、その後はエベレスト登山隊に協力、のちに触れるように植村直己さんの極地防寒衣もつくっている。そのほか、一般衣類の改善についても多くの研究をかさねられた。実践を重視する熱心さのあまり、水に落ちた場合を想定して羽毛服をきたままバスタブにつかったら危く溺れそうになったと苦笑されたこともある。ときに奇抜な考えで、左右で素材がちがうズボン下が送られてきて、この保温性、着用のちがいを報告せよといわれる。寒中あえて自転車走らせてその感触のちがいを測ろうとしたが、いざとなると左右の足の感触などそう簡単に違いがわかりませんと降参したこともある。

#### 武庫川女子大学山岳部の顧問として

女子大学に着任してからは既に活動していた山岳スキー部の顧問として、若い女性ばかりの部員の指導に尽力された。妙高笹ヶ峰の京大ヒュッテ、付近の小屋などを利用してながら活発に

冬、春季の妙高でのスキー登山をはじめたが、六〇年ごろには部員も三十名をこえ、北海道十勝の夏山縦走も実行された。六五年十月には笹ヶ峰への登り口の三本木の上に、小さいながらレルヘンヒュッテを日下学長や部員、関係者の協力を得て作り上げた。ヒュッテの入口近くにはゲートのようにトチの木とイタヤカエデがあったが、その先は雑木や藪で、ヒュッテが見つけにくかった。女子部員だけの小屋だから、安全のために外部からはわかりにくい藪のなかに置くのだというのが安田先生のお考えでした、と大藤栄子、新本政子（日本山岳会員）山岳部OGからいかに安田さんらしい気配りの思い出話をきいた。京都大学山岳部、同探検部との交流を通じて、女子山岳部の力量を向上させようと考えられたようである。また部員には日頃から安全な登山の実践と同時に常に品格を重んじるよう、つまり個人の矜持を守れと説かれたという。その教育者としての指導精神は、いまなお武庫川女子大学山岳部の鳴松山岳会百九十名のなかに生きていであろう。なお安田さん自身も六〇年代に京大探検部の数次にわたる知床半島学術調査に協力、参加し探検部の活動にも協力を惜しまれなかった。

このヒュッテは、その後二階建てに改修したが、雪害をうけ一九八三年に収容力や規模がぐんと大きくなった二代目レルヘンヒュッテとして杉の原スキー場中腹に近いところに、地元竹田克己氏の協力のもとに大学の施設として新たに開設された。

#### その後の装備改善のための研究活動

安田さんの、被服材料学および高分子繊維化学的な研究活動は続くが、登山装備関係のことについて横山宏太郎（武庫川女子大学元講師、第三十五次南極越冬隊長、京大士山岳会・本会会員）はつぎのように語る。

「先生は様々な衣類装備を開発されたが、その性能を評価する基準は『実際に使ってみてよいものが本当によいものだ』という、一見ごく当たり前だが実はかなり難しいところにあったと思う。装備を開発するにあたって、先生は着用実験を重視され、自然にできるだけ近い条件を室内で再現することにも力を注がれた。家政学部の新館を建設する際に、先生の長年の理想を実現する機会が訪れた。小規模ながら温度・湿度制御ができる人工気候室を作られたのはこの分野としては最初に近かっただろう。気圧調整と降雪装置こそあまりに大規模になるため見送られたが、温度・湿度制御可能な二室をもち、降雨装置・日射装置を備え、温度マイナス五〇℃から六〇℃まで、湿度三〇％から九五％と、熱帯雨林から南極までの環境を再現する人工気候室が完成し、様々な環境条件で多くの実験が行われた。それでもなお、先生にとってフィールドテストの重要性は変わらず、登山などの際に試作中の衣類を自分で着用テストされることも多かった。また、登山隊、調査隊など厳しい自然環境で行動する隊に衣類装備の設計を依頼され、その結果開発された試

作衣類のフィールドテストを隊が実施することもよく行われた。

八〇年代は先生の研究のみならず啓蒙活動も含む努力によって、ゴアテックスが日本にもたらされ、各種の性能評価を経ながら、登山・スキーなどアウトドア分野を中心に普及していった時代であった。八五年はブータンヒマラヤ登山隊（京大山岳部、堀了平隊長）、パタゴニア氷河学術調査隊（文部省海外学術調査、中島暢太郎隊長）がゴアテックスの各種装備を試用した。このようなフィールドテストの結果について、追従やおざなりではない、齒に衣着せぬ評価を聞くことを大変喜ばれた。

テストのための短時間の着用などではなく、隊員たちが本当に普段の行動の中で着用してみることが、先生にとつての真剣勝負だったのではないか。ある年、故植村直己さんが武庫川女子大学に來られて講演された折に、一九七〇年の日本山岳会エベレスト登山隊で支給された安田先生の設計になるウインドジャケットを、ここぞというときには一番信頼できる装備としていつも携行していると伝えられたときは、先生はことのほかうれしうだった。極限の環境で行動した植村さんに信頼されたジャケットは、これ以上のぞめないフィールドテストに耐えた、先生の記念碑の一つである。

安田さんの専門分野については、とりわけ被服の改善について、美的な面と機能的な面を偏らず配慮して、どちらかの専門に立てこもることのないよう警鐘を発しておられたが、これは

最近の学問のありかたへの一般的な警告ともとれる。しかしわれわれ登山者にとりわけ関係深いのは、被服素材の快適性を追求するための、表面加工と被服のレイヤードシステムの研究であろう。安田さんの共同研究者、奥野温子教授からは今回多くの資料を提供いただいたが、その中に九九年の二月四日、日本山岳会関西支部で、登山と繊維と題して話された講演記録がある。前出のヒマラヤ登山と繊維、などを通じて機会あることに訴えてこられた考えがそこに記されている。即ち下着ははじめ登山用被服素材の吸水性と吸湿性に関するちがいに触れ、「水蒸気が衣料（素材）に入っていく『吸湿』と、たとえ吸湿素材でなくても組織構造に水が入っていく『吸水』との区別は大切である。この見地からすると、合織衣料の問題点は、『水は吸っても水蒸気は吸わない』ということである」。発汗や外部から水が浸入する条件下で体温を保持するには、現在のところ各種ナイロンに比べ、吸湿性のよい絹・羊毛にまさる素材はないという。安田さんはこの点を強調しつつも「もちろんただか十五年の合織の経験にはなかったことが、今後起こるおそれはない」と科学者らしくただし書きをつけている。また「植村直己さんの装備について思うこと」では種々の素材の特性を良く知った上で、極めてきびしい環境に耐えるための重ね着の順序を考慮すること、即ちレイヤードシステムの概念が述べられており、傾聴に値する。

昨年十月二日の早朝、むかし今西錦司先生と試みたが藪のために登頂はたせなかった、鳥取石見の大岡山にむかうため、京大土山岳会熱年組は新見インターチェンジで合流した。そのとき斉藤Yさん（本会前会長）から、安田さんは北白川の病院におられるが、予断を許さない状況だ、君も一度お見舞いするなら近い内にと、耳打ちされた。翌日山からおりて休憩所のみた新聞には安田さんの訃報があった。前日の朝、病篤いと大勢の山の仲間が心配したころに亡くなったことになる。三十年も前に、胃潰瘍の手術を受けた際の輸血で肝炎を罹病され以後長期にわたって、人知れず苦勞され、闘病してこられたようである。たまたま昨年春わたくしも京大病院第二外科で胆嚢炎からみの手術を受けたが、そのとき丁度向かいの部屋に安田さんが入院しておられた。患部をアルコールでつぶしながら過すのだといかにも入院慣れした様子で血糖値測定器などを一通り説明してくださり、時折個室のわたくしのところを尋ねてくださった。夏には家まで電話をいただきながら外国に出張中で、いずれまたとおもううちのお別れである。妹正子様に向うところでは、最後の病床では昔から親生まれ、またほとんど毎年のように学生を連れてこられた京都の五月、葵祭りのことを懐かしんでおられたという。

安田さんの日本登山界への貢献に改めて感謝し、心からご冥福をお祈りします。

略 歴

- 一九二七年 京都市に生まれる
- 一九四七年 新潟高等学校（旧制）理科卒業
- 一九五〇年 京都（帝国）大学農学部林学科卒業。この間京都大学山岳部員として冬季鹿島槍天狗尾根など参加
- 一九五二年 東京工業大学有機材料研究生を経て酒伊纖維工業（株）入社。ナイロンの織布、染色の開発に従事
- 一九五五年 武庫川学院女子大学学芸部生活科学科助教授。六二年同家政学部教授。九六年同名誉教授。長年にわたり同大学山岳部員を指導、笹ヶ峰の山岳部レールヘンヒュッテの設立に尽力。
- 一九六八年 日本山岳会入会。会員番号六四四四。紹介者住吉仙也・松田雄一
- 一九八五〇八六年 ミズリー州立大材料研究所客員教授
- 一九八七年 兵庫県功勞者表彰を受ける
- 一九八九年 日本消費科学会学会賞（功績賞）
- 一九九九年十月二日 死去。享年七十二歳。正五位勲三等瑞宝章叙勲

（高村奉樹）

## 矢田目 昇氏（一九三三～一九九九）

十月の第一日曜日は、三十数年来雄国山の清掃登山ということになっていて、喜多方での山関係の行事の時は矢田目さんの家が集合場所になっている。昨年のも十月も手術の後ということで、清掃登山には参加できないだろうが、様子見と元気づけを兼ね、集合してみたら、至極元気な様子だった。

「今年は行きたいだろうが我慢して養生に努めるんだね。来年の清掃登山には一緒に行けるから。そしていい季節になったから全快の祝賀登山をぜひやろう」などと言って出掛けた。

この雄国清掃登山も彼が始めた「山のゴミ持ち帰り」運動から発展して、雄国を占める三市町村と地元山岳会の年中行事として続けて来たものである。

それから一月後の十一月七日、矢田目さんが亡くなったと知らせにはしばらく言葉も出なかった。

矢田目さんは一九五五（昭和三十）年、親しくしている山好きなたちと図って「喜多方わらじ山岳会」を設立し、初代の会長になった。以来、「わらじ」の仲間たちと福島県の中でも会津の山々を精力的に歩き廻った。高い山、有名な山にも無関心だったわけではないが、何よりも会津の山、地域の山を愛し

ていた。

一九六二年には熱塩加納村黒岩の前の沢から大塚山に至る登山道を刈り開き、続いて翌年には大塚山から福島県と山形県の県境尾根を通るルートを開いたのも地域の山を愛した現れだっただろう。

熱塩加納から県境尾根越しの峠道は米沢に至る間道としてあったが、余りにも険阻だったため江戸時代半ばには廃道となり、どこを通っていたのかも判らなくなっていた。ただ越峠、十文字峠と鞍部に名前が残っているだけだった。

通る人もなく分からなくなっているところを切り開くというようなことは小さな山岳会の力だけで出来る訳はない。わらじ山岳会の唱道で始めたことではあるが、黒岩部落、小屋部落の大勢の人たちの協力があってこそ出来たことであり、その人達を説きつけ、協力を得ることができたのも彼の手柄のせいであった。

同じ六二年、喜多方地区五市町村による山岳遭難対策協議会設立委員となり、それ以来、警察、消防団、地域山岳会等による冬山、夏山の救助活動や救助訓練にいつも中心的役割を果たしてきた。また訓練には手術の直前まで元気な姿を見せていた。持ち前の行動力を發揮して、一九六七年には会津全域に互る山岳会をまとめ、互いに連絡、協力を図ろうと、越後支部の鈴木敏雄氏のアドバイスと援助を得て「会津山岳協会」の設立に

いたった。

六九年日本山岳会に入会（会員番号六八二〇、紹介者市村貞夫・藤島玄）、翌七〇年には、会津山岳協会の記念行事として、会津が他の県と接している県境全山を協会加盟の山岳会の持ち山、得意としている所に従って八つのブロックに分け、縦走踏査を果たした。

一九七二年、川入、五枚沢、黒岩、日中にかけての岩羽県境と呼ばれている飯豊山麓のブナ、ミズナラの伐採計画が決まったとき、自然環境保護、動植物の保護の立場から地元の人達と図り、あるいは伐採に協力して賃金をもらった方がいいという人達を説得して反対運動を展開した。今でこそブナ林や自然環境の大切さは叫ばれているが、まだその気運になっていない頃のことである。運動の結果、遂に前橋営林署から、伐るのは地元のナメコ、シイタケ栽培に用いるための択伐だけとするという事実上の伐採中止を取り付けた。その結果、大塚山から日中飯森に至る県境尾根を行くと、伐採されなかった福島県側と伐採の済んだ山形県側とは見事に対照的な違いを見せていた。矢田目さんの地元に残した大きな功績の一つだろう。

気さくというか、世話好きというか、山を仲立ちとする交流は本当に広がった。飯豊山と故藤島玄さんや鈴木敏雄氏を通して越後支部の人たちと幅広い友人を持っていたし、イベント好きというところもあって、JACの山行事も何回か引き受け、

ここでも幅広い交友があった。

山とは関係ないことだが、今ではすっかり有名になっている喜多方ラーメン会の会長に押しされ、業界の向上発展に努めた。近年は県の物産PR事業にも駆り出され、北海道から沖縄までラーメンの宣伝販売のため年の半分も家を離れていて、山に行く暇がないとほやいている有り様だった。その忙しさがつい病気の進行を気付かせなかったのではあるまいか。惜しいことであつた。

合掌  
（牧野牧夫）

## 相沢甚平氏（一九四〇～二〇〇〇）

多くの山を共にしてきた、宮城支部の相沢甚平会員が、この三月急逝された。享年五十九歳。あまりに突然のことで、私たちも一瞬耳を疑い、にわかには信じられなかった。支部には六十代は勿論、七十代でもお元気で山登りをされている会員が多いことを考えると、相沢さんはまだ若い会員の方に属していたからである。

相沢さんは、一九七四（昭和四十九）年六月日本山岳会の会員になられた（会員番号七七五四。紹介者伊達篤郎・板橋元一）。

その頃の相沢さんは、すでに仙台市役所山岳会の中堅会員として活躍されており、ほぼ時を同じくして入会されてきた他の市役所山岳会の方々と同様に、長く支部の会友的活動もなさってこられたので、なるべくして会員になられた実力派の方でもあった。

相沢さんの山行は、山岳会入会とともに一層多方面に展開されることになった。蔵王、船形、栗駒などをはじめとする宮城の山は勿論のこと、丁度さかんになりつつあった県外登山に乗って、火打岳、祝瓶山、朝日連峰、和賀岳、五葉山、秋田駒などの東北の山、そして関東、中部の山々に及ぶ。これに加えて、スキー行は数を知らない。いつも物静かに飄々として山を歩かれ、口達者な支部会員の会話を傍らで楽しまれているという感じの登山であったように思う。

相沢さんは、仙台市ガス局に勤める技師さんで、私たちの家庭に直結したガスの配管や点検、最新のガス器具の設置など、現場の最先端に立たれて仕事をされていた。会員の中にも相沢さんにお世話になった方が相当いた。一九七八（昭和五十三）年の宮城県沖地震の折のガス復旧の苦労話は、山で何度か伺ったが、人が困っていると自分のことを忘れて尽くすお人柄がよく偲ばれた。

相沢さんの技術者としての物の捉え方、扱い方は、山で大変役立つ場面もあった。何かが壊れて修理を必要とする時など、

いよいよ彼の番で、大概のものは応急手当てをして即座に直してしまふのであった。当然物の扱い方も私たちより丁寧であった。

相沢さんはスキーもよくされた。東北の冬山ではスキーが大事な道具で、支部会員のどなたも山スキーをなさるが、相沢さんは特にスキーが上手だった。スキーを履いて雪の上にいる時の相沢さんは、夏道を汗だくで登っている時の相沢さんとか違って、生き生きとしていた。そこでは思うがままの行動が發揮できていた。

そんな訳で、宮城支部の年間行事の中で、恒例となっている冬の山形蔵王でのスキー登山は、いつも相沢さんをお願いしていた。この時は三五郎小屋をベースにして、登ったり滑ったり、飲んだりの楽しい二日間となるのであった。

多分、相沢さんのスキー技術は、御自分の技術者としての本分とかかわりがあると、私は思っている。雪という媒体をよく理解し、自分の履くスキーと雪との関係をよく知っていたためだろうと思う。

もうひとつ、相沢さんで忘れてならないのは写真のことである。相沢さんは六・六判の大型のカメラを持参していて、山頂での集合写真などをいつも撮っていた。そのひとつひとつの写真がいずれも鮮明で、構図なども見事なものであった。

相沢さんはお酒も好きであった。本格的な日本酒党で、い

つも愛惜しむように実に旨そうに嗜む。よく鹿島台まで帰宅の途中、仙台駅でお酒を仕入れられていた。山でもそうだが酔うと少し陽気になられていつもより会話が弾み、やがて一番先に寝入ってしまうのであった。酒もまた山やスキーと同じように友であったと思う。

とにかく、永いお付き合いだったので相沢さんとの想い出は尽きない。あと一年もすると無事に定年を迎えられる筈で、その時は家族揃って山に行こうと話し合っていたという。仕事から解かれて新たな楽しい山登りを描いていたのだと思う。それは、山登りやスキーの面白さは、年齢を越えて楽しめることを永い経験から悟られていたことを示している。

家族からは勿論、職場でも山の仲間からも「甚平ちゃん」と呼ばれて親しまれていた相沢さん、その相沢さんと再び山に行くことは叶わないが、いつまでも「甚平ちゃん」との山のことには忘れないと思う。宮城支部では、今度の会報の「宮城山岳」に「甚平ちゃん」の追悼を載せることにしている。そこではおそらく多くの会員がこれまで「甚平ちゃん」と共有してきた楽しい思い出を語ってくれると思う。私は、ただ「甚平ちゃん」の御冥福をお祈りするばかりである。

(柴崎 徹)

## 和仁古 昇氏（一九一六～一九九九）

前年から病氣療養中だった和仁古昇さんは、一九九九（平成十一）年七月十三日永眠された。享年八十三歳。和仁古さんの登山歴は六十年を越えると思われるが、組織的な登山は一九四八（昭和二十三）年に熊本アルコウ会に入会してからであろう。それでも五十年をこえている。熊本アルコウ会は、熊本でもっとも古く（昭和八年創立）もっとも大きな（会員数四百五十名）登山団体である。因みに、この熊本アルコウ会が主体となり一九四七年に熊本県山岳連盟が結成されている。和仁古さんが、日本山岳会に入会されたのは一九七四年、五十八歳のときである。一九八六年、七十歳の時、この伝統ある熊本アルコウ会の会長に就任された。会長在任中の一九九一年には、熊本支部の副支部長にもなられた。

和仁古さんの登山は、熊本アルコウ会在籍五十年間、および日本山岳会在籍二十五年間を通じて、九州の山を中心に日本全国にわたり弛みなく続けられた。海外の山も一九九〇年、七十四歳の時、キナバル山（四一〇一m）に登り、一九九二年、七十六歳の時には支部設立三十五周年記念カナディアンロック・トレッキングに参加して元気に歩かれた。晩年になってからも

週二回のペースで熊本市近郊の山々を精力的に歩き健在を示された。

一九九七年、八十一歳の夏、熊本から若いグループと自動車  
で長駆南アルプスの北岳を目指したが、「勇躍して出かけたつもり  
でしたが、こと志と反して途中リタイヤのやむなきにいたり、ま  
ことに残念至極でした……」とお便りにあった。翌年、  
脊椎と膝の疾患（大腸ガン）のため、長い間入院加療中であつた  
君子夫人と同じ本庄内科病院に入院され、ついに復帰すること  
とはなかった。和仁古さんは次の略歴にもある通り、熊本でも  
老舗の和仁古（漢方）薬局を経営しておられたので、専門の薬  
草関係の諸団体、熊本記念植物採集会や、熊本野草の会などの  
植物研究グループにも深く関与し活動の輪を広げておられた。  
生涯を通じて少年のような無垢な心で山を愛し、山歩きに没入  
された。あの温顔に二度とお会いできないと思うと残念でなら  
ない。

…合掌…

## 略 歴

一九一六（大正五）年五月五日 熊本市水道町において父の経  
営する薬局の長男として出生

一九三七（昭和十二）年 熊本薬学専門学校卒業。熊本市の西  
郷外科病院に就職。

一九四一（昭和十六）年 中国の華中水電に転職。水質検査に

（従事し中国の山野を跋涉する

一九四六（昭和二十一）年 終戦により帰国。家業の和仁古薬  
局を継ぐ。

一九四八（昭和二十三）年 熊本アルコウ会に入会

一九七四（昭和四十九）年 日本山岳会に入会。会員番号七七

七八。紹介者 三谷孝一・玉名金助

一九八六（昭和六十一）年 熊本アルコウ会会長就任

一九九一（平成三）年 熊本支部副支部長

一九九八（平成十）年 入院

一九九九年（平成十一）年七月十三日逝去。享年八十三歳。

（本田誠也）

## 洲<sup>す</sup>寄<sup>さき</sup>幸久氏（一九三三〜二〇〇〇）

関西支部所属、洲寄幸久君は二〇〇〇年二月二十六日国立療  
養所刀根山病院で間質性肺炎のため六十六年の生涯を閉じまし  
た。付き添っていた夫人と愛嬢も気がつかないぐらい静かな静  
かな最後であったようです。

洲寄は一九三三（昭和八）年九月一日、洲寄幸吉・伊佐子の  
次男として兵庫県武庫郡に生をうけ東京に移って東京都立大学

付属高校、東北大学工学部鉱山工学科を卒業しました。

彼の生い立ちを語る時二人の人物に触れる必要があります。

まず叔父（母の弟）で著名な登山家であった小谷部全助氏です。洲寄が山登りを始めたのはこの叔父の影響からです。もう一人は小谷部全助の父であり、洲寄の祖父である小谷部全一郎という人物です。全一郎氏は秋田の土族の出でしたが肉親を失ない徒歩で上京、十七歳の時渡米を決意して北海道からカムチャツカに渡ったが密入国者として捕えられ送還、そのうち琉球から中国大陆を流浪し帆船の労働船客となってアメリカへ上陸し苦勞してエルル大学大学院を卒業、帰国後は榮職を断って北海道でアイヌ族の救済事業を行なって金田一京助博士に「アイヌ種族の救世主」と呼ばれた人だったので（『貨美社刊』「ジャパニーズ・ロビンソン・クルーソー」小谷部全一郎著、生田俊彦訳、より。訳者は洲寄の妹正子さんの夫です）。この全一郎氏の冒険魂が全助氏に、アイヌ族に向けられたやさしい心が母を経て洲寄に伝えられたのでしよう。

東北大学入学後山岳部に入部、私とは同期でした。彼の山歴を紹介する紙数はありませんが雪深き東北の山々、特に好んだ北アルプスなど数多くの山行を積み重ねて来ました。山での洲寄は強いことの外にズバ抜けた方位感を持っており、厳冬期飯豊連峰の自分の足さえ見えない猛吹雪の中でもピタリピタリと進路を示して行きました。またやさしい心の持主で人のことを

色々思いやり助けてやっていました。この人柄が先輩後輩からも敬愛され納骨の際行った「偲ぶ会」には、米寿を越えた先輩を始め各界から実に多くの人々が出席してくれました。

東北大学卒業後東北電化工業に入社、大間々工場在動中に幸子夫人と結ばれ三人の美人姉妹をもうけました。当時ちょっと陽の当たらなくなった鉱山工学科出ということもあってかどちらかと云うと会社運に恵まれず大阪に転じユニチカ㈱で定年を迎えました。しかし公害防除施設設計者としての彼の腕は高い評価を受けていたようで最近まで請われて設計の仕事が続けていたようです。

洲寄は生地であったこともあり関西の地を愛し、東京に家もあつたのですが、吹田市の地を「俺の終の住みかにする。」と言つてこの地で「山ももの会」という実に楽しい山仲間と山本孝太郎先生という優れた指導者を得て山行を続けておりました。

日本山岳会へは一九九三年入会、紹介の労は叔父全助氏の縁で望月達夫名誉会員と部の先輩塩澤厚さんをお願いしました。

関西支部へは、恒例の「餅つき大会」に私が入会予定者として連れて行ったのが初デビューです。私が関西を去ってからも支部の活動、行事に参加し支部報に記事を執筆しておりました。彼の明るい人柄と周囲の人を楽しみする性格は支部の方々にも愛されたようです。彼が一番楽しみにしていたのは関西支部主催のチロル・スキーツアーでした。自分のスキーにつ

いては何も語りませんでした、多分ビールやワインを飲んで楽しい話題をふりまき旅を楽しんでいたのでしょう。その最大の楽しみも今年は参加できませんでした。所用の為一足先に帰国された宗実慶子さんが葬儀に出席して下さいましたが、洲寄はチロルの話を聞きたかっただろうと思います。

彼がもう一つ楽しみにしていたのが私達同期中心で毎夏行っていた北海道東北放浪の旅でした。オンボロ車にテントを積んで約二週間「テレビ、電話、新聞、活字、女房」などという体に良くない物は一切なし、土地土地の新鮮な食材を料理し、何かサツマ白波を大飲み、昼は山へ登り或る者は絵を描き或る者は何もせぬ、という全く自由な旅です。洲寄が大腸ガン手術後この旅に参加し、どこまでも続く北海道の道路でハンドルを握って「生きている実感を味わった」と言っていたと後で夫人から聞きました。その彼も今年の旅にはいないのです。

短い期間ではありましたが日本山岳会、特に関西支部の皆様にはお世話になりました。

六十六年の生涯は当世では長いとは言えないと思いますが、かし彼は「十分に生きた」と思っているに違いないと信じておられます。洲寄は蔵王にある旧制二高以来の清溪小屋をこのほかに愛しておりました。私達は、洲寄は清溪小屋に居る、清溪小屋に行けば洲寄が待っている、と思いたいのです。

(川俣俊一)

## 会報「山」計報・追悼文一覧

二〇〇〇年一月号(六五六号)

追悼 鳥居 亮先生を偲ぶ(森 武昭)

二〇〇〇年四月号(六五九号)

海外の山 吉尾弘滝沢に死す(江本嘉伸)

## 支部だより

### 北海道支部

ミレニアムに三十一年目となる当支部は、支部委員を三十一人体制として、金井哲夫会員（秀岳荘第二代社長）の厚意により秀岳荘白石店（札幌市白石区本通一丁目南）三階に七・五坪のルームが実現し、二十一世紀一月の正式オープンに向けて支部文庫の整理と図書目録を作成中である。ルーム設置に至る経過は会報「山」六六〇号（平成十二年五月）九頁を参照していただきたいが、理事会で重複本寄託承認され、和書二百十三冊、洋書百十二冊を六月中旬にダンボール十二箱のパッキングにて佐川急便で拝受、六月三十日に来札された大塚博美会長に新ルームを見ていただくことができた。

今年は国土地理院の測量百年にあたる二座（茅室岳・旭岳）があり、茅室岳は四月三十日、旭岳は九月十日に記念登山会を実施、日程を調整しながら東西南北の四地区担当の登山会を企画している。北日高のペケレベツ岳（五月二十〜二十一日）、渡島のカニカン岳（六月二十四〜二十五日）、道北の平山・ニセイカウシュツペ山（七月十五〜十六日）、道東のニペソツ山（八月十九〜二十

日）、お月見山行としての摩周岳・西別岳（十月七〜八日）などであるが、冬の目玉山行となっている雪洞からのスキーでアタック「チトカニウシ」（二〇〇一年二月二十四〜二十五日）も期待されている。同好会活動は発寒川の沢歩き、岩登り、ゲルメの会、オンチコーラスに恒例の三水会が定着し、第四回作品展（つる、七月十九〜八月十六日）にはアルパイン・スケッチ・クラブの六人の作品が首都圏から特別参加されて好評だった。これはアルパイン・スケッチ・クラブ十周年記念山行（知床の山を登ってスケッチを楽しむ旅、六月三十〜七月三日）で羅臼岳・斜里岳で当支部の会員との交流登山の際に出展の話が持ちあがり、佐々木松男会員らの紹介によるもので、今後も楽しみである。

会員が二百五十人となり、広大な北海道全域への情報提供を年六回（奇数月の一日付発行）の「支部だより」に託しているが、高山植物盗掘防止ネットワーク、山のトイレを考える会、大雪山国立公園パークボランティア連絡会などからの要望・協力依頼もあり、「支部だより」の紙面構成で事務局はルーム集合の機会が多くなった。

第二代伊藤秀五郎支部長は、昭和四十八年の北海道青年大学の講演で「物質文明がもたらす自然破壊、精神荒廃の現代から真の人間性回復ということが、次の人類の課題であり二十一世紀は精神革命の時代である」と述べたが、当支部の親子登山教室（愛称「ファミリー・アルパイン・クラブ」FAC）を日高山脈のイドンナップ山荘周辺で八月四日から六日まで開催した。雨の中の沢

歩き、飯盒炊事、ワラジ作りなど子供たちよりスタッフの方が興味を示し、ボランティアで協力された会員や父母の固い連帯感が生まれ「自然と友だちになろう」というテーマが充実していた。

(新妻 徹)

## 岩手支部

全国高校登山大会開催の年であった。支部が加盟している県山岳協会が高体連登山部と共に主管団体であることから、平成七年以降準備や実施に支部の人達が精力的に係わった。無事に終わってみて、ともすれば県内の岳界で孤立しがちである支部の立場の改善には良かったと思われる。

四月四日、平成十一年度委員会・総会。盛岡市上田公民館。出席者は委員会十人、委任八人。総会は出席者二十人、委任四十。決算の承認及び事業計画、予算を議決した。

四月二十九日、月例山行。石上山砂子沢口、春の花や若芽の上のアラレの降るお天気模様、幹事菅原(敏)、高橋(夕)十一人参加。

五月三十日、月例山行。姫神山、あまり登られない田代口を往復し、相の山にも立ち寄った。幹事諏訪、十三人の参加。

六月十九〜二十日、春の例会山行。男和左羅比山、女和左羅比山、卯子西山、原地山、三陸北部にある一等三角点の三山を訪れた。幹事中谷、阿部(克)、十人参加。

六月十九日、例会と委員会。九戸郡野田村苦屋、夏の例会の具休案、「新日本山岳志」支部編集委員の件などを話し合った。幹事 中谷、阿部(克) 九人参加。

七月十一日、月例山行。駒ヶ岳、国見温泉からカルデラ周回、コクサ、ミヤマキンバイ、ミヤマダイコンソウ、オノエラン、イワブクロなどを満喫した。幹事松田、七人参加。

八月十九〜二十三日、夏の例会山行。新穂高温泉、三俣蓮華岳、黒部五郎岳、鷲羽岳、水晶岳、双六岳、笠ヶ岳、新穂高温泉。ガス、雷、雨も晴れもある五日間の山行であった。リーダー松田・サブ藤井、十七人参加。

九月一日、「岩手支部通信」第十三号発行。

九月十一日、「新日本山岳志」支部編集委員会。水沢市、菊池(修)委員長他六人出席。

九月二十五〜二十六日、秋の例会。夏油温泉、新日本山岳志の岩手県の山と執筆者案を決定。例会山行、経塚山。山頂部では物凄い風に遭遇やっと三角点にタッチする。幹事音石、十二人参加。十月二十三〜二十四日、東北地区集会。青森県むつ市、釜臥山。九人参加。

十一月三日、月例山行。七時雨山、寺田口から登り山荘に至る、紅葉を楽しむ山行。幹事内山、立花。十七人参加。

十二月八日、支部忘年会、盛岡シティホテル小天地。幹事諏訪、十八人参加。

平成十二年一月二十日、「岩手支部通信」第十四号発行。

二月五〜六日、東北地区集会。山形蔵王六人参加。

三月十九〜二十日、月例山行。焼石岳。リーダー佐藤英夫サブ菊池修。スキーを付けての雪山の醍醐味を存分に味わいながら山頂を極め、ストックを挙げて祝った。七人参加。

三月三十一日、会計監査。藤岡監事、棚田監事他事務局三人出席。

(中谷 充)

## 秋 田 支 部

平成十一年度の当支部の活動は、設立四十周年の記念事業が中心となった。

四月十七日に定期総会を開催し、委任状を含め四十五人の会員が参加した。記念事業を中心とした事業案、決算・予算案が提案され、全議案を原案通り承認した。

支部山行(すべて「記念」を冠した)は、以下の通り。

①四月十八日、岩手県境にある残雪のモッコ岳に六人が登頂、快晴の山頂で四十周年万歳を三唱、三六〇度の展望を楽しんだ。

②五月十九〜二十四日、韓国の雪岳山(ソラクサン・一七〇八<sup>ハム</sup>)と五台山(オーデサン・一五六三<sup>ハム</sup>)に十一人の登山隊を結成し、韓国山岳会、同慶南支部の岳友と共に登山、交流を深めた。

③六月二十日、県北部の丘陵地にある羽保屋山に総勢二十二人が登頂した。この山は、近くにある鉾山の煙害復旧のために植樹さ

れたニセアカシヤが見事に山肌を覆い、古くから里人の信仰の対象にもなっている。この帰途、八人が途中の一等三角点「高森」に再度登頂。

④十月十八〜十九日、全国支部懇談会岐阜養老大会に参加のあと、荒島岳と白山に十人が登頂した。

記念事業としては、以下の通り。

①六月二十八日、「日本一低い富士山」のお墨付きのある、通称「明田(みょうでん)お富士(三五<sup>ハム</sup>)」と呼ばれる丘の頂に記念の標柱設置とソメイヨシノの植樹を行った。

②十一月二十〜二十一日、四十周年記念式典と祝賀会を、男鹿市門前の磯乃家族館に本会から会長代理の大森副会長と、本会百年史編纂委員会の松田雄一氏にご臨席をいただき開催、会員二十八人が出席した。

松田雄一氏から「百周年を迎える日本山岳会」、大森副会長からは「中高年登山者の医学的諸問題」と題した講話をいただいた。

祝賀会は盛りだくさんの海鮮料理に舌鼓をうちながら、四十年の思い出を語りあい、夜遅くまで盛り上がった。

③十一月二十八日、秋田市民のシンボルである太平山の山中に、会員名簿やスナップ写真、思い出の品々を詰めたタイムカプセルを埋設した。十年後の開封が楽しみである。

④「支部会報」第一号から第四十号までを合本し冊子に製本、設立時からの全会員名簿を含む記念誌を発行し配布した。さらに、バンダナ代わりにもなる和手拭を作り会員に配布した。

そのほか、支部会報「秋田山岳」は三回発行し、通算四十五号となった。また、本会が開催する諸会議、自然保護全国集会、東北地区集会および、県内山岳団体等の会議・事業に積極的参加し、情報の収集と交流を深めた。本年度は二人の会員が故人となったが、三人の新会員を迎え、総数七十三人となった。

(鈴木要三)

## 山形支部

一九五〇年四月三十日、本支部が月山山頂で産声をあげて五十年の節目の年だ。支部長も後藤幹次氏に始まり村上勝太郎氏、大橋克也氏、梅津博氏に次いで五人目に入っている。

昨年度は大幅な役員改選に加え、事務局の庄内への移動等で手探り状態が続いた。そんな中で今年二月上旬、本部より大塚会長、小倉、大森両副会長の出席をいただいた「二〇〇〇年東北地区蔵王集会」では、六十二人の会員が集い、好天の冬の蔵王の山を楽しんだ。

そして三月中旬、二泊三日の「鳥海山スキー登山」は、首都圏、宮城と福井支部からの参加があり総勢三十七人の盛況であった。トレースを付けたところがコースという消滅しつつある「宮様コース」を登って滝の小屋に入り、早春の風雪の合間を縫ってボサ森まで登ることが出来た。四月上旬、「アルペンスキークラブ全国集会」の後援で、湯殿山と月山に登り、そして滑った。これらは、

本支部の特色を存分に生かした活動といえる。

また、鳥海山南麓スキー場開発計画に伴って始まった、本部自然保護委員会による自然保護運動がある。その一環としてのイヌワシの生息調査、さらにそれを引き継いだ本支部会員佐藤淳志氏を中心とする鳥海山ワシタカ研究会活動の集大成が、「鳥海山南麓のイヌワシ」として二月に出版されたことも特筆に値するものである。

その一方で、五十周年記念行事、「新日本山岳志」への取り組みの遅れや支部活動活性化への組織改革等、今後の課題も目白押しである。

このような実績と課題を踏まえて、二〇〇〇年度支部総会を開き、今年が動き始めた。中心は何と言っても十月二十八・二十九日の「支部創立五十周年記念事業」。取り組みの遅れもあり内輪だけの小規模なものにならざるを得ないが、記念事業として「とっておきの展覧会」、「摩耶山」の記念山行および「海外登山」(来年度)を柱にして、総務・祝賀・登山・展示部門に分けて準備に取りかかっている。また、その他の活動として、各地域会員担当で夏の八方尾根、秋の最上神室山、冬の樹氷原を滑る会、早春の鳥海山スキー登山、春の湯殿山スキー登山等を支部山行として計画している。

組織改革としては、現在の事務局中心の支部運営から、委員会中心にし、より広い基盤の活動にしていきたい。会員はいずれかの委員会に所属することを原則として、山行企画、スキー企画、

写真・絵画、自然保護、海外登山研究等が考えられるが、設置委員会は今後の課題だ。また、支部晚餐会前後の時間を活用して、写真・スライド、作品等の展示説明会的なものを設け、支部活動の基本に据えている個人山行、活動の報告会、本部晚餐会で予定されている山岳写真展の支部版的なものとなればと思っている。

役員の任期は二年ということで、昨年度と同じ。また、元支部長村上氏と前支部長梅津氏には顧問としてご指導をいただくことを総会の席で承認し合った。

今年度の支部会員構成は七十人、その内一人が他支部所属となっている。

(木村喜代志)

## 福 島 支 部

平成十一年度は、懸案であった五十周年記念誌の刊行を前年度に果たして二年振りに平年度の事業計画に戻った。しかし諸般の事情によって実施を見合わせたものもあり、いささか不満の残る一年と内省している。

### 1. 実施事項

#### (1) 定時総会

平成十一年六月十九日(土)福島市「はりまや」にて開催。十年度決算、十一年度事業計画予算案を審議、佐久間支部長以下十八人参加。

#### (2) 吾妻小舎納涼集会

平成十一年九月四(五)日(土、日)福島市「吾妻小舎」にて開催、県内外の登山者に季節を通じて利用され、親しまれた小舎での集会を支部行事として定着させようと企画した。

一日目・夕刻小舎集合、前庭でパーベキューの晚餐、メニューは「はりまや」のオーナー兼シェフ大谷副支部長の多彩なメニューで蓋を開けた。後段は星空を見上げて食前酒の酔いを放散させながら無辺の天空に思いを馳せようとのロマンチックな趣向。星空の観測には二〇〇の反射望遠鏡二基と八〇の屈折望遠鏡一基を渡辺千代蔵会員が運び上げて小舎入り口の駐車場に設置した。夏空の天頂に巡り来た「こと座」のリング星雲、「ヘルクレス座」の球状星団を観望してしばし宇宙の神秘を垣間見た。

二日目・朝食後一切経山、鎌沼周辺を散策のち自由解散。支部長以下十三人参加。

#### (3) 秋山集会

平成十一年十一月四日(日)阿武隈高地の中央部に位置する日山(岩代、常葉、葛尾、三町村の境界にまたがる)に登ることにした。阿武隈高地の山で一〇〇を越える頂は片手の指に満たない。そのひとつがこの日山、そして富士山の見える北限の山といわれている。この日は折からの秋晴れに恵まれたが、地平線が靄で霞んでいて富士山を確認することはできなかった。それでも那須、安達太良、吾妻の連峰群、双葉、相馬の山なみなど三六〇度の展望をほしいままにした山旅であった。

2. 本部、東北ブロック諸会議への出席

(1) 支部長会議…平成十一年五月十五日、東京都グリーンホテル、十二月四日、高輪プリンスホテルにて開催され支部長出席。

(2) 年次晚餐会…平成十一年十二月四日、東京都高輪プリンスホテルにし開催され、三人出席。

(3) JAC東北地区集会…平成十二年二月五～七日 山形市蔵王パラダイロッジで開催され、一人参加。

(4) 各支部事務局担当者会議…平成十二年二月二十六～二十七日、東京都九段会館にて開催され一人出席。

3. 実施を見送ったもの

(1) 新年会(中止)

(2) 安達太良山、西吾妻山スキーツアー

二月、三月の最終日曜日に実施する恒例行事は、事業担当幹事の都合と大雪による道路事情の悪化を考慮して中止した。

(安藤 治)

## 信濃支部

古くからの信濃支部会員の多くは、自身が「山や」であり、信濃支部も「山や」の集まりであり続けてほしいと願っているように、私には思える。そして、「山や」でありたいと願っている会員からみると、信濃支部の現状は必ずしも満足のいくものではないのである。一体「山や」とはどういう人たちを指すのか、

これがあまりはっきりしないし、人によって少しずつ見方が違う。感覚で捉えている部分かなり大きく、具体的ではない。信濃支部の諸先輩から、「山や」の会にせよというご意見を聞かされても、これを具体的にどうすればよいのか、なかなか思案が浮かばないのである。

話を交える。一九七三年アンナプルナ登山隊の遭難以後、信濃支部の雰囲気が大きく変化した。アンナプルナ以降、信濃支部の会員は未知の山(本人にとって未知であればよいとする)にチャレンジしていくような果敢な行動を表面に出さなくなったのである。会員の高齢化が加わり、全体としては、行動力の減退はやむを得ない点もあるが、決して種火は消えたわけではないと私は見ている。支部会員の山行活動がお互いの間に出来るだけ伝わるようにしていけば、お互いが刺激しあって、登山活動が活発化すると思込んでいる。このため今年から、信濃支部ニュースレターを発刊した。これによって、私の期待通り「山や」の会であることが顕在化して欲しいと願っている。

もう一つ、支部会員の登山技術の維持・向上についてである。

「山や」の会である以上、登山技術を持たなければ、「山や」としての活動は成り立たないと考えている。これには抵抗を感じる支部会員がいると思うが、技術のレベルはともかく、登山技術の重要性を認識して欲しい。登山技術の維持・向上について昨年の役員会でも検討したが、アンナプルナ以降四半世紀のブランドがあり、会員の高齢化、指導者の確保等について今後の課題とした。

信濃支部が「山や」の会として存続していくための具体的な方策は、現時点では、会員山行の情報交換と、登山技術の維持・向上にあると私は考えているが、如何であらうか。

ところで、私の見るところ、信濃支部をくくるもっと大きな枠が他にある。どんな枠かという点、信濃支部会員は、みんな田舎人であるという枠である。極論に聞こえるかもしれないが、信濃支部には都会人はいないのである。たまたま仕事や住居の関係から都会に住んでいる会員はいるが、持っている感性は田舎人である。人工的な都会より、田舎の自然を優先して選択していると思うのである。信濃支部には「山や」でありたい人も、それにはこだわらない人もおり、皆が「山や」である必要はないが、田舎人という枠は最も大事にしていきたい。

(山浦源太郎)

## 山 梨 支 部

山梨支部では山岳環境と登山の将来像について探ってきた。九十五年より足かけ三年でフォーラムを開き、特に南アルプス北部については白根三山を中心に仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳と名山が集中しており、野呂川林道の開発により北部山群が近くなり、夏期には驚くばかりの入山者だ。三つの国立公園、一つの国定公園、二つの県立自然公園があり、全国有数の自然を残した県である。この環境を保護し、自然を残してゆくためには何をなすべきか、河川の汚染を防ぐためには、山小屋のトイレを考えるべきだ。その

結果、大樺沢二俣に公衆トイレが昨年より設置され、沢の水質はすっかり改善されている。この結果は環境庁にも報告されており、さらに今後の山小屋トイレについても広く働きかけてゆく必要があると考えられる。

今年には八王子の会員の方々に誘われて十日間、フランス・イタリア・スイスの国境を山峡のホテルや山小屋に泊りながら山岳スキーを楽しんできた。この報告を四月の総会で行った。これに少しは刺激されてか、本年の行事計画に上高地山研への一泊山行が実現し、十九人の参加をみた。一班焼岳、リーダー坂本桂氏、二班リーダー岩間弘雄氏と二班に分れ、七月一日山研に到着、上高地を散策し、夜は管理人の木村さん夫婦と共にワインを酌み交わし、うちとけた懇親会になった。明日の天気を気にしながら九時には床につき、翌日は焼岳組は五時に、徳本峠組は六時に出発。上天氣に恵まれ、それぞれ山研をあとにした。私は懐かしい徳本峠組に参加し、ゆっくりと四時間ばかり新緑を楽しみながら登った。峠の小屋は昔のまま、開発された上高地からは取り残された感じの峠。帰りのバスで一班、二班の報告を受けながら、本日より差入れの「八海山」で盛り上った。七月二十三日はレジャー登山で当番に合わせて、支部山行とし櫛形山へ山行を計画、十数人の参加をみた。下山後駐車場近くで懇親会を催し、岩間夫人の手料理で盛り上った。次回の山行についても幾つか候補地が上がったが、八日の委員会で決めることにし、散会となった。

(古屋学而)

## 静岡支部

平成十一年度の支部活動は、五月十一日（火）の支部定期総会で、事実上の幕を開けた。毎月の例会に用いている静岡市の労働会館において、水野公男副支部長の開会の辞に続き大石惇支部長の挨拶があった。

来年は静岡支部創立五十周年の年に当たる。創立当初の昭和二十五年は、戦争が終わって国民が大きく希望と夢を抱き始めた時期で、それまで休眠していた登山活動も爆発的に燃え上がった時代であったと言える。それから五十年間、会員の健全な登山活動を通じて、静岡県のみならず国内の「登山」という文化の発展に大きく関わって来たこと、これを支えた会員諸氏に敬意を表し、創立百周年に向けてどのような芽を育てて行けばよいかを考える節目にしたいとの言葉があった。

平成十一年度の支部総会は、支部会員数百二十人（団体会員一団体、個人会員百十九人）に対して、出席者三十四人、委任状六十一人、計九十五人で、支部規約第五条により会員総数の過半数に達し成立した。

第一号議案は、平成十年度の事業報告、会計報告があり、静岡県は東西に長い支部の一改善策として、九月例会を東部地区の富士市で、十月例会を西部地区の掛川市で開催したが、平成十年度からの初めての試みとあって、出席者が充分とは言えず、今後PRの必要性があるとの話題が出た。続いて第二号議案の平成十一

年度の事業報告、予算案を可決した。第三号議案は五十周年記念式典に関するもので、次のような記念行事の骨子が報告され会員の協力が要請された。

日本山岳会静岡支部創立五十周年記念事業（草案）

■記念式典 平成十二年十一月十一日（土） ニッセイ静岡駅前ビル二階

一二〇〇〇〜一三〇四五 記念式典

一四〇〇〇〜一五〇一五 記念講演会

移動 貸切バスにて井川青少年自然の家

■記念祝賀会 井川青少年自然の家

一九〇〇〇〜二二〇〇〇

■記念山行 平成十二年十一月十二日（日） 山伏岳

登山組 七・三〇出発 山伏経由 梅が島……静岡駅

散策組 自由行動 一四〇〇〇頃バスにて静岡駅

参加予定者 約百人

■記念誌の発行

■山行 台湾・玉山、雪山（平成十二年四〜五月）

韓国・雪岳山（平成十三年度春）

第四号議案は役員改選であり、創立五十周年記念もあって、十年度の役員がそのまま留任し記念事業を推し進め、必要に応じて役員を加えながら協力願うこととした。

平成十一年度の支部秋季定例懇親山行は、十一月十三〜十四日にかけて、静岡市井川田代の民宿「ふるさと」に一六・三〇集合、

翌日樺島の鳥森山（一五七〇・七<sup>分</sup>）に登り、赤石岳の眺めを存分に楽しんで往復三時間の行程を終えた。参加者二十八人。

支部会報「支部通信」（第四六号）の発行十月。

「支部通信」（第四七号）の発行 平成十二年三月。

（大石 博）

## 東 海 支 部

平成十年度、各委員会の充実に力を注いだ東海支部では、十一年度に入ると、東海支部本来の姿というべき海外遠征を三隊次々に送り出した。

青年部主催によるカナディアンロックイ登山隊（滝根正幹隊長）は七月六日、滝根、田辺治、三好学の三人がアシニポイン北壁、小川繁、金田博秋、鈴木美代の三人が同峰北稜を登攀。中高年隊（箕浦靖夫、中田晴紀子、中世古直子、石田好子）がナビピークに登頂。別動隊の尾上昇らはカナダの国立公園のし尿処理、レーンジャー制度などを視察した。

一九八八年に始まった実年隊によるインドヒマラヤ登山は、鈴木常夫らの努力により、ほぼ隔年ごとに実施、九九年の第六次登山隊（鈴木常夫総隊長、水野起巳隊長）は、複雑でもろいウムド・カンリ峰（六六四三<sup>分</sup>）西稜に増井行照らが悪天候下にルート工作、C I、C II設営を行い、八月六日、増井、柳原徳太郎、増井えみ子と連絡官、高所ポーター三人が西峰に初登頂。続く八

日、水野、青戸慎太郎、高所ポーター二人が西峰を越え主峰初登頂、山口宏、田村茂が西峰に登頂、翌九日には増井と高所ポーター一名が主峰に登頂した。

一方、六十歳代中心のドゥン峰（六二〇〇<sup>分</sup>）隊は八月六日、一次隊の田辺元祥、山口孝、連絡官らが厳しいラッセルを強いられながらも、ガスのため主峰がわからず頂上稜線の北西端のピークに初登頂。八日、前々日のピークを越え、鈴木、志賀勤、渡辺くみ、田中守之と現地ガイド、ポーターらと主峰の初登頂に成功。就中、田中は七十歳の日本人最高所記録を樹立し、高年の気を吐いた。

シヤパンマ（小川繁総隊長、鈴木幹夫隊長）を目指した若手は、六三〇〇<sup>分</sup>にC I建設後、C II予定地をとばしてC IIIに入り、頂上に向かったが「氷雪の廊下」と呼ばれる高度七〇〇〇<sup>分</sup>での四<sup>+</sup>に渡る長いラッセルに苦しめられ、北東稜のコル上部で撤退。一旦BCで休養し、数日後、再度頂上に向け出発。日本と英国の公募隊の先頭に立ち、彼らのシェルパと交代しながらラッセルして中央峰に鈴木、高橋玲司、加藤博の三人全員が無酸素、シェルパレスで登頂に成功した。

登頂後、南西壁から単独登頂を目指していた鈴木は本人の体調が思わしくなく、雪の状態も悪かったため、計画を断念した。

国内山行では支部友会夏山山行を尾瀬と鹿島槍ヶ岳で行い、ともに計画通りに終了した。月二回程度行われる日帰り、または一泊の支部友会山行は毎回支部員、支部友が十人から三十人ほど参

加し、益々盛んになって来ている。

文化面では、六六年の七号以来三年間の東海支部の活動（K2、ウルタルII峰、環太平洋一周環境調査登山その他）を安藤忠夫がまとめ編集した「東海山岳」八号が出版され、全支部員、支部友に配布された。

自然保護委員会では数年前から京都府の芦生の森の保存運動に関わってきたが、森に対する自分たちの無知を感じ、橋村一豊委員長の提案により森を体系的に勉強しようということになり、京都、関西の両支部にも声を掛け、六月十九、二十日の二日間三支部自然保護委員会共催で「森の勉強会」を滋賀県朽木村の森林文化協会研修所で座学と芦生の森の野外実習を行い、次年度も引き続き行うことになった。

毎年、登山未経験者や初心者を対象に行っている登山教室は、春秋の朝日カルチャー、労働協会に加え、瀬戸市教育委員会でも行い、講義と山行を行った。

稲葉省吾支部員の情熱で恒例化した「伊吹山播磨祭」は第五回目を数え十一月十三、十四日、石坂元富山支部長、春日村郷土史家大久保恭一氏をバネラーに迎えて開かれ、伊吹山は滋賀県側ではイブキヤマと呼んで生活の山であり、岐阜県側ではイブキサンと呼んで信仰の山であることなどを学んだ。

鈴木重彦、林芳弘集会委員らが中心となって隔年ごとに開かれている岳人写真展「山と自然のパフォーマンス」は、集会委員会最大の行事となり、そのための撮影山行も度々行って支部員、

支部友の撮影技術の向上にも努めている。十一月三十日から十二月五日まで名古屋市の市民ギャラリーで第七回を開き、入場総数三千九百四十八人という、一昨年、この写真展が記録した入場者数新記録を更新し、高い評価を得ることができた。

支部友会では山行の他、隔月で初心者のための講座を開いているが、十一年度は「登山の楽しみと罰則、歩行術」（橋村一豊）、「鈴鹿の山々」（山中保一）、「山での救急法」（赤沢硯夫氏）などを行った。

さて東海支部は来る二〇〇一年（平成十三年）で四十周年を迎える。それを記念して「支部設立四十周年記念事業」と銘うって数々の行事を実施することになった（尾上昇実行委員長）。まず国内行事として、記念式典と懇親会、登山は東海支部のエリアである愛知、三重両県から各二十山、計四十山を一年半で踏破するラリー、四十山の同日登頂を行うことにした。すでに本年四月から始まったラリーは七月末現在、すでに二十三座を登頂した者も現れる勢いである。その他、記念写真展、記念講演会、記念出版などを行う予定である。

海外行事としては、ローツェ南壁の冬期登攀、第七次のインドヒマラヤ実年登山、カナダ・ユークンでの登攀などを企画、準備を行っている。また支部員、支部友皆が楽しめるという観点からネパールヒマラヤの六つのコースでトレッキングと登山を計画している。

## 岐阜支部

平成十一年度の岐阜支部には二つの大きな出来事があった。一つは当支部主管で開催された第十六回全国支部懇談会であり、今一つは当支部会友による遭難騒ぎである。

まず全国支部懇談会から記していくと、十月十六日に岐阜県は西濃地区の中心都市である大垣市内のホテルで懇談会と懇親会が開催され、全国から二十支部百五十三人が参加した。懇談会は「我が支部の自慢話」をテーマに三時間の長丁場。各支部からの発表を中心に進めながら、随時、会長や副会長のコメントをいただいたりして、どうか退屈せずに終えることが出来た。その後懇親会は酒の力でスムーズに運び、当支部の高木支部長が各地の山行で一緒に撮った写真を撮した写真展「この人どこの人？」も好評であった。明けて十七日は養老山登山。大塚会長以下百三十五人が孝子伝説で名高い養老の滝を越えて養老山頂へ登り、素晴らしい秋晴れの下、濃尾平野や琵琶湖の大観を満喫した。別のバスツアー組も関ヶ原の古戦場めぐりの後、ドライブウエーを利用して伊吹山の頂上を踏むことが出来、大満足で帰ってきた。

岐阜支部主管が決まって以来二年間、地道に準備を重ねてきた努力が報いられたすばらしい二日間だった。

今一つの出来事の遭難騒ぎは、七月二十五日の京都支部との合同懇親山行の際に発生した。場所は乗鞍岳山系の十石山。乗鞍スカイラインの途中から県境稜線をたどるコースである。当支部に

は会友制度があり広く初心者にも門戸を開いているが、その会友の一人（男性、六三歳）が稜線から外れ谷筋に下り一晚ビバークしたという事件である。幸い翌朝には発見され、怪我もなく無事県警のヘリコプターで救出されたが、同行した京都支部の皆さんには大変な迷惑と心配をおかけした次第である。

また、支部山行のあり方、会友制度のあり方に対して大きな問題が提起された。それを受けて、支部山行では班編成を徹底し複数のサブリーダーをつけることとし、緊急時の連絡救助体制の確立も図った。さらに、会友は将来正会員になるまでの訓練期間と位置づけ、いつまでも会友のままでは籍し続けることの無いよう会則を改めた。

これらの出来事以外には例年の行事である春季懇親山行、春季現地小集会、秋季懇親山行、秋季現地小集会、山岳講演会、山の写真展、等を予定通り行い、今期初めての企画である冬期現地小集会も三河の出来山で実施した。海外山行は、五月にシルクロード探訪でタクラマカン砂漠を縦断したが、秋に予定していた台湾の関山登山は台湾大地震のため中止となった。

平成十二年の支部総会は四月二十二日、天下の名泉である下呂温泉に本部から大塚会長をお招きして開催した。平成十一年度の事業報告、平成十二年度の事業計画を承認し、前述した会友制度の見直しによる会則の改正も行った。平成十四年に実施する支部創立三十周年事業の準備委員会も立ち上げ、この一年間の活躍を期した次第である。

（堀 義博）

## 京都支部

京都支部は一九八六年に創設、今年で十四年目を数える。会員数も二百八十人を越え大きな支部になりつつある。

支部長に酒井敏明、副支部長に薬師義美、内田昌子、顧問に斎藤惇生、他二十三人で支部活動にあたっている。

二〇〇〇年の支部総会は、四月二十六日に開催された。改選期を迎えた支部長選任では、斎藤惇生顧問より酒井敏明氏に再任を要請する提案があり、満場一致で決定した。冒頭支部長の挨拶では、昨年提案した行動指針(一)チャレンジ精神、(二)京都らしさ、(三)和、(四)山や自然そして人に対する謙虚な心等を持ち、会員の協力を得て支部を盛り上げていきたいと表明された。総会議事が終了後「リヤンカン・カンリ初登頂」をされた小林尚礼氏による講演会が行われた。斎藤惇生顧問より二十世紀最後の初登頂だと賛辞がおくられた。その登山活動と、その山を選んだエピソード等、スライドを交えながらの興味深い話を耳をかたむけた。隊員十人のみによる高所への荷上げや、ルート工作を行い全員登頂という快挙をなしとげられた話に時間を忘れてしまう程であった。

五月は雪上技術講習会が中央アルプス千畳敷カールで行われた。五月十九〜二十一日には朽木朝日の森、美山の京大演習林で座学および現地行動での勉強会が、三支部合同で(関西、京都、東海)昨年につき二回目が行われた。ただ単に山頂を目指すだけではなく、樹木や草花や他の生きものの達の生態を知る、という事も大切

ではないか、今西錦司先生もおっしゃっていた、「山をやる者は、登るだけやなく、木の一本の名前も憶えよ」と。一木一草の名前を知ると、二つ三つを知ろうとする前向きな気持ちになると思う。この様な機会を継続することは非常に意義深いものがあり、年に一度でも毎年続けられ、どんどん広まって継承されて自然保護への意識が高まっていくのが一番いい形だと思う。

五月二十七〜二十八日はスケッチ山行、入笠山。六月四日は展望の山、鈴鹿、御池岳(池の探訪)、同十日に山水会、大山崎山荘見学および天王山ハイク。七月二十九日山水会、大文字ヒアパーティーが例年通り盛会であった。八月二十七日沢登り宇賀川、蛇谷へ。九月二十二〜二十四日、お月見山行、一山一泉の旅鉢盛山へ。十月七〜九日、岩手支部との交流山行で早池峰山、遠別岳。十八日は山水会意見交換の会。二十一日展望の山、竜王山〜長谷寺。二十八〜二十九日スケッチ山行大山へ。十一月四日展望の山鷹の巣山〜高御位山へ。十一〜十二日岐阜支部合同山行三室山へ。十六〜十八日流星ウォッチング冠山(奥美濃)。二〇〇一年新年会。二月ワカン山行湖北武奈ヶ岳。三月関西支部合同スキー山行。二〇〇〇年八月に酒井敏明支部長著「旅人たちのパミール」が春風社より発行された。(山村孝夫)

## 富山支部

第五十五回二〇〇〇年富山団体準備等に、支部の行動出来る会

員の多くが責任あるポストにあるため、その成功に全力をそそいでいる。

会員七十四人、内女性八人、室内例会と山行例会を交互に開き、室内例会は会員の海外登山等のスライドと講話を聞き、会費三千円で食事をしながら親睦を深めている。

富山支部は、支部費を徴収していないので本部よりの助成金のみ運営は、事務局長のボランティアによるところが多い。

例会山行は四月の総会で決められ、これに従って行う。

五月九日、播磨祭は上人の生誕地である大山町・旧河内村の顕彰碑がある中村家屋敷跡で行い、旧村民の方々と年に一度の交流の場となっている。終了後高頭山に登る。

六月六日剣岳山開き、馬場島。

毎年持ち回りで開かれる北陸三県合同支部懇談会、今回は当支部担当で、明日温泉にて懇親会、翌日は入善町で一番高い負釣山に登る。天候に恵まれ頂上で一望できる山々が素晴らしかった。

六月五く六日に行った。

七月三〜四日上高地の山研を利用しての上高地散策。

九月四〜五日越後の奥只見湖をベースにその周辺の山々を五年続けて登っている。今回は越後駒ヶ岳。長い行程であった。

十月十六日伊吹山へ。花の時期に是非もう一度訪れたい山だ。

十一月七日、きのこ狩り山行、支部会員できのこ採り名人の近藤さんの案内で、山に登る人、きのこを採る人、料理を作る人、それぞれ得意の分野に分かれ、昼食時には温かいきのこ汁が出来

上り。秋の山行の一番楽しい時である。

支部会員は富山岳連の役員を勤める人が多く、県民登山、市民登山・カルチャー教室と広く指導者として参画している。

二〇〇〇年に開かれる国体に向け今は、役員が心を一つにし、無事に行うことが出来るよう願っている。

(木戸繁良)

## 石 川 支 部

二〇〇〇年の八月は、上高地の山研展示室で「石川支部・山の写真展」を開催。今年よりの山研の活用行事の一端として一ヶ月間の長期利用を支部のトップを切り試行。他支部の先例がなく、展示室の環境の不安や、本部からの依頼条件も未定で焦点が絞り切れず。石川支部なら白山だ、故深田久弥氏の故郷として深田百名山だ、いや支部会員の活躍の場や作品集だとか、意見多出のうちにもうオープンの日限となり、七月末の土、日曜日に支部恒例の山研集会を兼ねて大挙山研泊り。半日かけてパネルの取付け・展示を行ったが結果は皆様御覧の通り。

二〇〇一年の石川県での全国支部懇談会のPRの目論みも屋外部での表示は環境庁の指導で禁止。ゲート外の道路はかなり人通りがあるのに、ゲートのすぐこちらに山研があるのは本部会員でさえ知らない有り様。

八月十四日、展示パネルの一部入れ換え。作業中に来訪された

方々の会話「こんな展示があるなんて知らなかったよな」「でも評判になって子供連れが増えたら雰囲気荒れるからこれでいいんだよ」ナルホド。「ところで上はどこかの別荘ですか?」ガツクリ。でも八月前半の来訪者名簿に記入された方八十人、中には温かい感想付記もあり感謝。

第十八回全国支部懇談会は二〇〇一年九月二十九日(土)、三十日(日)石川県で開催される。以前に「二〇〇一年宇宙の旅」という映画があったが、宇宙はまだ遠く「二〇〇一年は石川の旅」と考えている。

最大の問題は参加者全員が一堂に会する広い懇親会場。あちこちに当たり、幸運にも関西の奥座敷ともいわれる加賀温泉郷の加賀市が全面的に協力してくれることになり、加賀市の幹線で片山津温泉「あたかや佳水郷」を九月二十九日確保した。当日懇親会、宿泊を行い、翌三十日A隊(登山班)とB隊(観光コース)に分け、A隊はバスで岐阜県大白川へ抜ける白山スパー林道の最上部(三方岩駐車場)まで、そこから白山山系北方稜線の三方岩岳(二七四〇<sup>m</sup>)から野谷荘司山(二七九七<sup>m</sup>)へ。B隊はバスで地元出身の故深田久弥氏の江沼神社の記念碑(有名な「山の茜をかえりみて……」をはじめ、中谷宇吉郎の「雪の科学館」、「松前船の館」等をめぐり、午後三時ごろまでにJR加賀温泉駅および小松空港でA隊と合流の予定。

全国組織とはいえ民間の「山岳会行事」に行政当局からこれだけ支援して貰えるのも、先輩諸氏の築き上げた日本山岳会という名

の伝統と權威なのだろうか。費用は決して安くはないが、通常個人的に同じ待遇を期待すればこの倍は覚悟せねばならず、もし事情が許せば日頃御苦勞をかけている奥様はじめ御家族の慰勞も兼ねて参加いただければと考える。

(津田文夫)

## 山陰支部

一九九九年から二〇〇〇年にかけての当支部は、文字どおり創立五十周年記念事業に明け暮れたと言ってよい。以下はその概略。

### ①「大山概念図」の発行(一九九九年九月)

大山への登山のための最新の情報を一枚に収めた二万五千分の一「大山概念図」二千部を製作、一部は関係機関に寄贈し、残りは大山の登山基地・鳥取県西伯郡大山町の大山寺自治会に販売を委託している。七年ぶり、三回目の改訂版発行。

### ②「鳥取県境の山」出版(一九九九年十月)

鳥取県が兵庫、岡山、広島、鳥根の各県と接する境界上にある六十七の山を会員が手分けして登り、写真と案内図を含めて執筆した。千五百部のうち一部を関係機関に寄贈し、残りも既に完売済み。

### ③記念登山(一九九九年十月〜十一月)

「ネパールヒマラヤ・登山とトレッキングの旅」のタイトルのもとに、会員、家族、友の会会員合わせて三十四人が参加。登山

隊（三十日間・七人）、トレッキング隊（十二日間・十三人）、観光隊（八日間・八人）、とんぼ帰り隊（五日間・六人）の四隊に分けて次々に出発し、それぞれの目的を果たして十一月五日カトマンズに集結。市内のホテルで打ち上げを兼ね、支部創立五十周年祝賀会を催した。各隊の行動は、登山隊がクローンプ・ヒマールのメラ・ピーク（六四七三<sup>三</sup>）登頂、トレッキング隊がランタン谷へのトレッキング、観光隊がカトマンズ、ポカラ両市内の観光、とんぼ帰り隊がカトマンズ市内の観光とマウンテンフライトなど。また祝賀会の席上では、ポカラ市内に建設中のネパール山岳博物館の費用の一助にと、ネパール山岳協会を通じて二十万円を寄付した。

④記念式典（一九九九年十二月十一日）

当支部恒例の年次晩餐会にあわせ、米子市内のホテルで開催。来賓として本会副会長・竹内哲夫、一九九八年青年部カンチェンジュンガ登山隊長・谷川太郎の両氏を迎え、さきの「ネパールヒマラヤ・登山とトレッキングの旅」に参加した家族や友の会会員も招いて、総勢四十三人の出席のもとに創立五十周年と記念登山の成功を祝った。

⑤記念展（二〇〇〇年六月）

六月九日から十三日まで米子市美術館で開催。「ネパールヒマラヤ・登山とトレッキングの旅」や「鳥取県境の山」「美しき伯耆の滝たち」の出版に当たって会員や家族、友の会会員が撮影した写真、絵画など七十七点を展示、一般の観覧に供した。

⑥メラ・ピーク登頂報告会（二〇〇〇年六月）

記念展会期中の六月十一日に近くの米子市総合研修センターで開催。隊員の撮影したビデオの映写を含め、質疑応答なども交えて詳細に報告した。支部会員への公式報告にとどめず、一般へも公開した。

⑦「美しき伯耆の滝たち」出版（二〇〇〇年八月）

鳥取県東・中部にある四十カ所の滝について、会員が手分けして執筆。写真はもちろん、それぞれの滝について実測した落差、最大幅、滝つぼなどの詳しいデータも付けている。二千部のうち一部は関係機関に寄贈し、残りを書店と会員とで販売中。

⑧記念誌の発行（二〇〇〇年中）

一九八九年に四十周年記念誌を発行して以降の会員の山行記録、随想、五十周年記念各事業の報告などを収めたものを、年内に発行の予定。

（小椋凱夫）

福岡支部

平成十一年四月支部総会を開催した。参加者三十二人。総会当時の支部会員数は百七十二人である。十一年度の事業について次のように承認された。

一、九州登山史の編集を進める

二、福岡支部「とっておきの山」への登山

### 三、新年の集いの開催

総会終了後、恒例の記念講演会を「私の楽しい登山報告」として松本康司会員から「チロルの山と花」、松本徂夫会員から「コシリの山々」についてスライドを交えて報告。参加者から高山植物のことや登山についての質問や意見が出され、有意義な講演会となった。

九州登山史の編集については、平成四年八月発行した「九州登山史年表」の改訂と九州登山史作成のための資料の収集と整理を行っている。

福岡支部「とっておきの山」への登山については、五月七〜八日にかけて、長崎県対馬にある洲藻白岳、御岳、竜良山に登った。宿舎の関係で参加者が九人と小人数で残念であったが、山頂周辺の満開のチョウセンヤマツツジの群落に満足した山行であった。今回の山行の責任者で九州大学助教授の井上晋氏は、「洲藻白岳山頂一帯の岩場や森林には、チョウセンヤマツツジをはじめとする大陸朝鮮系の植物が数多く自生し、かつて大陸と陸続きであったことを証明する学術上貴重な植生として、国の指定天然記念物になっている」と紹介している。

この素晴らしい自然環境をいつまでも守り維持していくのは、山を志す私たち登山者の使命であることを強く感じた山行でもあった。

平成十二年一月二十二日「新年の集い」を開催した。

松本支部長のあいさつの後、福岡在住で東海支部所属の石原國

利氏から当支部に寄贈された、牧潤一画伯のエベレスト、K2、カンチエンジュンガ三点の画が披露され、会場に展示された。集いには三十八人の参加があり、海外登山や自然保護についての意見交換など和やかな楽しい一時を過ごすことができた。

自然保護については、平成十一年九月十八〜十九日宮城県いこの村栗駒での自然保護全国集會に中山健会員が参加した。

日本山岳会創立百周年行事の一つである、「新日本山岳志」の編集の当支部の担当は、山口、福岡、佐賀、長崎各県の山と、鹿児島県の離島並びに沖縄県の山々となっている。また、隣接する各支部との県境の山については、表登山口のある山を担当するよう関係支部と協議を進めている。

(副島勝人)

### 東九州支部

東九州支部は二〇〇〇年に発足四十周年を迎えた。日本山岳会の百年に近い歴史に比べれば半分にも満たないが、四十年という歩みにはそれなりの感慨がある。

別府市で産声を上げた当時の発起人・創立支部員はほとんど鬼籍に入り、五千番台より古い会員番号を持つ支部員も極めて少ない。山岳連盟をはじめ、大分県内の主要山岳団体をリードしている人たちの多くが支部に所属してくれてはいるものの、大半は二十年前ごろからの入会者で、最近では在籍十年未満の人が多数を占

める。ただ、それだけに、平均年齢はかなり若返ってきた。

四十周年記念の事業も、秋までに大半を消化した。最大ものは全国支部懇談会の誘致、開催だった。ミレニアムの年、四十周年の年ということもあって、支部懇談会の開催地に立候補したところ、満場一致でお認めいただいたことは本当にうれしかった。

本番は九月十六・十七日。相次ぐ台風の接近と、余波を受けての悪天候の連続で月初めからやきもきして、神仏にも祈るような気持ちだったが、当日朝になって台風はそれてくれた。

初日は午後、別府市のホテルで集会。全国各支部から予想を上回る百五十人の参加を得たことはありがたかった。北海道や東北の支部の会員たちは、よくぞ九州まで来てくれたものと思う。大塚会長の挨拶、斉藤前会長のスライドを使った講演「ヒマラヤの西と東」の後、支部活動報告を織り交ぜながらの懇談会。夜は懇親会が盛り上がった。

翌日は未明からバスに乗り込んで「くじゅう」へ。百四十人が三班に分かれて九州の屋根を歩いた。秋晴れのもと、山々も歓迎してくれ、「二〇〇〇年・九重集會」は終わった。今後、参加いただいた会員の皆さんにご感想・ご批評をお聞きしたい。

懇談会を目的とした「記念誌」や記念品は、数日前に完成するというあわただしさだったが、彫刻家の会員による「くじゅうの山靴」はいかがだったろうか。記念誌は支部会員の紀行や思い出が中心だが、それなりの思いはこもっていると思う。

残るは「大分百山」の再刊である。百山は二十周年で選定、三

十周年に刊行したが、この十年でかなりの経年変化があった。特に九州の山林を荒らした先年の台風19号により、大分の低い山々は風倒木で覆い尽くされ、登山道の改廃が目立っている。幸いに「百山」の評判は良く、再刊を期待する声が多かったため、今回、手分けして最初から調査をやり直し、目下、各会員が執筆の最中である。

記念山行は六月に湧蓋山で実施したが、新しい試みとして、この年に会員が登った海外、国内での最も印象に残った山を「一人ひとりの記念登山」とし、支部報に順次収録することになっている。二〇〇一年も、東九州支部へのご支援をお願いする。

(梅木秀徳)

## 宮 崎 支 部

念願だった「みやざき百山」がついに完成した。内容は単なるガイドブックではなく、文化遺跡・風俗・祭り・神話・伝説・歴史・民俗・動植物・地質・自然形態・風情などを盛り込んだエッセイ風とし、写真は一山ごとに山と花を一点ずつ厳選した。「みやざき百山」刊行は十六年前の宮崎支部発足時に「みやざきウェストン祭」「諸塚山山開き」と共に「三つの目標」として実践してきたものである。

前二者は十五年の間に地域の方々の絶大な支援のもとで完全に定着したが、「みやざき百山」刊行に関しては、現地調査、資料

の収集、百山の選定作業などに存外の時間を要した。本文の執筆は支部長の絶妙な表現力をして早い時期に完成したが、写真が最大の難関であった。人にも得意なポーズがあるように、山もその山が持っている最も特徴的な姿・優雅さを表現できるチャンスがある。そして、それは撮影角度や季節・天候等に左右される。また、花にはわずかな時期にしか出合えないことや、種類によっては開花しない年があるなど多くの制約があった。そのような中で会員が思い入れのある作品を持ち寄り、月に一回の割で「百山の集い」を開き、写真の整理・地図の作製・文章の検証など討議を重ねてきた。この活動を知った地元新聞社の要請で新聞掲載することになり、平成十年秋から二年間、毎週木曜日に一山ずつ紙面の半ページ分を使ってカラー版で紹介された。これに対して予想以上の反響があり、同紙の「読者の声」の欄にも数回にわたって賞賛の言葉が寄せられた。これが刊行に向けて格好の起爆剤となったのである。多くの会員が一つの共通した目標に向かって熱い思いをぶつけ合うことのすばらしさ、そして「みやざき百山」として全国で紹介できる自然がこの宮崎に現存することの有り難さを噛み締めている。

さて、支部の活動状況について簡単に紹介したい。定例山行は、原則として毎月第四土・日に行っている。毎回の参加者が三十人余という盛況ぶりからマイクロバスを利用しているが、車中は情報交換や懇談の場となる。毎月第二木曜日に市の中央公民館で開いている定例研究会では、救急法・気象学・地形図の読み方・ザ

イルワークなどのテーマを中心に山行計画・山行報告など山に関する情報を交換している。参加者は毎回四〇五十人を数える。宮崎ウエストン祭は、ウォルター・ウエストン氏が明治二十三年十一月六日に秀峰祖母山を訪れたのを記念して、毎年十一月三日に高千穂町五ヶ所高原で同町と宮崎支部共催で行っており、今年で十六回目を迎える。昨年の参加者は一般・約三百人、JAC会員・六十四人であった。諸塚山山開きは、地域交流と森づくりをテーマに朝日新聞社後援、諸塚村と宮崎支部共催で三月上旬に「日本一早い山開き」として、毎回約二千人の参加のもと十五回を重ねている。

他の事業としては、年二回の支部報発行、月一回の「NHK文化センター・山歩き入門」への講師・サポーターの派遣等がある。支部会員はみんな元気で、それぞれのスタイルで山を楽しんでいる。山への接し方はさまざまだが、支部活動の運営に関しては会員一人ひとりが主役であり、各自が支部を支えているという自覚のもとに結集し、「山」への熱い思いと喜びを共有しながら人の和、仲間愛を深めている。

(荒武八起)

# 会務報告

一九九九年(平成十一年)六月(二〇〇〇年(平成十二年)五月)  
一九九九年年度役員・評議員・支部長

会長 大塚博美

副会長 小倉茂暉・大森薫雄・竹内哲夫

常務理事 西村政晃(総務)・村井龍一(財務)・森 武昭(科学研究)・宮崎

敏一(学生部指導)

理事 高原三平(総務)・勝山康雄(集会)・村井 葵(会報編集)・高遠

宏(山岳編集・百年史)・宮下啓三(図書)・鯉坂青青(資料)・フイ

ルム・ビデオ)・松原尚之(指導)・遭難対策)・増山 茂(医療)・海

外連絡)・坂井広志(高所登山研究)・河西瑛一郎(自然保護)・坂

本正智(山研運営)・山本 篤(青年部)・二〇〇〇年三月に辞任)

監事 神崎忠男・中村 保

常任評議員 平山善吉・中川 武・平野真市・田邊 壽・吉永英明

評議員 若林啓之助・中村純二・芳賀孝郎・山本健一郎・宮下秀樹・岩間弘

雄・魚本定良・中谷 充・山本久子・平林克敏・斎藤惇生・尾上

昇・宇田川芳伸・絹川祥夫・古市 進

支部長 (☆印は年度内途中交替)

新妻 徹(北海道)・松島静吾(青森)・中谷 充(岩手)・佐藤兼

治(秋田)・木村喜代志(山形)・柴崎 徹(宮城)・佐久間高男

(福島)・五十嵐篤雄(越後)・山浦源太郎(信濃)・古墨字而(山梨)・

大石 惇(静岡)・中世古隆司(東海)・高木崎男(岐阜)・酒井敏

明(京都)・木戸繁良(富山)・津田文夫(石川)・☆中村 義↓宮

本数男(福井)・二〇〇〇年四月十八日交替・阿部和行(関西)・

☆吉川暢一↓高田允克(山陰)・二〇〇〇年四月八日交替)・平位

剛(広島)・☆松本徳夫↓深田泰三(福岡)・二〇〇〇年四月二十三

日交替)・梅木秀徳(東九州)・☆本田誠也↓工藤文昭(熊本)・二〇

〇〇年四月二十三日交替)・大谷 優(宮崎)

◇六月理事会 一九九九年六月九日 本会会議室

出席者 二十五名

▽審議事項

一、第二回秩父宮記念山岳賞の選考について

①運営委員(吉永↓村井龍、絹川↓西村)の交替と、審査委員の選任は運営委

員会で案を作り理事会に諮る。運営委員長は竹内副会長が留任 承認

②表彰対象のうち「優れた登山活動」の審議事項を明確にするため関連委員会

(学生部、指導、高所、青年部、海外など)に協力を要請する。承認

二、許可願い三件 承認

①富山テレビより冠松次郎写真展(十一月二十八日〜十二月十九日開催)の後

援依頼

②山と溪谷社第一出版本部の「目で見る日本登山史(仮題)へ資料貸出し

③日本テレビより今西錦司氏の書籍撮影の依頼

三、六月の新入会員は二十四名、復活団体一

▽報告事項

一、日中学生交流登山計画について(登山は九月、双方十名前後で四川省の山

を予定)経緯を報告、山本理事から「計画は参加する学生が主体であるから、

学生の意見を反映させるように」との発言があった

二、第十次マッキンリー氣象観測登山隊員は前回より七名減で実施

三、(新)日本山岳志第一回編集会議を五月二十九日に開催、編集委員長に高

木泰夫氏（岐阜支部）、副編集長に大森久雄氏（首都圏）、柏木宏信氏（関西支部）を選出し、出版社は「ナカニシヤ出版」、その他出版までの日程を決定

四、アルパータ二〇〇〇年実行委員会の経緯説明と役員交替（委員長≡齊藤惇生、大塚博美へ、委員≡細川、西村、宇田川、山本、田邊、高遠へ）の報告、

また七月十日の長野高校創立百周年記念行事として大塚本会会長とカナダ山岳会会長の間でビッケル寄託に関する合意書に調印する

五、「ミニ水力発電プロジェクト」実行委員会に、村井龍一常務理事を追加

六、自然保護委員会から岩手県知事交替に伴い、早池峰山自然保護についての要望書類を再提出したと報告

その他、医療、会報、財務、青年部など各委員会から報告があった

会報「山」六一号参照

◇七月理事会 一九九九年七月十四日 本会会議室

出席者 二十三名

▽審議事項

一、平成十一年度、十二年度海外登山基金委員会の委員（大森薫雄委員長ほか委員十名）の選任 承認

二、第三回加賀市深田久弥「日本百名山」写真コンテストの後援依頼 承認

三、七月の新入会員は十七名、復活一名

▽報告事項

一、秩父宮記念山岳賞、登山活動に対する選考基準について

二、日本山岳会百周年記念事業企画案の提出と進め方について

三、アルパータ峰登頂メンバーをカナダ、日本各三名とし、トレッキング参加者は新委員の黒川恵氏が担当、参加枠六十名を目標に募集する。長野高校百周年記念行事に大塚会長、大森副会長が出席、ビッケルの保管、展示は資料委員

会が担当（計画の詳細は会報六五三号参照）

四、日中学生友好登山隊は、日本側は隊長一名、隊員九名、中国側十名で、四川省の岷山山脈の主峰「雪宝頂」(五、五八八)に登頂する計画、九月三日に日本を出発、二十日間を予定している（会報六五二号に詳報）

五、第十次マッキンリー気象観測登山隊は全員登頂、観測目的も達成

六、山研ミニ水力発電の進捗状況

七、ポカラ国際山岳博物館報告（募金総額二四、七五六千円、うち日本山岳会

一三、一七一千円）。開館は二〇〇一年の予定

八、ネパール山岳協会新年度役員（会長≡Mr. Tashi Jangbu Sherpa、タシ

バンブー、シェルバ氏、副会長二名≡Mr. Ang Tshing Sherpa、アン、

シリシ、シェルバ氏、Mr. Bikrum Pandey、ビクルム、パンディ氏）が就任、

新会長に祝電を打った

九、自然保護委員会報告 ①全国集会を九月十八、十九日に栗駒高原で開催

②ネパールシヤクナゲ植林基金に二七〇万円補助金 ③「木の目草の芽」第三

六号発行 ④全国高校総体の登山競技対象の早池峰より別の山への変更につい

て、増田岩手県知事から変更しない旨の通知あり

十、東海支部のパソコン設置についての助成、今回は見送る

十一、冠松次郎氏寄贈品の取扱いについて遺族代表から「乾板（六九七枚）

を正式に当会へ寄贈 ②山岳博物館への展示貸出料は利益があった場合は、当

会と話し合い子供二名に送金してもらいたいという意向であった

なお、小倉副会長から乾板はインターネガをおこし保管するのがよい。費用

は何年かに分けて考えればよいとの意見あり

十二、日山協からエベレスト国際登山隊への参加要請があったが「判断するには資料不足」ということで、日山協に通知した

十三、その他、会費納入・新入会員の状況・会員名簿、北海道支部三十周年記念行事に大塚会長・小倉副会長、越後支部高頭祭に大塚会長が講師で、また長

野県戸隠村第三回ミセス・ウェストン祭に小倉副会長が出席の予定

十四、青年部K2（南南東リブ）登山隊報告書の刊行を山本理事が報告  
会報「山」六五二号参照

◇八月理事会 休会

◇九月理事会 一九九九年九月八日 本会会議室

出席者 二十四名

▽審議事項

一、許可願い三件

①朝日新聞社「週刊20世紀」へウェストン関係資料の掲載

②NHKから冠松次郎に関する資料

③NHK長野放送「20世紀を振り返る」放送に使用するウェストンに関するもの（以前収録したものを再放送する）

二、九月の新入会員は二十三名、復活二名

▽報告事項

一、自然保護活動に関するアンケート実施報告の件 大蔵自然保護委員長

地域振興策の一環として山岳地域の開発が行なわれ、登山者の増加に伴う山岳環境の破壊が進んでいる地域もある。地域振興策と環境保護との調整は難問であるが、今年是全国高校総体の山岳競技は岩手県の早池峰で実施され、自然保護委員会は「貴重な高山植物類が破損されるおそれがある」と早池峰以外の山に変更するよう要望したが受け入れられなかった経緯もある。

たまたま九月十八、十九日に栗駒高原で実施される自然保護全国集会は「自然保護のあり方」をテーマとしているので、このケーススタディの資料として全国支部関係者六十八名に対し、委員長名でアンケートを実施し、本音が聞きたいので無記名の回答を求めた。九月四日の評議員会で疑問が出されたのとこととであったので、表現等に反省する面もあったが、疑問を投げかけた評議員に

は説明し、了解を得た。

二、八月に実施された早池峰での全国高校総体山岳競技実施後の現場を一ヵ月後に河西理事、大蔵委員長ほか会員三名とNHKカメラマンが検証した。山岳競技直前の早池峰の状況が不明なために高校総体による損傷が、どの程度のものであったかは不明、高山植物約二百株が最近の登山者によって損傷されており、また登山シーズンを前に地元有志によって登山道整備が行われ、ノミで足場用に岩が百三十カ所にわたって削られていた。

三、秩父宮記念山岳賞について、①平成十一年度は新規二件の応募があり、昨年度の四件（五件は辞退）と合わせて六件が審査の対象になった、②山に関する応募三件が辞退したことは残念である ③小田審査委員長から木下は雄名誉会員を審査委員に追加推薦すると報告があった。

四、海外登山基金について、①評価基準は、従来の採点方式は参考程度とし、委員による判断を重視する ②山岳雑誌にも応募広告を出す ③助成金の増額を基金を取り崩さない範囲で次年度から実施したい、その他、対象登山は晚餐会で報告、山岳に記載されるなどの意見が出された。

五、承認三件の報告 ①都岳連第七回日本山岳耐久レースへの名義承認 ②郷土出版社「ウォルター・ウェストン未刊行著作集」への山岳第83年の記事転載 ③マガジントップ社「私の創る旅シリーズ⑥」「名作の舞台を旅する」（ウェストンの肖像画を掲載）

六、中国登山協会から一九八〇年チョモランマ登山以降の日中登山交流二十年年記念行事について打診があった。中国側から申し入れがあった十月実施は無理なので、トレーニング提案は断わり、来年も視野に入れて実施内容を検討する。以上を九月十一日に訪中する神崎監事に、今後の打合せを依頼する。

その他に総務、財務、会報編集、山岳編集、図書、資料、指導、学生部、山研運営、ミニ水力発電実行の各委員会、データバンク研究会からの報告があ

り、また吉田テントから一九二九年からのテントのミニチュアの展示案内の申し入れがあり、晩餐会等、展示の機会を検討することになった。

会報「山」六五四号参照

◇十月理事会 一九九九年十月十三日 本会会議室

出席者 二十四名

▽審議事項

一、大塚会長の「秩父宮勢津子妃殿下レリーフ建設委員会」への顧問就任要請について、同委員会より顧問就任の依頼あり、レリーフは平成十二年六月奥秩父山開き式をめどに建設の予定

二、永年会員の資格認定の一部定款第六条第四項「本会入会後在籍継続五十年に達した者」の認定条件を、従来の「十二月まで在籍継続五十年に達した者」だったのを「当該会計年度末（三月）までに在籍五十年に達した者」で五十年目の会費を納入した者。いままで一〜三月入会者で翌年十二月永年会員になった会員に会費を請求するトラブルがあった。（一九九九年対象は四名増加）  
また平山武志氏（一八三七番）より申し出があった永年会員は、会員名簿等によって、五十年継続が確認されたので、永年会員にすることになった。

▽報告事項

一、秩父宮記念山岳賞は、本年度応募二件、前年度四件、計六件を審査したが、いま一步の評価となった。十月二十五日に運営・審査（合同）委員会を開催し、審査過程の問題点等を整理し、最終結論とする。

二、十二月四日新高輪プリンスホテルの年次晩餐会で開催企画 ①同好会による「山の絵」「山の写真」 ②ヨシダテントの協力による「テントの歴史展―ミニテント実物展示」 ③学生部の「日中友好登山隊」「カナダアルパートプロジェクト二〇〇〇」報告 ④記念山行は「筑波山」（集委員会）を予定

▽支部動向

一、秋田支部四十周年行事（十一月二十〇〜二十一日）大森副会長出席

二、東北地区集会（十月二十三〜二十四日）主管・青森支部、大塚会長出席

三、全国支部懇談会（十月十六、十七日）主管・岐阜支部、大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、森、西村、坂本各理事が出席

四、木暮祭四十周年記念行事（十月十七日）主管・山梨支部、大森副会長が講師として出席する。

▽委員会報告

一、学生部の日中学生友好登山隊は雪宝頂に日本側隊員九名中六名が登頂、九月二十二日に無事帰国した

二、ミニ水力発電計画実行委員会から十月十八日に着工、十一月十日までに発電装置および送水・放水管を設置、十二日〜十三日に試運転、本格運転は二〇〇〇年五月初旬の予定

三、海外連絡委員会から台湾大地震（九月二十一日）で山岳遭難が起こり十五名が犠牲となった。藤平元会長を代表として募金活動中で、十月二十三日の告別式に当会から弔慰を表すことになった

その他、総務、財務、会報編集、図書、指導、山研運営などの各委員会報告

会報「山」六五五号参照

◇十一月理事会 一九九九年十一月七日 本会会議室

出席者 二十六名

▽審議事項

一、第二回秩父宮記念山岳賞は「本年は受賞該当案件なし」とする

二、アルパートプロジェクト二〇〇〇計画は計画書通り実施

三、図書利用規定の改訂等について①月曜日休館日の廃止（図書室は基本的に事務局開室時は利用できる） ②図書管理委員会は「財務委員会・図書管理小委員会」とする

その他、図書室内での飲食・会議の禁止と図書貸出しの禁止  
 四、平成十二年度年次晩餐会写真展企画Ⅱ全国の会員を対象に公募、審査し展  
 示する。詳細は実行委員会を設置し、理事会に諮る。また、作品は地方支部へ  
 巡回する

五、朝日新聞社「週刊20世紀」一九二一〜二二年号へ、アイガー東山稜登頂後  
 の横有恒一行の写真の掲載許可 承認

六、J R東日本社内サービス誌「トランヴェール」二〇〇〇年一月号へ河童橋  
 のウエストン夫妻の写真の掲載許可 承認

七、十一月の新人会員は十五名

▽報告事項

一、平成十一年度の名誉会員は齊藤惇生会員を推薦

二、同永年会員は平山武志会員ほか二十九名

三、日中友好登山二十周年記念事業は西村（世話役）、村井（龍）、増山、坂井  
 各理事、橋本（清）海外連絡委で、平成十二年実施にむけてとりまとめる

四、当会ホームページ検討プロジェクトは内容・体制についての答申案をプロ  
 ジェクトメンバーで作成する

五、十月〜十一月度行事報告Ⅱ全国支部懇談会は小倉副会長、木暮祭は大森副  
 会長、宮崎ウエストン祭は大塚会長から、それぞれ報告があった

六、委員会報告Ⅱ資料、科学研究、ミニ水力発電計画、総務、指導、海外連絡、  
 会報編集、山岳編集、財務の各委員会から報告

七、上半期監査結果報告Ⅱ十月三十日に監査を実施し、特に問題がないが、①  
 一部交通費等に明細を欠くものがみうけられる ②「基金」をいい意味で活用  
 できるような見直しを図る必要がある ③監査を年二回に限ることもない、特に  
 外部から補助金がついているような特定プロジェクトは特別に監査を行ったほ  
 うがよいのではないかと

八、九月に訪中した神崎監事から ①日中友好登山二十周年記念事業の行事  
 には多くの人が参加できるようにすること、合意、その他、北京大学山岳部  
 の部員は百二十名、部室も完備しており、岩のほりの人工ゲレンデまである  
 ②ポカラ山岳博物館の現状は十月末までに屋根、ガラスを取り付ける、完成ま  
 でに二〇〇万円不足という。ネパールは外貨獲得のために七ピークを解禁、  
 また韓国、ヨーロッパ諸国、インドなどが援助する予定、とのことであつた  
 会報「山」六五六号参照

◇十二月理事会 一九九九年十二月八日 本会会議室

出席者 二十三名

議事に先立ち会長就任半年を迎え大塚会長から ①役員はクラブサービスを  
 担当するサブバンドであり「会員を大切に」を伝統にしたい ②十二月四  
 日の支部長会議は本部からの伝達に終始した感があり、支部会員の意見を取り  
 入れたい ③「山に登る会」との認識を常にもちたい

▽審議事項

一、「秩父宮記念山岳賞」に加え、表彰制度を（西村、村井龍、森、宮崎各常  
 務理事、中川、吉永、平山、平野、田邊各常任評議員、平林、尾上両評議員、  
 高原理事の十二名）で検討したい 承認

二、日本勤労者山岳連盟創立四十周年記念事業「ア・シュールベルト氏を迎えて  
 の全国縦断記念講演会」の名義協賛について 承認

三、東京都北区教育委員会から、北区飛鳥山博物館で二〇〇〇年秋に予定して  
 いる特別展に出展する「冠松次郎氏および交友会員に関わる資料」の調査、短  
 期貸出し、写真撮影 承認

四、冠松次郎氏の原稿、地図、写真乾板二九五枚を含むネガフィルム、プリン  
 ト写真など遺族から寄贈していただいている貴重な資料を、保存環境のととのつ  
 た東京都美術館から、委託を受けて預かるとの返事があつた 承認

五、㈱ハユマから株日本図書センター四月刊行予定の「目で見る人間図書館」(仮称)へウエストンの写真借用および掲載  
承認

六、十二月の新人会員は六名

▽報告事項

一、支部長会議を十二月四日に開催、二〇〇〇年全国支部懇談会を広島で開催することに決定

二、十一月十九日の秋田支部創立四十周年記念行事を大森副会長が報告

三、ミニ水力発電計画実行委員会から十一月十九日に発電小屋が完成、二十三日に試運転、予定の1kWに近い900Wの発電に成功した

その他、総務・科学・学生部指導・高所登山・会報・自然保護・財務各委員会から報告

会報「山」六五七号参照

◇二〇〇〇年一月理事会 二〇〇〇年一月十二日 本会会議室

出席者 二十五名

▽審議事項

一、「秩父宮記念山岳賞」実施大綱、実施細則の改正について(会報「山」六五七号〜七ページに詳報)

二、海外登山推薦状交付について(ダンプシュ・ピーク二〇〇〇エクザナ隊一隊長 宮澤美渚子、時期二〇〇〇年春) 承認

三、二日に閉館予定のスイスアルプス博物館閉鎖に伴い、横有恒氏の遺品(門田ビッケルなど三品)を大町市立山岳博物館に寄託する

四、一月の新人会員は十六名

▽報告事項

一、ホームページなどにかかわる問題点と対応策について中間報告(会員と会員外へのサービス、サービスの限界など)

二、ミニ水力発電は今年五月中旬から本格稼働の予定

三、カナダ山岳会会長マイク・モーター氏が来日、一月九日集会室で、アルバータ二〇〇〇実行委員会と打ち合わせ(海外)

四、AAJ編集長クリスチャン・ベックウイズ氏が二月十三日来日、十四日講演会を予定している(海外)

五、文部省登山研修所で低酸素室滞在実験を当会事業として実施(医療)

その他、総務、集会、会報編集、百年史、指導、医療、自然保護、財務各委員会が活動状況を報告

会報「山」六五八号参照

◇二月理事会 二〇〇〇年二月九日 本会会議室

出席者 二十一名

▽審議事項

一、アルバータプロジェクト二〇〇〇の募金要項(目標額三〇〇万円)の提案  
通信費など一部予算を変更して承認

二、平成十一年度海外登山基金の助成は「困難を求めている挑戦、発想の新しい、夢の大きい計画……」ということことで次の二隊に助成したい 承認

①K2遠征隊二〇〇〇(隊長・山野井泰史) K2(八六一一) 東壁

②信州大学ガネッシュヒマールII峰登山隊二〇〇〇(隊長・吉田秀樹) ガネッシュヒマールII峰(七一一一) 西面

三、山の映画を見る会(代表・塚本福次郎)は信毎文化事業団、富山県・立山博物館と共催で、山岳映画「雪の薬師越え」(絶険北鎌尾根)を五月、六月にかけて東京、松本、富山で一般公開するための後援を依頼 承認

四、シルバートール(代表・神崎忠男)から報告書に、当会「マナスル登山報告書」記載の地図の転載願いがあった 承認

▽報告事項

一、自然環境研究センターの「平成十一年度富士山頂部における保護と利用のあり方検討部会」委員に森理事が就任

二、オーストリア・ザルツブルグ政府観光局より二〇〇〇年四月から二〇〇一年十一月まで開催する「山への誘い」へ「マナスル初登頂」などのフィルム協力の話があり、検討中である（海外連絡）

三、日本人の八千〇〇峰の登頂者にアンケートを予定している。またH A Jに「海外の山へ行く人のための情報センター設立」の話があって、一九八〇年以降の六千〇〇峰以上の登頂者にアンケートを予定している由、連携を取りながら進めたい（高所登山研究）

四、ドキュメンタリー会社「フィルムオアシス」より一九九六年青年部K2登山隊のビデオテープ、写真の貸し出し依頼があり、応じる予定（青年部）

五、「海外登山基金」秩父宮記念山岳賞の増額を検討中との報告について、意見交換があった（財務）

その他、指導、海外連絡、ミニ水力発電実行、会報、総務、自然保護手各委員報告会報「山」六五九号参照

◇三月理事会 二〇〇〇年三月八日 本会会議室

出席者 二十二名

▽審議事項

一、二〇〇〇年度事業計画案、一部担当理事から訂正、追加のうえ

二、二〇〇〇年度収支予算案

三、ホームページなどに関わる問題点と対応策（総務委員会内にインターネット小委員会―高原総務担当理事が担当―を設置し対応する、など）

その他の意見 ①東海、信濃両支部でもホームページ作成の動きがある、連携をとりながら将来的には広報委員会として人員も増強したい

四、アルパータ峰登攀メンバー選考について、登攀リーダー・熊崎和宏、森上和

哲、竹内洋岳、を提案―BCマネージャーは選考中

五、北海道支部から図書室にある重複本の寄託願いがあった

六、「山岳」「山」の残品処理―在庫チェックのうえ、支部、新入会員など希望者に配布処分したい（財務）

七、田淵行男記念館は開館十周年を記念して特別展「百楽の山 常念岳―写真でたどる自然と歴史」を開催する予定、当会の資料の事前調査依頼

八、植村記念財団より「エベレストに立つ」登頂三十周年記念展示会への後援名義使用許可願い

九、支部の英文表記は現在「Brand」だが「Section」のほうが当会には適している、との指摘があり、このほか「理事」などの英文表記も合わせ、いままでの経緯、法的なものを加味したうえで継続して審議する

十、三月の新入会員はなし

▽報告事項

一、晩餐会併催の西暦二〇〇〇年記念「山岳写真展」推進組織「山岳写真展実行委員会」を設置、フィルムビデオ、総務両委員会がサポートする

二、日中友好登山二十周年記念事業について―日中学生登山の二年目を二十周年記念事業と位置付け ①中国より役員五、六人を招き記念シンポジウム、レセプション ②日中学生を中心に日本北アルプスなどの登山を中国側の意志を

確認しながら進めたい

三、エベレスト登頂記念行事について―三十周年（一九七〇年）、二十周年（一九八〇年）に当たるが、一九八八年の三國合同チョモランマ交叉縦走も含めて記念行事を晩餐会当日に同じ会場で行う方向で検討する

その他、総務、財務、会報編集、海外連絡、自然保護の各委員会から報告

また、大塚会長から「山本理事から二〇〇〇年二月二十八日付で（一身上都合による）辞任届けが出され、受理した」との報告があり、理事会の席上、

山本氏から辞任の挨拶があった

会報「山」六六〇号参照

◇四月理事会 二〇〇〇年四月十二日 本会会議室

出席者 二十三名

▽審議事項

一、二〇〇〇年度総会議案

二、文芸春秋社より、「ナンバープラス」「ニッポンの挑戦」(五月十一日発売)

へ一九二二年の植有恒氏のアイガー登攀に関する記事と写真 承認

三、山と溪谷社より「日本三〇〇名山」リストの使用願い(「日本三〇〇名山

登山ガイド」を企画中) 承認

四、勸植村記念財団より展示会「エベレストに立つ」に使用するエベレストの

模型、映像「エベレストへの道」の二点を、四月二十日から九月二十四日まで

借用許可願い 承認

五、韓国在住の孫慶錫名誉会員から、ソウル郊外に昨年十一月二十八日に開館

した「韓国登山文化院」に、重複本の寄贈依頼があったので ①日本山岳会か

らの寄贈明示 ②送料を負担してもらう条件で 承認

六、日本体育・学校教育センター(秩父宮記念スポーツ博物館)からの資料使

用期間の更新願い(「マナスル登山関連資料4点」) 承認

七、毎日新聞社から「さよなら20世紀 カメラがとらえた日本の一〇〇年」展

で使う写真「マナスル頂上に立つギャルツェン(今西壽雄氏撮影)」(貸出期間 事後承認

二〇〇〇年三月〜二〇〇一年六月)

八、四月の新入会員は六十一名、復活会員六名

▽報告事項

一、中国登山協会の曾主席歓迎パーティー(四月十三日、グリーンホテル水道

橋)に十名が出席する予定

二、アルバーター二〇〇〇実行委員会から、三月十八日カナダ山岳会会長マイ

ク・モーター氏、同副会長ホプ・サンウォード氏、ジャスパーイエロウヘッ

下山岳博物館長ロリアン・パーリン氏が来日、三月十八日から二十四日まで大

塚会長以下日本側メンバーと登山、記念行事について打ち合わせを行った

三、四月八日開催の山陰支部総会に出席した大塚会長、四月八日開催の山梨支

部総会に出席した小倉副会長から報告

委員会報告は総務、図書管理小委、会報、海外連絡、遭難対策各委員会から

あり ①さきに来日したA.A.J編集長クリスチャン・ベックウイズ氏の仲介で

登山家ジム・ウィッタカー氏が四月に来日、同氏は一九六三年エベレスト西稜

初登頂、一九七八年K2登山隊長、また植村直己氏ほか多くの日本人が世話に

なっている(海外) ②四月十日、ネパール登山協会会長タシ・ザンブー・シェ

ルバ氏が来日し、大塚会長らと会談。同氏は三国合同登山のネパール側登攀隊

長を務めた ③遭難対策委は「インターネットホームページに山岳遭難のアン

ケートを収集しデータベースとしたい」と計画

その他、支部長の交替があるときは、新支部長のプロフィールを「山」に記

載する。

会報「山」六六一号参照

◇五月理事会 二〇〇〇年五月十日 本会会議室

出席者 二十二名

▽審議事項

一、十一月に会員アンケートを実施する予定、目的は会員構成、会員のニーズ

等の現状を把握し、中長期ビジョンづくりの基礎資料とする

二、日本ヒマラヤ協会から「海外登山情報センター(仮称)」設立を想定した

アンケート調査の協力の依頼があった 承認

三、三月から空席となっていた青年部担当理事を松原理事(指導・遭難対策)

に委嘱する。青年部は重要なので、各理事も協力する

四、共同通信社からエベレスト登頂三十周年特集記事用に当会所有の写真集の撮影許可願い

五、五月の新人会員は十九名、復活会員は五名

▽報告事項

一、会長諮問の表彰制度検討結果について

二、五月二十日のグリーンホテル水道橋における支部長会議の開催について

三、財務委員会より入会者もあるが、退会者も多く、この十年で増えた会員数は千四百二名にとどまり、会費の伸びが芳しくない、と報告

その他、会報編集、海外連絡、自然保護、山岳編集、百年史、ミニ水力発電実行、山研運営、科学研究各委員会報告のうち、とくに①アメリカの登山家ジム・ウィッタカー氏が四月二十日に当会を訪問、大塚会長、海外連絡委員と懇談

②増山理事が五月連休にカザフスタンを訪問、登山協会のカズベク・パリエフ会長等と会談した

会報「山」六六二号参照

◇二〇〇〇年度通常総会 二〇〇〇年五月二十日 東京グリーンホテル水道橋  
出席者 二千八百八十八名(委任状含む)

▽議案

一、一九九九年事業報告及び収支決算、財産目録承認の件

二、二〇〇〇年度事業計画及び収支予算承認の件

三、二〇〇〇年度除籍者の件

四、その他

会報「山」六六三号参照 以上四議案承認

▽会務報告

一九九九年年度末会員数

承認

名誉会員 四十名(内永年会員二十四名)

永年会員 六十六名

終身会員 百三十二名

通常会員 五千五百二十八名

夫婦会員 百四十九名

計 五千九百十五名(前年度末会員数 五千八百六十五名)

新入会員 二百三十五名

復活会員 七名

物故会員 五十名

退会者 八十七名

除籍者 三十四名

◇登山の指導と奨励に必要な集会、研修会、講演会、展覧会およびシンポジウムの開催(一九九九年)

(A) 集会

▽六月五日 上高地

▽六月五日 上高地

ウエストン祭(信濃支部)

▽六月十二日～十三日 猪苗代町

探索山行「火山ガスの危険を現地に学ぶ」(科学)

▽六月十三日 伊豆

第六回古道を歩く(図書)

▽六月二十日 本会会議室

新入会のしおり作成(総務)

▽六月二十三日～二十四日 白神山

白神山地体験造林作業 (自然保護)

▽六月二十四日 本会会議室

第一回高層気象講座「高層気象を登山に生かす」(科学)

▽六月二十六日～二十七日 奥秩父小川山

小川山集会 (学生部)

▽七月二日 本会会議室

第二回高層気象講座「高層気象の基礎」(科学)

▽七月十二日 東京

カナタ山岳会会長歓迎会 (海外)

▽七月二十六日 東京

中国登山協会代表団歓迎会 (海外)

▽八月八日 奥秩父小川山

岩登り研修会打ち合わせ (指導)

▽九月四日 本会会議室

ビールパーティ (山研)

▽九月十一日 本会会議室

名誉会員を囲む会 (総務)

▽九月十八日～十九日 栗駒町

自然保護全国集会「自然観察山行」(自然保護)

▽九月十九日 栗駒高原

自然観察山行 栗駒世界谷地原生花園 (自然保護)

▽九月二十日 本会会議室

委員会・同好会連絡会議 (総務)

▽十月十六日～十七日 大垣

全国支部懇談会 (岐阜支部)

▽十月二十六日 本会会議室

第八回山を語る (図書)

▽十月三十一日 東京都写真博物館

全国山岳博物館連絡会議 (資料)

▽十一月四日 東京写真博物館

韓国山岳会会長歓迎会 (海外)

▽十一月五日～七日 文部省登山研究所

岩登り研修会 (学生部・指導・青年部)

▽十一月六日 本会会議室

前期新入会員オリエンテーション (総務)

▽十一月十三日 日本大学会館

大学山岳部監督会議 (学生部)

▽十一月十四日 奥多摩

自然観察山行 柳沢峠周辺ブナ林 (自然保護)

▽十一月十四日 皇居外苑

マラソン大会 (学生部)

▽十一月十四日～二十二日 ニューデリーインド山岳会ミレニアム会議 (海外)

▽十一月二十六日 本会集會室

第三十一回山岳図書を語る夕べ (図書)

▽十一月二十七日 明治大学

フォーラム「登山用具の新知識：選び方と使い方」(科学)

▽十二月四日 新高輪プリンスホテル

支部長会議 (総務)

▽十二月四日 新高輪プリンスホテル

年次晩餐会 (総務)

- ▽十二月五日 筑波山
  - 年次晩餐会記念山行 (集会)
  - ▽一月八日～十日 志賀高原横手山  
スキー懇談会 (集会)
  - ▽一月九日 本会会議室
  - カナダ山岳会会長との合同会議 (海外)
  - ▽一月二十五日 東京グリーンホテル
  - 中国登山協会代表団歓迎会 (高所・海外)
  - ▽一月三十日～三十一日 八ヶ岳
  - アイスクライミング研修会 (集会・指導・青年部・学生部)
  - ▽二月四日～六日 富士学園  
総務委員会セミナー (総務)
  - ▽二月十八日 本会会議室
  - 第二十八回山岳史懇談会 (図書)
  - ▽二月二十六日～二十七日 東京グリーンホテル・ルーム
  - 全国支部事務担当者会議 (総務)
  - ▽三月十六日 本会会議室
  - マッキンリー登山隊報告会 (科学)
  - ▽四月一日 本会会議室
  - 十一年度後期新入会員オリエンテーション (総務)
  - ▽四月十三日 本会会議室
  - 学生部総会 (学生部)
  - ▽五月十五日 上高地山研
  - ミニ水力発電完工式および運転開始  
(ミニ水力発電)
  - ▽五月二十日 東京グリーンホテル
- 
- 支部長会議 (総務)
  - ▽五月二十日 東京グリーンホテル
  - 通常総会 (総務)
  - ▽五月二十七日～二十八日 下北半島  
若葉会山行 (集会)
  - (B) 研究会・講演会・展覧会
  - ▽七月十日 長野
  - 長野高校百周年記念講演会 (海外)
  - ▽九月四日 本会会議室
  - 医療委員会研究会 (医療)
  - ▽一月二十一日 本会会議室
  - 医療委員会講演会 (医療)
  - ▽五月七日～(七月九日) 上高地山研
  - 上高地山研資料室企画展 (資料)
  - (C) シンポジウム
  - ▽二月十四日 本会会議室
  - アメリカ山岳会ベックウイズ氏を囲むシンポジウム (海外)
  - ▽三月十一日～十二日 高尾グリーンセンター・高尾山 (自然保護)
  - ◇登山施設の運用、その他登山のための適切な事業
  - ▽上高地山岳研究所の運用
  - ▽受入れ資料保管
  - ▽各博物館、美術館との提携強化
  - ▽海外遠征の記録、会合、行事等の記録、フィルムビデオテープ化による保存
  - ◇山岳遭難の予防と、その対策に関する企画および指導
  - ▽遭難事例アンケート調査

▽雪崩ヒーコン講習会

◇自然保護活動の推進

▽自然保護委員会による自然保護指導者の養成のための「山の自然学講座」

▽自然保護委員会会報「木の目草の芽」隔月刊行

▽ネパールシバプリにおけるラリグラス（しゃくなげ）植林

◇機関紙等の発行

▽『山岳』第九十四年（一九九九）号の発行

▽会報「山」第六四七号～第六五八号の発行

▽インターネットホームページの更新

▽役員・委員会名簿作成

▽会員名簿作成

◇国内および外国山岳団体との情報交換

▽国内関係団体（日本山岳協会・東京都山岳連盟・日本ネパール協会・日本ヒ

マラヤ協会・HAT-Jその他）との連絡

▽海外登山団体との機関紙の交換および情報誌の購入

◇海外登山

▽一九九九年六月六日～七月一日 第十次マッキンリー気象観測機器設置登山隊

▽一九九九年九月三日～九月二十二日 日中学生友好登山隊「雪宝頂」

◇その他の目的を達成するために必要な事業

▽山岳図書の整備

▽山研ミニ水力発電設置

▽海外登山基金による助成

▽その他

◇その他のトピックス

▽名誉会員





男 男







# SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

---

---

Volume 95 No.153

Issued December 2000

---

---

## CONTENTS

- Current Trends and Future Predictions for Climbing in the United States  
.....Chrintian Beckwith.....( 7 )
- George Mallory—Exists through 20th Century .....EMOTO Yoshinobu.....(23)
- Tsurugidake Genjiro'one, origin of the name and an exact writing  
.....ISOJIMA Kazuaki.....(36)
- Doshisha University Alpine Club—Tracing its History during 70 years  
.....HIRABAYASHI Katsutoshi.....(60)
- Ascent of Kwangde Ri East via Northeast Ridge  
.....MATSUBARA Masayuki.....(89)
- First Ascent of Reddomain, Tashue Mountains, Sichuan  
.....TANAHASHI Yasushi.....(99)
- An Attempt on Gasherbrum II from Shaksgam Valley  
.....AJISAKA Seisei.....(106)
- The Untrodden Mountains in West Sichuan, China  
.....NAKAMURA Tamotsu.....(114)
- Chong Muztagh—Unknown Mountains in West Kunlun  
.....KODAMA Shigeru.....(136)
- The Transition of JAC's Membership and Subscription  
.....MINAMIKAWA Kin'ichi.....(151)
- Book Review .....(163)
- In Memoriam.....(196)
- Reports from Local Section .....(239)
- Club's Notes .....(257)
- Catalogue of Japanese Mountain Books in 1999.....(A40)
- RIMO 2000 Karakoram Expedition .....Harish Kapadia.....(A34)
- English summary .....(A21)

---

## The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

---

Office Bearers and Committee  
2000 (May 2000-April 2001)

*President* : OHTSUKA Hiroyoshi  
*Vice Presidents* : OGURA Shigeki  
OHMORI Shigeo  
TAKEUCHI Tetsuo  
*Honorary Secretary* : NISHIMURA Masaaki  
*Honorary Editor* : TAKATOH Hiroshi  
*Honorary Librarian* : MURAI Ryuichi  
*Honorary Treasurer* : MURAI Ryuichi  
*Auditor* : KANZAKI Tadao, NAKAMURA Tamotsu

---

### Committee

AJISAKA Seisei	MIYASHITA Keizoh	SAKAMOTO Masachi
KASAI Eiichiroh	MIYAZAKI Kohichi	TAKAHARA Sanpei
KATSUYAMA Yasuo	MORI Takeaki	
MASUYAMA Shigeru	MURAI Aoi	
MATSUBARA Masayuki	SAKAI Hiroshi	

---

### Council

FURUICHI Susumu	MIYASHITA Hideki	UDAGAWA Yoshinobu
HAGA Takaroh	NAKAGAWA Takeshi	UWOMOTO Sadayoshi
HIRABAYASHI Katsutoshi	NAKAMURA Junji	WAKABAYASHI Keinosuke
HIRANO Shinichi	NAKAYA Mitsuru	YAMAMOTO Hisako
HIRAYAMA Zenkichi	ONOE Noboru	YAMAMOTO Kenichiroh
IWAMA Hiroo	SAITOH Atsuo	YOSHINAGA Hideaki
KINUGAWA Yoshio	TANABE Hisashi	

---

### Chairmen of Local Section

<i>Hokkaido</i> : NIIZUMA Tohru	<i>Gifu</i> : TAKAGI Sakio
<i>Aomori</i> : MATSUSHIMA Seigo	<i>Kyoto</i> : SAKAI Toshiaki
<i>Iwate</i> : NAKAYA Mitsuru	<i>Toyama</i> : KIDO Shigeyoshi
<i>Akita</i> : SATOH Kaneji	<i>Ishikawa</i> : TSUDA Fumio
<i>Yamagata</i> : KIMURA Kiyoshi	<i>Fukui</i> : NAKAMURA Tadashi
<i>Miyagi</i> : SHIBAZAKI Tohru	<i>Kansai</i> : ABE Kazuyuki
<i>Fukushima</i> : SAKUMA Takao	<i>Hiroshima</i> : HIRAI Takeshi
<i>Echigo</i> : IGARASHI Tokuo	<i>San-in</i> : KIKKAWA Yohichi
<i>Shinano</i> : YAMAURA Gentaroh	<i>Fukuoka</i> : MATSUMOTO Yukio
<i>Yamanashi</i> : FURUYA Gakuji	<i>Kita Kyushu</i> : YOSHIMURA Kenji
<i>Shizuoka</i> : OHISHI Atsushi	<i>Higashi Kyushu</i> : UMEKI Hidenori
<i>Tohoku</i> : NAKASEKO Takashi	<i>Kumamoto</i> : HONDA Seiya
	<i>Miyazaki</i> : OHTANI Masaru

## Current Trends and Future Predictions for Climbing in the United States

Christian Beckwith

I've been asked to talk today about current standards of climbing in the United States and what they could mean in the years to come. At first I thought that it would be impossible to talk about climbing in the U.S. without including the entire continent of North America, because to talk about Yosemite without mentioning Baffin Island, or to discuss access problems in Hueco Tanks, Texas, without discussing what it has meant for the exploration of Mexico's cliffs, is to miss much of what is naturally connected in the American climber's mind. The automobile is to the American climber what the aerial tram is to the Alp's Auguille du Midi or the Sherpa is to the Himalayan expedition, and with a car the entire spectrum of climbing is possible, from big walls to free climbs to mixed routes to mountain epics, in America, yes, but also in Mexico and Canada. Influences, too, flow freely across geopolitical borders, so that the hard new Canadian ice and mixed routes play as sirens' songs to climbers in Montana and Wyoming, and the promise of warm limestone walls in El Portrero Chico, Mexico, lures American climbers locked in winter's frigid embrace south. But I will attempt to follow the constraints I have been given, because if I didn't I might have to buy my own rounds of sake tonight, and that is a thing I quite wish to avoid.

Unfortunately, there is one thing that sets the climbing in the U.S. apart from that of the rest of the continent, and that is the matter of access. Hand-in-hand with climbing's increasing visibility in mainstream media has come greater scrutiny from the regulatory agencies that administer the lands upon which we climb. In Mexico, climbing is still an anomaly practiced mainly by visiting foreigners, while in Canada, perhaps because it is a less litigious society than is the U.S., climbing access has not yet become an issue, but in the U.S., the last couple of years has witnessed an unprecedented series of challenges to our right to climb. Battles are being fought by the American climbing community today against aggressive efforts to institute fees, control movement and "administer" climbing by bureaucracies around the country. To the American climber, particularly those who enjoy the historical notion of climber as outsider living at the edges of American society, the realization that climbing's popularity has placed us squarely in the middle of the American society with all its inherent rules and politics has been a severe one. There are signs for hope, but there are more signs that the next years will be contentious ones for the

American climber.

Two cases illustrate the current political landscape. The Hueco Tanks State Historical Park, outside El Paso, Texas, is home to North America's largest concentration of painted mask rock art, and is considered a highly significant archeological site for Native Americans. It has also been, since the early 1980s, America's premier bouldering area and a favorite wintering spot for climbers. In 1998, citing the protection of rock art as the main reason, the Texas Parks and Wildlife Department (TWPDP) closed climbing at Hueco to all but a highly limited number of people per day. The decision came as a shock to the climbing community, but despite extensive efforts to overturn or at least reduce the restrictions, TWPDP remained adamantly opposed to climbers' interests. In fact, in September, 1999, the TWPDP announced that 40 new rock art sites had been identified at the Park and gave indication that the findings only underscored the need for further restrictions on climbing. Ongoing dialogues between climbing organizations and the TWPDP have cost the climbing community considerable time and money, but there is little hope that the wonderful desert ambiance and the incredible bouldering so special to climbers from around the world will be open any time in the near future.

At the other end of the spectrum is a well-publicized fight for the heart of Yosemite Valley. Perhaps no area in the country has meant as much to climbing as Yosemite, with its immaculate granite walls, beautiful crack lines and fundamental lessons waiting for all who venture onto its routes, but in 1997, Camp 4, the traditional campground for climbers, was threatened with development that would have irrevocably changed the nature of a Valley climbing experience. One man stood up against the threat: Tom Frost, photographer, inventor, the first ascensionist of the Salathé and North America walls in Yosemite as well as Ama Dablam and the South Face of Annapurna in the Himalaya, sued the National Park Service to prevent the development. The lawsuit was joined by The American Alpine Club, who later filed an application to have Camp 4 declared a National Historic Site. Today, Camp 4 is eligible for the National Register of Historic Places, which guarantees it from encroaching development. The victory was celebrated by climbers from around the country, but there remain larger battles to come. They include a proposed ban on fixed anchors in Wilderness lands that would make it illegal to rappel from man made protection in some of our most popular mountains, reservation systems in national parks that would necessitate paperwork far in advance of any actual climb, and the institution of reservation-only camping permits in areas like City of Rocks, Idaho, a park that sees its predominant use from climbers. The good news is that American climbers have united to deal with many of these issues in admirable ways. The bad news is the battles have only begun. Getting climbers together for any

reason has been likened to trying to herd a roomful of kittens, but the reality for the American climber is that political organization is our only hope if we are to maintain access to our favorite climbing areas.

Against that admittedly bleak backdrop, there was a lot of great climbing going on in the States in the last few years. On the free climbing front, perhaps no climb in recent memory has so electrified the American climbing scene as the first free ascent, followed by the first one-day free ascent, of what is arguably the most famous climb in the world. In 1993, Lynn Hill, a diminutive, intelligent, and exceptionally talented woman who pushed her personal limits while winning the World Cup three consecutive times, retired from competitive climbing and set her sights on returning to her roots as a traditional climber. To do this, she set out to scoop the long-coveted goal of freeing the Nose route on El Capitan in Yosemite. Since its first ascent in 1958 by Warren Harding, Wayne Merry and George Whitmore, among others, the Nose has come to embody the hopes and aspirations of two generations of climbers, and while significant free attempts had been recorded on El Cap before Hill began hers, it is appropriate that it was her efforts on El Cap's first route that heralded the beginning of a new Golden Era in Yosemite. Since her ascent, which she made all-free at 5.13b (Scotty Burke, who last year managed to free every pitch after 261 days of effort, suggests that 5.14b is closer to the mark), climbers have begun to look at the Big Stone with different eyes, and a number of other routes have gone free: The Salathé, El Niño, Free Rider, and this year's Leo Holding route, Passage to Freedom, which attains El Cap Tower at hard 5.13. American climbers have been noticeably absent from the development of the new free push on El Cap; only the Salathé has seen a verified American ascent, and that by a young 21-year-old powerhouse Tommy Caldwell (your own Yuji Hirayama made the successful third ascent of the route); but the buzz is on, and the country's best climbers are again turning their attention to the granite crucible from which so much influence has traditionally emerged.

Perhaps because most of El Cap's aid lines have already been climbed, Yosemite is enjoying a renaissance in other areas as well, with repercussions that will undoubtedly be felt outside the confines of the Valley. In a 1963 article in *The American Alpine Journal*, Yvon Chouinard, one of the pioneers of the Golden Era of Yosemite climbing, wrote, "Yosemite Valley will, in the near future, be the training ground for a new generation of superalpinists who will venture forth to the high mountains of the world to do the most esthetic and difficult walls on the face of the earth." That prediction has been born out by the scores of aid climbers who have attended the University of Yosemite and gone forth to Patagonia, Pakistan, Baffin Island, and beyond, putting up hard routes that drew upon the lessons they learned in the Valley. New aid routes continue to go up every year on El Cap—six were established last

year alone, including the first girdle traverse—but they are increasingly “squeeze plays” that connect established routes with pitches of new climbing. Valley regulars who these days scan the Greater Ranges for their big walls, are still carrying out Chouinard’s predictions, but today there are more exciting developments afoot that have evolved past simple aid climbing, and these developments are forging new paradigms that will show up in other areas around the world in the years to come.

Chris McNamara, a 21-year-old of immense talents, has been at the forefront of one of these developments : speed climbing. Along with a number of other Yosemite climbers, McNamara, or “Big Mac”, as he is commonly known, has been engaging in a game of one-upmanship that has resulted in speed ascents of routes in dazzling times. For the modern speed climber, it is no longer enough to climb the most difficult aid routes on El Cap : the new challenge is to climb them as rapidly as possible. The players involved work within an arena with which they are profoundly comfortable, and employ techniques that are becoming increasingly sophisticated, to speed up the 3000 feet of El Cap in times as little as a few hours on routes that traditionally take a number of days. While it is unclear at this point exactly how much of this type of climbing is applicable to objectives outside the Valley, certain developments will work their way into climbing at large in the future, allowing for safer, faster, more efficient climbing wherever they are applied.

Another aspect of American climbing that is being pushed in the Valley is clean climbing, with clean ascents of routes that were traditionally climbed with pitons, copperheads, and the like beginning to carry a certain cachet. Reports on first clean ascents are beginning to appear in the climbing magazines, expanding a phenomenon that began in 1967 with an article that appeared in Patagonia’s catalogue expounding the use of nuts to avoid the damage pins cause to the rock. The trend can only be commended, particularly agencies’ growing scrutiny of climbing practices and how they affect the environment, but again, how this plays out in the years to come is less than clear.

But all is not sunny granite in America, and all climbers are not content with the sweeping rock walls of Yosemite. In winter months, the thoughts of alpinists turn to ice, and mixed climbing—the application of ice tools and crampons to routes comprising both ice and rock—has been one of the most exciting new developments in the American climbing scene. Defficult, gymnastic techniques coupled with increasingly refined tools and pro, plus recent research that has altered the way ice climbers place screws, has resulted in hard new routes in easy access venues (Vail, Ouray, Hyalite) that feature at least as much rock as ice. One man is usually given credit for modern developments in American ice climbing : Jeff Lowe. His route, Octopussy, a 100-foot limestone rock climb to a thin pillar of ice high on the roadside cliffs of Vail,

Colorado, riveted attentions on a new realm of possibilities on the winter crags.

Just as alpinists have traditionally prepared for hard new mountain routes by developing their skills on smaller cliffs close to home, so, too, are they using the new tools and mentality of ice climbing to prepare for the mixed routes of the future. The route that stands out most as a direct application of modern mixed techniques to a big mountain objective was the 1997 route *A Pair of Jacks* on the north face of Mt. Kennedy. The 6,000-foot face lies on the border of Alaska and Canada, isolated from popular climbing areas, frigidly cold, as imposing a position as can be imagined. Jack Tackle and Jack Roberts, two alpinists who have established some of the finest climbs in Alaska of the last 20 years, chose the north face of Kennedy as an objective on which they could apply the tricky practices of mixed climbing they studied on their home crags. The climb involved the use of portaledge, difficult mixed climbing, one dropped crampon, and a harrowing two-day storm that prevented them from reaching the summit, but it perfectly illustrated the possibilities open to the modern alpinist who is willing to approach big projects with lessons learned at the crags back home. These mindsets have made imposing objectives such as the north face of Mr. Hunter, modern testpieces. They will result in harder and harder routes in Alaska in the years to come.

While a number of climbers will undoubtedly be authoring those futuristic routes, it is Steve House, a motivated young guide out of Washington state, who has pushed the imagination the most in recent years. In 1995, '96, and '97, while guiding on Denali, North America's highest peak, House put up three new routes in three years, including the brilliant solo *Beauty is a Rare Thing* on the northwest face of the west buttress, all with the same philosophy: that by going ultra-light, climbing at night when it is cold and napping during the warmest part of the day to avoid the need for sleeping bags, and finishing off routes in single pushes, sometimes up to 36 hours at a stretch, a climber travels lighter, faster, and thus stands a better chance of success. Since then, his new routing has continued, both in Alaska and in Canada, and his recent climbs, which include the *Gift (That Keeps on Giving)* on Mt. Bradley in Alaska's Ruth Gorge, attest to his fantastic ability.

These are all individual examples of climbs that have emerged as defining moments in the last ten years of American climbing. They were helped by advances in equipment, clothing, foods, and drugs, all of which allow today's climber to move more efficiently over more difficult terrain than was possible a generation ago. New techniques also played a part—techniques that will undoubtedly become part of climbing's regular bag of tricks in the years to come. But more important than refined techniques, stronger equipment, lighter gear, or concentrated drink mixes is the vision necessary to see what no other climber can see, and the boldness to make

that vision a reality. Bold climbers, applying the techniques and tools of an age, pioneered these routes, routes that stand as landmarks along climbing's path. And it will be bold climbers who take climbing into its next chapter.

Climbing evolves incrementally, not revolutionarily, with one or two exceptional climbs pushing the sport forward every year. Those incremental changes, however, result in a standard of climbing difficult to imagine from one generation to the next. So, the question I'm supposed to address now is, what will it all look like in my country in a generation's time? The obvious answer is that people will continue to build on the efforts of the pioneers as they have always done, which means the milestone routes of today will be the classic routes of tomorrow. People will take the imagination necessary to climb a new free route on El Cap and apply it to Colorado's Black Canyon of the Gunnison and the Diamond on Longs Peak ; they will take the mixed climbing techniques learned in Vail, in Ouray, in Hyalite Canyon, mix it with the speed climbing learned in the Valley, and apply both to great Alaskan objectives, such as the south face of Mt. Logan and the east face of Mt. McKinley. The pioneers, meanwhile, will author bold new routes that push climbing to an even higher level. The result will be a standard of climbing that is difficult to envision today.

But there is one thing that I think will stay constant. The spirit of climbing, that ephemeral curiosity that dares to encounter a situation where the outcome is uncertain, exists at the very heart of what we do, regardless of the year of a person's nationality or ability. Climbers know that to measure yourself in such circumstances you in ways you cannot imagine, and such knowledge will always be that which pushes us forward, into those soaring mountains that pierce the sky, not to mention our own imaginations. Wherever the future takes us, the climbing spirit will be there, creating masterpiece routes on the edge of failure—and pushing us ever forward into the next great adventure.

## **The Untrodden Mountains in West Sichuan, China**

### **Tamotsu Nakamura**

"TODAY the map has no more secrets." Idle minds repeat that parrot phrase. But who knows all Tibet, or its far-away frontier on western China? Even its own prayer-muttering tribes know only their own bleak, wind-swept valleys…… (The National Geographic Magazine, February 1930, Washington, D.C.)

This is an opening paragraph of Joseph F. Rock's journey seeking the mysterious mountain, Amnyi Machen. The venture was carried out three-quarter century ago. However, the readers' attention is invited to the fact that even today the Rock's

words may apply widely through Tibetan territories of Southwest China. Once being off the beaten tracks in the remote regions of Southeast Tibet and West Sichuan, you would meet untouched stunning peaks and hidden valleys with beautiful forests, pastures and, in some places, historic lamaseries.

This article has been worked out to introduce less-known mountains of West Sichuan (formerly Eastern Tibet) in two parts.

## **I. Hengduan Mountains East • Unclimbed Peaks in Sichuan Province**

Being different from Southeast Tibet where all the 6,000 m peaks still remain untrdden, there are only a couple of unclimbed 6,000 m peaks in Sichuan nevertheless countless alluring rock and snow peaks of lower than 6,000 m are waiting visits of climbers and trekkers. In this part an outline of major mountain ranges/massifs in the eastern part of Hengduan Mountains between Jing Sha Jiang and Min Jiang of Upper Yangtze River is described from west to east. It is noted that, unless otherwise specifically mentioned, all the peaks are those unclimbed.

### **1. Chola Shan Massif**

Two 6,000 m peaks were already scaled. Mt. Chola I (6,186 m) was first climbed by the joint party of Japan-China in 1987 and Mt. Chola II (6,119 m) was ascended by an American solo climber in 1997. U.A.I.I. team ascended some 5,000 m peaks in 1997. However, 5,816 m peak in the northern end is unveiled, and in the west supposedly remarkable rock peaks would exist that surround an old lamasery.

### **2. Shaluli Shan Range**

This mountain range covers vast area and a boundary with the other mountain massifs is unclear. Each massif is introduced in succession from north to south.

#### **(1) Gangga Massif**

This massif is stretched to southeast from the end of Chola Shan in the south of Yalong Jiang. The main peak, Gangga (5,688 m) and other 5,000 m peaks have small glaciers.

#### **(2) Jarjinjabo Massif**

The highest peak is 5,812 m and the second highest is 5,725 m. The most impressive peak is a brilliant granite rock tower (5,382 m) soaring to the sky like Fitz Roy in Patagonia.

These are located along the northern rim of wide Zhopu Pasture in the north of Xiashe (5,833 m) Massif. To the west there are several 5,500 m peaks and to the east a challenging fortress of Hati (5,524 m) rises proudly.

#### **(3) Xiashe Massif**

Xiashe (5,833 m), the highest peak has beautiful lakes in the southern side, while the north face seems to attract climbers. The massif has the other 5,500~5,600 m

peaks adjacent to Sichuan-Tibet Highway.

(4) Dangchezhengla Massif

This massif situates 15~20 kilometers away from Batang to the east. An access to the base camp is short. Four principal peaks of 6,060, 6,033, 5,833 and 5,850 m dominate ranging from east to west. Japanese party assaulted the highest peak from the northern side in 1991, but the attempt was unsuccessful because of the bad weather and danger of avalanches. Since then no one has tried to approach to the mountains. In the southern side of the mountains a heaven lake, called Yamochouken locates at such a high altitude as 4,800 m above sea level.

(5) Genyen Massif and neighbor mountains to the north and northwest

To the south of Sichuan-Tibet Highway between Litang plateau and Batang, there is a vast mountain area. The highest peak, Genyen (6,204 m) that is a divine mountain was climbed by Japanese party in 1988. However more than ten peaks of rock and snow over 5,800 m are waiting climbers. In particular, 5,965 m peak towering like a sharp beak is magnificent and scenery of Rengo Monastery with 600 years history surrounded by spiky rock pinacles is really enchanting.

(6) Gongga Xueshan (Kongkaling) Massif

These mountains had been known by F. Kingdon-Ward and also by Joseph Rock since 1920's. There are three major peaks of Xianre Ri (6,032 m), Yangmaiyoung (5,958 m) and Xaruo Doje (5,958 m). Japanese party failed to climb Xianre Ri in 1989 and two Americans made a reconnaissance of Yangmaiyoung in 1993. A snow pyramid of complete

conical shape of Yangmaiyoung which Rock called as "Jambayang" would be one of the most beautiful mountains in Sichuan.

### 3. Gongkara Shan Range

This is a small mountain range locating 30 kilometers away from Garze to the southeast. In 1998 Japanese party made a reconnaissance of the highest peak, Kawarani (5,992 m) and the second highest one (5,928 m) from the south. According to the topographical map of Chinese Liberation Army (1:100,000), glaciers seems well developed in the northern side. No other record is available.

### 4. Daxue Shan Range

This range is the most renowned mountains having Minya Konka (Gongga Shan, 7,556 m). Tibet-Qinghai Plateau ends in Daxue Shan. The scope of the range is rather ambiguous. Each massif is introduced from north to south.

(1) Haizi Shan—"Ja-ra"

Tibetans called Haizi Shan (5,820 m) as "Ja-ra" to signify "King of Mountains" and many explorers took notes of this outstanding peak. The southwest side is viewed very near from Sichuan-Tibet Highway. The north face would provide a

possible climbing route.

(2) Mountains of Dadu River basin

Along a deep valley of Dadu He, one of the large tributaries to Yangtze River, there exist many 5,000 m peaks to both the east and west. The highest is 5,712 m peak in the left bank of the river. The eastern end shares a boundary with Jiaojin Shan and Qionglai Shan Range.

(3) Cheto Shan

This is a minor mountain with the highest peak of 4,962 m locating between Haizi Shan and Minya Konka.

(4) Lotus Flower Mountains

Although no glaciers are developed, eminent rock peaks are viewed in the north of Kangding, a capital of Garze Tibetan Autonomous Prefecture. The Japanese party climbed the highest peak of 5,704 m in 1998.

(5) Lamo-she Massif

This was called as "Mountain of Tachienlu" that is just east of Kangding. In 1993 the highest, Lamo-she (Tianhaizi Shan, 6,070 m) was scaled by Americans and the forth highest (Shehaizi Shan, 5,878 m) was climbed by America-Canada-NZ team. The other two peaks of 5,924 m (Baihaizi Shan) and 5,880 m are guarded with rocks and hanging glaciers.

(6) Minya Konka (Gonnga Shan, 7,556 m) and its Satellite Peaks

All the ascents of Minya Konka, since the first ascent by Americans in 1932 till the 6th ascent by Japanese in 1997, were made via Northwest Ridge. In 1998, however, Korean party succeeded in the 7th ascent via Northeast Ridge, which had taken the lives of 12 Japanese climbers in three expeditions. The future problems are the more difficult South Ridge and Southwest Ridge.

There still remain unclimbed satellite peaks over 6,000 m. The following shows the notable peaks to be challenged.

A. Northern part	.....Grosvenor	6,376 m
	.....Mt. Edgar	6,618 m (E-Gonnga)
B. Central part	.....Daddomain	6,380 m
	.....Longemain	6,294 m
C. Southern part	.....Longshan	6,684 m
	.....Nyambo Konka	6,144 m

(7) 6,079 m Massif

There is an independent massif having unclimbed 6,000 m peak in the vicinity of Minya Konka to the south, though it is not in large scale. The highest one is 6,079 m, the profile of which no body has glimpsed yet. To the further south, 5,584 m mountain is shown in the Chinese map, but no specific information is available.

## 5. Qionglai Shan Range

This range forms Min River-Dadu River divide and the highest peak is a famous Mt. Siguniang (6,250 m) having been first ascended via East Ridge by Japanese in 1981. Japanese also first climbed the south face in 1992. The southern side of Mt. Siguniang is now a popular place for tourists, but to the north, a splendid climbing field is expanding along beautiful valleys. Many granite rock spires of some 5,500 m soars peak upon peak and two major peaks of 5,892 m and 5,712 m with glaciers are hidden in a veil in the northern end.

Apart from Mt. Siguniang, Americans climbed the following peaks.

1983.....Celestial Peak (5,413 m, Tibetan name: Punyu), a complete rock pyramid

1994.....5,484 m and 5,383 m peaks

1996.....5,666 m peak

In further north, there is an unknown massif of five 5,000 m peaks, of which the highest is 5,527 m.

## 6. Min Shan Range

Min Shan is the eastern end of Hengduan Mountains near Jiuzhaigou and Huanlong registered as UNESCO's World Heritage. The highest peak is Xuebaoding (5,588 m) that was first climbed by Japanese in 1986. This area is no longer a field to seek a pioneer work but tourist spots.

## II. Journey to Unknown Mountains and Valleys in South Kham

The South Kham that had belonged to Xikang Province was incorporated into Sichuan Province in 1949 when Communist China enforced new administration.

Our trip in the first half of 2000 was focused to the unknown region of the South Kham. A key word is "Seeking New Discoveries", and consequently the following two targets were programmed.

First round.....Unclimbed 6,000 m peaks, Dangchezhengla Massif east of Batang

Second round.....Jarjinjabo and Xiashe Massifs north of Litang Plateau

### 1. Dangchezhengla and Heaven Lake

Except for the satellite peaks of Minya Konka, only three mountain massifs have unclimbed 6,000 m peaks in West Sichuan. These are Xinanre Ri (6,032 m) of Gongga Xueshan, 6,079 m peak south of Minya Konka and Dangchezhengla.

Our party of two elder members (Total age is 132 years old.) arrived at Chengdu via Shanghai on May 26, 2000. We were well received by Zhang brothers of Sichuan Adventure Travel and our guide Lenny Cheung. Zhang brothers are getting reputed in USA as the most experienced guide of rafting in both Yangtze and Tsanpo rivers.

On May 27 we got to Kangding from Chengdu in eight hours by a Toyota Land-cruiser via newly opened Erlangshan Tunnel.

On May 28 to 29 we proceeded westwards in the rain driving Sichuan-Tibet Highway to Batang (2,560 m). The road maintains a high altitude over 4,000 m about 200 kilometers long in the section of Litang Plateau. Lenny made necessary arrangements for organizing our caravan at Dongba village (2,690 m) near Batang.

On May 31 a favor swung towards us as a cycle of good weather was about to commence after it had rained several days. Our caravan could manage to depart from Dongba and ascended a trail along the mountain ridge to the east. Our party consisted of two Japanese, a Chinese guide, three Tibetans (a local secretary of Communist Party and two muleteers), nine horses and one yak. We stayed overnight at one of Tibetan house in Zhomba village (3,740 m).

In this season it is not easy to employ local porters and animals such as horses, mules and yak to carry a burden because villagers are very busy in gathering caterpillar fungus (Chinese traditional medicine) in higher places over 4,000 m and animals are moved to high pastures for grazing. The fungus is the substantial income source for local Tibetan people. They sell one piece at a quarter dollar.

On June 1 the fine weather came back.. The caravan started with five horses and seven porters. The trail was ascending along the left bank of the valley to the east through a primeval conifer forest. Sometimes appeared rhododendrons in full bloom. In the opposite side of the valley there was an isolated lamasery. Before long the valley ended being blocked with an overwhelming rock peak of 5,148 m, beyond which there must be a heaven lake. We set up our base camp (BC) at 4,450 m near a temporary summer hut for grazing near the main stream.

On June 2 it was cloudy but often sunshiny. We pushed our way as the path climbed up a steep zigzag slope and then followed a stream leading us to the right shoulder of the rock peak. We must look there the only outlet of the heaven lake, Yamouchouken (4,800 m). The horses were gasping. Off the trail we could see many *Meconopsis integrifolia* of yellow flowers, but no *M. horidula*, so-called "Blue Poppy" were found in any place. The writer's diary describes as under:

"At last we reached the outlet at 10:30 am that locates in the western end of the lake. A complete tranquility rests over the entire vicinity. No sighs of animals are felt at all. The scenery in my front is quite different from what I have been imaging. It is really breathtaking. In spite of early summer, the lake is almost totally frozen and the surface is glittering in silvery white. I was reminded of the salt lakes in the highland of Bolivian Andes and Ethiopia in East Africa. If you had one day walk down to Jin Sha Jiang river basin from the lake, you would suddenly suffer from dry and hot blast running up the valley. It is a wonder of the nature, indeed, in South

Kham.”

We got off the horses and continued our march further to the east tracing a foot-path along the northern bank of the lake until all the three peaks (6,060, 6,033 and 5,833 m from east to west) of Dangchezhengla Massif came into sight. We ceased our trekking at the point of 4,900 m. 5,833 m peak had a large glacier. The southwest side of the highest peak seemed not so difficult to climb. In the late afternoon we returned to BC. We could accomplish a preliminary reconnaissance on the mountain massif.

On June 3 our caravan went down to Batang and spent one day there to be prepared for the next round.

## 2. Heart of South Kham-Zhoku Pasture and Jarjinjabo Massif

We are apt to overlook an important thing that lies near at hand. A hidden paradise has existed not far away to the north from Sichuan-Tibet Highway of our main traffic. Incidentally the local chief of Dongba village gave us the relevant information, which was summarized as follows:

- (1) Zhoku Pasture and its surrounding nature reserves are the most beautiful in Batang County. Wide grassy valley, rock and snow mountains, primeval forests, a blue lake and wild animals are in a perfect harmony. It could be compared with Jiuzhaigou.
- (2) Zhoku Monastery having 700 years history is a holy place of an authentic Red Hat sect. Now an access is possible by a vehicle as a road to carry mining products has been constructed from Chalu to a silver mine beyond Zhoku Pasture.

On June 5 we left Batang early morning for Zhoku Lamasery with a great deal of expectation as if we were entering into a secret and isolated world, “Lost Horizon” of James Hilton. We turned to the north at the junction of the highway to Chalu and Zhoku. From Chalu a young officer of the local government accompanied us as a pilot. He had a role of watching the foreigners too. Our land-cruiser went forward along the left bank of the valley to the northeast. We passed by a hot spring where old lamas were bathing. Plenty of conifers and oak trees grew natural in the mountain. The pine-oak woods yield the same species as Japanese Pine-mushroom (*Tricholoma matsutake*) that are exported to Japan. An old lamasery and then a ruined stone defense tower appeared. At about 4:00 pm, the valley merged with a vast and flat pasture where hundreds of yaks and sheep were grazing.

Zhoku Pasture is at an altitude of 4,050~4,100 m above sea level, spreading about 20 kilometers long from NWW to SEE and 2~4 kilometers wide where Khamba people are living their life of nomads in black tents looking after yaks, sheep and horses. Jarjinjabo mountain massif stretches in a panoramic view over the pasture. The grandeur of granite peak (5,382 m) viewed in front is outstandingly

impressive. But it is regretful that no glaciers are seen.

In late afternoon we arrived at Zhopu monastery (4,120 m), the neighborhood of which supposedly had an atmosphere of "Shangri-La". Many lamas and students received us warmly but curiously, as we were the first foreigners to visit them.

On June 6 it was fine. After having taken photographs of the challenging north face of Xiashe (5,833 m) in the early morning, we ascended a gully between granite walls just behind the monastery to the upper lakes for some hours. It was a hard work and we could not help turn back halfway. At 3:00 pm we had an interview with Living Buddha who is the supreme lama in this monastery. He explained that the monastery had been opened in 1260's A.D. and now had 30 lamas and 300 students, of which 100 were nun. We came back to Zhopu Pasture and stayed at a villager's log house.

On June 7 the weather was stable in the morning. We made one day trekking to search the highest two peaks of 5,812 m and 5,725 m. Riding on horses we marched calmly to the northwest. Fertile grasslands, yaks, sheep, black tents, Khambas girls and Tibetan dogs were representing a typical picture of Eastern Tibet. We spent a couple of hours in Tibetan black tent where only women and children were stationed almost throughout the year. Tibetan females look after animals and children in the pasture, whilst males remain in their villages to take care of houses and barley fields.

The top of 5,727 m peak is snow covered and the southern side looks gentle. A profile of the highest 5,812 m peak seems different. The broad southeast face is guarded with precipitous ridges and gullies with hanging glaciers. But from a climbing point of view, it would not be so attractive. Further to the northwest some 5,500 m peaks are ranging. In the evening a shower came and the rambling of thunder was heard. It noticed that the weather was changing.

On June 8 it rained. We told "Zaijian (See you again)" to warm hearted Zhopu people. On June 10 we returned safely to Chengdu. The outcome of our whole journey was quite satisfactory.

#### **Reference maps:**

Map of Mountain Ranges in China, 1:6,000,000 (Chinese version)

Map of Mountain Peaks on the Qinghai-Xizang Plateau, 1:2,500,000 (English)

Map of Garze Tibetan Autonomous Prefecture, Sichuan, 1:500,000 (Chinese)

DMAAC (USA)-TPC Aeronautical Chart, 1:500,000 (English)

Chinese Peoples Liberation Army, Topographical map, 1:50,000 & 1:100,000 (Chinese)

Russian Topographical Map, 1:100,000, 1:200,000 & 1:500,000 (Russian)

本稿は、Himalayan Journal の名編集長として知られる、Harish Kapadia 氏より送られてきた最新の東カラコルムの登山報告である。この地域はインド・パキスタン・中国の三国が国境を接する国境未確定地域であった関係で国境紛争が絶えず、1962 年の中印戦争、1984 年からの印パ紛争は、未だに解決するに至らず、今世紀を終わろうとしている。筆者の Kapadia 氏は、この地域の平和を願って、1996 年以降ボンベイの民間登山団体 The Mountaineers を指揮して、継続的にシアチェン氷河地域を訪れている。

2000 年 7～8 月にインド・フランス登山隊 (H. Kapadia 隊長) が歴史的に有名な Karakoram Pass (5 569 m)、Col Italia (5 920 m) と二つの峠に到達し、Rimo IV (7 169 m) と Migpa (5 935 m) に登頂した。Col Italia は中央リモ氷河の源頭にあり、シアチェン氷河へ通じている峠であるが、1913 年に Filippo de Fillppi の隊が訪れて以来、二隊しか達しておらず、1930 年に Prof. G. Dainelli が通過して以来の 70 年振りのことであった。この成果は新世紀に向けての明るい話題であり、紛争が一日も早く解決し、この地域にも安心して入域できるようになりたいものである。その意味でも Millennium の掉尾を飾るに相応しい原稿として、原文のまま掲載することにした。(編集委員会)

## RIMO 2000 KARAKORAM EXPEDITION

### Harish Kapadia

The expedition was organised from 25 July 2000 when five Indians and four French members finally gathered in Leh. After proper acclimatisation the team moved to the Nubra valley to start the trek to the mountains.

Starting on 31 July the team with seven Sherpas, 38 horses and other helpers followed the historic Central Asia Trade Route. After initial bad weather and crossing flooded nalas the team went from Changlung-Jhingmoche-Tutiyailak-Skyangpoche to cross Saser La. The Shyok was crossed on 6 August and the trail continued via Chhongtash-Murgo-Kalon Chumik-Burtsa-Qazi Langar to reach Depsang La. Form Track Junction on the Depsang plains, the Indian members visited the historic Karakoram pass.

The trade route to Karakoram Pass is used for centuries. Nothing is known of the early pioneers who discovered this pass. But later several Central Asian travellers and traders passed from here in search for trade. Many used the trail for pilgrimage to Mecca (via Leh, Srinagar, Amritsar and Mumbai!). Bones of animal littered the route which are still seen. The difficulties of river crossings and difficulties of passes en route are legendary and several books and stories are written about it.

On this historic Central Asia Trade Route caravans passed till 1959. The India-China war of 1962 put the area under restriction. In the past 40 years we were perhaps the only third civilian party to visit the Karakoram Pass. Standing on the pass

gave a great feel of history of the by-gone trade caravans.

On 12 August the team reached Gapshan. From here two separate base camps were established-on the South Rimo glacier (on its right bank) and on the Central Rimo glacier (foot of the central moraine).

### **SOUTH RIMO GLACIER**

Starting from the 15 August, the team ferried loads to the Advance Base Camp. While the camp was being stocked, Camp 1 was established by the 17th. On the 20th Camp 2 was occupied. After a day of bad weather, Rimo IV (7 169 m) was climbed (third ascent) on the 23rd of August by Dr Jeff and Sherpa Pema Tsering. Lt Cdr S Dam reached an altitude of c. 6 800 m before descending to help the ailing liaison officer down to ABC. The route to the summit followed the west face, approached from the cwm between peaks Rimo III and IV.

Two cols, Lharimo Col, on the southern rim of the glacier, and Dzomsa Col, on the northern rim of the south Rimo glacier, were reached on 24th and 25th August respectively, by three French members each.

The South Rimo glacier had been visited by two previous expeditions from these eastern approaches. An Indian Army term, led by Capt. K. S. Sooch visited the area in 1984. After establishing a base camp in centre of the South Rimo glacier, they followed the Central moraine of the glacier and finally made the first ascent of Rimo IV (7 169 m). Four climbers reached the summit on two days.

In 1989 four members of the Indo-British team made the second ascent of the peak by the west face. They crossed the high col between Rimo II and III and descended to the Cwm between these peaks and Rimo IV. Summit was reached from a high camp before they retreated back to the North Terong valley by the same high col. Our route of ascent almost followed the route of 1989 expedition.

In 1986 an Indo-New Zealand expedition attempted Rimo I from the eastern approach. Mired in controversies they failed to achieve their goal.

### **CENTRAL RIMO GLACIER**

The area of the Central Rimo glacier had been visited only twice before. In 1913 an expedition of Filippo de Filippi spent some weeks on the both the South, as well as the Central Rimo glaciers, mapping the area, though their party did not reach Col Italia. Their photographs and panoramas are a complete record of these glaciers. In 1930 a party of Italians, led by Prof. G. Dainelli were climbing on the Siachen glacier. The Nunbra river, which drains the Siachen glacier, was flooded and blocked their exit beyond Warshi. As an alternative escape route they climbed on the Teram Shehr glacier and crossed a high col at its head and descended the Central Rimo glacier. They named this col as "Col Italia". Their party then returned to civilisation by the caravan route from the Depsang la. No other party had visited this glacier in last 70

years.

Three Indian members and four Sherpas proceeded on the Central Rimo glacier. After initial difficulties they opened the route which led to "Lake Filippi" which was at the centre of bifurcation of the Central and South Rimo glaciers. The party followed the right bank of the Central Rimo glacier to set up four camps in all till the foot of "Col Italia". En route "Lake Dainelli" and the snout of the North Rimo glacier (International boundary) were observed. After a day of bad weather, "Col Italia" was reached on the 23rd of August by three Indian members and two Sherpas. It is a 7×7 kms plateau and they could overlook the legendary "Raider's Cols 1 and 2" towards the Shaksgam pass.

They returned to Camp 1 on the 25th August. On the 26th Huzefa, Nima and Karma Sherpas climbed Migpa, (5 935 m) (first ascent) and obtained a view of both the glaciers.

#### TRAGEDY

As the teams were returning on the 27th of August, as planned, a tragedy struck the team. The Central Rimo team was crossing a branch of the Shyok river. Suddenly, Dan Sinh fell and three other members tumbled with him. All four were swept by the Shyok river, even though water was only knee-deep. The cold was intense and huge chunks of ice were floating rapidly in the river. Three members, Huzefa, Harish and Kumaoni Dan Singh managed to reach different banks. Dan Singh was reached first and was rescued by the Sherpas who had managed to locate him. Injured, wet and shivering in the cold breeze, Harish and Huzefa spent almost three hours sheltering under a small rock before the rescue arrived. KAIVAN MISTRY, who was unable to throw off his heavy rucksack, possibly hit his head against a rock as he fell. He was carried 2-3 kms down stream where he was found dead by the South Rimo team who were crossing the Shyok at the same time.

Kaivan's body was carried to Gapshan and after two days it was flown to Leh, on the 29th August, by an Indian Air Force helicopter and sent to Mumbai on the 30th after conducting the post-mortem at Leh.

Kaivan Mistry (32 years) was an experienced mountaineer on his 9th trip to the Himalaya and the Karakorams. He was a Lighting-engineer-designer for the theatre and movie world in Mumbai. He was well-known in the mountaineering and the art circles. Very enthusiastic outdoor lover he loved the trans-himalayan barrenness. His typical Parsi humour regaled friends on many Himalayan nights. He was unmarried and leaves behind old parents. Kaivan will be sorely missed. May his soul Rest in Peace.

The expedition returned by the same route to Sasoma on the 2nd of September and to Leh on the 4th of September 2000.

## SUMMARY OF THE EXPEDITION

### Peaks Climbed

No.	Name and height	Date climbed	Summiteers	Remarks
1.	Rimo IV (7 169 m- 23,520 ft)	23 August 2000	Dr J.F. Manificat and Pema Tsering Sherpa	Third Ascent (via west face)
2.	Migpa (5 935 m- 19,472 ft) horseshoe'	26 August 2000	Huzefa Electricwala, Sherpas Karma and Nima Dorje	First Ascent (via southeast ridge)

### Passes and Cols Reached

No.	Name and height	Date reached	Persons	Remarks
1.	Karakoram Pass (5 569 m- 18,270 ft)	11 August 2000	Harish Kapadia, Kaivan Mistry, Huzefa Electricwala, Lt. Cdr. S. Dam. Raj Joshi and Capt. R. Jain (LO)	As per available re- cords, perhaps ours was only the third civilian party to reach the pass in re- cent years
2.	Col Italia (5 920 m- 19,422 ft)	23 August 2000	Harish Kapadia, Kaivan Mistry, Huzefa Electricwala, Sherpas Pemba Tsering and Karma.	The pass was last crossed in 1930. We were the second party to reach this.
3.	Dzomsa Col (6 050 m- 19,850 ft)	25 August 2000	Jeff Tripard, Bernard Odier and Dr J.F. Manificat.	Col on the northern rim of the South Rimo glacier, over- looking the Central Rimo glacier.
4.	Lharimo Col (6 200 m- 20,340 ft) "holy col"	24 August 2000	Jeff Tripard, Bernard Odier and Dr J.F. Manificat.	Col on the southern rim of the South Rimo glacier, near Lharimo peak.

## Other Points Reached/Observed/Studied

No.	Name and height	Date	Persons	Remarks
1.	Point Goba (5 450 m- 17,880 ft) "village headman"	26 August 2000	Harish Kapadia and Kaivan Mistry.	A high vantage point above "Lake Filippi" which offers a complete coverage of both the Rimo glaciers. Possibly from the same point Filippi had taken a panorama in 1913. It is one of the important and prominent point between two glaciers. A small cairn (and an old bucket) was found here.
2.	Gyani Ridge (5 200 m- 17,060 ft) "Knowledge Ridge"	14 August 2000	Harish Kapadia and Huzefa Electricwala	A prominent ridge situated to the east of the Central Rimo Base Camp. It offered a vast panorama of both the Rimo glaciers and surrounding peaks. This point was reached by Filippi in 1913 and a similar panorama was taken by him. Because of the knowledge of the area it offered it has been named as such.
3.	Raiders' Cols 1 and 2 (6 000 m-19,690ft) (Situated on the northern rim of the Central Rimo glacier)	23 August 2000	By Central Rimo Team from Col Italia'.	As per legend Central Asian Raiders looted Balti villages on the Siachen glacier and below towards the Gyari nala. Possibly they came across these cols which connect with the North Rimo glacier and the Shaksgam Pass.
4.	"Lake Filippi" (5 045 m- 16,550 ft)	18 August 2000	By Central Rimo Team, en route to "Col Italia"	Situated at the upper junction where the South and Central Rimo glaciers moraine meet.
5.	"Lake Dianelli" (5 100 m- 16,730 ft)	21 August 2000	By Central Rimo Team, en route to "Col Italia"	A long lake stretching from the eastern rim of the Central Rimo glacier towards the international border.
6.	North Rimo glacier	21 August 2000	By Central Rimo Team, en route to "Col Italia"	The glacier descends from the Shaksgam Pass to join the Central Rimo glacier. The snout is the international boundary and an alternate trade route passed from here to the Shaksgam valley.



# 山岳図書目録 (1999年)

## 「山岳図書目録について」

日本山岳会図書委員会

「山岳図書目録」も、本年で7年目になりました。この種の目録は、いまのところ各種山岳・アウトドア関係の定期刊行物でも整理・記録の対象とされていないので、この「山岳」掲載のものだけがわが国でのただ一つの資料です。その意味でも、毎年継続して掲載していくことに、よりいっそう価値があるといえます。山の本も年々多様化しており、掲載の範囲に苦労しました。そのため一部に収録できなかったものもありますが、どうか有効にご活用ください。

\* 記載は書名、著者名、発行所、価格、判型、ページ数の順です。

\* 判型が数字で表示されているものの単位はmm(天地×左右)、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

\* 記載の配列は、書名の五十音順です。

## 山岳図書目録

書名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
愛山記	渋谷 茂	桂書房	2000	AB判	276p
会津・雪ものがたり ※画文集	小堀 貞	奥会津書房	1715	190×220	86p
アウトドア撮影ガイド	日本カメラ社/編	日本カメラ社	1400	B5	196p
アウトドア百科	内田一成	舵社	1200	A5	185p
アウトドア・ロープテクニック	羽根田治	山と溪谷社	950	新書判	189p
青森県の溪流	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1600	A5	175p
あおもり 110山	村上義千代	東奥日報社	3600	B5変	236p
秋田県の溪流	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1600	A5	167p
アコンカゲア山頂の嵐	チボル セケリ/著 栗栖 継・栗栖 茜 /訳	筑摩書房	860	文庫判	333p
アジアの山旅	大関 保	穂高書店	1900	四六判	214p
芦生奥山炉辺がたり	森 茂明	かもがわ出版	1600	四六判	187p
芦生の森	広瀬慎也	遊人工房	1500	170×183	47p
阿蘇・風・光 ※写真集	萩尾龍治	海鳥社	2700	200×220	95p
雨巻山	田村豊幸	健友館	10000	B6	214p
アラスカ風のような物語	星野道夫	小学館	800	文庫判	267p
アルパイン・トレッキング	細田 充	地球丸	1000	B6	191p
アルプスの小さな村で暮らすー アルプスに恋したOLが、山の 案内人になった	柿沼和子	双葉社	1500	四六判	288p
行く雲のごとく 高畑棟材伝	浅野孝一	山と溪谷社	1800	B6	238p

石鐘・剣山を歩く	石川道夫	山と溪谷社	1750	A5	143p
異常気象レポート—近年における世界の異常気象と気候変動	気象庁／編	大蔵省印刷局	6000	A4	341p
伊豆・箱根の山を歩く	真辺征一郎	山と溪谷社	1750	A5	159p
一期一会の山、人、本	中島 寛	中島昭子		A5	438p
いで湯行脚三千湯	美坂哲男	山と溪谷社	1700	四六判	311p
いで湯の山旅—関西周辺	中村圭志／編	山と溪谷社	1553	A5	135p
いで湯の山旅ベストコース—東京周辺	桑子 登／編	山と溪谷社	1650	A5	142p
伊能忠敬の歩いた日本	渡辺一郎	筑摩書房	660	新書判	222p
医は国境を越えて	中村 哲	石風社	2000	四六判	356p
いまだ下山せず、	泉 康子	宝島社	600	文庫判	325p
植村直己と山で一泊	植村直己／述 ビーバル編集部／編	小学館	457	文庫判	226p
ウォルター・ウェストン未刊行著作集 上巻	W. ウェストン／著 三井嘉雄／訳	郷土出版社	3500	A5	374p
ウォルター・ウェストン未刊行著作集 下巻	W. ウェストン／著 三井嘉雄／訳	郷土出版社	3500	A5	340p
喪われた岩壁—第2次 RCC の青春群像	佐瀬 稔	中央公論新社	838	文庫判	324p
美しい石鐘 ※写真集	高橋 毅	高知新聞社	6476	260×300	103p
美ヶ原・霧ヶ峰・蓼科・ハケ岳—首都圏山の散歩道4	山と海／編	DHC	1400	A5	159p
美しき山稜—北アルプス白馬岳・唐松岳の四季 ※写真集	菊池哲男	アドミックス	1905	225×200	80p
うつくしま百名山	福島テレビ／編	福島テレビ	952	A5	
裏磐梯—火の山・湖の国 ※写真集	新井幸人	時事通信社	2500	198×230	95p
雲上の神々—ムスタン・ドルバ ※写真集	小松健一	冬青社	9500	320×240	
エソヒグマー—残された聖域 ※写真集	久保敬親	山と溪谷社	4200	230×320	95p
江戸人が登った百名山	住谷雄幸	小学館	752	文庫判	454p
近江百山	近江百山之会	ナカニシヤ出版	2500	B5	224p
小川山 御岳 三峰 ボルダー図集	室井登喜男／編	室井登喜男	950	A5	67p
奥会津 自然からの伝言	小柴吉男	奥会津書房	1857	A5	119p
奥多摩・奥武蔵・秩父—首都圏山の散歩道3	山と海／編	DHC	1400	A5	159p
奥多摩山歩き—一周トレール	東京都勤労者山岳連盟／編	かもがわ出版	1600	A5	211p
奥秩父西端・わが町の山々	矢崎茂男	近代文芸社	1700	B6	275p
奥秩父の滝 ※改訂版	深田光雄	幹書房	1600	A5	111p
尾瀬しじまの旋律—悠久六千年の呼吸 ※写真集	鈴木一雄	日本カメラ社	5000	A4変	159p
尾瀬の草花—ポケット図鑑	伊東良朗／監	高陵社書店	680	文庫判	96p
尾瀬の総合研究	尾瀬総合学術調査団	尾瀬総合学術調	8000	A4	868p

落ちこぼれてエベレスト	／編 野口 健	査団 集英社インター ナショナル	1400	四六判	288p
弟・植村直巳	植村 修	編集工房ノア	1600	四六判	202p
大人の男の実践“森の生活”	本山賢司・細田 充 ・真木 隆	山と溪谷社	1800	A5	262p
おやじは山を下れるか ※詩集	高岡淳四	思潮社	2000	A5	84p
回想の秩父多摩	河野寿夫	白山書房	1600	B6	194p
街道・古道を歩く 関西周辺	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1400	A5	167p
賢い山のウェア選択術	細田 充	山と溪谷社	950	新書判	205p
風の響 早池峰山伏神楽 ※写真集	師岡和彦	光村印刷	3000	250×270	83p
Gati チベット文化園 ※写真集	久田博幸	藤原書店	5000	220×310	143p
かながわの峠	植木知司	神奈川新聞社 かなしん出版/ 発売	695	文庫判	201p
神々の座 8000 m 峰のデーター 1998 年版	日本ヒマラヤ協会/ 編	日本ヒマラヤ協 会	3000	A4	154p
上高地玻璃	中村至伸	プラルト	1286	179×207	
上高地ものがたり	浅野孝一	新潮社	1500	A5	118p
「神の石」行—高橋喜平 88 歳ヒ マラヤをゆく	高橋喜平	熊谷印刷出版部	1905	四六判	195p
画歴の山々—穂高からヒマラヤ へ ※画集	増田欣子	恒文社	1800	四六判	96p
河口慧海 人と旅と業績	高山竜三	大明堂	2800	A5	222p
河口慧海著作集 第7巻 西藏 伝唯識三十頌	河口慧海	うしお書店	11000	A5	522p
河口慧海著作集 別巻1	河口慧海／著 松濤 誠達・高山竜三・金 子英一／監	うしお書店	12000	A5	739p
川よ	天野礼子	日本放送出版協 会	1600	四六判	237p
変わりゆく日本の山林	高田浩一	都市文化社	1500	B6	182p
環境と人間と文明と	川喜田二郎	古今書院	3200	四六判	228p
環境保護運動はどこが間違っ ているのか?	植田 敦	宝島社	457	文庫判	221p
環境問題と自然保護	棚沢能生・他／編	成文堂	3500	A5	285p
関西ハイキング 1999—2000 秋冬号	山と溪谷社／編	山と溪谷社	838	B5	160p
関東周辺の岩場	菊地敏之／編	白山書房	1900	B6	279p
関東の名山	ゼンリン／編	ゼンリン	1143	B6	191p
関東のんびりハイク	ゼンリン／編	ゼンリン	1143	B6	191p
関東日帰り湯けむりハイク	ゼンリン／編	ゼンリン	1143	B6	191p
関東平野を囲む山々	石井光造	さきたま出版会	1500	B5変	176p
感動的な「日の出」写真の撮り 方—日本の心を撮る	世界文化社／編	世界文化社	1700	B5	145p
がんばらずに行ける登山入門と	大垣晃一	三心堂出版社	1200	B6	182p

花の山ガイド					
還暦からの百名山	増田信男	増田信男	1600		
消えゆく月に一三和裕信悼集	三和史朗	中西出版	952	A5	183p
消えゆく森の再生学—アジア・アフリカの現地から	大塚啓二郎	講談社	660	新書判	224p
消える氷河—地球温暖化・アラスカからの告発	桐生広人	毎日新聞社	2000	四六判	189p
消える森 甦る森—めざせ「緑の防人」地球大作戦	宮下正次	東洋書店	2300	A5	244p
北岳 花たちの王国 ※写真集	中西俊明	東京新聞出版局	2800	260×250	84p
北の花つれづれに	梅沢 俊	共同文化社	1800	A5	207p
北の火の山—統 摩周・知床編	小池省二	中西出版	1200	B6	154p
北の雷鳴—近藤重蔵の生涯 上	斎藤一男	岩峰社出版部	2660	四六判	458p
北の雷鳴—近藤重蔵の生涯 下	斎藤一男	岩峰社出版部	2660	四六判	512p
樹と森のものがたり	西口親雄	柘植書房新社	2000	B6	203p
きふ山—生活川—生活	第14回国民文化祭 岐阜県実行委員会	岐阜新聞社	1429	265×210	144p
九州の火山—フィールドガイド	高橋正樹・小林哲夫 ／編	築地書館	2000	四六判	152p
日本の火山5					
京滋びわ湖山河物語	沢 潔	文理閣	2500	B6	276p
巨樹・巨木—日本全国674本	渡辺典博	山と溪谷社	3200	A5変	451p
巨樹探検—森の神に会いにゆく	平岡忠夫	講談社	2200	四六判	302p
「巨匠が描く」日本の名山1—北海道編 ※画集	鈴木 進／監 足立 朗・他／編	郷土出版社	18000	300×300	218p
「巨匠が描く」日本の名山6—中国・四国・九州編 ※画集	鈴木 進／監 足立 朗・他／編	郷土出版社	18000	300×300	206p
霧ヶ峰花物語	手塚宗求	恒文社	2000	四六判	94p
霧島の花—木の花100選	川原勝征／写真・文 初島住彦／監	南方新社	1500	四六判	149p
近畿の山日帰り沢登り 続	中庄谷直・吉岡 章	ナカニシヤ出版	2000	四六判	210p
草津・白根山自然ガイド—上信越高原国立公園	財団法人自然公園美 化管理財団草津支部 ／編	ほおずき書籍 星雲社／発売	600	新書判	
九重 山の歳時記	嶋田裕雄	不知火書房	1429	四六判	197p
朽木の植物—上巻	朽木村教育委員会／ 編	サンライズ出版	1500	B6	271p
朽木の植物—下巻	朽木村教育委員会／ 編	サンライズ出版	1500	B6	271p
熊野古道	海部要三・海部多賀 子	蟻郷舎	1143	A5	142p
熊野古道を歩く	JTB／編	JTB	1600	A5	143p
熊野修験の森—大峯山脈奥駆け記	宇江敏勝	岩波書店	1800	四六判	248p
熊野への道—熊野古道ガイドブック	吉田昌生	向陽書房	1000	A5	128p
クライマー—登山界の寵児・吉尾弘と若き獅子たちの闘い	高野 亮	随想舎	1800	四六判	262p

グレートジャーニー 5—極東シベリア編	関野吉晴	毎日新聞社	3800	B5	95p
黒戸の尾根—ロマンの道	三田末治	文芸社	1000	B6	102p
黒部峡谷山暮らし—エッチャンの日々	太田悦子	桂書房	1200	四六判	238p
黒部へ—黒部八千八谷に魅せられて	志水哲也	白山書房	2500	A5	342p
溪流・溪流	学習研究社／編	学習研究社	1500	B5	128p
溪流生態砂防学	太田猛彦・高橋剛一郎／編	東京大学出版会	3400	A5	246p
溪流釣り余滴	佐々木一男	つり人社	950	新書判	256p
玄奘三蔵のシルクロード	安田暎胤	東方出版	1600	A5	174p
玄奘の道・シルクロード	鎌澤久也	東方出版	2800	A5	159p
※写真集					
高原の花紀行	※写真集 山本建三	東方出版	1200	A4変	93p
高山植物と「お花畑」の科学	水野一晴	古今書院	2700	四六判	145p
高山の花	永田芳男	山と溪谷社	1000	150	281p
こうして…森と緑は守られた!!—自然保護と環境の国ドイツ	川名英之	三修社	2500	四六判	221p
氷の回廊—ヒマラヤの星降る村の物語	庄司康治	文英堂	1800	A5	223p
午後三時の山	柏瀬祐之	中央公論新社	629	文庫判	269p
ここで暮らす楽しみ	山尾三省	山と溪谷社	1800	四六判	335p
小西さんちの家族登山—妻が語る登山家・小西政継の素顔	小西郁子	山と溪谷社	1600	四六判	352p
こんなに楽しい愛知の130山—低山ハイキングの決定版ガイド	あつた勤労者山岳会／編	風媒社	1505	A5	248p
最新へビ学入門—90の疑問	カール H. アーンスト／著 岩村恵子／訳	平凡社	1800	B6	318p
坂本直行水彩スケッチ—北海道の山	坂本直行	北海道大学図書刊行会	1200	B5	4p
里山讃花—私の花散歩・自然観察記	小暮勝治	文芸社	1300	四六判	263p
里山の伝道師	伊井野雄二	コモンズ	1600	B6	190p
サバイバル読本	工藤章興・他／編・著 早稲田大学探検部／監	主婦と生活社	1200	A5	214p
サハリンの蝶	朝日純一・他	北海道新聞社	3200	A5	310p
山岳写真の魅力	日本カメラ社／編	日本カメラ社	2000	AB判	208p
山岳憧憬	※写真集 野中 勤／著 白旗史朗／監	野中利子		A4横	
山河光彩 中央アルプス	中村至伸	ほおずき書籍	1286	165×185	105p
※写真集					
3000 m の峻峰槍ヶ岳	※写真集 小川 誠	東京新聞出版局	2800	250×260	70p
三蔵法師のシルクロード	高橋 徹／文 後藤正／写真 三蔵法師の道研究会／編	朝日新聞社	2000	B5	174p

山稜'99—全日本山岳写真展作品集 ※写真集	全日本山岳写真協会 ／編	全日本山岳写真協会	220×220	194p
山麓亭百話 上	横山厚夫	白山書房	1400 四六判	189p
シカの食害から日光の森を守れるか—野生動物との共生を考える	辻岡幹夫	随想社	1500 A5	159p
四季の無言歌	串田孫一	恒文社	1800 四六判	144p
四季富士山の撮影—名作を撮る入門編	中村 修	世界文化社	1600 B5	146p
四国花の山へ行こう—春夏秋冬季節を楽しむ山歩き	四国4県新聞社／制作	四国4県新聞社	2667 AB判	216p
自然ガイド屋久島の旅	太田五雄	八重岳書房	1000 B6	127p
自然と遊ぼう日帰りトレッキング—首都圏版	日本出版社／編	日本出版社	1200 A5	150p
自然にあそぶ心—山歩きと豊かな人生	岡村治信	原書房	1500 四六判	219p
自然派写真読本	川口邦雄	実業之日本社	2000 A5	192p
湿原の宇宙—天使の降り立つところ・尾瀬 ※写真集	谷川洋一	小学館	3300 250×260	122p
私鉄沿線ハイキング—関西周辺	中村志志／編	山と溪谷社	1600 A5	133p
自分でできるテーピング—傷害予防と応急処置のためのテーピング基本マニュアル	三宅公利	日本文芸社	1200 A5	223p
島根の自然をたずねて	島根の自然編集委員会／編	築地書館	1800 四六判	238p
島のとっぺんから島を見る—島の山探訪記	向 一陽	山と溪谷社	1700 A5	368p
シマフクロウ	山本純郎	北海道新聞社	3000 A4	192p
週末は山歩き—「初めて」からのお役立ちガイド・エッセイ	荒川じんべい	講談社	695 文庫判	272p
週末山歩きをことごとん満喫する本—つい仲間に教えたくない96項	川口邦雄	青春出版社	870 新書判	219p
秀麗富嶽十二景 ※写真集	白旗史朗／編・監	山梨県大月市商工観光課	3000 240×250	
上信越の谷105ルート	豊野則夫／編	山と溪谷社	2000 A5	252p
縄文の響 屋久島 ※写真集	三井純夫	東洋出版 南日本新聞開発センター／発売	2800 B5	
ジョン・ミューア・トレイルを行く—バックパッキング340 <sup>+</sup>	加藤則芳	平凡社	2200 四六判	384p
白神山地の山々	石井光造	白山書房	1700 四六判	128p
白旗史朗の山岳写真撮影テクニック	白旗史朗	山と溪谷社	2800 A5	319p
シルクロード—飛天の舞いに魅せられて	大塚清吾	大修館書店	2400 四六判	166p
シルクロード紀行	北海道新聞社／編	北海道新聞社	2500 B4	134p
シルクロードの大旅行家たち	加藤九祚	岩波書店	740 新書判	214p

知床の鳥類	斜里町立知床博物館 ／編	北海道新聞社	1800	A5	232p
知床ヒグマ物語 ※写真集	山本盛雄	北海道新聞社	2300	180×220	95p
新・岩手の20名山	岩手日報社出版部/ 編	岩手日報社	1900	A5	139p
新疆ウィグル自治区に行く	市川市佐	日本橋書房 楽 ／発売	762	新書判	121p
信州美しき百山一上 北アルプ ス・東北信 ※写真集	信濃毎日新聞社出版 局／編	信濃毎日新聞社	2600	242×257	143p
信州紀行 ※写真集	山本建三	東方出版	1200	220×210	82p
信州山岳日帰り紀行2	山崎浩希	竜鳳書房	1800	四六判	280p
新多摩の低山—ようこそ65の 山へ	守屋竜男	けやき出版	1200	四六判	214p
新福島百山紀行	奥田 博	歴史春秋出版	1429	A5	232p
人力地球縦断 中・南米編	九里徳泰	山と溪谷社	1800	A5	304p
森林の環境100不思議	日本林業技術協会/ 編	東京書籍	1300	B6	215p
森林の生態	菊沢喜八郎	共立出版	2200	A5	198p
森林立地調査法—森の環境を測 る	有光一登・他/ 監 森林立地調査法編集 委員会／編	博友社	4300	B5	284p
スイス・ヴァレー州 マッター ホルンが見える「バカンス天国」	土田陽介	日経 BP 社 日 経 BP 出版セン ター／発売	1500	A5	169p
スイスの風景—スイスに関する 80章	浮田典良	ナカニシヤ出版	1900	B6	166p
スキーをはけば怖くない	熊谷 榎	グリーン・プレ ス	1800	四六判	216p
すぐ役立つ山の雑学	岳人編集部／編	東京新聞出版局	1400	四六判	207p
すぐわかる尾瀬の花図鑑	鈴木幸夫	コウサイクリエ イツ 弘済出版 社／発売	1524	B6	
砂に埋もれたホータンの廃墟	オーレル スタイン ／著 山口静一・五 代 徹／訳	白水社	7600	A5	458p
スノーフィールドの楽しみ方	清水秀俊	地球丸	1000	B6	192p
生と死の分岐点—山の遭難に学 ぶ安全と危険	ビット シューベル ト／著 黒沢孝夫/ 訳	山と溪谷社	2600	A5	302p
清貧登山のススメ—お金をかけ ずに心豊かに登る	清永 謙	山と溪谷社	950	新書判	189p
絶景!! 富士山と花を眺める百 名山—中高年のための登山術	鈴木澄雄／監 中高 年山の会／編	講談社	2400	四六判	254p
遭難のしかた教えます	丸山晴弘	山と溪谷社	950	新書判	221p
そして謎は残った—伝説の登山 家マロリー発見記	ヨッヘン ヘムレブ ／著 海津正彦 ・高津幸枝／訳	文藝春秋	1762	四六判	344p
空と山のあいだ—岩木山遭難・ 大館鳳鳴高生の五日間	田澤拓也	TBS プリタニ カ	1500	B6変	198p

ソローと漱石の森—環境文学の まなざし	稲本 正	日本放送出版協 会	2200	四六判	357p
大規模林道はいらない	大規模林道問題全国 ネットワーク／編	緑風出版	1900	B6	245p
大山・蒜山紀行 ※写真集	山本建三	東方出版	1200	220×210	
大地に見える奇妙な模様	小崎 尚	岩波書店	1900	B6	160p
タクラマカン周遊	金子民雄	山と溪谷社	2600	A5	333p
ただいま雲の上—らんぼう山日 記	みなみらんぼう	山と溪谷社	1400	四六判	288p
誰でも行ける世界の秘境	藤木高嶺	朝日新聞社	1900	四六判	156p
丹沢尊仏山荘物語	山岸猛男	山と溪谷社	1600	B6	213p
丹沢・三浦・横浜—首都圏山の 散歩道2	山と海／編	DHC	1400	A5	159p
地域環境から地球環境へ	西川治光・高原康光 ・形見武男・角田寛	岐阜新聞社	1200	A5	131p
地球・自然環境の本全情報 '93/'98	日外アソシエーツ／ 編	日外アソシエー ツ 紀伊国屋書 店／発売	28000	A5	678p
秩父往還いまむかし	飯野頼治	さきたま出版会	1800	B6	177p
秩父・陽だまりの山麓から	井上光三郎	新人物往来社	1800	四六判	257p
チベット—歴史と文化	チレ チュジャ／著 池上正治／訳	東方書店	2200	四六判	234p
チベット研究文献目録	索 文清・八巻佳子 ／編	風響社	4000	A5	278p
チベット聖なる七つの智慧	田淵俊彦	大和出版	1900	四六判	214p
チベット滞在記 ※新装版	多田等親／著 牧野 文子／編	白水社	2400	四六判	230p
チベット入門	チベット亡命政府情 報・国際関係省／著 南野善三郎／訳	鳥影社	1600	四六判	264p
チベットのシャーマン探検	永橋和雄	河出書房新社	2200	四六判	237p
チベットの白き道	安東浩正	山と溪谷社	1700	A5	285p
TIBET ブッダの民—チベットの 高原大地に生きる、我が友ブ ェバ ※写真集	イサム高野	鳥影社	3400	A4	121p
中央ユーラシアの考古学	藤川繁彦／編	同成社	3200	B6	366p
中高齢登山者のための生理学— これだけは知っておきたい／	塩田純一	本の泉社	1714	A5	190p
中高齢登山トラブル防止小事典	堀川虎男／編	大月書店	2000	A5	287p
中高齢の爽快山歩き	主婦と生活社／編	主婦と生活社	1200	B5	144p
中高齢の山歩き入門	山田哲哉	日本文芸社	1200	A5	206p
中高齢の山ベストコース—東京 周辺	浅野孝一／編	山と溪谷社	1699	A5	142p
チョモランマの渚—天空の海へ	三浦洋一	KSS 出版	1400	四六判	188p
地理と民俗への旅	千葉とくじ	大明堂	2800	B6	153p
チロルの山を歩いてみませんか —ハイキング徹底ガイド	和田 肇	ラ・テール出版 局	2300	A5変	201p

使えるロープワーク	太田 潤	大泉書店	950	A5	190p
ツキノワグマのいる森へ	米田一彦	丸 アドスリー 善株式会社出版 事業部/発売	1800	A5	143p
つくもぐき日記—夏山を巡る紀 行集	大山 厚	飛鳥出版室	2857	A5	
辻まことセレクション1—山と 森	辻まこと	平凡社	1100	HL判	262p
辻まことセレクション2—芸術 と人	辻まこと	平凡社	1200	HL判	304p
辻まこと全集1	辻まこと	みすず書房	8000	菊判	560p
妻と二人の山歩き 心得編	小浜浩三	光人社	1700	四六変	226p
定年後は山歩きを愉しみなさい	小倉 厚	角川春樹事務所	700	文庫判	247p
天空の四季—美ヶ原高原 ※写真集	野々上朱實	プラルト	1715	200×215	64p
東海自然歩道 関西周辺	津口哲也	山と溪谷社	1600	A5	127p
東京周辺山のいて湯+ハイキン グ	弘済出版社/編	弘済出版社	1190	四六判	175p
峠路を行く	蜂矢敬啓/編・著 加藤 誠・他/執筆	高文堂出版社	1857	四六判	231p
道東の自然を歩く	道東の自然史研究会 /編	北海道大学図書 刊行会	1800	四六判	268p
動物・植物の本全情報 '93/ '98	日外アソシエーツ/ 編	日外アソシエー ツ 紀伊国屋書 店/発売	28000	A5	695p
東北の火山—フィールドガイド 日本の火山4	高橋正樹・小林哲夫 /編	築地書館	2000	四六判	152p
登山者のための最新気象学	飯田睦治郎	山と溪谷社	1900	A5	318p
登山道で出会える花—中高年の ための登山学2	日本放送出版協会/ 編	日本放送出版協 会	1500	B5	135p
栃木と周辺の渓谷散歩と湧水め ぐり	飯田啓一/編	下野新聞社	1800	A5	175p
栃木273 山—女房殿と歩いたり ハビリ山日記	倉持裕至	白山書房	1700	A5	322p
とやま県境踏破 無雪期	池原 等	桂書房	2000	B5変	225p
とやまハイキングガイド	ひぐらし会/編	北日本新聞社	1800	A5	123p
トレッカーのためのネパール学	中村昌之	山と溪谷社	950	新書判	221p
トレッキング・マニュアル—山 歩きのすべてがわかる	中村昌之	山と溪谷社	1500	B5	125p
ナキウサギの声が聞きたい—小 さな NGO の悪戦苦闘物語	ナキウサギふぁんく らぶ/編	日本評論社	2200	A5	172p
なぜ山に登るのか	鷺 晴夫	文芸社	1500	B6	252p
日光・那須・足尾を歩く	中村成勝	山と溪谷社	1750	A5	143p
ニッポン百名山よじ登り	クレイグ マクラク ラン/著 橋本 恵 /訳	小学館	619	文庫判	365p
にっぽん自然派オヤジ列伝	新垣 譲	山海堂	1500	A5	188p
日本アルプス	清水隆雄・他	実業之日本社	2200	A5	291p

日本アルプス植物図鑑	大場達之・高橋英男	八坂書房	2200	四六判	223p
日本山名総覧—1万8000山の住所録	武内 正	白山書房	1700	A5	560p
日本スキー・もうひとつの源流—明治45年北海道	中浦皓至	北海道大学図書 刊行会	3500	A5	332p
日本の溪谷 '98/'99	白山書房編集部/編	白山書房	2000	A5	264p
日本の森林	四手井綱英	中央公論新社	800	新書判	184p
日本の万年雪—月山・鳥海山の雪氷現象 1971~1998 に関連して	土屋 巖	古今書院	18000	B5	286p
日本の名景 滝 ※写真集	鉄 弘一	光村推古書院	1600	170×190	105p
日本の名山—写真家の視点で選んだ100山 ※写真集	日本山岳写真協会/編	信濃毎日新聞社	3000	A4変	143p
日本の名山15 富士山	串田孫一・今井通子・今福龍太/編	博品社	1600	四六変	253p
日本の森を旅する	石橋睦美	平凡社	1524	B5変	127p
日本の山を殺すな、—破壊されゆく山岳環境	石川徹也	宝島社	660	新書判	256p
日本百名山 ※写真集	内田良平	朝日ソノラマ	4000	A5	335p
日本百名山登山案内	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2200	B5	206p
日本百名山を楽しく登る	岩崎元郎	山と溪谷社	950	新書判	229p
日本百名山を登る—上	昭文社/編	昭文社	1400	A5	174p
日本百名山を登る—下	昭文社/編	昭文社	1400	A5	175p
日本百名峠 ※新装版	井出孫六/編	メディアハウス マリナード/発 売	1800	A5	365p
日本北辺の探検と地図の歴史	秋月俊幸	北海道大学図書 刊行会	8300	B5	450p
ニュージーランドの環境保護—「楽園」と「行革」を問う	平松 紘	信山社出版	2200	四六判	218p
ネパール・カトマンドウの都市ガイド	宮脇 壇・中山繁信	建築知識	1800	A5	239p
ネパール語小辞典 ※第2版	森田 宏/編	紀伊國屋書店梅 田本店	2667	B6変	
能海寛—チベットに消えた旅人 残された山靴—志なかばで逝った8人の登山家の最期	江本嘉伸 佐瀬 稔	求龍堂 山と溪谷社	2000 1500	四六判 四六判	297p 220p
野猿峠—多摩丘陵自然の移り変わり	下島 彬	かたから書店	950	新書判	141p
野の花山の花ウォッチング	日本植物友の会	山と溪谷社	2000	A5変	335p
バーソロミューの旅日記・下—インド編	バーソロミュー/著 メアリー マーガレット ムーアチャネル・ヒューイ陽子/訳	マホロバアート	1900	四六判	258p
俳句と写真を楽しむ名山の旅	三宅 修・岩崎ひさお	法研	1500	A5	224p
白山山系とおきの33山	柚本寿二/著 金沢	北國新聞社	2200	B5	150p

		ナカオ山岳会／監				
白山の歴史—神と人とその時代	下出積與	北國新聞社	2000	A5		214p
箱根・伊豆・房総—首都圏山の散歩道1	山と海／編	DHC	1400	A5		159p
はじめてのアウトドア読本	武蔵野山楽会／編	宙出版	1200	A5		191p
初めての山歩き	伊藤幸司	主婦与生活社	1200	A5		222p
バタゴニア	平山和充	日本短波放送	2000	A5		47p
八甲田の変遷—史料で探る山と人の歴史	岩淵 功	青森市観光レクリエーション振興財団	2300	B5		
八甲田・八幡平・秋田駒を歩く	仁井田研一	山と溪谷社	1750	A5		143p
花ごよみ大山II	小西 毅・棚田耕吉・川上明敏・鷺見寛幸・宮倉 誠／著 朝日新聞社鳥取支局／編	米子今井書店	1700	文庫判		269p
花と恋して—牧野富太郎伝	上村 登	高知新聞社 高知新聞企業／発売	1905	四六判		373p
花の自然史—美しさの進化学	大原 雅	北海道大学図書刊行会	3000	A5		262p
花の湿原 霧多布	伊東利和	北海道新聞社	1200	A5		95p
花の乗鞍岳	田中豊雄	ほおずき書籍 星雲社／発売	1000	B6		101p
花の百名山・登山ガイド 上	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1650	A5		117p
花の百名山・登山ガイド 下	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1650	A5		117p
花の妙高高原	田地野政義	ほおずき書籍 星雲社／発売	1000	B6		90p
花の山旅—関西周辺	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1600	A5		135p
花の領域 ※写真集	坂本健三・坂本艶子	夢人館	10000	A4変		225p
パフォーマンスロッククライミング	デイル ゴダード・ウド ノイマン／著 森尾直康／訳	山と溪谷社	1800	A5		199p
パリジェンヌのラサ旅行1	A. ダヴッド ネール／著 中谷真理／訳	平凡社	2400	新書判		281p
パリジェンヌのラサ旅行2	A. ダヴッド ネール／著 中谷真理／訳	平凡社	2300	新書判		251p
遙かなり秘境可西里—崑崙を越えて	松本徂夫	日本放送出版協会	3000	A5		278p
遙かなるチベット	根深 誠	中央公論社	1048	文庫判		374p
日帰り登山で基本を学ぶ—中高年のための登山学	岩崎元郎	日本放送出版協会	1000	B5		164p
ヒグマ Ezo brown bear ※写真集	窪田正克	平凡社	4500	A4		
英彦山修験道考	村上龍生	海鳥社	1500	B6		155p
ヒト、山に登る	柏瀬祐之	白水社	880	新書判		187p

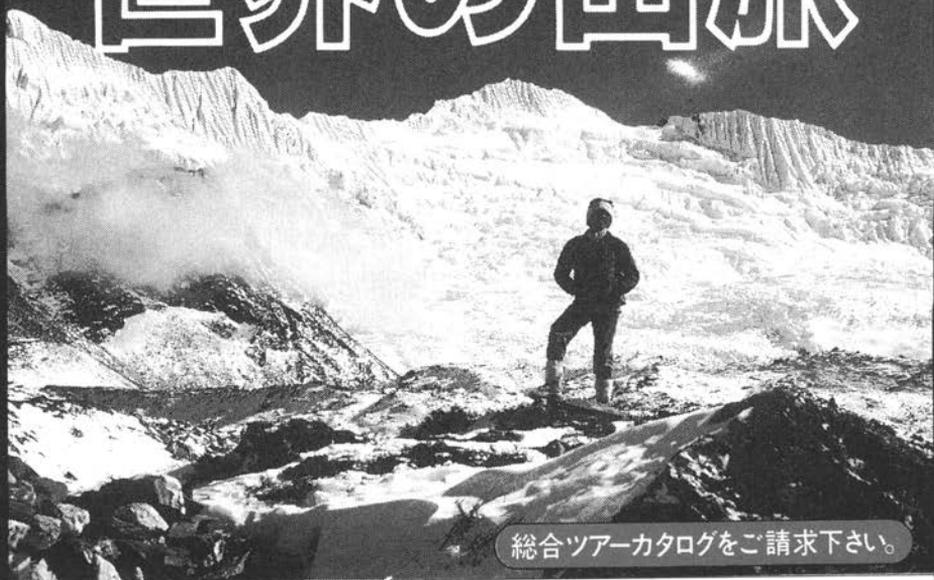
陽はまた昇る ※写真集	佐藤秀明	KSS 出版	3800	260×270	
松原金銀山物語—会津の鉱山	佐藤一男	歴史春秋出版	1429	四六判	186p
ヒマラヤ酔夢譚	森田千里	リベルタ出版	1900	四六判	221p
ヒマラヤで考えたこと	小野有五	岩波書店	700	新書判	182p
ヒマラヤの青いケシ ※写真集	倉下生代	東方出版	1200	170×190	70p
ヒマラヤのパレット—描いて登って8000メートル、まだまだ行くぞ	森山 勇	ポカラ出版 山と溪谷社/発売	1800	四六判	127p
ヒマラヤを越えた花々	大場秀章	岩波書店	1900	B6	144p
ヒマラヤを釣る	根深 誠	中央公論新社	819	文庫判	257p
百名山以外の名山 50	深田久弥	河出書房新社	2000	A5	301p
百名山からの眺望 CG 版	石垣博史・石垣修司	東京新聞出版局	1700	A5	317p
百名山パノラマ案内	白山書房編集部/編	白山書房	1900	190×260	214p
兵庫県の山—分県登山ガイド 27	中村圭志	山と溪谷社	1700	A5	111p
深田久弥の研究—読み、歩き、書いた	飯島 齊・高沢光雄 ・高辻謙輔・深田ク ラブ編集部	新ハイキング社	1600	A5	390p
福岡・佐賀県の山歩き ※改訂版	吉川 満	葦書房	1800	四六判	352p
ふくおか野の花 ※写真集	安原修次	ほおずき書籍 星雲社/発売	2800	A5	198p
福島県の渓流 会津編	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1600	A5	191p
福島県の渓流 中通り浜通り編	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1400	A5	151p
ふくしま山歩き手帳	奥田 博	歴史春秋出版	1333	B6	168p
普賢岳鳴動す—太田一也聞書	吉田賢治	西日本新聞社	1700	四六判	289p
富士 ※写真集	峰広敬一	誠文堂新光社	2000	B5	109p
富士 神々の聖域 ※写真集	栗林吉夫	光村印刷	2500	200×220	
富士山学習	「富士山学習」研究会 /編	国土社	2000	B5	197p
富士山の四季を撮る	日本カメラ社/編	日本カメラ社	1600	A4変	178p
富士山の自然と対話	山本玄珠	北水	1700	A5	198p
富士登山ハンドブッカー—富士山の自然を楽しむために ※改訂版	富士自然動物園協会 /編	自由国民社	1500	B6	294p
富士を見ながら登る山 36	工藤隆雄	小学館	1600	A5	159p
復刻版絵葉書にみる懐かしの上高地	上条 出	ほおずき書籍 星雲社/発売	1000	165×185	58p
ブナの山旅	坪田和人	山と溪谷社	2000	AB 判	352p
ブナ林の民俗	赤羽正春/編	高志書院	2800	A5	238p
山毛榉林より—高見和哉遺稿追悼集	高見和哉遺稿追悼集 編集委員会/編	悠々社	3800	AB 判	183p
ふるさと兵庫 50 山	兵庫県山岳連盟/編	神戸新聞総合出版センター	1600	A5	127p
ふるさと富士登山ガイド—関西周辺	竹内鉄二/編	山と溪谷社	1600	A5	135p
ふわっとブータン、こんにちは 冒険物語百年	岸本葉子 武田文男	NTT 出版 朝日新聞社	1429 660	四六判 文庫判	247p 326p

星野道夫の仕事 第3巻 ※写真集	星野道夫	朝日新聞社	4700	220×300	
星野道夫の仕事 第4巻 ※写真集	星野道夫	朝日新聞社	4700	220×300	
北海道人 松浦武二郎	佐江衆一	新人物往来社	1800	四六判	329p
北海道地名分類字典	本多 貢	北海道新聞社	2800	A5	461p
北海道夏山ガイド5 道南・夕張の山々 ※増補改訂版	梅沢 俊・菅原靖彦	北海道新聞社	2200	B6	285p
北海道の植物―野の花・山の花 続 ※増補改訂版	谷口弘一・三上日出夫／編	北海道新聞社	2200	B6	383p
北海道の山と谷 下	北海道の山と谷再刊委員会	北海道撮影社	2000	A5	256p
北海道花歩き	川見利津子	文芸社	1200	四六判	250p
マイカーで行くファミリートレッキングコース	ベネッセコーポレーション／編	ベネッセコーポレーション	952	AB判	146p
マイカー登山 関越・上信越道	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1700	A5	126p
マイカー登山 中央・長野道	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1700	A5	126p
マイカー登山 東北・山形道	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1700	A5	126p
マイカー登山 東名高速道	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1700	A5	126p
マイカー登山 ベストコース	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1600	A5	135p
マイカー登山のススメークルマを使ってラクに楽しい山登り	松倉一夫	山と溪谷社	950	新書判	205p
摩周屈斜路―巨大カルデラの森と湖 ※写真集	藤 泰人	北海道新聞社	2500	180×255	
マタギを追う旅―ブナ林の狩りと生活	田口洋美	慶友社	3800	A5	222p
未踏の大洞窟へ―秋芳洞探検物語	櫻井進嗣	海鳥社	1800	四六判	238p
緑の森と溪谷・清流ウォーキングガイド52選 関東周辺	成美堂出版／編	成美堂出版	1200	B5	159p
南アルプス	静岡新聞社	静岡新聞社	1800	A5	127p
南へ―エンデュアランス号漂流	アーネスト シャクルトン／著 奥田祐士・森平慶司／訳	ソニー・マガジnz	2200	四六判	413p
みなみらんぼうの山からこんにちへ	みなみらんぼう	毎日新聞社	1400	四六判	237p
身延山・七面山参拝案内	関口 哲／編	鎌倉新書	934	A5	127p
宮城産土の山に行く	深野稔生	無明舎出版	1800	A5	223p
宮城県の溪流	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1400	A5	142p
宮城の巨樹・古木	宮城県緑化推進委員会／監	河北新報社	1600	A5	151p
宮城山遊び山語り（上）蔵王・二口編	深野稔生	無明舎出版	1800	A5	214p
宮城山遊び山語り（下）栗駒・船形編	深野稔生	無明舎出版	1800	A5	204p
民俗と植物	武田久吉	講談社	800	文庫判	264p
夢幻の山旅	西木正明	中央公論新社	952	文庫判	451p

明治の山旅	武田久吉	平凡社	1200	HL判	349p
名人・達人が明かす実践アウトドア術	別冊宝島編集部/編	宝島社	933	A5	254p
もう山でバテないーバテの原因とその対策を科学的に解説	森田秀巳	山と溪谷社	950	新書判	213p
森と環境の世紀	依光良三	日本経済評論社	2500	A5	292p
森なしには生きられないーヨーロッパ・自然美とエコロジーの文化史	J. ヘルマント/編 ・著 山懸光晶/訳	築地書館	2500	A5	227p
森の命の物語	西口親雄	新思索社	2800	B6	271p
森のシナリオー写真物語・森の生態系	西口親雄	八坂書房	2400	A5	148p ※新装版
森の中へ	三好弘一	ビー・アール・サーカス そしえて/発売	1500	180×200	
森は知っている	ベルンド ハイน์リッチ/著 法村里絵/訳	角川書店	1900	四六判	256p
森はすべて魚つき林	柳沼武彦	北斗出版	2000	B6	246p
屋久島の植物	川原勝征/写真・文 初島住彦/監	八重岳書房	1942	B6	223p
屋久島花暦花の旅	青山潤三	八重岳書房	1700	A5	96p
屋久島花風景 ※写真集	日下田紀三	八重岳書房	1905	A5	95p
やくすぎ ※写真集	津田洋甫	東方出版	1200	220×210	93p
八ヶ岳で40頭の犬と生きる	川股昭彦	草思社	1700	四六判	229p
山歩き五十年ー躓きながら	傘木徳十	東京新聞出版局/制作	2800	A5	312p
山歩きの楽しみー思索したスケッチブック	川口邦雄	青春出版社	495	文庫判	216p
山形県の溪流 県南編	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1500	A5	140p
山形県の溪流 県北編	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1500	A5	140p
山暮らし始末記	堀越哲朗	太田出版	1700	四六判	333p
山造り承ります	島崎洋路	川辺書林	1650	四六判	237p
山釣りの旅	鈴木竿山	つり人社	1800	A5	299p
山で唄う歌1	戸野 昭・朝倉 宏/編	茗溪堂	950	文庫判	128p
山と校歌ー中学校校歌にうたわれている山地	朝倉隆太郎	二宮書店	1000	B5	
山梨の滝	上野 巖	山梨日日新聞社	1800	B6	170p
山なんて嫌いだった	市毛良枝	山と溪谷社	1400	四六判	245p
山の憶い出 上	木暮理太郎	平凡社	1500	HL判	532p
山の憶い出 下	木暮理太郎	平凡社	1500	HL判	600p
やまの劇場	沢野ひとし	山と溪谷社	1800	A5	178p
山の写真12ヵ月ー四季のベストコースとカメラワーク	中西俊明	実業之日本社	2500	A5	238p
山の宗教 修験道	五来 重	淡交社	2000	A5	260p
山の生涯ー来し方行く末 上	田口二郎	茗溪堂	8500	A5	358p

山の生涯—来し方行く末 下	田口二郎	茗溪堂	8500	A5	342p
山の花	木原 浩	山と溪谷社	1000	文庫判	281p
山の花めぐり ※写真集	加藤明文	恒文社	3200	B5	153p
山の風景—プロカメラマンがすすめる全国ベスト撮影ポイント	学習研究社/編	学習研究社	1500	B5	128p
山の放課後	松田由博	松田由博	1600	四六判	336p
山の眼玉	畦地梅太郎	平凡社	1000	HL判	189p
山ばか日記 1—私の日本百名山登山記録	瀬川泰由	近代文芸社	2000	B6	352p
山はドキドキ妖精舞台—木版画とエッセイでめぐる 101 山	山咲みつオ	隋想舎	1800	四六判	214p
山日和—岩手の山々 307m から 2038m まで	諏訪 弘	自湧社	3500	A4	
山より帰って	内堀 有	日本山書の会	5000	A5	300p
山・わが心のオアシス ※写真集	村井文男	東方出版	5000	A4	133p
山を愛する写真家たち—日本山岳写真の系譜	東京都歴史文化財団 ・東京都写真美術館 /企画・監修	日本写真企画	2476	240×190	254p
山を駆ける風になれ—北摂・丹波、マウンテンバイク紀行	織田正憲	山と溪谷社	1500	四六判	190p
山を見る日	川崎精雄	中央公論新社	686	文庫判	325p
檜穂高 ※写真集	岩橋崇至	山と溪谷社	3600	220×270	111p
雪山—光と影のシンフォニー ※写真集	関谷智彦	光村印刷	1200	200×220	
ヨーロッパ・アルプス ハイキングガイド	地球の歩き方/編	ダイヤモンド・ビッグ社	1740	A5	
よみがえれ池塘よ草原よ—巻機山ボランティアからのメッセージ	松本 清	山と溪谷社	1600	四六判	296p
寄り道でできる日帰り山歩き	温健舎/編	辰巳出版	1500	A5	143p
歎びの知床	立松和平	地球丸	1450	四六判	199p
リアスの海辺から	畠山重篤	文藝春秋	1619	四六判	262p
琉球弧 野山の花	大野照好/監 片野田逸朗/写真・文	南方新社	2900	A5	221p
漁師が山に木を植える理由	松永勝彦・畠山重篤	成星出版	1500	四六判	173p
ルポ・日本の川	石川徹也	緑風出版	1900	四六判	221p
若さの秘訣は山歩き	小倉 厚	角川春樹事務所	1600	四六判	267p
和賀山塊の自然—和賀山塊学術調査報告書	和賀山塊自然学術調査会	和賀山塊自然学術調査会	5000	B5	299p
忘れえぬ山 1	串田孫一/編	筑摩書房	860	文庫判	390p
忘れえぬ山 2	串田孫一/編	筑摩書房	880	文庫判	408p
忘れえぬ山 3	串田孫一/編	筑摩書房	880	文庫判	414p
わたしの一名山—ICI 石井スポーツ「とっておきの山」大賞作品集 続	「わたしの一名山」事務局/編	双葉社	1750	B6	298p
わっさかわっさか沢歩き記録集—鈴鹿・奥美濃・白山編	同人・わっさかわっさか沢歩き/編	ナカニシヤ出版	2000	四六判	204p
われら北極観測隊	伊藤 一	出窓社	1600	四六判	205p

# 世界の山旅



総合ツアーカタログをご請求下さい。

## トレッキングからエクスペディションまで。



アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地域への主催ツアーやインフォメーションを用意しております。もちろん日本国内の山旅も企画しております。

トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録旅行業第490号 日本旅行業協会正会員

## アルパインツアーサービス株式会社

東京	〒105-0003	東京都港区西新橋1-12-1 (西新橋1森ビル2階)	☎03 (3503) 1911
大阪	〒550-0004	大阪市西区靱本町1-10-22 (ポロロッカビル4階)	☎06 (6444) 3033
名古屋	〒450-0002	名古屋市中村区名駅3-23-6 (第2千福ビル8階)	☎052 (581) 3211
福岡	〒810-0073	福岡市中央区舞鶴1-2-8 (セントラルビル5階)	☎092 (715) 1557
広島		広島サービスステーション (大阪支店転送電話)	☎082 (542) 1660
仙台		仙台サービスステーション (東京本社転送電話)	☎022 (265) 4611
札幌	〒060-8582	札幌市東区北9条東2丁目 北海道地区総代理店(株)リムゆゆう観光	☎011 (711) 7106

語り継いでいきたい美しき日本の山々。  
山と自然を愛するすべての人に贈る、50冊。

朝日ビジュアルシリーズ

# 週刊 日本百名山

誕生！山と旅を楽しむ新マガジン。深田久弥の名著「日本百名山」完全再録、山麓実用情報、コラム満載！！

2001.1.11(木) 創刊 毎週木曜日発売

創刊号サービス定価400円(税込)

〈第2号以降〉定価560円(税込)

A4判変型・逆中綴じ・オールカラー36ページ

内容見本を差し上げます。

〒104-8011朝日新聞社出版  
局直販担当へ、はがき、または  
FAX(03-5541-8025)で  
お申し込み下さい。



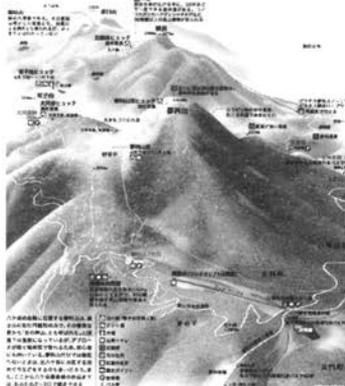
予約受付中

## ◆ 気高く美しい「山の美」に迫る ダイナミックで雄大な山岳写真

圧倒する迫力、四季折々に見せる表情の変化…これら山の持つ深い魅力をとらえた内田良平氏の山岳写真を主に掲載。感動あふれる「山の美」に迫ります。

## ◆ CG(コンピューターグラフィックス) 絵地図で ポイントチェック

コースの全容をつかむために、ガイド的役割を持った絵地図を展開。登山コース上の、チェックポイントがイラスト感覚で手にとるようにわかります。



## ◆ 山小屋のトイレ事情など すぐ役立つ登山ガイド情報

交通アクセスから登山コース、緊急時の連絡先、山小屋のトイレやお風呂情報などもキメ細かに。

『週刊日本百名山』全50冊  
毎週木曜日、号数順に配本。

- |             |              |                  |                  |              |
|-------------|--------------|------------------|------------------|--------------|
| 1 富士山       | 11 立山・薬師岳    | 21 巻機山・苗場山       | 31 筑波山・天城山・丹沢山   | 41 飯豊山・魚沼駒ヶ岳 |
| 2 ハケ岳・夢科山   | 12 白馬岳・五竜岳   | 22 奥白根山・男体山      | 32 利尻岳・阿寒岳       | 42 磐梯山・安達太良山 |
| 3 霧ヶ峰・美ヶ原   | 13 鹿島槍岳      | 23 那須岳・赤城山       | 33 大雪山・トムラウシ・十勝岳 | 43 会津駒ヶ岳・平ヶ岳 |
| 4 甲斐駒ヶ岳・仙丈岳 | 14 黒岳・鷲羽岳    | 24 谷川岳・武尊山・皇海山   | 34 斜里岳・羅臼岳       | 44 白山・荒島岳・大山 |
| 5 鳳凰山・北岳    | 15 黒部五郎岳・笠ヶ岳 | 25 草津白根山・四阿山・浅間山 | 35 後方羊蹄山・幌尻岳     | 45 惠那山・伊吹山   |
| 6 間ノ岳・埴見岳   | 16 栗駒岳・御岳    | 26 火打山・妙高山       | 36 岩木山・八甲田山      | 46 大台ヶ原山・大峰山 |
| 7 穂高岳       | 17 木曾駒ヶ岳・空木岳 | 27 南鈴山・高妻山       | 37 八幡平・烏海山       | 47 剣山・石鎚山    |
| 8 檜ヶ岳       | 18 恵沢岳・赤石岳   | 28 両神山・甲武信岳      | 38 若手山・早池峰       | 48 九重山・阿蘇山   |
| 9 常念岳・焼岳    | 19 聖岳・光岳     | 29 金峰山・瑞巒山       | 39 月山・朝日岳        | 49 霧島山・祖母山   |
| 10 剣岳       | 20 燧岳・至仏山    | 30 雲取山・大菩薩岳      | 40 蔵王山・吾妻山       | 50 開聞岳・宮之浦岳  |

## ◆ 野鳥や高山植物など 動植物図鑑としても便利

山麓の秘湯や名物料理、土産物、観光スポットなど実用情報が満載。高山植物をはじめ、樹林や高山でさえずる鳥たちを美しい写真とともに紹介します。

## ◆ 著名人の山行エッセーや 多数の山行を収録

著名人が綴る「百名山」山行エッセーや、「世界百名山」「山岳写真の撮り方」「インターネットトレッキング」などコラム多数。

## 創刊号付録「高山植物・花カード」

40枚数の「高山植物・花カード」を  
綴じ込み付録で。

快適ウォーキング!

ノン  
ソフト  
フィット  
マジック  
ソール



標準小売価格  
15,800円

旅で、街で、長時間歩いても疲れを感じさせないウォーキングシューズ——ENTERTAINER FOR TRAVELLING (エンターテイナー フォートラベリング)。

雨の日の濡れた歩道や地下街のタイルも安心して歩ける高いノン  
スリップ性、足入れがスムーズなオプリークラスト、ソフトなフィット感など、  
「歩きやすさ」を徹底的に追及した逸品です。

ソールの中心部がへこんで  
いますから、体重がかかると  
吸盤のように底の接地面が  
大きくなり、ノンスリップ性が  
高まります。

吸盤構造だから高いノンスリップ性!



**ENTERTAINER**  
FOR TRAVELLING

★カタログは80円切手1枚同封の上、下記にご請求ください。

株式会社 ウェストフォワード  
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5丁目5の2  
電話03(3226)7361(代)

いつでも、どこでもお湯・水を入れるだけで

# 炊きたてご飯

## アルファ米

新製品



コンパクトサイズで  
スペースいらず

### 1食タイプ



### 2食タイプ



尾西食品株式会社

東京都港区三田4-15-36  
TEL03(3452)4020(代) FAX03(3456)3783  
<http://www.onishi-co.co.jp/>

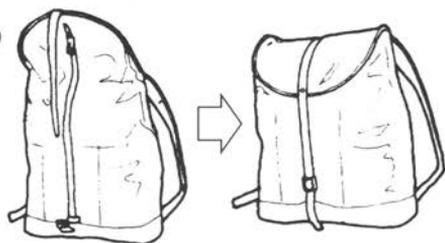


クレッターザック  
キスリング  
イギリス、オーストリア、カナダ・  
オリジナルセーター

# リュックサック専門店

## ウォーカー

- 大きさ  
巾(38cm)×深さ(48cm)×厚み(12cm)
- 価格  
ナイロン……¥11,500  
綿帆布……¥14,500



## 赤丸一本(新製品)



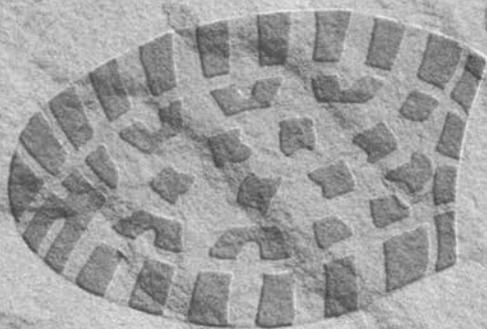
2泊から3泊までの山行に最適で、背負いやすさが魅力

- 大きさ  
巾(50cm)×深さ(前部55cm・背面部48cm)×厚み(18cm)
- 価格=¥27,000  
色は赤で、ナイロンコーデラ使用。希望により、綿帆布、色は  
グレーと青でお作りします。

# 片桐

住所/〒113-0034 東京都文京区湯島3-38-9  
TEL.03-3831-1794 FAX.03-3831-6680  
★営業時間=10:30~19:00/12:30~18:00(日・祭日)  
★水曜日休業  
〈カタログ進呈〉  
住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、切手400円分を  
同封の上、上記住所にお申込み下さい。

着実な一歩一歩、それはキャラバンの歴史そのもの。



Caravan



Caravan®

## (株)キャラバン

東京本社 〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1-25-7 TEL(03)3944-2331  
大阪支店 〒560-0872 大阪府豊中市寺内2-3-15緑地サンプラザ301号  
TEL(06)6866-0505

(株)北海道キャラバン TEL(011)822-8664

(株)九州キャラバン TEL(092)715-9151

[www.caravan-web.com](http://www.caravan-web.com)

「山のパンセ」「北八ッ彷徨」「霧の山稜」……。名著との出会いと人を情感豊かに描く!

# 山をめぐる 人と書物

手塚宗求 著

定価(本体1800円+税)

信州霧ヶ峰車山高原の山小屋暮らし四十余年、霧ヶ峰に集った詩人、文学者、芸術家、登山家たちとの友誼と交流。そして書棚に並ぶ山の書物たちから浮かび上がる思い出の数々。しみじみと自然に心遊ばせるとき、空高くゆく雲のように、自由な想念は広闊な草原を駆け抜けていく。

# 心象の山々

山の版画と断章

大谷二良著

定価(本体1800円+税)

二年間にわたって山岳誌「岳人」の表紙を飾った作品を中心に、诗情あふれる文とともに贈る画文集。畦地梅太郎氏亡き後のわが国山岳版界をリードし、独特の版画技法で山岳心象風景を産み続ける版画家による魅力あふれる作品を満載。

越後と周辺の山を行く

# 山岳悠々

筑木力 著

定価(本体2500円+税)

越後・信州・上州の古きよき時代を偲ぶ山行から、夫婦で登った山旅まで、半世紀以上にわたり山に登り続けてきた著者が、鋭い観察眼と繊細な感性で綴る山岳紀行文。

# 飯豊道

(いでみち)

五十嵐篤雄 著

定価(本体2800円+税)

戦前、戦後を通じ半世紀以上にあたり、飯豊連峰の山塊に魅せられ、夢中になろうとする著者の山行とエッセイ。

# 四季の無言歌

串田孫一 著

うつろ四季折々の自然を見つめる、透徹した詩人のまなざし。百六十七の断章からなる随想集! 1800円

# もう登らない山

串田孫一 著

もう登らない山だからこで、自然の真の姿が見えることがある。豊潤で深遠な世界が広がる随想。●2718円

最寄りの書店にご注文ください。お取り寄せいただけます。

宅配(着払い)のご注文は  
電話かFAXで

電話0257-80-1231  
FAX0257-80-1232

恒文社 受注センター  
コレクト便係

FAXの場合はご注文の本の書名、冊数、お客様の住所、電話番号を明記して送信してください。夜間配達のご希望は、ご希望の時間帯をお書き添えください。(18:00~20:00と20:00~21:00の時間帯がございます)※宅配料380円 電話受付▶9:15~17:00月~金(除祝祭日)

# 旅するあなたのサポート隊

パッケージツアー、グループ・トレッキング等は **西遊旅行** が、  
 格安航空券は **キャラバンデスク** が、皆様のお手伝いをいたします。



ランタン・リルンとジャクナゲの花(ネパール)

## 秘境の地へ 世界の山々へ



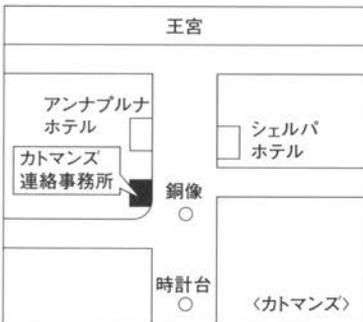
プータン・チョモラリトレッキングにて



JAI-HIMAL TREKKING 社長  
ラビ・パウデル

ネパールではカトマンズ連絡事務所の社員が、皆様のお世話をいたします。

トレッキング部門は、JAI-HIMAL TREKKINGが、一般観光部門はSAIYU TRAVELがそれぞれ皆様のお手伝いをいたします。スタッフは日本語も話せますので、お気軽にご利用ください。



～ 地球の果てまでお手伝い ～  
 ディスカウント航空券の専門相談室

## キャラバンデスク

東京 ☎ 03-3273-8384 (代)

大阪 ☎ 06-6362-6060 (代)

シルクロード・秘境旅行・トレッキング・海外登山のパイオニア

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

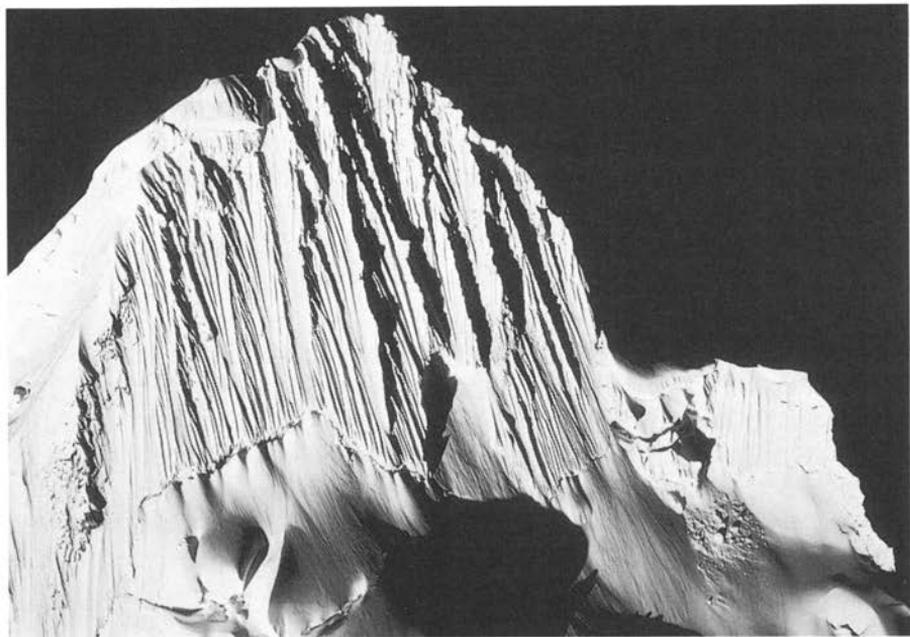
# 株式会社 西遊旅行

さい ゆう りょ こう



- 本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1 岩波書店アネックス5F  
 ☎ 03 (3237) 1391 (代) FAX 03 (3237) 1396  
 (格安航空券の専門デスクです) (住所同上)
- キャラバンデスク東京 ☎ 03 (3237) 8384 (代) FAX 03 (3237) 0638
- 大 阪 営 業 所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F  
 ☎ 06 (6367) 1391 (代) FAX 06 (6367) 1966  
 ☎ 06 (6362) 6060 (代) (住所・FAX同上)
- キャラバンデスク大阪  
 カトマンズ連絡事務所 P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL  
 (JAI HIMAL TREKKING) ☎ 224248, 221707 (アンナブルナホテル並び)
- 西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

これが白川芸術の最高峰。  
世紀を超える偉業をここに集大成。



〈1〉より「アルパマーヨ南西壁(ペルー)」

白川義員作品集

# 世界百名山

THE WORLD'S HUNDRED GREATEST MOUNTAINS

2000年12月下旬発売予定

2001年春発売予定

2001年秋発売予定

〈I〉ネパール・南北アメリカ 〈II〉パキスタン・ヨーロッパアルプスほか 〈III〉インド・中国ほか  
ヒラリー卿をはじめ世界の偉大な登山家、著名山岳関係者が選出した荘厳で秀麗な名峰のすべてを白川義員  
が4年をかけて撮影。撮影エリア20数か国、50地域以上。生命を賭して神々の峰と対峙した魂の記録が「圧倒的  
な感動を呼びます。新世紀の幕開けを飾るにふさわしい気高き峰々の美の記録です。

定価(各): **本体38,000円** + 税 A3判/総176ページ(カラー136ページ)/ケース入り **全3巻/小学館**

白川義員 写真展「世界百名山」

東京・新宿タカシマヤ10階 = 平成12年12月31日(日) → 平成13年1月9日(火) ※1月1日(月・祝)・2日(火)は休業日 お問い合わせ先 TEL03(5361)1111

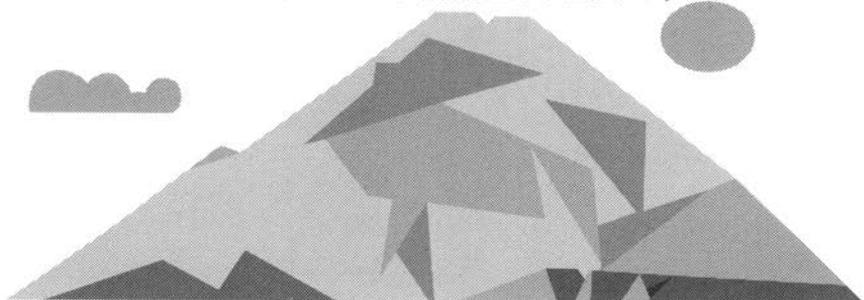
主催: NHKプロモーション 協力: コニカ株式会社

■内容見本送呈。書名をご記入のうえ、右記の宛先までお願いします。〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館宣伝営業部「世界百名山」内容見本係  
小学館「堂読者注文センター」 ●TEL03-3230-5739 ●FAX03-3230-0094 インターネット小学館オンラインショップ <http://www.shogakukan.co.jp>

日本の主要山域をカバー

# 山と高原地図

毎年シーズン前に入念な実踏調査を実施。  
信頼と安心の本格派登山地図です。



- 1 利尻・羅臼・斜里・阿寒
- 2 ニセコ・羊蹄山
- 3 大雪山・十勝岳 幌尻岳
- 4 十和田・八甲田・岩木山
- 5 八幡平・岩手山・秋田駒
- 6 栗駒・早池峰
- 7 蔵王・面白山・船形山
- 8 鳥海山
- 9 朝日・出羽三山
- 10 飯豊山
- 11 磐梯・吾妻 安達太良
- 12 那須 塩原
- 13 日光・奥鬼怒 奥日光
- 14 尾瀬
- 15 越後三山
- 16 谷川岳 苗場山・武蔵山
- 17 志賀高原・草津
- 18 妙高 戸隠
- 19 軽井沢・浅間
- 20 赤城・皇海 筑波
- 21 西上州・妙義
- 22 奥武蔵 秩父
- 23 奥多摩
- 24 大菩薩嶺
- 25 雲取山・両神山
- 26 金峰山・甲武信
- 27 高尾・陣馬
- 28 丹沢
- 29 箱根
- 30 伊豆
- 31 富士・富士五湖
- 32 八ヶ岳・磐梯
- 33 美ヶ原・霧ヶ峰
- 34 北アルプス総図
- 35 白馬岳
- 36 鹿嶋橋・黒部湖
- 37 駒・立山
- 38 上高地・槍 穂高
- 39 乗鞍高原
- 40 御嶽山
- 41 中央・南アルプス総図
- 42 木曾駒 空木岳
- 43 甲斐駒 北岳
- 44 塩見・赤石 聖岳
- 45 白山
- 46 霧仙 伊吹 藤原
- 47 御在所 鎌ヶ岳
- 48 比良山系
- 49 京都北山 1
- 50 京都北山 2
- 51 京都西山
- 52 北摂の山々
- 53 六甲・摩耶 有馬
- 54 葛城高原 二上山
- 55 金剛山・岩湧山
- 56 紀泉高原
- 57 大峰山脈
- 58 大台ヶ原 大杉谷 高見山
- 59 赤目・御留尊高原
- 60 水ノ山 鉢伏 神鍋
- 61 大山・蒜山高原
- 62 四国剣山
- 63 石鎚山
- 64 福岡の山々
- 65 阿蘇・九重
- 66 祖母 嶺
- 67 霧島 鹿島岳
- 68 屋久島 種子島

定価 750円(税込) お求めは全国の書店で



エアリアマップ  
**昭文社**

〒102-8238 東京都千代田区麹町3-1

☎03(3556)8111(代)

〒532-0011 大阪市淀川区西中島6-11-23

☎06(6303)5721(代)

〈インターネットで情報発信中〉 <http://www.mapple.co.jp/>

# 実業之日本社の山と旅の本

価格表示は本体価格で、別途消費税が必要になります。

晴れたら山へ—東京付近 花と展望の低山を歩く—

打田鏝一 A5変型判/18000円

大雪山の四季

塩谷秀和 A5変型判/20000円

車窓展望の山旅—鉄道で楽しむ山—

藤本一美・田代博 A5変型判/20000円

車窓の山旅・中央線から見える山

山村正光 A5変型判/19000円

展望の山旅—山から見る山・町から見える山—

藤本一美・田代博編著 A5変型判/19000円

続・展望の山旅—町から見える山・山から見える山—

続々展望の山旅—山から見える山・町から見える山—

藤本一美・田代博編著 A5変型判/各19420円

山は魔術師—私の山岳写真—

田淵行男 B5判函入/43600円

黒部の山賊—アルプスの怪—

伊藤正一 B6判/11600円

カメラの山旅—山の写真とカメラハイイク12カ月—

川口邦雄 A5変型判/19420円

西丸震哉の日本百山

西丸震哉 A5変型判/20000円

花の山旅・八ヶ岳

新妻喜永 A5変型判/20000円

花の山旅・みちのくの山

一戸義孝 A5変型判/22000円

心に残る花の山旅—とておきの花の山・エーデルワイス咲く山—

坂倉登喜子 A5変型判/22000円

山の写真12カ月—四季のベストコースとカメラワーク—

中西俊明 A5判/25000円

山の写真塾—自然を見る撮る楽しむ分割法—

佐藤篤志 A5変型判/25000円

きのこの森の歩き方

赤沼博志 A5変型判/20000円

上高地・乗鞍 北アルプス

菊12取判/12620円

花の北アルプス—高嶺に咲く花々—

菊12取判/15000円

自然派写真読本

川口邦雄 A5判/20000円

パソコンで楽しむ山と地図—マルチメディアの山旅—

山と地図のフォーラム編著 A5判/20000円

●ご注文は最寄りの書店へお願いします。お急ぎの場合は代金引換宅配便もご利用いただけます。

実業之日本社注文センター—TEL048-478-0203へ、直接お電話ください。

〒104-8233 東京都中央区銀座1-3-9/TEL03-3535-4441/振替00110-6-326

## 登山の運動生理学百科

山本正嘉  
本体2000円

登山と健康、疲労、中高年女性の山歩き、トレーニング法を詳述。クライミング、高所登山も科学的に解説。

## 百名山からの眺望<sup>△CG版</sup>

石垣博史  
石垣修司  
本体1700円

国土地理院のデータをもとに立体図化した山名ガイド。

## 彼ら「挑戦者」

大蔵喜福  
本体1300円

飽食の時代に敢えて限界に挑むヤングクライマー列伝。

## 中高年登山なんでも百科

福島正明  
本体1500円

より安全により快適に登山を楽しもう。

## さわやかに山へ

田部井淳子  
本体1500円

世界的な女性登山家が、初心者とアルプス、ヒマラヤなどを歩き、山の楽しみのこつを伝授。

## 私でも登れた百名山

高橋哲雄  
本体1400円

58歳からチャレンジした記録。モデルプラン付き。

## 山岳警備隊、出勤せよ!

高山県警  
山岳警備隊  
本体1350円

山岳警備隊の草分け富山県山岳警備隊の命懸けの救助活動の実録。

## すぐ山の雑学

岳人編集部  
本体1400円

大自然の中では雑学がモノを言う。

## 山の名著30選

福島功夫  
本体1400円

国内外の山の名著を気鋭の登山史研究家が再評価する。

## すぐこれで安心登山術

岩崎元郎  
本体1250円

山岳ガイドによる中高年登山入門書。

## 花と歴史の山旅

田中澄江  
本体1214円

胸をおどらせて訪ね歩いた、花と歴史の山旅ガイド。

## 新版 登山の医学

J・A・ウィルカーソン  
本体2030円

米国で大ロングセラー「山の救急解説書」の完全翻訳。

\* 価格は本体価格。別途消費税がかかります。

全国各地の美味・珍味を満載。

取り寄せて味わうもよし、

贈り物にもよしの、

便利な産直ガイド。

北海道から  
沖縄まで、代表的な  
名産と珍味を都道府県  
別に紹介。好物・おいしいもの  
を取り寄せたいとき、お中元、  
お歳暮などの贈答用のカタログ  
として、旅先での買い物、  
お土産のガイドとして、  
いろいろに活用できる  
便利な本。

≡ 名産・珍味

美味探究会 編

# 全国うまいもの 1・2・3



1・2・3とも

定価(本体1,500円+税)

1・2・3それぞれ全国うまいもの180を厳選して紹介!

北海道=たらばガニ・新巻鮭/青森=にしん飯寿司/秋田=比内鶏きりたんぼ/岩手=南部そば/宮城=笹かまぼこ/山形=香味牛肉/福島=ウニの貝焼/新潟=大力納豆/富山=ホタルイカ墨作り/石川=加賀麩/福井=ひらめの昆布じめ/栃木=刺身こんにゃく/群馬=下仁田葱/茨城=あんこう鍋/千葉=塩ゆで落花生/埼玉=秩父源流水/東京=べつたら漬/神奈川=丹沢そば/山梨=信玄煮貝/長野=馬かつた/静岡=わさび漬/愛知=鮮魚味酢粕漬/三重=伊勢海老/岐阜=鮎うるか/滋賀=桑酒/京都=すぎき/大阪=水なす漬/奈良=地ビール・倭王/和歌山=封じ梅/兵庫=山の芋/岡山=浜ゆでシャコ/広島=鯛の浜焼/鳥取=砂丘山芋/島根=島津屋海苔/山口=ふぐぞうすい/香川=鱈の魚漬/徳島=たらいうどん/高知=黒潮鯉たたき/愛媛=きじ鍋/福岡=柚乃香/佐賀=いかしゅうまい/長崎=焼あご/大分=天然活き車海老/熊本=馬刺/宮崎=やまめの甘露煮/鹿児島=かつおの腹皮/沖縄=ゴーヤー 他多数

富士書店

東京都文京区本郷4丁目1-14

電話 03-3814-0498 FAX. 03-3814-9250

SINCE 1975

# mont·bell

## 身体が求める自由な動きを実現した、 スリーピングバッグの理想形。

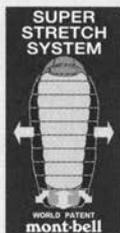
スーパーストレッチダウンハガー#4  
#1121616……………¥16,500



### super stretch system

発想の転換が生んだかつてない寝心地。  
隙間のないフィット感の実現と窮屈感の解消。  
これまで相反すると考えられてきた二つの要素を、  
高レベルで達成したのがスーパーストレッチ・システムです。

#### スーパーストレッチ・システム



スーパーストレッチ・システムは横方向に縫い込まれるステッチ部分にゴムを採用し、これまでにない高いフィット感を達成。また同時に、膝を立てたりあぐらをかくなどの快適な姿勢を自由にとることができます。

#### ギャザードキルト・システム



スーパーストレッチ・システムを支えるのが世界特許『ギャザードキルト・システム』。中綿部分が身体にぴったり沿うようにステッチ部分にゴムを採用（外・内両側）しています。

※商品の価格・仕様等は予告なく変更になる場合があります。

#### 《詳しくはカタログをご請求下さい》

スリーピングバッグ、テント、ザックなどを満載した「2000年ギアカタログ」をご用意しています。ご希望の方は、封書に1冊¥500分の切手を同封の上、希望カタログ名・住所・氏名・電話番号を明記し、本社（コンシューマ・山岳95カタログ希望係）までお送りください。

株式会社 **モンベル**

本社◆〒550-0013 大阪府大阪市西区新町1-33-20  
東京営業所◆〒150-0012 東京都渋谷区広尾1-15-3

TEL.06-6531-4761(代)  
TEL.03-3445-5401(代)

山と溪谷社創立70周年記念出版

# 二十世紀 日本の登山史



豪華特装版  
函入り3点セット

ヴィジュアルでたどる日本の登山史200年

目で見る日本登山史  
付=日本登山史年表

山ありて人あり 山と溪谷社の70年

山と溪谷社創業者・川崎吉蔵の、山登りにも似た苦難の物語を中心に、70年の道のりを辿る。

山と溪谷社出版総目録  
1930～2000

- 2001年2月発売予定!
- セット本体10,000円+税



山と溪谷社創立70周年記念出版

## 目で見る日本登山史

ヴィジュアルでたどる日本の登山史200年

貴重な写真や絵、地図などをふんだんに使用し、わかりやすくまとめた「日本で初めてのヴィジュアルな登山史」。巻末付録=日本登山史年表

- 普及判 ●本体4800円+税 ●2001年2月発売予定!

山と溪谷社 ホームページ— <http://www.yamakei.co.jp>

〒105-8503 東京都港区芝大門1-1-33 / ☎03-3436-4055・FAX 03-3433-4057

軽く、コンパクトなテントのことなら

# ARAI TENT

(株)アライテント

〒359-0021 埼玉県所沢市東所沢5-12-12 TEL 042-944-5855

日本山岳会 [編] / 大修館書店発行

## 「覆刻日本の山岳名著」分売・割引セール実施!

	定価	特価		定価	特価
●小島鳥水「日本アルプス」全4巻	50400	→ 40320	●鹿子木員信「ヒマラヤ行」	2625	→ 2100
●横有恒「山行」	6825	→ 5460	●東京帝大山の会編「鏡澤に逝ける人々」	5250	→ 4200
●板倉勝宣「山と雪の日記」	3150	→ 2520	●吉江喬松「山岳美観」	2625	→ 2100
●藤木九三「雪・岩・アルプス」	8400	→ 6720	●尾崎喜八「山の繪本」	9450	→ 7560
●辻村伊助「ハイランド」	6825	→ 5460	●大島亮吉「先蹤者」	9450	→ 7560
●小島鳥水「氷河と萬年雪の山」	8400	→ 6720	●京大白頭山遠征隊編「白頭山」	4200	→ 3360
●伊藤秀五郎「北の山」	7350	→ 5880	●小島鳥水「アルピニストの手記」	9975	→ 7980
●今西錦司「山岳省察」	3150	→ 2520	●竹節作太「ナンダ・コット登攀」	6825	→ 5460
●「覆刻日本の山岳名著解題」	4725	→ 3780	●足立源一郎「山に描く」	4725	→ 3780
●谷文晁「名山圖譜」全3巻	27300	→ 21840	●ウェストン「Playground of The far East」	9450	→ 7560
●播隆上人「迦多賀嶽再興記」	4515	→ 3612	●別巻 中村清太郎「山岳礼拝」	9450	→ 7560
●播隆上人「信州槍嶽畧縁起」	2520	→ 2016	●「新選覆刻日本の山岳名著解題」	5250	→ 4200
●松浦武四郎「石狩日誌」	5250	→ 4200			
●松浦武四郎「乙酉掌記」	7350	→ 5880			
●高島北海「歐洲山水奇勝」	23100	→ 18480			
●野中至「富士案内」	2625	→ 2100			
●河口慧海「西藏旅行記」全2巻	13650	→ 10920			
●小島鳥水「山水無盡蔵」	3150	→ 2520			

会員必携! —— 日本山岳会会報「山岳」合本

●1~100号覆刻合本(昭和5~15年)	12600	→ 10080
●101~200号覆刻合本(昭和16~33年)	14700	→ 11760
●2冊セット	27300	→ 19110

TESクラブ

☎注文は▶TEL 03-5999-5434

## 茗溪堂＝山の本

- 北の山 続篇  
伊藤 秀五郎 2,700円
- 快晴の山  
織内 信彦 2,500円
- 森林・草原・氷河  
加藤 泰安 2,500円
- 山なみ帖  
小谷 隆一 3,200円
- 山・人・本  
島田 巽 2,400円
- 山稜の読書家  
島田 巽 3,900円
- 山の生涯―来し方行く末  
田口 二郎 上 8,500円  
下 8,500円
- 山で唄う歌 1  
戸野 昭・朝倉 宏編 950円
- 山に忘れたパイプ  
藤島 敏男 3,200円
- わが登高行  
三田 幸夫 上 3,800円  
下 4,500円
- 忘れえぬ山の人びと  
望月 達夫 1,900円
- 山は満員  
渡辺 公平 2,200円  
本体価格です

TEL 03-3291-2811

FAX 03-3295-2043

郵便振替 00180-2-24723

Email meikeido@din.or.jp

茗溪堂onWeb山の本Access to

http://www.din.or.jp/meikeido

茗溪堂 ☎101-0062 東京都千代田区  
神田駿河台2-1-11

## 坂本直行の本

- 雪原の足あと 3,800円
- 原野から見た山 4,175円
- 山・原野・牧場  
ある牧場の生活 1,748円
- わたしの草と木の絵本 1,748円
- 私の草木漫筆 1,500円  
本体価格です

## 山の本と山の絵 本の雑誌などの店

お茶の水店 営業のご案内

営業時間 午前11時～午後7時

定休 日曜日・年末年始 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$

通販もいたしております。

はがき、電話、FAX、Email 等でご注文を承わり、ご自宅までお届けいたします。発送費がかかります。

お問合せ下さい。

JRお茶の水駅お茶の水橋口下車、駅前のスクランブル信号を正面の交番に向って斜め左にわたるとスグ前です。

山の本の売場はビルの3Fです。入口は1Fのパン・ミュージックと同じです。奥の階段をお上り下さい。



## 編集後記

・『山岳』の編集者に求められるものをあげれば、日本の山はもちろん海外の山にも明るく、本会の歴史・伝統に通じ、それなりの外国語の語学力もあり、加えてもう一つ時としてこれがいちばん重要になるのだが―それなりのヒマがある、ということにならうか。一人でこれらの条件をすべてクリアする者などは、かつてはともかく、いまでは得べくもないから、それぞれの分野を得手とする者が集まって集団で編集に当らざるを得ない。が、常々思うことはもっと若い集団でありたい、ということである。

・今号の巻頭に、アメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長ベックウイズ氏の講演を紹介した。アメリカカ山岳会においても、エディターに求められるものは概ね『山岳』と同様であろう。大胆な人材の登用はアメリカだからなのか、その辺りのことはよく解らないが、アダムス・カーター氏（『山岳』第九十一年の追悼欄参照）の後任として二十六歳で抜擢されたという話は、『同業』の目から見ても驚くべきものであり、何よりもその若さが羨ましい。

・今号も編集委員の皆さんの協力により予定の期日に刊行することができた。委員と担当は次のとおりである。

高遠 宏（担当理事）、南川金一（総括・源次郎尾根・百年史・追悼）、関塚貞亨（公務報告）、児玉 茂（海外の山・書評）、小浜浩三（同志社・海外の山・書評）、大関義明（支部だより・図書目録）、永田弘太郎（アメリカカ山岳会・海外の山）、渡部温子（公務報告）、柏 澄子（追悼）。

（高遠）

山岳 第九十五年（通巻一五三号）

二〇〇〇年十二月二日発行

価三五〇〇円

発行所

社団法人 日本山岳会

東京都千代田区四番町五―四  
サンビュートハイツ四番町

（〒一〇二一〇〇八一）

電話 〇三―三二六―一四四三三  
振替口座 〇〇三〇三―一四八二九

発行人 大塚博美

編集人 高遠 宏

印刷所 株式会社 技報堂

発売所 株式会社 茗溪堂

東京都千代田区神田駿河台二―一  
電話 〇三―三二九―一四四二  
振替口座 〇〇二八〇―二二四七三

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。



大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

# ATLAS TREK



Manaslu



Qomolangma



Namcha Barwa



Sagarmatha



Nanda Devi



Kangchenjunga

ビギナーのための山旅から、未知の魅力を秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、それぞれのニーズにお応えし、新鮮でユニークな手づくりの山旅をコーディネートします。

☆世界各地、日本の名峰へのトレックツアー、各種手配旅行、登山隊、航空券等々を取扱っております。

●お問合わせ・お申込みは

運輸大臣登録旅行業第1167号

## 株式会社アトラストレック

〈東京〉03-3341-0030 (代) 〈大阪〉06-6946-9111 (代)

東京都新宿区三栄町29番地

FAX: 03-3341-9200

大阪市中央区谷町3-4-5中央谷町ビル501号

FAX: 06-6940-3799

〈北海道地区総代理店〉株式会社ノマド  
011-261-2639 (代)

札幌市中央区南2条西6丁目一関ビル1F・2F

北海道知事登録旅行業第2-249

The Journal of  
The Japanese Alpine Club

**S A N G A K U**

Vol.95

2000